神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

A history of the Japanese people

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村田, 邦夫, Murata, Kunio メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1482

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

ISSN 1345-8604

神戸市外国語大学　研究叢書　第48冊

日　本　人　の　物　語

村　田　邦　夫　著

神戸市外国語大学外国学研究所

2010

日　本　人　の　物　語

村　田　邦　夫　著

第１部　「日本人の物語
—福田和也『魂の昭和史』との対話をとおして」

序章　「日本人の物語」を描くに際して求められる分析視角と分析枠組み

1. はじめに

「日本人の物語」と銘打って「開国」から平成に至る大きな流れを描こうと思う直接的きっかけとなったのは、沖縄米軍基地をめぐる民主党政権の「迷走」劇である。

民主党の鳩山政権は、衆議院総選挙における公約として掲げた、沖縄米軍基地の国外、あるいは、最低でも県外へ、という約束を守ることができないままに、結局、自身の「政治と金」の問題も重なって、首相の座を退いた。私自身、沖縄米軍基地の移設、移転問題を、自分の問題として、きちんと受け止めて、これまで考えてこなかった。いや、まったく考えなかったといえば、ウソになるのだが、逆に、真剣に、四六時中、考えてきたなどというのも、またウソになってしまう。たとえ、職業柄、いつも、沖縄米軍基地問題は、「差別」と「排除」の「象徴」として、私の脳裏を、片時も離れることはなかったのも、これまた、偽りのないことだと、断った、としても、である。

これに関連して、ここで、ぜひとも語っておきたいことがある。それは、「第9条」の問題と、沖縄米軍基地問題とは、どのように、結びついているのだろうか、ということに関して、である。私は、これまで数え切れないほど、「第9条を守る」とか、「守らなければならない」、「守りましょう」という趣旨の話を、耳にしてきた。とくに、それは、選挙時において、喧（かまびす）しいものであった。しかし、この「物いい」も、少し考えればわかるように、「ウソ」ではないか。「気持ち」は理解できるにせよ、正直に言うと、戦後の日本において、占領統治下も含めて、一度たりとも、「第9条」が「守られる」ことはなかったのである。「日本」と「日本人」は、守ることができなかった。やはり、この言い方は、奇妙であろう。正確にいうとすれば、日本国憲法の「第 9 条」の「規定」にあるように、「現実」を、「現状」を、変えていこう、変えていかなけれ

ばならない、という「物いい」が、望ましいのではあるまいか。

「一度たりとも守られることはなかった」と、私は、先に述べたが、「憲法」の公布、施行時から、今日に至るまで、そうである。沖縄には、もちろんのこと、日本においても、米軍の基地があり、軍事力が存在していた。もし、その際、それは、「日本国」のではない、「米軍」ではないかというならば、それこそ、またまた「奇弁」なる言いまわしではあるまいか。誤解のないように断わっておくが、もし「第 9 条」を「守ろう」とする「立場」にいる人であれば、このように、考えるのではないか、そう私は、みるのである。ところが、どうも、そうではない。「第 9 条」を守る「立場」にいる人のなかにも、あくまで、そこでいう「戦力」とは、「日本国」のそれであり、米軍や、米軍基地の「軍事力」は、そこに含まれるものではない、と考える人もいるようである。いや、むしろそう考えた方が、整合性のつく問題である。ベトナム戦争の際、沖縄の米軍基地からベトナム空爆を、米軍は行うのだが、またベトナム戦争で、多くの命が奪われるのだが、そうした「現実」を前にしても、なお日本は「第 9 条」を守ったおかげで、誰一人として、戦争で命を奪われたり、奪っていない、という趣旨の言を、「第 9 条」を守る「立場」の人たちは、臆面もなく、いえるのだろう。そこには、沖縄の米軍と米軍基地が、また、それは当然ながら、沖縄で暮らす「沖縄人」が、「日本」と「日本人」と結び付けられていない、切り離されて、語られていることが、示されているのではないか。さらに、沖縄の米軍や米軍基地の背後にある、アメリカ本土の米軍や、アメリカ、そして覇権国としてのアメリカとそこに暮らす人々とも、結び付かないままに、切り離されてきたことを示している。当然、そのことは、「覇権システム」とその「秩序」であるとか、私が、モデルで描いた、あの[セカイ]と、最初から、切り離された「思考」状態に置かれていることを示している。まことに、おめでたい人たちである。私が、彼らに、問いたいのは、それでは、あなた方の「胃袋」は、どのようにして、満たされてきたのか、それを、教えてほしいと。ここでも誤解のないように、初めに述べておきたいのは、おそらく既に、その答えのわかる人のなかで、私に対して、「だからといって、アメリカのいうことを聞きなさいというのは、おかしいではないか」、とすぐ反論する人に対して、その「だからといって」を、もう少し、考えることをしてほしいために、このような質問をするのではないと、伝えておきたい。逆に、教えてもらいたいのである。もし、私たちの「衣・食・住」の「ネット・ワーク」の維持、確保が、沖縄米軍や、基地の存在と、またそこから覇権国であるアメリカの「世界戦略」の展開と、密接に結び付けられて

いたとすれば、ぜひとも、ここで「だからといって」の、「内実」を、再検討すべきであろう。

ところで、こうした「思考の在り方」は、非常に、いびつなものであり、まさに独りよがりなものであると、私などは、みているのだが、それにもかかわらず、「第9条」を守る「立場」にいる人たちのみならず、多くの日本人も、そうした思考を、共有してきたのではないだろうか。もし、戦後65年以上にわたり、そうであるとすれば、やはりそれは、ここらで、再考されてしかるべきものであろう。その意味でも、「第9条」を、これまで一度も守ることができないままに、今日まで私たちは、来てしまったと、再確認した方がいいのではなかろうか。もしそうした場合、そこからまた、あらたなる問いかけが始まる。すなわち、「第9条」を、それこそ、憲法の想定するように、「額面通り」に、「マモル」ためには、（これまで、一度たりとも守ることができなかった、という再確認の後に）当然ながら、まず、沖縄から米軍とその基地を撤退、撤去することが求められるだろう。またそこから、日米安全保障条約体制、さらに、日米関係、の見直し、という問題に、「日本」と「日本人」は、向き合わざるをえなくなる。少し考えただけでも、大変なことであり、「にっちもさっちもいかなくなる」ことは、誰だって、想像がつくはずである。そう考えれば、〈「第9条」を守ろう〉といい続ける方が、はるかに楽であり、あるいは、こうした問題に、「真正面」から取り組まない方が、賢明であると、そう考えるであろう。鳩山前首相は、そのような、だれもが考えてわかることを、「わからないまま」に、向き合った、というのはあまりにも、簡単だが、誰も、彼を批判したり、非難できる資格を持たない。

こう考えていくとき、戦後の「日本」と「日本人」の、「民主主義の発展」と「経済発展」において、覇権国としてのアメリカとアメリカの軍事力の「プレゼンス」が、どれほど深く、かつ、密接に、関与していたかが、わかるのである。そこから、また、逆説的ながら、覇権国であるアメリカとアメリカの軍事力の存在によって、日本国憲法と、その「第9条」の「規定」が、創り出されたかが、わかるのである。

その意味において、これまで、声高に「第9条」を守ろうと、主張してきた人たちは、悲しいけれども、現実は、「第9条」を守る力もないし、守ることもできていない。しかし、なんとかして、この「現状」を、打開して、だれもが許すような、「守れる」「守っている」ような、「状況」を、つくりたい、と主張しないままに、守られていない「現実」に、ひたすら背を向けつつ、彼らが実際にはそれ

を望まないにせよ、現実には、「覇権システム」とその「秩序」を、守り続けてきたのではあるまいか。また、そのことにより、覇権国アメリカとアメリカの軍事力を守ろう、と主張しているのではあるまいか。またそれは、アメリカによるアジアの、とくに、東アジア、東南アジアにおける「外交」（戦略）と、それに基づく利害関係を、守る、支持すると、換言しているのではないか。

これまで述べてきたように、「一度も守られてこなかった」ハズの「第９条」を、「守ろう」と、国民に訴える、そうした「物言い」にみられる「ウソ」のなかで、「日本」と「日本人」は、戦後日本の「繁栄」と「平和」を、手にすることができたのである。

ところで、鳩山由紀夫前首相の「普天間」移設をめぐる政治指導のこの上もない軽さというより、さすが「宇宙人」と呼ばれるだけあって、物事の軽重を問うことのできない「無重力空間」に漂流し続ける「みっともなさ」に、「日本人」の一人としての私を、見事なほどに垣間見させてくれたのは確かなことであった。その意味で、さすがなのである。鳩山は首相の器にかなう「日本人」の「リーダー」なのである。これほどまでに今日の「日本」と「日本人」のおかれている「惨状」を有権者に突きつけたリーダーはいなかった。鳩山だけである。アメリカとの「交渉」を、「日本人」と「沖縄人」の双方も含めた「土俵」の上で行ったのは。それゆえなかなか決まらないのだが、だからこそ逆に、「日本人」の力の無さが露呈されることになる。そのことは「日本人」の「沖縄（人）」に対する無関心、無責任さを白日の下に晒すこととなる。こうした無重力空間のなかで私たち「日本人」は生きてきたのだろうか。そうではない。たしかに、「日清・日露戦争」時の「日本人」は、しっかりとした「足場」を築くための「自覚」があったように思われる。と同時に、自ら流す汗と血を知覚できていたのではないか。その意味では「加害」と「被害」についてもそうであったのではないか。だがそういった瞬間、私はやはり何かを隠しているのかもしれない。嘘を言ってきたのかもしれない。それは、「日本人」というとき、「沖縄」、「沖縄人」はどこに位置づけられているのだろうか、と自問自答したときに勝手に「自然に」「日本人」となっているかのように思うからである。このような「日本人」の語る「日本の歴史」にはどこか空虚な軽薄なところがみられるのではなかろうか。たしかに「足場」を築き、「坂の上の雲」を目指したのも事実であろうが、それなのに、どうしてなのだろうか。こんなにももろい「日本人」としての鳩山首相をリーダーとしているのは。

2.「覇権国の興亡史」のなかの「日本」と「日本人」

「あの戦争」で負けたからなのか。その結果として、「自覚」とか「知覚」とがしだいに薄らいできたのだろうか。そんなことではなかろう。おそらくもっと奥深い闇に隠れたところにその原因なり理由があるのだろう。それをこれから探っていこうと思うのだが、これまでの私の研究からその原因、理由についての粗削りな構図をここで提示しておきたい。キーワードとして挙げておきたいのは、「パックス・ブリタニカ」、「パックス・アメリカーナ」、「パックス・シナ」、「覇権国」、「非覇権中心国」、「準周辺（国）」、「周辺（国）」、「覇権システム」とその「秩序」、「近代化のパラドックス」そして「経済発展（高度化および低度化）」、「民主主義の発展（高度化および低度化）」である。なお、断りのない限り、本論で「民主主義（の発展）」という場合、「自由民主主義」を意味している。21 世紀のこの地点から「開国」以降の日本の「近代化」の歴史を振り返るときにわかるのは、「日本」と「日本人」が「覇権国」の興亡の歴史に大きく関与する形で、近代化の歩みを繰り返していることである。(1)

「開国」の頃の世界はまさに「パックス・ブリタニカ」の全盛期であり、「あの戦争」と「敗戦」による「第二の開国」の頃は「パックス・アメリカーナ」の全盛期をまさにすぐそこに迎えようとする頃であった。「開国」から「あの戦争」に至る時期において、日本はこのイギリスとアメリカの「覇権連合」の指導のもとに、「覇権システム」の中で、「産物の国」から「製物の国」へと「経済発展」における「高度化」を実現するのに成功した。またそれと関連する形で、「覇権システム」の中で、「民主主義の発展」における「高度化」への歩みを始めることが出来たのである。「日本」と「日本人」の「近代化」の歩みにおける「経済発展」と「民主主義の発展」における「高度化」とその「進展」は、「覇権システム」を構成する「準周辺」ならびに「周辺」における「経済発展」と「民主主義の発展」の「低度化」とその「深化」と「共時態」の関係に、すなわち「一体的」関係に、あったのである。「日本」と「日本人」は、「開国」以降この方、「覇権システム」の中でなんとかその生存を確保していくために順調な滑り出しを実現したのであるが、1920 年代以降、次第にイギリス、アメリカ両国と対立を深め、紆余曲折はあるものの、結局は衝突そして戦争その後、敗戦へという局面と結末を迎えたのである。それゆえ、「開国」から「敗戦」に至る「日本」と「日本人」の「生き方」は、「パックス・ブリタニカ」から「パックス・アメリカーナ」へと「覇権国」の交替を作り出すように「貢献」したそのようなものとして捉えることが可能である。もちろん、「貢献」したからと

いって喜べるものではない。「貢献」した挙句に、なぜか原爆を二発も叩き込まれて無条件降伏へと至るからである。やりきれなさしか残らない「貢献」ではあるまいか。

ところがである。「日本」と「日本人」の「生き方」は、戦後も変わらない。今度も「貢献」した挙句、「格差社会」「雇用崩壊」「3 万人を超える年間自殺者数 12 年連続」等々、これまた悲惨極まりない局面、結末ではないか。戦後の「日本」と「日本人」の高度経済成長に端的に象徴される「ガンバリズム」とその「(公害）犠牲者」は、結局はアメリカから中国への「覇権国」の交替を促すことに「貢献」したのである。

このようにみてくると、「日本」と「日本人」の「物語」を描く上で重要なことは、「覇権システム」とその「秩序」の中で、「経済発展」と「民主主義の発展」の両者の「関係」を、「日本」と「日本人」とがどのように認識理解し、行動したかということを、「物語」の中心に位置づけることであろう。「あの戦争」に至る原因、理由はそうした「関係（史)」をめぐり引き起こされたからである。当時の欧米先進国、なかでもイギリスとアメリカにおける「経済発展」と「民主主義の発展」の両者の「関係（史)」との間において、「日本」と「日本人」とは、具体的には、「日本」と「日本人」の「経済発展」と「民主主義の発展」の両者の「関係（史)」との間において、何らかの軋轢を経験したに違いない。そしてそうした軋轢から、やがて、修復しがたい状態へとその「関係」は煮詰まっていったのであろう。それこそが「あの戦争」の原因、理由にほかならない。それはまた、「敗戦」とその後の占領統治、そしてサンフランシスコ講和条約締結以後の日米安保体制と米国の核の傘のもとで、「日本」と「日本人」の「平和」と高度経済成長に象徴される「繁栄」が、そうした「関係（史)」の「改善」によってもたらされたのと表裏一体の「出来事」を構成しているところにも示される。いずれにせよ、「日本人」の「物語」は、「覇権システム」とその「秩序」の形成と発展に大きく関わるものであった。「現実主義」であれ、「理想主義」であれ、この「覇権システム」とその「秩序」を前提とする、いわばこの［セカイ］を丸ごと認めた上での「立場」とその表明にすぎず、その意味では、米国の核戦略とそのもとに展開される圧倒的軍事力と、「両立」可能な「第 9 条」の護持であったということである。これほど「悲しい物語」がどこにあるだろう。仮にそれを「大人の知恵」とか、「生きるための方策」と読んでみたとしても、当の「日本人」は、その「矛盾」を、矛盾とは露ほども思わないままに心底信じてきたのではあるまいか。多くの「日本人」が語る「平和」とは、まさ

に「パックス・アメリカーナ」の「パックス（平和）」であったといわざるをえない。「第 9 条」はこの「パックス」を実現するために、「覇権国」を目指す米国の世界戦略の一環のもとで「日本」と「日本人」に「押し付け」られたものなのである。それゆえ、この「パックス」と異なる「平和」を構想、構築するためには、その「パックス」をささえる「経済発展」と「民主主義の発展」の「関係（史）」がどのように形成され今日に至るまで発展してきたかを、まずは確認しなければならないであろう。「平和」とは、「もう二度と戦争はしません」と、ただ叫んでも手の中に掴めるものではない。「平和」とは「戦争」の対立概念ではない。ヨハン・ガルトゥングがいみじくも述べたように、「暴力」に対置されるものなのだ。まさに「構造的暴力」とそれを支える「文化的暴力」に向き合うことが必要なのである。(2) そして「覇権システム」とその「秩序」の形成と発展の歩みこそが、こうした「暴力」を作り出してきたものであると、私は強調しておかねばならない。

本書をまとめるに際しての留意点は、それゆえ、「日本」と「日本人」がこうした問題にどのように向き合い続けたかということにある。この[セカイ]を支える「経済発展」と「民主主義の発展」とその「関係（史）」にどのように向き合い、いかなる代案を求めてきたのかどうかについて、大きな関心がある。たとえば、『坂の上の雲』で描かれている「物語」の中にそうした「営為」がどのように展開されているか、興味を覚える。また「新しい歴史教科書」を提唱する論者の主張の中にそれはどのように展開されてきたか、また「旧い」立場とされる論者はどうか、に注意を向けたい。そのことは、日本人の物語をどのような「眼」でもって描けばよいかという問題である。換言すれば、「覇権システム」とその「秩序」、および、そうした仕組みのもとで形成、発展とその変容の歩みを見てきた「経済発展」と「民主主義の発展」の「関係（史）」を、日本人としてどのような「眼」を持ってとらえるのか、捉えなおすのかという問題である。私のこれまでの研究はまさにそうした「眼」を創るための作業であったといっても過言ではない。またその成果は私の「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（史）」に関するモデルとして提示されている。(3) そうした私の「眼」からこれまでの日本人の物語を再考するとき、そのほとんどすべてが「欧米」（「西洋」）の「眼」をもとにして、それを基準として描かれていることが分かるのである。

3.「日本人の物語り」の全体像

ここでそれに関して素描しておきたい。詳しい話は以下の各論で展開しているが[(4)]、その前にわかりやすく全体像を示しておきたい。たとえば、最近話題となった田母神論文を見てもすぐそれが分かる。田母神氏が国際法を引き合いに出して日本の韓国併合を正当化するくだりに端的に示されている。国際法は、まさに「覇権システム」とその「秩序」を「正当化」する法律である。それを盾に取るということは、まさに自らがそうした「覇権システム」とその「秩序」を支えるということを意味している。同時に、欧米主導（「西洋主導」）の「眼」をもって、そこから「世界」を見ているということを証明するものである。もちろん、そのようなことを言われると、田母神氏は真っ向から否定されるに違いない。しかし私は、田母神氏が「国際法」を持ちだして日本の「韓国併合」を正当化するところにこそ、日本の「弱さ」がそのまま出ていると言わざるをえない。こうした論を展開する論者の特徴は、「日本」と「日本人」が欧米主導の「世界」のなかで埋没することなく果敢にそれに挑戦して、「独立」を死守したかを説くのである。しかしそのこと自体がまさに欧米の「眼」でもって、欧米主導の「枠組み」を前提として、「日本人」の「物語」を描いているかの証ではないだろうか。もちろん当時の世界は、欧米主導の世界であり、まさに「覇権システム」とその「秩序」を前提とする「世界」があり、そのなかに「日本」と「日本人」は組み込まれて生きてきたし、生きているのはたしかなことである。しかしそのことでもって、「欧米主導」の、「覇権システム」を維持する「側」に立って、「日本人」の「物語」を描くこととは次元の異なるものである。すなわち、そうした「欧米主導」の枠のなかで生きているからといって、何も欧米の「眼」でもって、日本人の物語を描く必要はないということである。「国際法」に依拠して日本の歴史を「正当化」した瞬間、もはや「日本人」の「物語」を一貫して日本人の「眼」で語ることができないということになってしまう。日本人の「眼」を持つことができるためには、「開国」以降の「日本」と「日本人」が、私のモデルで描くあの［セカイ］のなかで生きてきたということを、きちんと理解できなくてはならない。

ところで、司馬遼太郎氏とそれを批判する論者、なかでも中村政則氏の「眼」を見ても、驚くほどに両者はよく似ている。まさに「欧米主導」の「世界」を前提とする語り方である。もう少し分かりやすくいえば、「市民革命」と「産業革命」の両方を達成したイギリス、フランスあるいはアメリカの「歩み」（「歴史」）を準拠枠として歴史を見る「眼」である。司馬氏は、『坂の上の雲』で、

アングロ・サクソンと仲良くやっているときの日本はまともであったが、日露戦争以後、日本は独善的になり、日本独自の歩みを軍部主導のもとで行ったことが日本をダメにしてしまったと語っている。ただ、司馬氏は日露戦争を「祖国防衛戦争」とみることで、日本の「侵略」の問題を当時の国際環境の厳しさに求めた議論を展開する。そのことを、中村は批判するのだが、どういうわけか、中村の批判は、欧米のアジア「侵略」には直接向かないのである。換言すれば、先の二つの「革命」を達成するときに非欧米世界はどのような「侵略」をされたのかという視点が希薄となる。そうした観点に立つ「準拠枠」の問題点を中村は問い質せない。いわゆる「左翼」とされる論者が怠った作業の一つは、西洋世界における「自由民主主義」の歩みと、非西洋世界に対する「帝国主義」との「歩み」とを相互に「関係」づけて問い質すことではなかったろうか。そうした作業を経ることなく、「欧米主導」の「世界」を「準拠枠」としながら、日本人の物語を語るのだから、これはたまったものではない。(5) 結局のところ、あれほど司馬史観を批判しながら、当の中村自身も、日本と日本人の歴史を語る際、「市民革命」と「産業革命」の二つの「革命」を「準拠枠」とすることにより、それらの二つの革命を創り出した「覇権システム」とその「秩序」を「正当化」しているのだが、中村はそうした事実を認めたくない、というよりも、中村のこれまでの研究からは、そうした点を理解するのは難しいに違いない。

後に取り上げる加藤陽子や半藤一利と、また彼らを批判する西尾幹二も、やはり「欧米主導」の「世界」を前提とする「眼」でもって、日本人の物語を語ることに何ら異なるところはない。

「日本」と「日本人」の「物語」を書くに際して、私は、これまでの民主主義に関する、私自身のモデルをもとに、叙述することを、考えているのだが、その際、福田和也の著作『魂の昭和史』を、導きの糸として、参照することにした。その理由については、また後において、語られるだろうが、その前に、これまで、一体どのような「眼」でもって、「日本人」の「物語」が論じられてきたかについて、先の「はじめ」において述べたことを踏まえながら、簡単にまとめてみたい。非常に親しみやすいというか、多くの読者をえてきたといったところでは、司馬遼太郎氏の「眼」に、やはりまずは注目すべきであろう。あるいはまた、その司馬の「眼」を批判している西尾幹二にも、また、その関係から、「新しい歴史教科書を考える会」のメンバーの「眼」にも、注意をはらう必要がある。さらにまた、そうした考える会がそもそもなぜつくられたのかを、私なりに考えるとき、彼らが批判したい何らかの「眼」が、すでに存在してい

たといえるだろうし、事実、そうした「眼」を、「考える会」の人たちは「占領史観」とか、「自虐史観」と呼んでいたのである。ただし、司馬や、西尾、あるいは、その他の「眼」（「占領史観」と呼ばれる「眼」も含めて）でもって、「日本」と「日本人」の「生き方」を描くことに対して、私は少し抵抗を覚える。その理由について、以下に披歴してみたい。

誤解を恐れないで、ここで、それらの「眼」に共通した特徴を述べておくと、それは「親米」的なものに彩られているということだ。それは、日本の「右翼」、「左翼」、あるいは、「中道」、と目されている人の共通したものだといえよう。さらに、誤解を恐れずに、付言するならば、それでは「反米」、「嫌米」はどうなのかと問えば、これも、結局のところ、「同じ穴の狢」なのである。ここで使われている、「米」とは「米国」という国家、あるいは、その「支配」に対しての、「反」であり、「嫌」なのである。ところが、前者の「親米」の、「米」には、二つの意味が込められている。一つは、「反米」とか「嫌米」を説く人たちと同じレベルで使われている意味での、米国というか、アメリカ合衆国という国家と、そこから生み出される「影響力」（「圧力」）に関わるものである。もう一つは、そうした米国をつくり出してきた、そして、その米国をも、その内に飲み込んできた、もっと大きな「歴史」の流れと、そこから生み出されてきたものだ。「親米」というときには、この両者を含んでいる。そして、「反米」、「嫌米」を主張している論者も、この「親米」の意味する「歴史の大きな流れ」（「大きな歴史の流れ」）に対しては、「反」でも「嫌」でもない。もっと正確に言えば、そうした「歴史の大きな流れ」を、受容した上での、「反米」であり、「嫌米」、ということである。

ここで私のいう「歴史の大きな流れ」とは、歴代の覇権国が中心となって作ってきた「覇権システム」とその「秩序」を前提に、形成され、発展とその変容を見てきた「経済発展」と「民主主義の発展」の「関係（史）」にほかならない。これについては、またあとで説明するが、ここで、ごく簡単に、それについて紹介しておこう。たとえて言うならば、歴代の覇権国が中心となって、「衣食（経済発展）足りて、礼節（民主主義の発展）を知る」、そのような「大きな歴史」と、その「流れ」を、つくってきたのである。その「大きな歴史」の始まりは、まさに、「大航海時代」であり、ラス・カサスの書物に描かれた、「開発主義」と、それに伴う「環境破壊」であり、また、そうした「歴史」を前提とした「自由」、「平等」、「平和」の世界の形成と発展の歩みである。[(6)] 司馬の『坂の上の雲』は、こうした「大きな歴史の流れ」を、「肯定」しつつ、そこで、「健

気に」、「明るく」、かつ、「元気に」、生きる、生きていかざるをえない「日本」と「日本人」の「物語」なのである。それは、あまりにも「非情な世界」の、その中での物語なのである。付言すれば、西尾幹二は、『国民の歴史』のなかで、司馬の歴史の見方を批判して、「便利すぎる歴史観」と揶揄しているが、しかし、司馬と同様に、西尾も、「大きな歴史の流れ」それ自体と向き合い、その問題点を、考察し論究することはない。

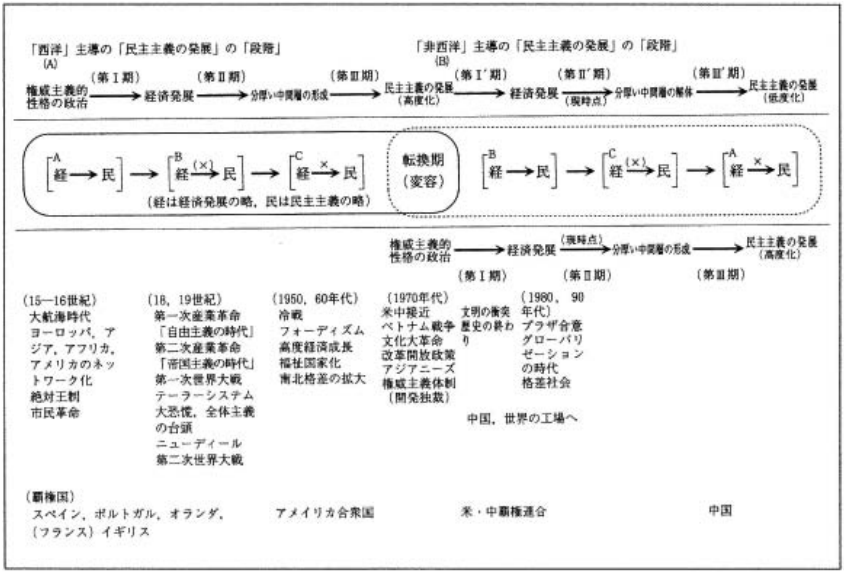
ここで、司馬の歴史観について、西尾による批判とともに、少しだけ言及しておく。よく知られているように、司馬は、日本の歴史を語る際、日清・日露戦争までの日本と日本人は健気に、謙虚に、そして何よりも「リアリズム」の立場で行動することができていたのに対して、それ以降、とくに昭和の5，6年頃からおかしくなってしまったと述べている。(6) 満州事変から以降の歴史を、念頭に置いているのは確かである。ただ、そこにもみられるように、司馬の見方は、「開国」を迫ったアメリカや他の欧米諸国の［理不尽］ともいえる対応に対して、批判の目が甘くなると同時に、日清・日露戦争以前の日本と日本人の、アジア諸国に対する「傲慢な」対応に甘くなるきらいがある。それは、「ドイツへの傾斜」、「脱亜論」にみられる(8)、司馬の「眼」にも垣間見ることができる。この点に関して論究する前に、西尾の「眼」についてみてみよう。氏は『国民の歴史』において、司馬の歴史観を俎上に載せながら、はっきりと批判している。日清・日露までの「生き方」は良くて、それ以後は悪いといった見方はあまりにも「便利すぎる歴史観」(9)ではないか、と論じるのである。しかし、西尾の歴史観は、「自由」、「民主主義」［進歩］(10)は「それはそれでいい」、それを目指した日本の歩みは「何ら間違っていなかった」というのだが、それは、司馬の「眼」に垣間見られる「アングロ・サクソン」的なものと相い重なるように、私には思われて興味深い点である。

その意味で、私は、こうした「大きな歴史の流れ」のなかで、「日本」と「日本人」がどのような「生き方」をしてきたかを、描いてみたいのである。

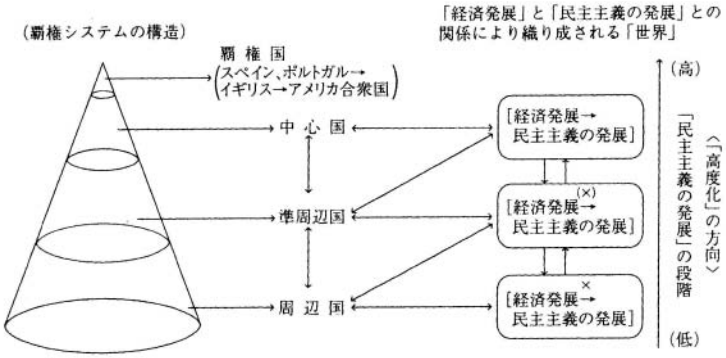
4 分析視角と分析枠組み

ここに、私のモデルで描いた、「大きな歴史の流れ」を提示しておきたい。すでに、これについてはこれまでに、拙著や拙論において紹介しているが、行論の都合上、示しておきたい。(11)

<「世界史」を再構成するための「分析枠組み」>



〈1970 年代まで〉(あるいは、1970 年代半ばまで)



〈図式Ⅰ〉(ア)〈1970 年代半ばまでの「民主主義」の「秩序」〉(共時態モデル)

(文明)A　(半開)B　(野蛮)C
〈先進国〉　〈中進国〉　〈後進国〉
〔経済発展→民主主義の発展〕→〔経済発展$^{(\times)}$→民主主義の発展〕→〔経済発展$^{\times}$→民主主義の発展〕
(製物国) ―――― (中間的役割) ―――― (産物国)

(野蛮)C　(半開)B　(文明)A
〈後進国〉　〈中進国〉　〈先進国〉
〔経済発展$^{\times}$→民主主義の発展〕→〔経済発展$^{(\times)}$→民主主義の発展〕→〔経済発展→民主主義の発展〕
(産物国) ―――― (中間的役割) ―――― (製物国)

〈図式Ⅱ〉(ウ)〈1970 年代半ばまでの「民主主義」の「秩序」(図式(ア))の下での「民主化」の方向〉

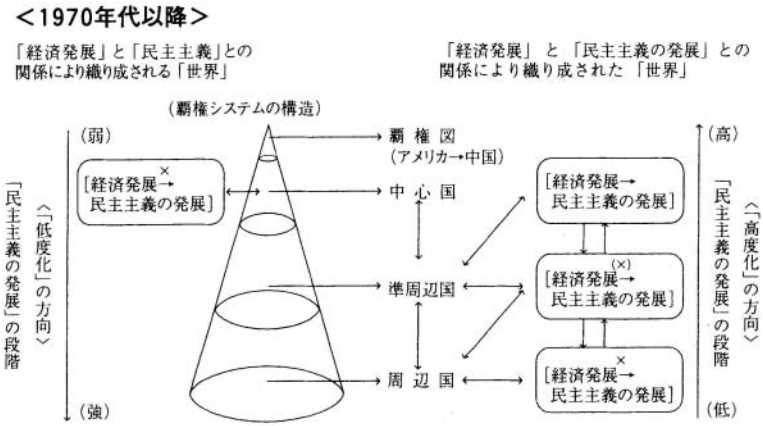
・(文明)・(半開)・(野蛮)すべてに共通する図式(先進国、中進国、後進国)

〔権威主義的性格の政治→経済発展→分厚い中間層の成長→民主主義の発展(高度化)〕

Ⅰ期　Ⅱ期　Ⅲ期

(通時態モデル)

〈1970 年代以降〉(あるいは、1970 年代半ば以降)



〈図式Ⅰ〉(イ)〈今日の「民主主義」の「秩序」〉(共時態モデル)

(半開)B
〈中進国〉
〔経済発展→民主主義の発展〕→
(製物国) への変換をはかる。
なかには金融・サービス化の
転換をも視野に含めた国もあ
る。

(野蛮)C
〈後進国〉
〔経済発展→民主主義の発展〕→
(産物国) なかには製物国へ
の転換をはかる国もある。

(文明)A
〈先進国〉
〔経済発展→民主主義の発展〕
(金融・サービス国) への変
換をはかる。

(文明)A
〈先進国〉
〔経済発展→民主主義の発展〕→
(金融・サービス国) への変
換をはかる。

(野蛮)C
〈後進国〉
〔経済発展→民主主義の発展〕→
(産物国) なかには製物国へ
の転換をはかる。

(半開)B
〈中進国〉
〔経済発展→民主主義の発展〕
(製物国) への変換をはかる。
なかには金融・サービス化の
転換をも視野に含めた国もあ
る。

〈図式Ⅱ〉(ウ)〈1970 年代半ばまでの「民主主義」の「秩序」(図式(ア))の下での「民主化」の方向〉

・(中心国) の場合 (先進国)

〔民主主義の発展(高度化)→経済発展→分厚い中間層の解体・断片化→民主主義の発展(低度化)〕

Ⅰ′期　Ⅱ′期　Ⅲ′期

・(準周辺国)・(周辺国) の場合 (中進国、後進国)

〔権威主義的性格の政治→経済発展→分厚い中間層の成長→民主主義の発展(高度化)〕

Ⅰ期　Ⅱ期　Ⅲ期

(通時態モデル)

残念なことに、日本の知識人の多くは、こうした流れに対して、真正面から、向き合わないままにいる。この「大きな歴史の流れ」に対して、毅然と向き合う代わりに、その流れを、結局は弁護または擁護してしまう、「理性」「進歩」「自由」「友愛」「平和」といった「価値」を、擁護する立場にあったといわざるをえない。その意味では、「占領史観」、「自虐史観」と揶揄されている立場の論者も、またそうした批判をする「新しい歴史教科書をつくる会」の論者も、同床異夢の状態にあると、位置づけられるのである。

ところで、先にもふれたように、私は、福田和也『魂の昭和史』をもとにして、「日本人の物語」を論じていきたいのだが、ここで、私自身の「歴史」を語る際の「時期（段階）」区分について、述べておきたい。

まず、私は、自分のモデルのなかで説明しているように、「経済発展」と「民主主義の発展」の「関係（史）」の「歩み」を、1970 年代までと、それ以降の時期に二分して、「Ⅰ期」、「Ⅱ期」「Ⅲ期」と、「Ⅰ´期」、「Ⅱ´期」、「Ⅲ´期」に、区分し、また、それぞれの時期を、さらに、前期、中期、後期と、三区分している。私のモデルにおける、「Ⅰ期」の「段階」に該当する「日本」と「日本人」の「物語」を描くとき、それは以下のように、まとめられよう。福田の著作のくだりと関連させるとき、私の描く「Ⅰ期」の物語は、福田の 3，4，5，6，7，8 そして 9 で語られている内容に、該当している。

この時期は、「開国」以降から明治、大正の 1920 年代までと、1932 年から 1945 年までと、1945 年 8 月 15 日、9 月 2 日以降から 1952 年のサンフランシスコ講和条約の発効までの時期に、該当する。もう少し、ここで、具体的に説明しておくと、以下のようにまとめられるだろう。「開国」以降、明治維新を経て、日本は、私のモデルで描く、「大きな歴史の流れ」、換言すれば、私のモデルで示すあの[セカイ]であるが、B グループのなかで、「Ⅰ期」の前期に相当する「段階」に位置していた。B グループというとき、やはりそのなかでも、A グループの下位に近いところに位置づけられる上位集団もあれば、逆に、C グループの上位の追い上げに直面しているような下位集団もあるだろうし、その真ん中に位置する、中位集団もあるが、ここではそれは問わないでおく。そして、その段階から、1920 年代、30 年代の初めころにかけて、「Ⅰ期」の中期、そして後期の「段階」に達していたと、私はみている。誤解を恐れないで、もう少し踏み込んでいうならば、と同時に、「Ⅱ期」の前期の「段階」を迎えるか、すでに、その段階に差し掛かっていたと、理解している。これに対して、A グループのイギリスは、「Ⅱ期」の中期から後期の「段階」を、ひたすら目指していたし、フランス

やアメリカも、また、1920 年代、30 年代には、「Ⅱ期」の前期、中期あたりの「段階」に迫っていた、と私はみている。A グループや B グループの日本の、植民地、従属地におかれていた、朝鮮半島や中国をはじめとするアジア諸国（地域）は、ほとんどすべてが、C グループに位置すると同時に、「Ⅰ期」の前期の「段階」に、長期間にわたり、甘んじることになるのである。「Ⅰ期」（[権威主義的性格の政治→経済発展]）の段階の特徴である「権威主義的性格の政治」に見出される「強権的」、「抑圧的」な「開発主義」的色合いは、宗主国である A グループや、B グループの政治指導のもとで、C グループとの「共同管理」の下に、推進されるのである。(12)

日本は、結局のところ、「あの戦争」とその敗北によって、1945 年までは、「Ⅰ期」の「段階」にとどまり、「Ⅱ期」の「段階」へと「上昇」することはできなかったのである。そして、アメリカの占領統治の下で、戦後ふたたび、「Ⅰ期」の「段階」の前期を迎えるのである。あの[セカイ]のなかの、C グループに、当初は位置づけられていたが、「冷戦」の進行のもとに、アメリカの積極的なテコ入れを受けて、日本が独立を果たした 1952 年頃には、B グループの、上位に、位置づけられるようになる。ここでも注意すべきは、アメリカの占領統治の下で、日本は「権威主義的性格の政治」的手法により、「宗主国」アメリカの政治指導の下での「共同管理」により、「開発主義」的特徴に彩られる、「Ⅰ期」の「段階」の政治を、推進していくのである。これに関連して、ここで付言すれば、『敗北を抱きしめて』の著者である、ジョン・ダワーが、占領期の統治において、日・米が「共同」で、「民主主義」を「創造」し、それを推進したという(13)とき、私は、その「創造」された「民主主義」とは、ここでいう「Ⅰ期」の段階の「権威主義的性格の政治」であると、みるのである。と同時に、その「民主主義」を「創造」する、「大きな歴史の流れ」の存在を、すなわち、私のモデルで描く、あの[セカイ]の形成と発展とその変容の「歩み」を、忘れてはならないと強調しておきたいのである。

ところで、日本が 1950 年代の中頃までに、何とか、「Ⅰ期」の段階を経て、「Ⅱ期」の前期の段階を迎えようとしていたとき、中国は、毛沢東の指導のもとに、中華人民共和国を建設し、まさに「Ⅰ期」の前期の段階から中期を目指していた。結論を先取りしていうならば、中国が、「Ⅱ期」の段階を迎えることができるのは、改革・開放による「社会主義市場経済」へと、舵を切ってから以降である。中国の歴史を振り返るとき、清朝後期に「歴史の大きな流れ」のなかに飲み込まれた中国は、孫文の下で辛亥革命を経て、中華民国として、再スタートを切る

が、その後の混乱のなかで、長らく、「Ⅰ期」の前期、あるいは、中期の段階に、甘んじるところとなったのである。

戦後日本が、「Ⅰ期」の「段階」を卒業して、「Ⅱ期」の「段階」へと、「上昇」していく、1960 年代頃には、すでに、イギリス、アメリカ、フランスは、「Ⅱ期」の中期、後期の「段階」を経て、「Ⅲ期」の前期の「段階」に、差し掛かっていたが、日本も、驚異的な追い上げにより、1970 年代の末頃には、追いつきかけるのである。もちろん、その際に、注意すべきことは、こうした「追いつき、追い越せ」の歩みが、「大きな歴史の流れ」のなかで、実現されるということであり、そのことは、その歩みに、いつも「差別」と「排除」の「関係」をともなう、ということである。それゆえ、追いついた、追い越したからといって、喜べるものでもなく、また、同様に、追い越されたからといって、それほど悲観すべきことでもない。しかしここで忘れてならないのは、どうすれば、「差別」や「排除」の「関係」を前提としないで、「豊かな社会」を築いていけるか、それを考え、そうした社会を建設する努力を続けていくことであろう。こうした社会をつくる上で、もし「日本」と「日本人」が、「ナンバー・ワン」を、手にすることができるのであれば、私は、その「共同体」の一員であることに対して、誇りを覚えるであろう。たとえ、［ナンバー・ツー］であっても、それは、称賛に値する歩みであることに、間違いない。

次に、私の「Ⅱ期」（［経済発展→分厚い中間層の形成］）の「段階」に該当する「歴史」は、福田の 10，11 に語られている内容に一致している。10 は、「Ⅱ期」の前期、中期に、そして 11 は、後期にそれぞれ重なっている。この「Ⅱ期」における「分厚い中間層の形成」は、日本の「1 億総中流の時代」を導く大きな要因であるが、「大きな歴史の流れ」のなかで、この中間層の形成を捉えなおすとき、日本をはじめ、欧米先進国が「Ⅱ期」の段階、そして、「Ⅲ期」の段階に位置するとき、先進国では、「分厚い」中間層が、その担い手となる「豊かな社会」を実現するのであるが、それと軌を一にするかのように、「南」の途上国と「北」の先進国との「格差」が、もっとも大きな、拡がりを、見せるのである。そこには、先進国の「分厚い中間層」と、それを担い手とする「豊かな社会」が、「差別」と「排除」の関係のもとに、創り出されてきたともいわざるをえない、「関係」が、如実に、存在しているのである。そこには、「南」の隣人に対して、あまりにも「冷酷」な、「やさしくない」関係が、示されている。この時期、なおまだ「南」の途上国グループに位置づけられていた中国は、「大きな歴史の流れ」のなかで、C グループの上位、あるいは、B グループの下位に位置していたと

いえる。そして、「Ⅰ期」の「段階」の前期から、中期、そして後期の「段階」に、到達するのであるが、中国は、この段階において、国民国家の基盤づくりを終了し、さらなる国家の発展を目指すのである。この中国に対して、戦後、蒋介石により指導される台湾は、1950 年代、60 年代には「Ⅰ期」の前期、中期の「段階」を経て、1970 年代に入ると、後期の「段階」に達する。そして 80 年代には、「Ⅱ期」の前期に、90 年代には、中期の「段階」へと到達するのである。「大きな歴史の流れ」における、台湾の、こうした「上昇」のプロセスは、韓国の「上昇」の歩みと、類似している。蒋介石の率いる台湾は、その建国期の事情もあり、当初から、アメリカの後援のもとに、B グループに位置していたと、私はみている。それは、また、韓国にもそのまま、該当する。このような、台湾、韓国に対して、中国は、なお、この時期（1950 年代、60 年代に至る時期）には、C グループの上位に位置しており、いわば、台湾、韓国の、後塵を拝しているような状況下に、おかれていたのである。

ところで、「日本」と「日本人」が、「Ⅱ期」の「段階」を経て、「Ⅲ期」（[分厚い中間層の形成→民主主義の発展（高度化）]）の、前期、中期、そして、後期へ、またそこから、「Ⅰ´期」（[民主主義の発展（高度化）→経済発展]）、「Ⅱ´期」（[経済発展→分厚い中間層の解体]）の、「前期」「中期」の、「段階」を迎える歩みは、福田の 12 と 13 に、該当している。

私の見方と、福田のそれは、当然のことながら、異なっているところが多々見られるのだが、これについては、本論で論じることとしよう。先進国が 1970 年代以降、いわゆる「先進国病」と呼ばれる長期に及ぶ経済的後退（衰退）を、経験していくのだが、日本はその歩みに、少し遅れて、ついていくことになる。そして、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツをはじめとするかつての先進諸国が、「Ⅲ期」の「段階」を通り過ぎて、「Ⅰ´期」の前期の「段階」を迎える 1980 年代頃、中国が、まさに「世界の工場」となるべく、「Ⅰ期」の後期を経て、「Ⅱ期」の前期を迎えていた。着実に、また、確実に、「大きな歴史の流れ」は、そのしお目を、変えていたのである。もちろん、このしお目の変わりの始まりは、70 年代であったが、この時期は、また、「分厚い中間層」を担い手とした、「豊かな社会」が、崩壊を始める、まさに、その終わりの始まり、の時期と、重なり合っていた、時期である。この両者の重なりは、1970 年代、80 年代、そして、90 年代の初めころまで、続くのだが、次第に、［A→B→C］から、［B→C→A］へと、「歴史の大きな流れ」は、その輪郭を、はっきりと表すようになっていく。こうして、先進諸国が、「Ⅰ´期」の前期、中期、後期から、「Ⅱ´期」

の前期、そして中期の「段階」を、迎えるのと呼応する形で、中国は、「Ⅱ期」の前期、中期を経て、後期へと、今まさに、差し掛かろうとしているのである。これに対して、韓国や台湾は、「Ⅲ期」の、前期を経て、中期の「段階」に、位置している。そして、日本は、今、「Ⅱ´期」の前期から、中期の「段階」へと、突入していると、私はみている。誤解を恐れないでいうならば、イギリスやアメリカは、すでに「Ⅲ´期」の前期の「段階」に、位置づけてもいい状況化にある。それではこうした点を踏まえながら、福田の著作『魂の昭和史』のくだりに、眼を転じることにしよう。

第1章 「自由主義—帝国主義—民主主義—民族主義」の「渾然たる関係」のなかの「日本」と「日本人」

1. はじめに:「主権国家」と「国民国家」の「厚い壁」と「薄い壁」と「ボーダレスの壁」

私が福田和也を本当の意味で知るに至るのは、クリストファー・ソーン著、市川洋一訳『米英にとっての太平洋戦争』の、下巻に収められていた、氏の「解説」(14) に触れたときからである。なんとも言われぬ、読後感を覚え、それは、未だに、私の身体の奥深く、残っている。いつか、福田と「対話」の機会が持てればと思い始めたのも、その時である。もっとも、「対話」といっても、福田氏の専門分野は、私のそれとは、異なるものである。それだけでなく、氏の学識の深さは、「対話」を許すようなものでもないほどに、私の眼前に、はるかに高く、位置している。無謀、と言えば、それまでであるが、それを、あえて今回、試みてみたくなったのである。あまり好きではないのだが、いわゆる、今はやりの言葉を使えば、「こらぼれーと」、というものに譬えられようか。福田には、日本の近現代史に関して、分かりやすく語っている、いくつかの著書がある。(15) なかでも、私が非常に興味を抱いたのは、『魂の昭和史』(16) である。高校生を対象とした文庫本なのだが、刊行後、すぐに一読したが、いろいろなことが脳裏を駆け巡ったのを、記憶している。このほかにも、この著作と、一対の関係にある、著書がある。福田による日本の近現代史の見方を、私のこれまでの研究と絡めながら、そこから、純然たる福田のものでもなく、また私のものでもなく、同時に、お互いの「立場」を尊重しながら、それこそ、先の「コラボ」ができれば、と願う次第である。

ここで、福田の「解説」のくだりを紹介しておきたい。その際、私の「経済発展」と「民主主義の発展」の「関係（史)」に関するモデル（「村田モデル」）との、「コラボ」を念頭におきながら、論を展開してみよう。「中国のナショナリズムに関する一考察－丸山真男の「幸福な結婚」論を手がかりとしてー」、において、提示したモデルを、ここで、手始めに、使ってみたい。そのモデルを、簡単に紹介してみる。(17)

＜共時態モデル＞

A　　B　　C

［経済発展→民主主義の発展］→［経済発展 →(×) 民主主義の発展］→［経済発展→×民主主義の発展］

【厚い壁】　→　［薄い壁］　→　［ボーダレスな壁のない状態］

（より詳しい図式としては、[11] の拙著の他に、拙論「イラクに「民主主義」を押しつけているのは何か―「民主主義」の「構造」と「発展」方向の転換という観点から」『アソシエ』15 号（御茶の水書房）所収を参照されたい。）

この図式について、少し、説明しておきたい。この図式は、すぐ上で示したように、『アソシエ』に収められた、中国のナショナリズムに関する論考のなかで、私が、提示した、モデルの、一つであるが、話を、わかりやすくするために、独立して間もない、東ティモールの例を、引き合いに出して、説明している。[18] そのくだりを、ここに、そのまま引用してみる。

この問題を考える際、今日の東ティモールの置かれた現状を見てみることは有益である。東ティモールは 2002 年 5 月に独立を果たすのだが、2000 年 2 月 7 日付「読売新聞」に紹介されていた当時の東ティモールが経験した「産みの苦しみ」にも垣間見られる。国連東ティモール暫定統治機構（UNTAET）主導の下で東ティモールは「ゼロからの国造り」を進めていた。その東ティモールはまさにグローバル化の真っ只中で国造りを行っていくのだが、そこにオーストラリアに代表する海外企業の「特需」狙いの進出により、「植民地化」が進行していた。こうしたなかで、「将来、国家指導層となるはずの東ティモール民族抵抗評議会（CNRT）の幹部は『国家の枠組みが未整備の段階での、市場原理導入には無理がある。国内産業育成のためにも規制が必要だ。このままでは、また植民地になってしまう』と懸念を口にした。」と紹介されている。しかしこの評議会は、「東ティモールの自立に向けて献身的に取り組んでいるのか、というと疑問がある。」と記事は述べながら、約 200 箇所に支部をもつ同評議会の援助物資の横領を批判している。この記事にある「規制」はまさに「国権」であり、「横領」はある種の「保身」であろう。このように「保身」にのみ「国権」は直結しているわけではないことがわかる。ボーダレス化された壁のない状態に置かれたままでは国造りもままならず、そのためには、「規制」が必要となり、「国権」に重心が置かれることを物語っているのである。

東ティモールの例は上掲図式で描く世界の中において考えるとよく分かることである。

こうした図式で描かれるＣに位置する東ティモールが、もし丸山のいう［幸福な結婚］をするには、なによりもこのボーダレスな壁のない状態を脱していくために少しでも厚い壁を建設していくことが不可避であった。もちろん、それは容易なことではない。

もしどこかの国が、私の描く世界に無理矢理組み込まれて、この壁のない、ボーダレスな状態に置かれていては、この世界で行きぬける力を得ることは相当に困難なことが予想される。生き抜くためには、この図式の左側にできるだけ位置することが必要であるが、そのためには、逆にできるだけ多くの国や地域を自分の右側につくることに成功しなければならない。つまり、自分より、壁の薄い地域や国をつくり出すことが必要である。しかし、逆からみれば、そうした試みに対して、図式の左側に位置している国は、当然ながら自分の厚い壁を守りさらにその壁を厚くしようと試みるから、そうした営為を阻止しようと行動していく。

このように、先に厚い壁をつくった国は、つまり「幸福な結婚」を経験した国は、そうした営為を許そうとはしなかったのである。そのことは、国民国家の建設を何よりも必要とした。国民経済を、国民文化を、またその担い手である国民をつくっていくためにも、その壁の厚さが必要であり、そのために国民国家が不可欠であった。そのことは、国権と民権のバランスを考えた時、必然的に前者に重点が置かれることを意味していた。まずバランスをとるためにも、国権を重視して、国家建設をできるだけ速やかに行う必要があった。それができて初めて、丸山のいうバランスを考えることができたのである。このように丸山のいう「幸福な結婚」論が私のモデルで描く世界と結び付けられないまま理解されてきたことから、国権と民権の両者のバランスについての的確な議論が十分に行われてこなかったことがわかる。このことは、また従来論じられてきた中国の「ナショナリズム」論も、再考察されるべきことをわれわれに教えているのである。

このモデルは、いちばん左側に、位置している、「先進国・地域」と、いちばん、右側に、描かれている、「後進国・地域」との、「自己決定権」の「争奪戦」を、めぐる「関係（史）」を、同時に、物語っている。行論の都合上、ここで、

それについて論じた、拙考のくだりを、紹介しておきたい。[19]

「自己決定権」とは文字どおり、誰からも干渉されることなく「自己」が「単独」で「決定」する「権利」であり、同時にそれは「権力」(「力」)である。しかし「単独」で決定する権利や権力をもつこの「自己」は、一人、一集団、一国家でその能力を有することができないのである。この「自己」は「関係」のなかで生み出される「自己」であり、当然ながら、その「決定権」も「関係」を形成し、発展させることによって獲得されうるものなのだ。行論の都合上、ここで結論を先取りしていえば、「主権国家」、「国民国家」を建設していく流れを構成する「ナショナリズム」もこの分脈においてわかるように、いつも「関係」として、「関係」のなかでつくり出されていくものであり、またその「ナショナリズム」と結びついた「自由民主主義」の形成、発展も同様に、「関係」としてはじめて可能となるということである。それゆえこれまでの「ナショナリズム」研究において紹介されてきたように、「下から」の、「上から」の、あるいは「健全な」「良い」とされる「ナショナリズム」も、さらにはたとえそれが「想像の」それであっても、いつも「関係」として、「関係」を前提としてつくり出される「ナショナリズム」の性質上、あたかも、「一国」枠のような位置づけ方では適切に描けるものではないということだ。もっと踏み込んでいえば、「ナショナリズム」には、「下から」も「上から」も、そして「健全」なものとして捉えられるものなど断じてないということだ。以下においてこれらの「ナショナリズム」に関する筆者の見方をさらに掘り下げて論究していこう。

2.「自己決定権」の「関係(史)」からみる「市民的自由」

「自己決定権」の獲得あるいは争奪の過程として「ナショナリズム」の形成、発展の歩みに接近するとき、私たちは、まさにスペイン、ポルトガルの「大航海時代」以降の「主権国家」「民族国家」、そして「国民国家」の建設に向けての歩みの中にそうした「自己決定権」をめぐる争奪の「戦争」を確認できる。もともと、イベリア半島は長らくオスマン・トルコの支配の下にあり、スペイン、ポルトガルは「レコンキスタ」と呼ばれる国土回復運動に着手するわけだ。つまりそこでもすぐ確認できるように、イスラム勢力との「自己決定権」をめぐる争奪戦をおこなうわけである。そして国土を回復した後でも、今度はその国土をさらに確固たる基盤の下につくり直す必要がある。それによってイスラム勢力に対してのみならず、イベリア半島を含む他のヨーロッパ諸地域の諸勢力との間での「自己決定権」の争奪という「戦争」に勝利することが要請され

たわけである。そしてそのことが、スペイン、ポルトガルに「大航海時代」と呼ばれるアジア、アフリカ、アメリカ大陸への海外領土の拡張拡大へと乗り出させることになった。スペイン、ポルトガルは、「大航海時代」の先頭を走ることでアジア、アフリカ、アメリカ大陸での「自己決定権」の争奪戦にある時期までは勝利したのであるが、それは同時に、それらの地域における多くの「共同体」から「自己決定権」を奪うことを、または制限することを意味したのである。後にスペインから独立するオランダも、「自己決定権」を奪われていたのであった。

それではこうした「自己決定権」をめぐる獲得、争奪の過程をモデルとして以下に示しておくことにする。

$$\left\{\begin{array}{l} \text{Aの自己決定権} \overset{(\times)}{\rightarrow} \text{Bの自己決定権} \overset{\times}{\rightarrow} \text{Cの自己決定権} \\ \left(\begin{array}{l} \text{Aの自己決定権} \overset{(\times)}{\rightarrow} \text{Bの自己決定権} \\ \text{Aの自己決定権} \overset{\times}{\rightarrow} \text{Cの自己決定権} \\ \text{Bの自己決定権} \overset{\times}{\rightarrow} \text{Cの自己決定権} \end{array}\right) \quad \text{（共時態モデル）} \end{array}\right.$$

基本的には三者関係（$A \overset{(\times)}{\rightarrow} B \overset{\times}{\rightarrow} C$）として描かれる「自己決定権」のモデルとなっているが、そこから二者関係（$A \overset{(\times)}{\rightarrow} B$、$A \overset{\times}{\rightarrow} C$、$B \overset{\times}{\rightarrow} C$）としても描くことは可能である。いずれにせよ、このモデルで筆者が伝えたいのは、「関係」として、それを前提として「自己決定権」の形成、発展がみられるという点である。この「自己決定権」の関係は、個人レベルにおいても、集団レベルにおいても、また「共同体」レベルにおいても該当すると筆者はみている。そしてこの「自己決定権」という「権利」は、すなわち、「自由」は、またはその「自由」を「自由」として認めさすことのできる「権力」は、「共同体」レベルでは「主権」として位置づけられる。つまり「民主主義」は、換言すれば、「領域的民主主義」として形成、発展するに至った「自由民主主義」の領域は、こうした仕組みの下でつくられる「主権」を手に入れることによって実現されたのであり、その意味で、「民主主義」は、その誕生のまさに前史からすでに、「差別」、「排除」の仕組みをその内に構造的な関係として抱えていたのである。

福田は「解説」において、次のように述べる。――つまり歴史の成立は、神話や、あるいは世代的、種族的な自己了解を脱して、より長く広い時間的な持続のなかでのアイデンティティの把握を意味している。と同時に歴史的叙述が

成立するためには、普遍的な価値観が必要であり、その点で特殊としての「文明」成立が欠かせないのである。[20]――ここにある、「普遍的な価値観」、「特殊としての『文明』(の成立)」を、私のモデルで表わすならば、まさに、先のモデルで描かれる[セカイ]の形成と発展とその変容過程において、「普遍的価値観」なるものが、図式の、いちばん左側に、位置するAと、BとCとの「関係(史)」のなかで、創り出されるのであるが、「普遍的価値観」を、「普遍化」するのは、もっぱら、Aであり、これに対して、BやCは、ひたすら、それを、「受容」する、「押し付けられる」側に、まわるのである。それゆえ、「押し付けられる」側にとっては、すなわち、BやCにとっては、それは、まさに、「特殊」であり続けるのだが、ここでも、その「特殊」なるものは、B、Cとの、「関係(史)」のなかで、本来は、これまた、「特殊」な、Aの「文明」を、作り出していることを、意味している。

福田の、次のくだりは、「近代〈現代〉民主主義」の「理念」やその「実現」を「当為」としてきた社会科学の世界には、非常に「新鮮」なものとして、あるいは、「驚き」として、理解されるのではあるまいか。以下に引用しながら、私のモデルに依拠しながら、再解釈してみたい。

――西欧的な思考において、「歴史」が思想として完成したのが、十九世紀のドイツにおいてであった。十八世紀末、フランス、アメリカにあいついで起こった市民革命を、後進国として焦燥のうちに傍観していたドイツの思想家は、市民的自由を人間精神の最高の価値として理念化することで、歴史の意味を、精神の進歩として定式化したのである。人類の全歴史を、原始から民主主義社会にむかう精神的階梯と見る、いわゆる「世界史」の誕生は、また一面において「文明」の意味を抹消するものであった。もしも人類の発展が、単一的な終局に向かって進むべきものであるならば、多様な文明のあらわれは進歩への一過程としての意味しか有せず、ある社会にくらべてその目的地としての市民社会からみて前段階にあるものは、おしなべて「未開」「野蛮」としてその価値を否定される。その抹消は、すでにヘーゲルが『精神現象学』において「世界史」を祖述しつつ、馬上の世界精神としてのナポレオンの自国占領をことほぎ、ドイツの民族的興隆を主張したフィヒテらを憫笑したことにあらわれている。[21]――

ここのくだりを私のモデルからみるとき、以下のように再構成される。ドイツの思想家が、「原始から民主主義社会に向かう精神的階梯」と捉えた、いわゆる「世界史」は、私のモデルで描かれた、[セカイ]の形成と発展そして変容によって、形作られたものである。それは、まさに、「差別」と「排除」の「世界

史」にほかならない。それゆえ、私には、ドイツの思想家のように、「市民的自由を、人間精神の、最高の価値として、理念化」して、「歴史の意味を精神の進歩として定式化」することなど、とてもではないが、できる相談ではない。それは、恐ろしいまでの、詐術である。上述したように、精神的階梯を、上昇するために、自分の右側に、できるだけ多くの、「自己決定権」を、行使できない人や、そうした集団を、創り出さざるをえないからである。個人レベルであれば、「自己決定権」とは、まさに、「自由」であり、集団、共同体レベルであれば、「主権」に、該当するものである。A は、B や C に対する、「差別」と「排除」の「関係（史）」のなかで、初めて手に入れることのできる、「市民的自由」を得る。そのことは、同時に、B や C における「文明」を、「抹消」することになる。福沢諭吉が『文明論之概略』において、「欧米の触るる処にて、よくその本国の権義と利益とを全うして、真の独立を保つものありや。――」云々と、述べたくだりを想起してみればいい。(22) これに対して、A においては、まさに［経済発展→民主主義の発展］の図式で描かれる[セカイ]それ自体が、「文明」を僭称できることとなる。まさに、とんでもない[セカイ]（の創造）である。「東京裁判」における「文明に対する罪」の、「文明」とは、まさに、この[セカイ]のことを意味しているのである。キーナン判事が「文明に対する罪」というときの「文明」とは、私のモデルでいう、アメリカ、イギリス、フランスそしてオランダに代表される、A の［経済発展→民主主義の発展］にある、「民主主義」を、指している。ところが、キーナン判事は、その「民主主義」が、A の「経済発展」との「関係（史）」のなかで、実現されてきたことに対して、また、それゆえ、B や C の、「経済発展」と「民主主義の発展」の「関係（史）」のなかで、創り出されてきたということに対して、どれほど理解できるだろうか。私のモデルで、描く、A の「民主主義の発展」が、B、C の「民主主義の発展」を、「共時態的な関係」のなかで、阻害、あるいは、頓挫させてきたなどとは、露ほども思わないだろうし、考えるはずもない。(23)

福田のいうように、ヘーゲルとナポレオン、そして、フィヒテの関係は、まさしく、その通りであろう。政治学や、比較政治学、及び、国際関係学における、「民主主義」の「定義」とされるものが、ヘーゲルに、ナポレオンが、「市民革命を実現したとされる国」に、フィヒテが、「アジア的人権」を掲げるアジアの「開発独裁体制」諸国に、各々、対比、対応されるだろう。はたして、ヘーゲルの、ナポレオンに対する態度を、そのまま素直に、「受容」してよろしいのであろうか。「日本」と「日本人」は、［馬上の世界精神としてのナポレオン」

に、「開国」期に、そして、「あの戦争」の「敗北」後に、少なくとも、二度にわたり、遭遇しているのである。一度目の、「ナポレオン」は、ペリー提督であり、二度目は、「マッカーサー将軍」であった。そして、一度目における「フィヒテ」は、「尊王攘夷主義者」であり、二度目の、それは、「日本軍国主義者」、であった。

3. 福田のみる「日本の近代化」

ところで、福田による、日本の「近代化」の理解の仕方を、私のモデルで見るとき、少しその捉え方が、異なってくる。私にとって、こうした「違い」というか、［ズレ］の認識は、非常に面白いと同時に、私のモデルに対する、さらなる理解のためにも、重要なところである。以下に、日本の「近代化」に関する、福田の見方を、箇条書きに列挙し紹介してみる。

①――日本にとって近代の政治的意味は、東アジアの政治過程に、ふたたび密接にむすびつけられることにあった。日本の近代化そのものが、西欧列強による中国やベトナムの植民地化という現象を前提として始まったのであり、あらゆる政治的決断の背後には、「アジア」の一端として西欧におびやかされつつある自己の認識があった。

②政治的にも、歴史的にも、文化的にも均質ではありえないアジアを「一つ」とあえていわなければならなかったところに、近代日本の世界観の屈折があらわれている。

③近代日本の「アジア主義」が錯綜した様相をもたざるをえなかったのは、日本をアジアとむすびつけているのが、西欧のアジアにおける存在そのものであることだった。――近代日本は、パックス・ブリタニカという与えられた枠の中で、政治的、軍事的に自立できるよう努力すればよかった。もとよりその努力は困難をきわめたが、また目的が明らかである安心もあった。日本は、この適応の課題を見事にこなした。――だがまた、その適応の低音部には、「アジア主主義」のおどろおどろしい響きがつきまとっていた。

④――日本は、第一次世界大戦後、パックス・ブリタニカが消滅してから、適応すべき秩序を見失い、迷走をはじめた。イギリスの衰退は、日本が適応をはたした秩序の崩壊を意味すると同時に、それにかわるべき秩序の空白を意味していた。アメリカは、――イギリスにかわってその責任をはたす気概と能力に欠けていた。

⑤維新以来、さまざまな形でイギリスの保護や指導をうけていた日本は、第一次世界大戦後の世界情勢のなかで、みずからの手で、国家戦略を立てざるをえなくなる。

⑥――第一次世界大戦後の混迷をどう見るか、ということが、日本の近代化の評価と直接的につながっている。つまり日本近代における西欧化と、アジア主義的反西欧の相克をどう見るのか。それは同時に第二次世界大戦そのものの問題である。

⑦周知のように近代日本が西欧を相手に戦争をしたことを、必然とみるか、回避しえた衝突であったとみるか、について、これまでさまざまな議論がなされてきた。要するにこの問いは、日本の近代化をどう見るか、という問いと同じなのである。つまり、日本の近代化が、日本の完全な西欧化、西欧文明への同化を目的としていたのか、あるいは、西欧文明とはことなる文明をきずこうとしていたのか。――(24)

少し引用が長くなったが、ここまでのくだりを、私のモデルから見直してみよう。先ず、私のモデルで描かれる、[セカイ]は、歴代の覇権国が中心となって、そのもとに、先進（中心）国（地域）、中進国（地域）、そして後進国（地域）を束ねながら、まさに、「大航海時代」から今日に至るまで、その形成と発展、変容を、経験してきた「構造（関係）」である。当然、それは、「パックス・ブリタニカ」のもとでもそうであるように、その後の、「パックス・アメリカーナ」のもとでも、そうした[A→B→C]（省略系）の「構造」は、一貫して、続いていた、と私は見ている。それゆえ、たとえ、「パックス・ブリタニカ」の世界が、後退する、ことがあっても、イギリスの影響力が無くなっていくとしても、私のモデルで描く[セカイ]までもが、無くなってしまうとは、どうしても考えられないのである。もっとも、それは、A のなかで、B のなかで、さらには C のなかで、その地位の上昇、下降をめぐる、換言すれば、各々の「自己決定権」の、多寡をめぐる「争奪戦」が不在であるということを、決して意味しない。目まぐるしい変動は、いつも、続いている。しかし、それは、いつも、私のモデルの[セカイ]のなかで展開されるものであり、また、その「構造」を、決して、破壊するものとはならないのである。したがって、私には、福田が、④でいうようには考えられない。たとえ、「パックス・ブリタニカ」が崩壊したとしても、日本が、「開国」以降組み込まれてきた[セカイ]の崩壊にはつながらないのであり、依然として、日本は、この[セカイ]の、B グループのなかで、ひたすら、A グループを目指して、邁進することを怠るとは、思われないのである。

もちろん、その際、福田が④，⑤で述べるように、イギリスの保護もなく、日本が心細い状態に置かれていたことは、想像に難くないし、日本が、独自に進路を切り開かなければならないことも、確かなことである。しかし、私には、だからといって、そのことにより、日本が「適応すべき秩序」を見失うことになるなどとは、とても思えないのである。それゆえ、日本の「迷走」が、もし引き起こされたとすれば、それは、「適応すべき秩序」を、日本が見失ったからというようには思われない。なぜなら、「開国」以降、また、「維新」以降、日本の「適応すべき秩序」は、私のモデルで描く[セカイ]と、そのもとでの「秩序」であったからにほかならない。私のモデルの[セカイ]は、別言すれば、「覇権システム」とその「秩序」のもとで創り出されてきた、「経済発展」と「民主主義の発展の関係（史）」にほかならない。再度、ここで言及しておくと、「パックス・ブリタニカ」の消滅が、たとえ導かれるにせよ、それを作り出すのは、私のモデルの[セカイ]の形成と発展と、その変容に伴って導かれるものであるということであり、それゆえ、決して、このモデルの[セカイ]が、「消滅」することを、意味しない。また、この[セカイ]に組み込まれて生きてきた、「日本」と「日本人」は、それほど、和（やわ）ではない。なにしろ、「あの戦争」へと、突入し、戦い続けたのだから。

また、私のモデルから、福田のいう、「アジア主義」を捉えなおすとき、それは別にアジアだけではなく、欧米の「近代化」の過程のなかでも、「アジア」は「一つ」ならぬ、「欧米（西洋）」は「一つ」という、「欧米主義（ウエスタン主義）」が創られてきた、と見ている。私のモデルでいえば、アジア主義は、[A→B→C]の[セカイ]のなかの、[B→C]の、[セカイ]であり、これに対して、「欧米主義」は、まさに、[A→B→C]の全体からなる、[セカイ]である。その意味では、福田が、日本の近代化を、「屈折があらわれている」とみていたように、欧米の近代化も、そうした「屈折」を、生み出すという意味では、かなりの「屈折」の歴史を[重層化]したものとして捉えることができるのではないか。オスマン朝トルコの勢力に対する、スペイン・ポルトガル、スペインに対する、オランダ、オランダに対する、イギリス、そして、イギリスに対する、アメリカ、というように。ところで、「アジア主義」が、「特殊」、「アブ・ノーマル」に、「欧米主義」が、「普遍」（「普遍的人権」の「普遍化」）、「ノーマル」に、それぞれ結び付けられてしまうのは、今に始まったことではないが、この問題に関連して、福田の⑥⑦にあるくだりは、重要な問題を提起している。その問題に入る前に、③のくだりで、福田が日本の近代化を、語る際に、「パックス・ブリタニカという与えられた枠の

中で、政治的、軍事的に自立できるよう努力すればよかった」、と述べていることに対して、一言しておきたい。このくだりも、すでに、何度も、指摘したように、私のモデルの[セカイ]の[枠の中]で、先ずは、「日本」と「日本人」が、生きてきた、生きざるをえなかったということを、銘記しておきたいのである。「パックス・ブリタニカ」は、その前の、「覇権国」であるオランダとの関係を抜きには成立しなかったし、また、そのオランダも、それ以前の、ポルトガル、スペインとの関係抜きには、「覇権国」とはなりえなかった。また、そのポルトガル、スペインの、「覇権国」への「上昇」は、「大航海時代」以降の、「準周辺」、「周辺」との「関係（史）」を抜きにしては、語ることのできない「歴史」であった。そのことは、私のモデルで描く[セカイ]の形成、発展と、変容の歩みと結びつけられなければ、「パックス・ブリタニカ」なる存在も、考えられるものではない、ということを物語っている。それゆえ、私からみるとき、福田の位置づけ方には、私のモデルで描く[セカイ]との「関係」が、鮮明なものとはなっていないように思われる。その点で、単刀直入に言うと、福田の、「パックス・ブリタニカ」の中での、「日本」の位置づけ方は、ある種、司馬遼太郎の『坂の上の雲』の中での日本と、アングロ・サクソンとの、とりわけ、イギリスとの位置づけ方と、共通するものを持っているように思われる。これらの点については、また後に、触れられるであろう。

さて、先の⑥⑦のくだりに戻るとしよう。ここでの、福田の見方に対して、私は、少し、異なる見解を持っている。ただし、この⑥⑦にある、福田の見方は、非常に、重要な問題を提起していることは、たしかである。福田は、⑥⑦のくだりに続けて、次のように語っている。――しかし、日本の近代化のなかに本来反西欧的なもの、あるいは西欧がつくりだそうとしてきた秩序と文明、そして世界史に対して抗するものがあったとしたならば、いずれにしろ英米との衝突は避けられなかったことになる。こうした見方を成り立たせるためには、必ずしも大東亜戦争を「解放戦争」とみなすような立場を必要とはしない。――「解放」か「侵略」か、といった倫理的問題とは別に、近代日本が作りだした「文明」が西欧に包含されるものではない、という主張はなしうる。また日本の近代化が、結果として「世界史」をいかなる方向に導いたのか、あるいは破綻させたのかを考えれば、おのずと大東亜戦争が一種の事故であり、犯罪とみなされるべきなのか、必然であり文明的な事件なのか、は判然とするはずである。[25]――このくだりも、大切なところだが、私は、たとえ日本が「文明」的観点から、「世界史」に抗する形で、ついに戦争へと帰結したとしても、その日本の歩みは、そ

れでも、まずは、私のモデルで描く[セカイ]の枠の中で、B の立場を、死守しながら、同時に、A に対抗する上でも、A グループへと、「上昇」する必要があった、と見ている。というのも、「開国」以降に、話を限定した場合であれば、たとえ「文明」を「防衛」するための「戦い」であるとしても、そのためには、「日本」の「文明」を創り、そしてそれを、継承できる「担い手」が必要であり、また、その「担い手」が、仮に「国民」であれば、「主権国家」、「国民国家」の態を取らざるをえない。事実、「開国」以降の日本の歩みは、まさに、そうしたものであった。(26) また、その際、日本と日本人は、どのような「舞台」の上で、そうした国家建設の課題に直面したかを鑑みるならば、私のモデルで描く[セカイ]を前提にせざるをえないことに気がつくのではないか。そして、その[セカイ]で、「自己決定権」を、獲得していかなければ、国家の存続もおぼつかなくなり、私のモデルの右側へと、位置づけられざるをえなくなる。もし、こうした課題に応えられなければ、「文明」を前面に出すことすら、できないからである。この点を、どの程度、認識するかによって、結論は異なってくるのであり、事実、そこに、私と福田の「ズレ」が見出せる、と私は理解している。ここで、もう少しこの問題について、私のモデルをもとに考えてみたい。

4. 福田の提示する「二つの世界」—「普遍的世界」と「フィヒテ的世界」

福田の議論において、私が共感を覚えるのは、先述したように、社会科学の研究者と異なり、とりわけ「民主主義」を語るこれまでの研究者と異なり、福田は、「世界史」をより的確に把握しているように思われるからである。私の見るかぎり、政治学や比較政治学における「民主主義」や、「民主化」を取り扱った研究は、そのほとんどすべてが、福田が、ここで紹介したような「世界史」を、「所与の前提」としている。(27) それゆえ、福田が拘泥しながら語る、「文明」の「防衛」といった問題に対して、換言すれば、「伝統」とか「慣習」といった「文化」と、よりもっと両立・整合可能な「文明」の「消滅」を、どのようにして避けるのか、という問題に対して、よくいえば、「楽観的」に、悪くいえば、「無頓着」に、取り扱ってきたように思われる。むしろ、高橋哲哉とテッサ・モーリス・スズキの「対談」でも垣間見られたように、「国柄」は、あまりにもあっけなく放り捨てられても良いかのように、扱われていたのではなかろうか。彼らは、「国柄」と「普遍的人権」が「抵触」した場合には、前者よりも後者を「選好」すると、こともなげに、言い放つのである。(28) こうした立場は、まさに、戦後の日本において、「押し付けられた憲法」をめぐる議論のなかに、見事に、

投影されている。「世界史」を、素直に受容した、「占領下」の「日本人」には、ナポレオンに対峙したフィヒテの「気概」を、どれほど理解できただろうかと、福田ならずとも、私も思わず見てしまう。

ところが、ここでも少しばかり、福田とは異なるものを感じている。それは、たとえ、その当初において、ナポレオンの「世界精神」とは、異なる立場に位置づけられるものであれ、フィヒテの「気概」を「現実化」していくにしたがい、結局は、「世界史」の「歩み」を、フィヒテとプロイセンもたどらざるをえないからである。これは、まさに「子供」が「大人」へと「成長」していくプロセスに似ている。私のモデルで描く［セカイ］のなかに、A、B、C の、それぞれのグループは組み込まれながら、C は、B へと、また B は、A へと、「上昇」することを、目指していく。もちろん、そうはさせまいとして、A は、B に対して、B は、C に対して、有形無形の「圧力」を、掛け続けていく。そうした相互の「力」と「力」のぶつかり合いをとおして、首尾よく、「上昇」することのできるものと、逆に、それを、阻止されるものとに、区分されていく。そうした過程のなかで、［セカイ］はつくりだされていくのだが、その際、「ナポレオン」的「普遍的世界」と、「フィヒテ」的「特殊的世界」とは、私の［セカイ］のなかで、相互に補完する形で、支え合っていることを、私のこれまでの研究は示している。[29] その意味でいえば、たとえ、「フィヒテ」的世界」を、「防衛」しているように見える場合でも、実は、それは、「ナポレオン」的「世界」を、支え、維持・発展することに与っているのである。誤解を恐れないで、ごく分かりやすい例を挙げれば、「自由」な国を標榜するアメリカが、数々の極悪非道なる「強権・抑圧」政権を、後押ししてきた、そうした「歴史」を考えてみれば分かりやすい。一見、「水」と「油」のように見えながら、実は、相互に、補完的な関係にあるのである。「世界史」も、そうした「からくり」の上に、展開してきたのである。福田も、それは、先刻承知のことだと思われる。それゆえ、こうした観点を、どの程度、強調するかによって、先の、「世界史」のなかの、「文明」の位置づけ方も、異なるであろう。しかし、もし「近代化」の歩みにおいて、「文明」が、「世界史」（という名の「普遍的文明」）のなかに、すべて吸収され「消滅」するとなれば、それは、あまりにも、さびしすぎる話とならないか。しかも、そうした、「からくり」が、「世界史」の、歩みに、必要なものとされているとすれば。私のいう、「からくり」は、ここで、再度、繰り返すならば、すべての国が、A の歩みをたどれるのだから、その道を行けばいい、（いわゆる、ロストウ流の「近代化」論であるが）と後ろから、肩を押されたとき、

実は、そこには、「大いなるからくり」があり、「現実」は、B や C のような道を、たどらせるような、「力」があれば、いつでも、A になれるという話である、と同時に、A の歩みをたどれるという話なのである。A になるのも、「地獄」であり、ましてや、B や C になるとなれば、それは、想像を超える「差別」や「排除」を、自らが行う、あるいは、甘受せざるをえないことを、覚悟しなければならないのだが、悲しいことに、そうした「レース」に参加した（参加を、無理矢理強制された）後で、初めて、「実は、コウコウシカジカ」という具合に、「レース」の「規則」を、教えられるのである。「開国」以降の「日本」と「日本人」が直面したのは、まさに、こうした「舞台」であったのである。「世界史」を、だれよりも早く、率先実行できた国は、こうした「からくり」を、あとから「レース」に参加する国やそこの住人に対して、親切に教えたりはしない。ただ、社会科学に従事する研究者が、これを学生に、教えないとすれば、これも、やはり、許し難いことではないだろうか。[30] しかし、「左翼」と呼ばれる研究者は、この「からくり」を、十分に学んでこなかったのは、確かなことである。

たとえば、これについて、ここで指摘しておくならば、『昭和史』の著者に代表される、「マルクス主義的歴史観」に立脚する論者も、この例外ではない。また中村政則にみる「貫戦史」の観点から、あるいは、野口悠紀雄の「1940 年体制」（論）にみる「歴史観」も、同様に、なにか重要な論点を、外している、取り扱うことができない、と私はみている。そこには、本論でも論究されているように、「自由主義－帝国主義－民主主義－民族主義」の「渾然たる関係」を、十分に含み込んだ「歴史観」を、垣間見ることができない。そうした「関係」、ならびに、「関係史」を視野の外におきながら、いわばそれらを、切り離したままに、「歴史」を描いている。こうした観点からみるとき、「総力戦体制」（論）なるものも、こうした傾向を免れるものではない。これらの「歴史観」には、そのなかに、「自由主義的民主主義」（リベラルなデモクラシー）を実現する「歩み」と、「関係」づけ（られ）た、結びつけられた、「歴史」が、欠落している。換言すれば、「自己決定権」の「争奪戦」をめぐる「歴史（関係史）」と、結び付けられていないのである。このような不思議な、おかしなことが許されていいのだろうか。一人の人間にとって、「自由な存在」として生きることは、まさに人生における最大、最重要の目的、目標である。それは、また「共同体」においても等しく該当する。国家においても然りなのだ。「日本」と「日本人」の「歴史」を語る際に、それがどのような歴史であれ、こうした「自己決定権」

の「争奪戦」にかかわる歴史が、またそうした観点を含み込んだ歴史が、描かれていなければならないであろう。ところがである。こうした問題を、真正面にすえて、語る論者が、あまりにも少ない、少なすぎるのである。

もう少し、これについて、言及しておこう。西尾幹二は、『国民の歴史』のなかで、――戦争に「正義」と「不正」を持ち込むのは自然法に反する、という考えを本書は一貫して取っている。――と指摘しながら、氏の「戦争観」を次のように、述べている。すなわち、――あの戦争は日米いずれも「正義」の戦争ではではなく、太平洋の覇権をめぐるエゴとエゴの衝突、東洋と西洋のあいだのパワーとパワーの必然の激突であったとみるのが本書の見地である。正邪善悪の入る余地ははできるだけ小さく考えた方が健全であるという見地である。――と、述べつつ、西尾は、これに対して、日本人は、道徳的に捉えて、また「歴史」を、「連続」したものとして、捉えようとしない、と日本人の「歴史観」を、批判的に述べている。ここにも、端的に示されるように、西尾は、「エゴ」と「エゴ」、あるいは、「パワー」と「パワー」の「衝突」を、「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（史）」をめぐる、換言すれば、「自己決定権」の「争奪戦」をめぐる、「問題」として、掘り下げて論究していない。「あの戦争」は、日本が、「民主主義」社会を実現するために、必然とされたものであるとか、当時の「民主主義」社会を作り上げている「構造（関係）」の下で、「あの戦争」は、引き起こされたのではないのか、といった問題に対して、西尾は、まったく、向き合わないのである。すなわち、われわれが作り上げてきた「民主主義」と、その歩み、それ自体のなかに、相当厄介な問題が含まれており、そうした「仕組み」のもとに、「日本」と「日本人」とは、「あの戦争」へと、突入することになったのではないか、といった、「民主主義」に対する、懐疑なり、批判、非難へと導く態度や姿勢を、西尾から見出せない。西尾は、最初から、「自由」、「民主主義」を当然のことのように、歓迎する見方を示しているからである。そこには、「歴史の大きな流れ」のなかで、「自由」とか「民主主義」なるものが、創り出されてきたという、視角なり視点が欠落しているのである。あるいは、あえて、「欠落」させている。

たとえば、西尾は、以下のように、論じる。――自由も民主主義も平等も進歩も、もちろんそれはそれでいい。それが日本の進んでいく道であると考えることはなにも間違ってはいない。これは戦後ではなく、明治以来の日本の国是であり、日本もアメリカもほぼ同じ目標をめざしていたと、そう考えればよかった。――私は、このくだりを見て、思わずつぶやいてしまった。この人は、

本当に、「新しい歴史教科書」をつくりたかったのかと。ここには、西尾らが批判する「旧い歴史教科書」の描く、「自由」、「民主主義」と、まったく同様の、「歴史観」が示されている。そこには、左派の論者と共通する「眼」が存在している。それは、たとえば、「自由」や「民主主義」を実現する際に、「帝国主義」（西尾はそれを、「軍国主義」と呼んでいるが）と、どのような「関係」のもとにあるかについて、左派の論者と同じく、西尾も、そうした「関係」に、言及していないし、または、言及することを、さし控えている。西尾は、おそらく左派の論者と同様に、私のモデルで描く、あの［セカイ］の、「差別」や「排除」の「関係」の下で、「自由」や「民主主義」なるものが、実現するとは、考えないであろうし、またそうした、私の見方を、到底受け入れ難いとして、拒否するであろう。ましてや、明治以来の日本が、そうした「差別」や「排除」の関係をもとに、初めて手にすることのできる「自由」や「民主主義」を、実現することを、「国是」としていたなどとは、認められないであろう。しかしながら、私からみれば、西尾は、まさに、左翼の論者と、同じように、そうした「自由」や「民主主義」を、無批判に、受け入れたままに、「日本」と「日本人」の「物語」を描いているのである。西尾は、「自由」、「民主主義」と「軍国主義」（帝国主義）の「関係」を、おのおの別の「次元」の「出来事」として、みているのである。それは、――そして二つの国が同時に一定のある時期に軍国主義に陥ったと、そう考えればよかった。――のくだりにも、示されている。つまり、日本が明治以降において、アメリカが 1830 年代以降において、「民主化」を目指して「歩み」をたどる一方で、他方で、日本とアメリカは、その間、「軍国主義」（帝国主義）の「歩み」をたどる、と語っていることになる。はたして、こうした見方でもって、「日本人の物語」を、語れるだろうか。語ることを、許してしまっていいのだろうか。たとえば、日本は、日清戦争後の、下関条約締結による、賠償金獲得により、その後の日本の資本主義の発展に、大いに利することになったと論究されているが、それはまた、資本主義の「経済発展」のみならず、当然ながら、日本の「民主主義の発展」の歩みにも、大いに「寄与」したと、捉えることが大切ではないか。そのように理解したとき、「帝国主義」（「軍国主義」）なるものは、「自由」や「民主主義の発展」の歩みと、「共時態」の「関係」として、捉え直されるべき必要があるのではないか。個々に切り離された、「次元」を異にする「出来事」として、理解してきた、従来の「歴史」の描き方は、やはり、再考を要すると、いわざるをえない。

いずれにせよ、西尾にみるように、「自由」や「民主主義」を、所与の前提と

する議論では、私がこれまで論究してきた「覇権システム」とその「秩序」を、結局のところ、「丸ごと」認めてしまうこととなるのである。それは、歴代の覇権国が中心となって、想像してきた、欧米主導の「国際秩序」を、無批判に受容した上で、「日本」と「日本人」の「歴史」を語ることに、ほかならない。最初から、そうした「国際秩序」を問題視するような議論は、できなくなってしまう。ましてや、そうした「国際秩序」が提供する「自由」なり「民主主義」を、「それはそれでいい」ものとして、「国是」として、位置付けてしまったならば、われわれに、一体全体、どれほどの議論の余地が、残されているのであろうか。あまりにも、愚かな「戦略」(などといえるものではない)、それこそ、西尾の見方も、左翼の議論に輪をかけた、「自虐史観」というしかない代物ではないか。

ところで、上述したように、西尾のいう「エゴ」とか「パワー」を創り出す、担い手は当然ながら、「国家」であるが、その「国家」の担い手は、「国民」であることを考えるとき、どうしても、「国民」としての立場で、「エゴ」とか「パワー」とが、どのように結びつくかを、再考することが大切ではないか。日々の国民の「生活」のなかで、そうした「エゴ」や「パワー」は、どのようにして、創り出されているかが、もしわかっていなければ、われわれは、その「エゴ」や「パワー」に対して、あまりにも無防備な状態のままに面することになる。何か、「他人事」のように、そこから、戦争を「自然災害」であるかのように、理解してしまう。それではまったく、先に進むことができない。「戦争」と、国民一人一人の「衣食足りて、礼節を知る」ために、日常の「自己決定権」の「争奪戦」の「関係(史)」の間に、密接不可分な関係があり、そこから、西尾のいう「エゴ」や「パワー」が導かれるのだとすれば、どうしても、そうした「自己決定権」のあり方をめぐる、「自由」や「民主主義」の「ありよう」自体に、メスを入れることが、重要になるのではないか。そうした意味でも、西尾にしろ、マルク主主義の論者にしろ、「自由」や「民主主義」に体現される「自己決定権」なるものの「争奪戦」が、どのような「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係(史)」を前提としながら、実現されるのか、獲得されるのか、という重要な問題から、眼をそらしていた、そらし続けているように、私には思われるのである。これは、たとえば、『昭和史(新版)』のなかで、「あの戦争」の「三つの性格」を指摘している論者にも、ひとしく該当している。彼らは、その「三つの性格」から成るそれぞれの「歴史」を、「一つの」大きな「歴史」に描きなおすことを避けてきたように、私には、思われる。もしそれを試みていたな

らば、私がここでいう「からくり」の仕組みに気がついたと思うのだが。私は、これに対して、これまでの研究のなかで、私のモデルに示される、あの[セカイ]として、提示してきた。そして、それをもとにして、あの[セカイ]に代わるオールタナティブを思案してきたが、正直なところ、非常に悩み続けている。なぜ、「一つ」の「立体的」な「関係（史）」モデルなどを、つくり、それを読者に提示してしまったのかと。むしろ、「三つの性格」を、それぞれ独立したままで、論じておいた方が、どんなに楽であったかと、後悔しているのである。もちろん、そうはいうものの、後悔しても、そうしたことは、重要なことであったと、今も思っているのも、たしかである。なぜ、後悔しているのか。それは、「ウソ」を、結局のところ、述べるだけだからである。できもしないことを、ただ、言い放つことにしか、ならないからである。換言すれば、いい子ぶった、物言いである。しかし、私たちの日々の生活は、「三つの性格」が、切り離せないように、密接不可分に、絡まったままに、繰り返されるのであるが、(1) デモクラシーvs.ファシズム、の問題は、「自己決定権」を、「自ら」が、自身の、手によって、握ることができるのか、あるいは、誰か他の人によって、与えられるかどうか、の問題に、関連するものとして、理解できるであろうが、ここまで述べるとき、もうすでに、難しさを痛感してしまう。会社を考えてみればわかるように、誰も、こうした「自己決定権」を、自らの手に、握れるものはいないといってよいほどに、ほとんどが、「株主」によって、その「自己決定権」なるものを、その存在を、許容されている、そのようにいえないだろうか。そして、会社は、業種は違いこそすれ、会社間同士で、生き残りをかけた「戦争」を繰り返している。大企業が、中小に、また中小が下請け、孫請けに対して、それぞれ、「差別」と「排除」の関係を、押し付け合うこととなる。この関係は、当然ながら、大企業同士においても、中小同士においても、下請け、孫請け同士においても、免れることのできないものである。いわゆる、「帝国主義」戦争として、理解される側面を、共有するものである。もっとも、孫請け、下請け、中小企業も、彼らの失った「自己決定権」を回復させる努力を、初めから、放棄しているわけではない。虎視眈々と、その機会を狙っている。現代のような、グローバル時代においては、日本の大企業も、いつ何時、海外企業の傘下に、組み入れられるかもわからない。そうした際、彼ら大企業も、形は違いこそすれ、「自己決定権」の回復のために、あの手、この手と、手を打たざるをえないだろう。こうした動きのなかに、(3) の「植民地独立戦争」の性格を、読み取ることができる、かもわからない。もっとも、こうした企業間戦争にみる、自

己決定権の「回復・独立」をめぐる、動きの背後には、いつも、「株主」の存在と、彼らが運用する「資本」とが、密接不可分に、関係している。当然のことながら、「あの戦争」の背後にも、こうした日々の、「自己決定権」をめぐる「争奪戦」が、大きな位置を占めていたのである。

このような観点から、「あの戦争」を見直すならば、どうしても、私のモデルで描く、あの[セカイ]の、「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（史）」のあり方に、果敢にメスを入れなければならないだろう。それは、「市民的自由」という「自由（権）」（「基本的人権」）のあり方に対して、根本的な修正を迫ることになる。ある国の、「公共の福祉」と、「私権（自由権）」の関係を、修正する、といった、レベルの問題で、片づけられるものではない。「公共の福祉」の有無にかかわらず、最初から、これまで通用していたような「自由権」は、存在しないことが、当然に、予想されるし、またそうあらねばならない類の問題である。まさに「格差」問題は、こうした観点から、捉え直されなければならない。このように、私が、問題提起した際に、どれほどの、左翼的、左派的な、あるいは、右翼的、右派的論者が、私の周りに、集まってくるだろうか、と懸念する、私自身に、気がつくのである。

「三つの性格」を、「一つ」の、相互に関連付けられる「歴史」として、もし仮に、理解したならば、少なくとも、ここまでは、たどり着くことができるのではあるまいか。そうした際、逆説的ながらも、「市民的自由」という、「厚い壁」の存在に、否応なしに気づくこととなる。そして、私自身、そこで立ち止まることを、余儀なくされるのである。あれほどまでに、「市民的自由」を、論難してやまなかった、この私が、ここで、立ちつくすのである。そこには、いろいろな理由がある。それを、もう少し、私自身に跳ね返るような形で、話してみたい。(31)

ところで、こうした点を踏まえるとき、福田の見解は、そうした問題を、率直に述べているものとして、参考になるのである。もちろん、ここまで論を展開してきたなかでもわかるように、私は、すべてにわたり、福田の日本の近現代史の見方や考え方に対して、同意するわけではない。むしろ、表面、表層の部分では、同じように見えても、深層の部分では、鋭く対立するところが多いかもしれない。ところが、それにもかかわらず、前掲『昭和史』において、「太平洋戦争」（「あの戦争」）に関する「三つの性格」を披歴していた遠山茂樹らの歴史学研究者よりは、福田に対して、より親近感を、抱くのである。(32) その理由は、教条的な態度で、「世界史」を受け入れて、それをもとに、日本の歴史を語るのに代えて、もっと根底的な問いかけを試みつつ、歴史に迫ろうとする態

度が、福田の議論の中に見え隠れすることによる。これに対して、遠山らの見方は、「教条的」なそれであり、「世界史」を疑うことなく受容したままで、それをもとにして、日本の近現代史を「裁断」している、といっても過言ではなかろう。その一番の問題点は、これまで拙著で幾度となく言及してきたように、「民主主義」の「歴史」、「帝国主義」の「歴史」、「民族主義」の「歴史」を、それぞれ個別の、「歴史」として、設定してしまい、それぞれの「関係（史）」を、不問に付したままで、「歴史」を語ってきたことに見出される。(33) そうした姿勢のもとにおいては、決して、日本の近現代史を、「総合的」な観点から語ることはできないで終わってしまうのであり、そのために、「戦争責任」をはじめとする重要な問題に切り込んでいくことは、到底できないと、私は見ている。これに対して、福田のそれは、『魂の昭和史』のなかにみられるように、もっと「本能的」な、「リピドー」的に体の奥底から、ある面、まったく無防備な仕草でもって、先ずは、問いかけるのである。これまでの常識とされてきた「理屈」を、根こそぎ剥ぎとる、払拭するかのように、「君たちは植民地になってもいいと考えるかい」(34)、というように。この「問いかけ」は、単純明快ながら、複雑な仕掛けが用意されている。おそらく左翼的な論者ならば、そうした「問いかけ」の前に、なぜそうした「植民地」が作られなければならなかったかを、まずは問うべきではないか、と反論するだろう。しかし、その論者が、「世界史」を、「教条的」に、受容するだけの信者であれば、彼らの、その問いに対する答え方は、おそらく、「自由」「民主主義」「普遍的人権」といったものが作られてきた「歴史」の問題と、「植民地」の、すなわち「帝国主義」の「歴史」とを、切り離して答えることから、最初から、肝心かなめの問題には、答えられないのである。その代表例が、中村政則の『『坂の上の雲』と「司馬史観」』のなかに、色濃く、刻印されているのは偶然ではない。(35)

彼らは、「植民地になっても良いとは考えない」と、「直接」的には語らないで、「植民地」になるからといって、また、「植民地」にもなっていない状態で、相手を、「侵略」してもかまわないとはいえないだろう、と語るであろう。そうした論理によって、彼らは、既に、「植民地」を、たくさん領有してきた、「加害者」を、初めから、追求できなくなる公算が大であることに、気がつかない。ましてや、その「加害者」は、そうした「植民地」を、たくさん増やすことで、自らの、「自己決定権」の権限を、増大することが可能となり、そのことにより、彼らの「自由」や「人権」の「幅」を、増大させることが可能となっていく。また、それにより、そうした「自由」や「人権」を、社会の多くのものに拡大

することができるようになり、そこから、「民主主義の発展」を、実現させることがたやすくなっていく。私のモデルの[セカイ]が着実に定着していく。これほど悲惨なことはない、と私は思うのだが、左翼的論者は、相変わらず、個々ばらばらに、「歴史」を捉えていることから、せいぜいが、「近代」の「明」と「暗」とか、「功」と「罪」といった議論で、お茶を濁すのである。(36)

これに対して、福田は「植民地になっても良かったと思いますか」、と逆に問いかけることで、先の、個々ばらばらの、切り離された「歴史」の「総合化・統合化」を、試みる機会を与えることに貢献していると、少なくとも、私は、そう見ている。もちろん、福田自身が、そうした「総合化・統合化」を試みたかといえば、彼自身は、試みていないことも確かである。もし、そうした「総合化・統合化」が、「経済発展」と「民主主義の発展」の、「関係（史）」の観点から試みられたとすれば、おそらく、その作業は、私のモデルで描く[セカイ]を、垣間見せることに、成功したであろう。もちろん、現実は、21 世紀においても、ヘーゲルの時代とまったく変わらない。「世界史」は、やがて、中国がそれを、見事に体現することによって、「不動の地位」をえるであろう。(37) 当然ながら、第二、第三と続く「フィヒテ」的民族主義者を、作り出していくだろう。しかし、すでに指摘したように、その「フィヒテ」的動きは、「世界史」に抗する有効な処方箋を、提供することはない。むしろ、「世界史」の歩みを担うためには、そうした「フィヒテ」的民族主義を、まず「実践」することを、迫られるのである。アジア的「開発独裁」体制が、1980 年の末から 1990 年代に入り、ますます、「世界史」的な「歴史」を、たどっていることを鑑みるときに、上でも述べたように、そこには、見事としか言いようもない「からくり」が、組み込まれているのである。それにメスを入れない限り、「フィヒテ」的民族主義をこえる（超克する）、すなわち、「世界史」（私のモデルの[セカイ]）と、柔らかく対峙しながら、その横で、静かに生き続けることのできる「共同体」主義を、創造することは、決して、できないであろう。

第 2 章「残酷きわまる世界」のなかの「日本」と「日本人」

1.「植民地になってもいいと考えるかい」

それでは、ここで、そろそろ、『魂の昭和史』に入っていこう。すぐ上で紹介した問題から取り上げてみたい。すなわち、「君たちは植民地になっても良いと考えるかい」から。非常に難しい問題だが、中村政則や加藤陽子の著作も参照しながら、以下に論を展開していこう。行論の都合上、『ＷｉＬＬ』に掲載された論考も、その都度、絡ませて論じてみよう。

誰しも「植民地」になるのは、ごめんこうむりたいと思うだろうし、それを避ける道を考えて行動することは、想像に難くない。しかし、同時に、現実問題として、それができない国や、地域が、存在していた。そうした「共同体」は、「自己決定権」の争奪戦に敗れ、植民地とならざるをえなかったのである。ここで、私のモデルを思い出してほしい。「壁」の「厚い」A グループから、「壁」の「薄い」B グループ、そして、「壁」のない、いわば「ボーダレス」化した C グループに、配置していた、モデルである。植民地になりたいとは思わないとしても、そうした状態になる危険を避けるためにも、このモデルで描く、「関係（史）」を、先ずは見ておく必要がある。「開国」以降、日本と日本人は、B グループに、組み込まれていたものの、「不平等条約」のもとに、「半植民地」化の状態に置かれていた。いつ何時、C グループへと、「転落」するかもわからない状態にあったことは否定できない。「小日本」を、目指すにしても、この[セカイ]のなかで、できるだけ、「左側」に位置することが、至上命題であったのである。ここで、頭に入れておかねばならないことは、たとえ、「普遍的人権」を、大切にする国であっても、それは、国内の、国民の人権であって、よそ様の国の人権にまで、配慮した、対応を取ってくれるほど、甘いものでなないのである。その人権も、私のモデルの、「関係（史）」を、もとに、創り出される、あるいは、剥奪されていくのである。相当に、厄介極りない[セカイ]ではあるまいか。

それでは、どのように、当時の日本と日本人は、行動したのであろうか。また、どの程度の、行動の「余地」が、許されていたのであろうか。先ずは、福田のくだりを紹介してみよう。「3　明治時代について（19 世紀後半～1890 年代）－残酷きわまる世界のなかで命がけで走りつづけた」の章にある、最初の小見出し、「なぜ西欧は、東洋の片隅の日本までやってきたのか」を見てみよう。要約すると、明治の日本はアメリカ、イギリス、ロシア、フランスなどの強国と無理につき合うことを迫られ、「もう、それまでの内輪の、のんびりした『鎖国』

は続けられなく」なり、また「国の在り方を一変させ」ることとなる。それこそ［迷惑な話］であり「せっかく続いてきた長い平和と安定を崩され」ることとなる。このような状態に、「日本人は、つまり、君たちの祖先たちは、そんな理不尽さに対して、泣きごとを言わないで、立ち向かった」。それにしてもなぜ西洋の国は東洋の小さな日本にまで来たのか。それは「金儲けのために」である。(38) 貧しかったヨーロッパは、「アジア・アフリカから奪った富で、あんな豊かな社会ができあが」ることになったが、それにより、豊かな西洋と貧しい非西洋の図式で描かれる世界が創り出されることとなる。福田がここで描く世界は、21 世紀の今においてもなお、イラクやアフガニスタンにも垣間見ることができるのではないか。そこにもやはり「支配するもの」と「支配されるもの」とがいることは変わりないのだが、そうしたなかでの「平和と安定」が維持されていたことは徳川幕藩体制のそれとまた同様である。それが「世界史」の歩みと結びつく。すなわち「市民的自由人間精神の最高の価値として理念化することで、歴史の意味を、精神の進歩として定式化」することに成功した、A グループの当然とする「平和と安定」と、「衝突」するのである。私のモデルで示される、①［A の経済発展→C の経済発展］、および、②[A の民主主義の発展 $\xrightarrow{(\times)}$ C の民主主義の発展]、さらには、③［A の民主主義の発展→C の経済発展］の、[セカイ]は、福田がここで述べている「西洋」と「非西洋」との、「関係（史）」を、物語るものである。先のくだりにある、「市民的自由」のなかには、種々の「基本的人権」が、含まれている。「言論の自由」、「表現の自由」、「身体の自由」など、すぐに思いつく「自由」が、あるのだが、ここで忘れてならないのは、「市民的自由」という場合、「世界史」を作り出してきた者たちにとって、それは、何よりも、「金儲け」と、結びつく「自由」であった、ということである。すなわち、「（私有）財産権の自由」、「営業・通商の自由」、である。③の図式は、まさに、A の、「市民的自由」と、そのありようが、C の、［経済発展］と、そのありようを、導くことを、意味している。それを、ごく簡単に言い換えるならば、A では、決して、できない、許されないようなことが、C においては、許される、そうした「経済発展」を、作り出す、ということである。A における「営業の自由」、それをもとにして手にすることのできる「財産権の自由」といった「市民的自由」が、C における、低賃金、長時間労働によって、支えられる、「経済発展」を、導くのである。C グループに、もし、日本が、組み込まれてしまったならば、徳川幕藩体制のもとで、甘受しなければならない、「圧政」に、代えて、とてつもないほどの「圧政」を、強いられる、ことになった、であろう。

そこでは、従来のCグループで続いていた「圧力」に加えて、Aグループの「圧力」が、加わるからである。この、後者の「圧力」は、想像を、絶するものであったことは、これまでの「世界史」が、その「負」、「暗」、「罪」の「歴史」として、すなわち、「帝国主義」の「歴史」として、語ってきた。ところが、そこでは、Aの、「帝国主義」と、Aの「民主主義の発展」との、「関係（史）」が、不問に付されることにより、Aの、「民主主義の発展」が、押しつけている、「圧力」に対しては、驚くほどの寛容さでもって、見過ごされてきた、といっても過言ではない。Aの、「民主主義の発展」、すなわち、Aの「市民的自由」が、「民主主義」とか、「自由」の名の下に、行使しつづけてきた、「暴力」に対しては、あまりにも、無頓着な態度を、示してきたのである。この「暴力」は、まさに、ノルウェーの平和学者、ヨハン・ガルトゥングの、「構造的暴力」を連想させるものであるが、残念なことに、この「構造的暴力」の意味することがらは、私のモデルとの対比でもって見るとき、もっぱら、[Aの経済発展→Bの経済発展→Cの経済発展］の図式で描かれる世界の「構造」的「関係（史）」に限定されたものであり、[Aの民主主義の発展（はってん）(×)→Bの民主主義の発展(×)→Cの民主主義の発展］の図式で描かれる「民主主義の発展」に見られた、「構造的」な「関係（史）」は、含まれていない、といわざるをえない。それは、ガルトゥング自身の、「民主主義」の見方にも、うかがうことができる。(39)

こうした点を踏まえるとき、まさに、福田のいうように、「開国」以降の、「日本」と「日本人」は、「残酷きわまる世界」の中に、放り込まれていたのである。もっとも、ここで、留保しておきたいのは、戦後の日本は、高度経済成長を遂げ、豊かな国となったが、そのときにも、世界の多くの国は、まさに、明治期の、「残酷きわまる世界」に遭遇していた、日本と同じような、境遇に、置かれていたことを、想起しておかねばならない。それゆえ、私にとって、たとえ、戦後の日本が、豊かで「平和」を享受できるようになったからといっても、決して、もろ手を挙げて、歓迎できないのである。なぜなら、私のモデルで描く[セカイ]は、なお、一貫して、その歩みを、続けているからである。日本の位置が、Bグループから、戦後に入り、名実ともに、Aグループの、仲間入りをはたしたといっても、この［セカイ］が存続していることを考えれば、かつての日本のように、「圧力」を、受け続けている国や、地域は、存在し続けているのである。そして、何よりも、今度は、Aグループのなかで、その「圧力」を、押し付ける側に、日本が位置している、ということなのである。あまり喜べるものではない。「世界史」を、戦後は、日本と日本人は「素直」に受け入れて、歩ん

でいくのだから。それゆえ、仮に、福田が、戦後のこうした、日本人の歩みを、厳しく、しかりつけることがないとすれば、それでは、何のために、「世界史」に、あれほどまでに、こだわりつづけたのか、と思わざるをえない。さらには、戦後の、「平和」と、「安定」を、讃えて、それを、戦争で死んでいった人々に、「感謝」しなければならない、というならば、やはり、それは、どこか違うのではないか、と思うのである。(40)

少しここで、「歴史」を語る際の、私のスタンスについて、簡単に述べておきたい。このような「歴史」の見方だけは、できれば、避けたいという観点から。なぜ、このようにいうかといえば、日本の近現代史を語る論者の、ほとんどすべてが、先に紹介した「世界史」を、「物差し」として、語ってきたことに対する、（あるいは、逆に、その「世界史」を、「対抗軸」にした「世界史」批判に則りながら（甘んじながら）、語るというやり方に対する）、私自身の反発というか、反対の態度があるからである。もう少しだけでも、「日本人」自身の手による、日本人独自の視点で、作り上げた「物差し」が、そこに存在していても、いいのではないか、それをもとにした「日本」と「日本人」の近現代史の「物語」があってもいいのではないか、という私の思いは、日々高まるばかりである。たとえば、以下の例は、まさに「世界史」をもとにして、日本の近現代史を、肯定的にせよ、否定的にせよ、語っている、その意味では、「世界史」を、唯一の「物差し」としながら、「日本」と「日本人」とを語っている。その代表的なものである。たとえば、明治期の日本人が、「世界史」の流れに抗して、果敢に、挑戦したことを、取りあげて、「素晴らしく善戦した」という「評価」を与え、また、「あの戦争」で闘った、日本人に対して、福田のいうように、「文明」を「防衛」するために、奮戦したという、「評価」を一方において下すとき、換言すれば、戦前・戦中の、「日本人」が、「世界史」の流れに対して、果敢に挑戦して、「敗北」したとみるとき、そこには、「ナポレオン」的世界に屈したプロイセンの「フィヒテ」的世界から、その「歴史」を、捉えなおそうとする姿勢を、垣間見ることができる。しかし、そこには、あくまでも、「ナポレオン」に対峙する「フィヒテ」であり、その対立・敵対は、「世界史」という 1 本の軸をもとにして創り出された、「二項対立」として、位置づけられるものである。ところで、そうした見方をとっていた論者が、今度は、戦後の、日本人の歩みを、戦前・戦中の、それとは逆に、「ナポレオン」的世界観に立って、まさに、「世界史」を代弁するような、そんな生き方を、日本人がたどってきた、とそのように肯定的に評価を下すとき、すなわち、「日本人は、よく頑張って、戦後の平和と繁栄を実現した、

素晴らしい」[41] と、評価するとき、正直、私はそこになんとも言いようのない「あわれさ」を感じてしまうのである。戦前・戦中の日本と日本人の歩みを見る際には、「アングロ・サクソン」と、彼らの支配する「世界」に対して、果敢に、対峙、対抗したという「フィヒテ」的見方を取る論者が、戦後の日本人の歩みを語る際には、そうした「アングロ・サクソン」と彼らの支配する「世界」のなかで、今度は、彼らと共同して、「ナポレオン」的生き方よろしく、うまく立ち回った、というようなことを、述べるならば、やはり、ある種の「興ざめ」を、覚えてしまうのである。このような、人間の集団の「生き方」は、どこか「むなしい」ものを示していないだろうか。そのいずれの生き方であれ、すべて「世界史」的流れから創り出された「生き方」にほかならない。こうした描き方は、当の日本人を「馬鹿」にしていると思えないだろうか。ましてや、戦前・戦中の時の「弱肉強食の掟」が、なお、戦後においても、続いているときには、なおさらである。私は、あくまでも、「世界史」的生き方を、軸にして、日本と日本人の「物語」を、語ることだけは、なんとしてでも、避けたいのである。私のモデルで描く、あの[セカイ]のなかに、「世界史」も、また、「日本」と「日本人」の「歴史」も、入れ直すことによって、「日本人の物語」を、描いてみたいのである。

2. 西尾幹二の「歴史観」とその問題点

それでは、こうした点を、踏まえながら、さらに、福田のくだりを、紹介してみよう。「植民地になってもいいと君たちは考えるだろうか」の「小見出し」のあるくだりにおいて、福田は「開国」以降の日本が 300 年も続いた社会から、「高校野球のチームがいきなりメジャー・リーグに入れられたようなものだ」[42] と、当時の日本を見ている。「白人だけが人間で有色人種は動物なみだったんだ」の小見出しのくだりの最後にあるように、「力が支配する国際社会のなかに加われと言われ」、「大砲で脅されて無理やり引きずり込まれた」その社会の「競技というのは、負ければ植民地にされてしまうという、冷酷無残なゲームだった。実際にはいってみると、西洋の工業先進国と日本とでは全然国力、生産力が違う」[43] とんでもないところであった、とみている。ここでも注意してほしいのは、私は、福田の語るこのくだりを、私のモデルの[セカイ]と重ね合わせてみている。それゆえ、A のグループの、すなわち当時の先進諸国の「民主主義の発展」及びそうした「民主主義の発展」を導き出す「経済発展」を、「冷酷無残なゲーム」を強いる厄介な「発展」であり、したがって、できるのならば、別の何かに変えたほうが良い、と見ている。まさに、「世界史」の歩み、それ自体が、創り

出す「冷酷無残なゲーム」にほかならない。福田もいうように、「植民地の悲惨な話はどれだけ書いても足りない」のであり、「無理をして頑張るのはバカらしくて、植民地になってもいいと考え」たりは、できないだろう。「やはり、自分で自立して生きていきたいという気持ちがあるだろう」し、「少なくとも、明治の日本人は自立しようと思った」のだろう。(44) しかし、ここにもまた、どう仕様もできない、「冷酷無残なゲーム」が、待ち受けていたということを、思い出す必要がある。すなわち、日本が植民地にならないで、「自立」するためには、私のモデルの[セカイ]の中で、出来うる限り、A の側に向かって進むことが、必要であり、それは、また、自分の右側に、できるだけ多くの植民地や自立できない、つまり、「自己決定権」を奪われる存在を、作り出す必要があった。「自立」するということは、この［セカイ］のなかで、初めて実現可能であり、そのことは、他の「自己（決定権）」との「関係（史）」抜きには、語りえないものであるからである。私のモデルの「セカイ」において、A は、いつも、B に対して、「民主主義の発展」の歩みにおいて、「侵略」し続けているのである。その歩みは、B の、C に対する「侵略」と、「共時態」の「関係（史）」に置かれている。それゆえ、より複雑で、ややこしいこととなってくる。誤解を恐れないでいうならば、福田の次の小見出し、「戦争を通してしか自分として生きることができなかった」(45) のである。誰も「侵略（戦争）」を責めることはできない、といえば語弊があるものの、少なくとも、A の立場にいるものが、B や C の「侵略」を、「テロ」として、非難、批判はできないということだけは、銘記しておかねばならない。それゆえ、今日の、米英のイラクやアフガニスタンに対する「戦争」を、「テロとの戦い」といって、正当化する前に、先ずは、私のモデルの「セカイ」における[A→B→C]の「関係（史）」の形成と、発展と、その変容の「歩み」それ自体が、ある種の「テロ」であったということを、私は、ここで、強調しておきたい。

それゆえ、明治期の日本人が悪戦苦闘の末に、「自立」することができるようになったとしても、日本と日本人の「平和と安定」とを考えるとき、どうしても、この[セカイ]の動きに、注目せざるをえない。というより、この[セカイ]のなかで、「日本」と「日本人」は、生きてきたのであり、これからも、生きていかざるをえないことを前提とすれば、なおさら、そうであろう。例えていうならば、明治期は大変だったが、そうした祖先たちの奮闘のおかげで、今の日本と日本人があるのだ、というような見方で、終わってほしくないのである。たとえば、福田は、「貧しかったんだね。たくさんの子供が死んだ」、の小見出しのくだり

で、「――君たちに考えてほしいのは、こういった犠牲があって、なんとか日本の近代化が実現した――その是非を問う前に、まず君たちが生きている、豊かな時代がこのような努力をへて、成り立ったということを感じてほしい。」(46) というときに、中国や韓国と比較して「中国や韓国の同世代の青年よりも豊かな生活ができるのか、彼らより多くの情報にせっして良くも悪くも柔軟に世界を眺められるのか」と問いかけながら、その理由を、「日本がアジアのなかで唯一、独立を貫くという選択をして、そのための努力をやりぬいたということの結果なんだ」(47) というときに、それでは、今の日本と日本人の直面する苦境は、いったい、この明治期の「努力」と、どのように結びつくのか、また、今日の中国と韓国の台頭と、日本の地盤沈下を、どのように、ここでの福田の見方と、結びつければいいのだろうか。私は、福田の説明には、あまりにもご都合主義的な部分が、多い、と見ている。それは、福田が、「パックス・ブリタニカ」の盛衰と日本の近代化を結びつけて語るところに原因がある、と理解している。「パックス・ブリタニカ」の盛衰を、そのうちに、含み込む、私のモデルの「セカイ」から、日本の近代化の歩みを捉え直していたならば、もう少し、結論は異なっていただろう、と考えるのである。

それにしても、である。福田のいうように、「命がけで近代国家になって、日清戦争で中国と戦争し、次はロシアと戦争をしなければならなかった。そのために何万人という日本人が死に、中国やロシアの人が死んだ。別に日本だって戦争をしたかったわけじゃない。鎖国が終わって突然投げ込まれた、残酷きわまる世界のなかで、なんとか独立を守ろうという努力の過程に戦争があった。それを今の感覚で、侵略だとかなんとかいって裁くのは、あまり意味がない。僕はそう思っている。」という見方(48) には納得するのである。ただし、「今の感覚」のところを「世界史」に、置き換えてみたら、という前提をつけてのことだが。付言すれば、加藤陽子の『それでも日本人は「戦争」を選んだ』の著作では、日本の戦争選択をここでいうところの、「世界史」の観点から、裁いているのである。(49) 「選択」云々を言う場合、そもそも、日本と日本人は、あの［セカイ］以外で、生きることを「選択」できただろうか、という問題を斟酌しておかねばならない。また、その[セカイ]で生きるということ自体が、「日々戦争（暴力）状態下にある」、ということを意味していたと、私は、見ている。その意味では、加藤よりも、福田の見方の方が、やはり「無理がない」、といわざるをえない。

ここで、西尾幹二らによる加藤陽子著『それでも日本人は「戦争」を選んだ』に対する批判を取り上げ、その問題点について論じてみよう。彼らは、『ＷｉＬ

Ｌ』（2010 年 1 月号所収）の「加藤陽子『それでも日本人は「戦争」を選んだ』徹底批判」において、次のように、批判を展開している。「歴史を見る眼」との「小見出し」では、まず、西尾が、―――しかし、全体的にみて、歴史を見る眼に複眼があるか否かには疑問を感じます。―――と指摘して、それを受ける形で、柏原が、――日露戦争が日本を守る戦争であっただけでなく、ヨーロッパ列強から中国大陸を守る戦いであったという二点を見過ごしているのです。――と述べている。さらにそれについて、西尾は、―――もし日露戦争で日本が敗けていたら、今の中国領土の北半分はロシア領になっていたでしょう。――と答えている。そうした流れにおいて、福井も、―――二十世紀を爆発させる起爆力をもった全世界的な出来事です。その辺りの視点が加藤さんには全くありません。日本史という、小さな座標軸の中だけで論じています。―――と、言及している。それを踏まえて、西尾は、―――とかく自閉的であるのは加藤さんに限らず、日本の歴史学会をはじめ、「昭和史研究」のほとんどがそうですよ。―日清、日露戦争の全体をみる際のポイントとして、先ずイギリスとロシアの対立が地球の北半球を南北に分割するような構造を引き起こします。―世界史の大きなうねりが日本列島を揺さぶり出したのが、日本近現代史の前提でなくてはなりません。―アメリカも日本も英露の対立を利用するしか生きる道がなかった―日本は利用すると同時に朝鮮半島と中国大陸で英露両国に振り回されてしまう。―そこを加藤さんは、明治の日本人の心細さという視点ではなく、日本は悪い強国だという視点で書いている。―歴史を白か黒か、善か悪かの二元論でとらえるのは歴史を知らない証拠で、―――と、論究している。忘れないうちに、付言しておくと、加藤は、歴史を、白か黒か、あるいは、善か悪か、といった二項対立的観点から、すぐさま、評価してはいない。だが、まさに福田が指摘したように、ヘーゲル的世界史の流れと、それをもとに獲得された「市民的自由」を、「物差し」として、「日本」と「イギリス」、「日本」と「アメリカ」、「日本」と「フランス」等々の、「近代化」の「歴史（歩み）」を、二国対立的に、比較して論評していることは、否めない。この点が、つまり、こうした「物差し」でもって、「歴史」を裁断するところにこそ、問題点があるのであり、この点こそ、徹底討論されてしかるべきなのだが、西尾には、それを、望むこともできない。西尾の「自由」、「民主主義」に対する見方は、加藤のそれと、ほとんど変わらない、そん色のない評価である。なぜなら、西尾は、歴史は善か悪か、白か黒か、で見てはいけないというのだが、「自由」、「民主主義」については、「それはそれでいい」、「なにも間違っていない」と断定し

ながら、歴史を語るのであるから、やはり、西尾の歴史をみる「眼」も、相当に怪しい、と言わざるをえない。というのも、「自由」とか、「民主主義」の「歩み」は、最初から、西尾のいうように、「それはいい」とか「間違っていない」として、位置づけ、捉えるのではなく、むしろ、「自由」や「民主主義」とされるものが、どのように、形成され、実現してきたかについて、問うべきことが、何よりも、求めらることではないか。そして、その際、その「歩み」を、すなわち、「自由」や「民主主義」が実現される「歴史」を、「世界史」的枠組の中で、捉えることが、重要となってくるのではなかろうか。西尾らは、加藤を批判して、歴史の知識が不足しているとか、日本と欧米の関係を十分に理解していないと、語るのだが、それでは、欧米列強は、その「権謀術数」を駆使することにより、またそうした歴史を繰り返すことによって、一体、何を守ろうとしてきたのであろうか、何から、それを守ろうとしてきたのだろうか、という問いに対して、西尾らも、十分に、応えきることができないのではなかろうか。換言すれば、たとえば、英露の対立を利用するとか、日米がある局面で対立しながら、別の局面では妥協していたとか、それらの「出来事」は、一体、何を、何から、守るためになされたかが、論述されなければならないのではないか。ただ単に、「国力」(「国益」)であるとか、「金融利害」であるとかを、指摘したり、言及するだけでは、満足のいく「歴史」は描けないであろう。私は、たとえば、「市民的自由」を守るために、「自由」や「民主主義」を守るために、ということに代えて、それらがどのような「歴史」の中で実現されるのかを、まず考察することにより、「市民的自由」を守るということは、「自由」や「民主主義」を守るということは、私のモデルで描く、「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係(史)」を前提として形成され、その発展と、変容の歩みをたどってきた、あの[セカイ](1970 年代までは、[A→B→C]の図式で、1970 年代以降は、[B→C→A]の図式に、それぞれ、省略形で、描かれる)を、守るために、ということにほかならない、と位置づけなおしたのである。こうした「全体像」をもとにして、日本の近現代史の歩みを捉えなおすとき、従来の知見の含み持つ問題点が、理解できるのである。

ところで、福田の次のくだりを、私は、頭ごなしに、否定することが、できない。「――いや、悪いことを悪いことだというのはいい。侵略という言葉を使いたい人は使ってもいいよ。でも、侵略という言葉を使うときに、君たちは、当時の日本人の、そしてアジアの人々の苦しさというものを感じてほしい。感じようと試みて欲しい。戦争を通してしか日本が独立を保つ、自分が自分とし

て生きるということを貫くことができなかったということ、その悲しさは覚えておいてほしい。その点では明治時代は、暗い時代だ。」(50) 急いで付言しておきたい。「明治時代」が「暗い時代」なのではない。あの[セカイ]のなかで、その枠のなかで、生き続けるということ、それ自体が、「暗い」のである。そして、その[セカイ]のなかでは、「自分が自分として生きるということを貫く」ために、いつも、日常における「戦争」を、すなわち、「自己決定権」をめぐる「争奪戦」を、繰り返して生きて、いかざるをえない。それゆえ、その「独立」は、その[セカイ]からの、「独立」ではない。むしろ、その[セカイ]に、ひたすら、「従属」することを、意味しているのである。私は、そのことを、「感じて欲しい」し、「感じようと試みて欲しい」し、「その悲しさは覚えておいてほしい」と切に訴えたいのである。

それにしても、厄介極りない、問題である。福田氏のいうように、現代の地点から、簡単に、日本の過去を、「侵略」の「歴史」として、片付けるのは、あまりにも、「歴史」に対して、無責任すぎる態度である、というよりほかにない。しかし、同時に、それでもやはり、「侵略」であることは、否定できない。しかし、また、すぐさま、何を、「基準」として、日本の歩みを、「侵略」とするのか、という問題が、浮上してこよう。もし、仮に、その基準が、例の何度も出てきた、「世界史」を、基準とするのであれば、私は、その基準、それ自体に、異議申し立てを、せざるをえない。その際、その異議は、これもまた、何度となく触れたように、決して、「フィヒテ」的世界からの、それではない。また、日本が「侵略」する前に、「世界史」は、まさに、「侵略」に次ぐ、「侵略」をもとに、創り出されてきたではないのか。それを、私のモデルの[セカイ]は、示しているのである。それゆえ、日本の、過去の「侵略」は、まさに、韓国や中国に代表される諸国に対する「侵略」というよりも、「世界史」それ自体に対する、換言すれば、「世界史」のもとで創り出されてきた、「平和と安定」に対する、「侵略」としての側面が強い、ともみることができるであろう。ところが、どういうわけか、「世界史」の歩みが、これまでずっと、理想とされてきた、ように思われる。その代表的論者の一人が中村政則であることは確かである。ここで、中村の著作を取り上げ、福田が、ここで提起している、日本の近現代史の歩みをめぐる重要な論点を、考察してみよう。

3. 中村正則の「歴史観」にみる問題点

中村は、『『坂の上の雲』と司馬史観』の、「第三章　近現代史をどう見るか」において、氏の「歴史観」を、披歴しながら、それを基準として、司馬の、「歴史観」を、批判している。すでに、私は、それに関して、拙著のなかで、それを批判的に、考察しているのだが(51)、行論の都合上、ここで、再度、触れておきたい。中村の「歴史観」は、福田が、最初に、紹介していた、あの「世界史」を、そのまま、踏襲するものである。私のモデルで描く、[セカイ]のなかの、A に、該当するものである。ただし、中村は、「世界史」の理解の仕方と、同様に、このAが、BやCの「経済発展」と「民主主義の発展」との、「共時態」的「関係（史）」のなかで、創り出されてきたものだ、とはみないで、それらと、切り離されて、あたかも、「自生的」に、Aの、［経済発展→民主主義の発展］の図式の[セカイ]が、作られてきたかのように、捉えている。「第２節　明治維新の世界史的位置」にある、「明治維新論の過去と現在」のくだりで、中村は、この切り離された、Aの歩みを、「明治維新を当時の近代世界システムのなかに位置づけて論じる必要がある。この観点から一九世紀後半の世界を眺めて見れば、世界は次の三グループに分けることができよう」、と述べながら、「第一グループはイギリス、フランス、アメリカなどの先進資本主義国で――これらの中枢国は市民革命と産業革命をともに達成した」と位置づけている。(52) ちなみに、中村は、すぐこの後で、第二グループ、第三グループについて、紹介している(53)が、私のモデルの[セカイ]の、BとCに、それぞれ、呼応するものである。しかし、中村は、私のモデルの[セカイ]のなかで、A、B、C、が、すなわち、中村に従えば、それぞれ、第一グループ、第二グループそして第三グループとなるが、「共時態」的「関係（史）」を、形成し、発展、変容させる、そうした歩みのなかで、創り出されてきたもの、とは見ないで、個々、ばらばらの区分を、ここでも、おこなっている。また、先の、第一グループの説明に、注意してほしい。「イギリス、フランス、アメリカなどの先進資本主義国」と位置づけているのだが、それら諸国は「先進資本主義国」だけでなく「先進民主主義国」としての観点からも、位置づけられるのではないか。その後で、「市民革命」と「産業革命」の二つを、ともに実現した、というのであれば、やはり、「先進資本主義国」の観点からもっぱら語るのは、何か奇妙な感がする。ところが、である。ここには、伏線がある。「資本主義国」が「帝国主義国」へと「変容」、「変質」する「流れ」に、何とか「理屈」を合わせるためである。中村は、決して、考えようとしない。「民主主義国」が「帝国主義国」に、「変容」、「変質」するのは、なぜなのか、という問題を。それはなぜなの

か。「帝国主義」と結びつくのは、「資本主義」の「歴史」であり、「民主主義」の、すなわち、「市民的自由」の「歴史（世界史）」ではないと考える。こうした論の特徴は、中村だけに、該当するものではない。『昭和史』の論者の語る、「太平洋戦争」の「三つの性格」区分にも、それを、垣間見ることができる。それだけではない。マスコミの理解もそうである。(54) この意味で、私からみると、福田による「太平洋戦争」を、「世界史」の「問題」と、むすびつけて語る、その位置づけ方は、たとえ、そこにある種の問題（とくに「フィヒテ」的世界の見方について）があるとはいえ、はるかに刺激的な問題提起を、行なっているのである。これに対して、中村は、なぜ第一グループが、第二や第三グループと異なり、「市民革命」と「産業革命」の二つとも、実現できたかについて、それこそ、「当時の近代世界システム」と結びつけて、論じていないのである。そうした視点があれば、当然ながら、第一グループと、第二、第三グループとの、「関係（史）」を、俎上に載せて考察することを、避けられなかったであろう。その意味で、中村は、たしかに、「近代世界システムのなかに位置づけて論じる」という「静態的」作業を試みてはいるのかもしれないが、その「近代世界システム」、それ自体を、第一グループ、第二、第三グループとが、各々の「市民革命」（民主主義）と「産業革命」（資本主義）の「歴史」を歩む過程において、どのような形で、「関係」しながら、創造していったかという「動態的」考察を、試みてはいないのである。その理由は、簡単である。拙稿ですでに述べているように、中村や左翼的とみなされる論者は、「資本主義」の「歴史的構造（関係）」については、多くの知見を得ることができたものの、「民主主義」の「歴史的構造（関係）」については、なお十分な知見を、得てはいない。それゆえ、「資本主義」と「民主主義」の相互の「歴史的構造（関係）」という観点からみる、「近代世界システム」の考察にも、着手できていない。こうしたことを、前提とするとき、中村の、「歴史観」の問題点は、容易に理解されるのである。「世界史」の歩みを、すなわち、「市民的自由」を、最初に、実現して、それをもとに、「産業革命」を、経験したときたとされるイギリス、フランス、アメリカの「近代化」の歩みを、「絶対的」な「物差し」として、位置づけ、そこから、日本の近現代史を、語るのだから、中村の日清戦争、日露戦争の描き方は、あらかじめ、予想されるであろう。もし日本が、第一グループと同様に、「市民的自由」を手にしておれば、「侵略戦争」という方向は避けられたかもしれないという見方を取る傾向が強い。(「市民的自由」を手にすることができていれば、まさに、その通りであろう。しかし、それでは、アイルランドは、インドは、オスマン朝支

配下のエジプトは、どうすれば、その「市民的自由」を、手にすることができたであろうか。）たしかに、そうだが、いつも、中村は、それこそ不思議なことだが、以下の問いかけに、向き合おうとはしない。すなわち、第一グループは、どのようにしてその「市民的自由」を手にすることができたのか、という問いかけに対して。さらにその問いかけを、「近代世界システム」の形成、発展と、その変容の歩みと、結びつけながら、考察しようとは、しないのである。卑近な例は、枚挙にいとまがないほどに、見出される。たとえば、「市民的自由」を獲得したイギリス、フランス、アメリカは、その獲得の過程で、その植民地、従属地をつくり、そうしたところに、その「市民的自由」を、許さなかったことを、まずは、問うべきではなかろうか。(55) この種の問いかけに、中村が向き合ったことは、一度もない。左翼的論者も、右翼的論者も、どういうわけか、この問いかけに対して、真剣に取り組んでこなかったのである。

中村は、先に紹介したくだりにおいて、司馬遼太郎が提示した、日露戦争の「祖国防衛戦争としての性格」、という見方に対して、積極的、あるいは、肯定的な評価を、与えていない。むしろ、そうした戦争の、「侵略」性に、重きを置いている、ように見える。私も、そうした中村の見方を、直ちに、斥けることは、やはり、できないのだが、その際、それでは、「市民的自由」を、換言すれば、「自己決定権」を、世界の隅隅にまで、拡大していくための、「侵略戦争」は、「植民地、従属地獲得・拡大戦争」は、中村によって、どのように、評価されるのだろうか。ここでも、また、その問題に、向き合うことを、求められる。すでに、「市民的自由」を、獲得している、第一グループの、「市民的自由」を、世界的に拡大するための、「侵略戦争」という、「暴力」は、許されるのに、つまり、「不問に付される」のに、それに対して、まだ、十分に、その「市民的自由」を、手にしていない、第二グループの、それは、厳しく、糾弾される。その際、ひょっとして、「市民的自由」の、獲得と、植民地、従属地獲得の、「歴史」の間には、「共時態」的「関係（史）」の存在が、あるのではないか、という問いかけまでには、至らないのだから、なんという、お粗末な、論の展開では、なかろうか。拙著で、以前、批判的検討を、加えた、戦後日本の「進歩的文化人」の、代表的存在とされた、久野収の、「牧歌的」すぎる見解を、思い出してしまう。(56)

中村の、「司馬史観」に対する、非難のなかで(57)、私も、強く、同意するのは、「地政学的見方」に対しての、異議申し立ての、くだりである。それに関して、私が、ここで、まず、確認しておきたいのは、「主権線」、「利益線」に関わる、

「地政学的見解」から「防衛」云々を、語る前に、それより、なにより、私のモデルの、あの[セカイ]のなかに、日本と、日本人とが、「開国」以降、組み込まれて、そこで、生き続けて、いかなければならない、という「現実」に、目を、向ける、必要がある、ということである。A グループの、有形無形の、「構造的圧力（暴力）」に対して、B グループは、いつも、「防衛」することを、迫られていた、ということである。日々、「戦争（闘争）」状態に、おかれていた、といっても、過言ではない。もちろん、それは、C グループが、A や B グループの、「構造的圧力（暴力）」のもとに、おかれ続けていた、ということと、結びついている。各々のグループにおいても、「力」の、すなわち、「自己決定権」の、大小があり、それは、また、それぞれの、グループ内で、「疑似」的[セカイ]を、作り出していた、と見ることができよう。それぞれが、「自己決定権」の、「争奪戦」のために、「権謀術数」の限りを、尽くして、生存を、確保しようと、していたのである。それゆえ、この[セカイ]のなかの、「構造的圧力（暴力）」の問題に、目を向ける、必要があることを、私は、強調して、おきたい。

ところが、中村の議論は、それに代えて、「司馬史観」にみられる、先の「地政学的見解」を、批判的に、検討するだけで、その先へと、論を、進めようとはしない。というよりも、進めることが、できないのである。最初から、第一グループの、「歴史」を、「物差し」として、採用していることから、「主権線」、「利益線」の見方を、また、それと結びついた、「地政学的」な、「祖国防衛戦争」の立場を、批判しても、それ以上の、議論の展開を、期待することは、できないことが、予想されるのである。それを、踏まえた上で、中村の見解を、紹介してみよう。たとえば、「はじめに」、において、「司馬史観」について、説明している。中村は、尾崎秀樹に、したがいながら、「司馬史観」について、次のように、引用しつつ、述べている。———「彼は歴史を完結した事象としてうけとり、ちょうどデパートの屋上から路面をゆきかう人や車の流れを見下ろすように、歴史的事件やそのなかに動いた人物を、その起こりから終焉まで鳥瞰するといった方法をとる」と。そしてこの「鳥瞰史観」に立つとき、———「余談だが」などの語を挿入して、事件の歴史的背景や国際関係など、大局を説明しなければならない。日露戦争とは何だったのか。あるいは日本人とは何かなど小説とは思えない叙述が延々と続く」いわば「大局史観」であると指摘している。(58) こうした「司馬史観」から「主観的外圧」と「客観的外圧」との「距離」を、あるいはその違いを読み取ることが難しくなるのだと、中村は見ている。そのことの一例として、中村は、司馬の次のくだりを紹介している。———ロシアは一八世紀以来、満州・

朝鮮を自己の支配下におこうという野望を持っていた。隙あらば、日本を占領し、支配したがっていた。これに対し、日本は対露恐怖の感情で怯え、反感を持っていたという。[59] ———そしてそれを裏付けるものとして、中村が『坂の上の雲』のなかで「核心がある」とみているくだりが次の一節であるとして引用されている。すなわち、———「『日本というのは悲痛な国よ』と、真之はいった。——日本というのはまだまだ農業のほかろくな産業ももっていないくせに、ヨーロッパの一流国とおなじ海軍をつくろうとしている、と真之はいう。『それも超一流の軍艦をそろえたがる』と、真之はいった。『そのエナージーのひとつは恐怖だ。外国から侵されるかもしれぬという恐怖が明治維新をおこし、維新後はこのような海軍を持つにいたった。———』」。[60] 中村にしたがうなら、「この外圧（外国から侵略されるかもしれないという恐怖）に由来する」とみられる。そこからあの有名なくだりとなる。「朝鮮半島は日本のわき腹に突き刺さった刃だ」と。中村は、こうした「恐怖」は現実にはなおまだ起こりそうもないことをさも起こるかもしれないと見るものであり、それを作り出すのは、「主観的外圧」（感）なのだとして、そうした態度を、戒める。そして、それに対置される、「客観的外圧」（感）であったか、どうかの確認が、必要であった、と語るのである。換言すれば、そうした「脅威」なり、「恐怖」が、また、それを、生み出す、切迫した、「状況」なり、「状態」に、日本が遭遇している、かどうかの、検討をすべきだ[61]、というのだろう。中村は、第一グループの、「歴史」を、「物差し」としていることから、司馬のいう、「脅威」や、「恐怖」を、「主観的外圧」、あるいは、朝鮮半島の、「地政学的」観点からの、位置づけの過大評価、という問題点を、提示することで、批判はしても、その、第一グループが、第二、第三グループを、巻き込みながら、私のモデルで描く、[セカイ]を、創造してきたことについて、そして、その過程で、上でも、述べたように、「構造的圧力（暴力）」のなかに、第二グループ、第三グループを、放り込んだ、ということに対しては、どうも、鋭い勘が、働かない、きらいがある。それゆえ、ここで、私は、中村のいう、「主観的外圧」、「客観的外圧」の見方に、加えて、「構造的圧力（暴力）」の、問題の検討が、必要である、と主張しておきたい。こうした問題を、踏まえるとき、第一グループの、「歴史」を、「物差し」とすることの、問題点が、浮き彫りにされるであろう。と同時に、「司馬史観」を、批判する「眼」が、より豊かに、なるのではないか、と私は見ている。

4.「司馬史観」の問題点と今後の課題

「司馬史観」を、批判しながら、中村は、「日清戦争」、「日露戦争」に対する見方を、どうすればいいかという、重要な論点を、提示している。中村は、「司馬の日清戦争観」において、「戦後歴史学」に対する司馬の批判について以下のように紹介している。―――「『日清戦争は、天皇制日本の帝国主義による最初の植民地獲得戦争である』という定義が、第二次大戦のあと、この国のいわゆる進歩的学者たちのあいだで相当の市民権をもって通用した。あるいは、『朝鮮と中国に対し、長期に準備された天皇制国家の侵略政策の結末である』ともいわれる」(――悪玉史観)。それとは反対に、清国は多年にわたって朝鮮を属国視し、ロシアは北方から朝鮮に対し野心を抱いていた。日本はこれに対し、清国の暴慢を抑え、朝鮮の中立を保つために、武力に訴えて、みごとに清国を排除したという説もあった(善玉史観)。―――こうした「悪玉史観」、「善玉史観」に対して、「司馬は人類の歴史のなかにおける日本という国家の成長の度合い、近代ナショナリズムと明治国家、産業革命と帝国主義、国民国家と軍事・外交の問題などを明らかにしなければ、日清戦争の本質を説くことはできないという。」[(62)] まさにその通りである。こうした観点から司馬の問うような作業を通して、初めて、「司馬史観」も批判されるべきだと思うのだが、中村はそこまで踏み込まないのである。それに代えて、中村は司馬の次のくだりを紹介する。すなわち「帝国主義と自由と民権は渾然として、西洋諸国の生命の源泉であると見、当然ながらそれをまねようとした。西洋の帝国主義はすでに年季を経、劫を経、複雑で老カイになり、かつては強盗であったものが商人の姿をとり、ときに変幻してヒューマニズムのすがたをさえ仮装するまでに熟していたが、日本のそれは開業早々だけにひどくなまで、ぎこちなく、欲望がむきだしで、結果として醜悪な面がある。ヨーロッパ列島では、帝国主義の後進国であるドイツが多分にそれであった」と。私は、司馬の、この、くだりは、見事に、私のモデルの、[セカイ]の歩みを、描いている、と見ているのだが、中村は、あらかじめ、予想されるように、司馬による、この問題提起には、踏み込まないで、次のような、批判を、繰り返すだけである。すなわち、「いわば先進帝国主義と後進帝国主義、あるいは武断帝国主義(軍事力重視)と経済的帝国主義(経済力重視)の移動を述べていて――説得力がありそうに見えるが、この視点で日清戦争と日露戦争の性格や本質が論じられていくわけではない――いわば風呂敷を広げすぎ、筆が走りすぎているのだ。―――と。

たしかに、中村のいうように、「この視点」から論究されてはいない。それは、

そうなのだが、そうした批判をする、中村自身も、「この視点」を、矮小化しているのではないかと、私は、ここでも、感じてしまうのである。というのも、司馬は、「帝国主義と自由と民権は渾然として西洋諸国の生命の源泉であると見」ていた、のであるから、「先進帝国主義対後進帝国主義」、という構図のみならず、そこに、「先進帝国―自由―民権主義国対後進帝国―非自由―非民権主義国」という、構図の関係を、また同時に、含めておかなければならない、のではないか。しかも、「帝国―自由―民権」の、「渾然とした」関係を、どのように、位置づけ、考察するかが、司馬の提起した、最も、重要な、問題提起である、と見ることが、重要ではないのか。こうした観点からの、「司馬史観」に対する、批判になることが、いま、求められているのであり、中村の、この種の、「歴史観」でもって、「司馬史観」が、批判されることには、司馬も、おそらく、承服できないのではないだろうか。もっとも、そうはいっても、先に、指摘したように、中村のいうように、司馬自身が、自身の提起した、問題には、答えられなかった、ということも、認めておく必要がある。付言すれば、司馬が、問題提起した、「帝国主義と自由と民権は渾然として西洋諸国の命の源泉」、であるというくだりを、私はこれまでの研究において、なんとか、位置づけなおそうと、努力してきたが、それを、私のモデルで描く、[セカイ]の、形成と、発展、そして、その変容の、「関係（史）」として、提示してきた。「中村史観」に対して、「村田史観」、とでも呼ぶことが、できよう。

私のモデルの[セカイ]、それ自体が、ある種の、「外圧」を、それを、「主観的外圧」とみるか。「客観的外圧」とみるか、に関係なく、作り出しているのである。それゆえ、「司馬の日清戦争観」のなかに、みられる、「地政学的」観点から、朝鮮の担った「朝鮮半島の位置」を、戦争の「原因」の一つとして、挙げることに対しては、中村と同様に、支持することはできない。しかし、同時に、それが有した、「問題」を、まったく、却下することもできない。私の描く、あの[セカイ]を、主たる「原因」とすれば、朝鮮半島の、地政学的なそれは、従として、見ることができる。ただし、中村のいうように、司馬が、「そろそろ、戦争の原因にふれなければならない。原因は朝鮮にある。といっても、韓国や韓国人に非があるのではなく、罪があるとすれば、朝鮮半島という地理的存在にある。」(63) というのであれば、やはり相当に無理な話となってくる。あれほど「渾然とした―――」(64) と語っておきながら、いきなり「朝鮮半島の位置」と言われても返答のしようがない。さらに、そこから、「資本主義」－「帝国主義」－「民主主義」の「関係（史）」の問題に向けられるまなざしは極めて弱くなってしまう。中村の危惧するとおり

になってしまう。残念である。それゆえ、司馬が提起した問題には私自身が、中村と共に、向き合わねばならなくなったのである。といっても、何度も指摘したように、中村の見方もある一線を越えては前に向かないのだが。それを踏まえた上で、もう少し、中村の言に、耳を傾けておきたい。

中村は、司馬の「日露戦争観」について、以下のように、述べている。

———作家として脂ののり切った四〇代をすべて投入して、『坂の上の雲』を書き終えたとき、司馬は四九歳の終わりに達しており、日露戦争史に新風を吹きこんだ。とくに日露戦争は侵略主義的なロシア帝国主義に、日本国家・日本人が総力をあげて立ち向かった「祖国防衛戦争」であると描き切った時、いまだ敗戦意識、虚脱感からぬけきれなかった日本人に勇気と希望を与えた[65]———として司馬の『坂の上の雲』を紹介している。そのすぐ後でも、中村は続けて、「日露戦争の本質はロシア帝国主義と日本帝国主義の帝国主義間戦争であったと考える」[66] ということを忘れていない。これに対して私は、ここでもまた、日露戦争を、中村のようにもっぱら「帝国主義間戦争」の観点からみるだけでは、私のモデルで描く[セカイ]のなかの、第一グループ（A グループ）による日本やロシアの第二グループ（B グループ）に対して加えられている、「構造的圧力（暴力）」の問題が俎上に上らなくなってしまい、そのことにより、この[セカイ]の「経済発展」と「民主主義の発展」の「関係（史）」の抱える問題点にまで目が向けられなくなってしまう（その代わりに、福田の冒頭での語る「世界史」の歩みが、中村の第一グループの見方に端的に示されているように、逆に称賛されてしまう）ことを、危惧するということを指摘しておきたい。それにしても厄介な問題である。その[セカイ]のなかで、その「関係（史）」の在り方を疑い批判しつつも、私はそのなかで生き続けているのだから。言いたいことは、明治の日本と日本人が抱えた同種の問題が、時と場所を変えても、その程度差はわからないものの、確実に繰り返し生みだされているということである。その観点から、私は、福田、中村、司馬、さらには以下に取り上げられる、論者の「歴史観」と、向き合い、「対話」を重ねていきたいのである。できれば、二度とあのような「歴史」を、繰り返したくないために、である。

それでは、遅くなったが、ここで、「第三節　近現代史をどう見るか」に、目を転ずるとしよう。すでに、ここまでにおいて、「司馬史観」と、それに対する「中村史観」の、「対話」に関して概略を、紹介してきたが、それらを踏まえながら、補足する形で中村の論を紹介していきたい。この章において、中村は「司馬史観」を藤岡信勝に依拠しながら、紹介している。———藤岡は「司馬史観」の発想の

特徴として、―― 一、健康なナショナリズム、二、リアリズム、三、イデオロギーからの自由、四、官僚主義への批判―――である。（付言すれば、藤岡の「自由主義史観」なるものはこの四つを取り込んでいるとされる。）この見方は、中村がいうように、「いい面だけを取り出した『信奉史観』にすぎない」。(67) それにしてもである。最初に、司馬が究明しようと提起した例の「渾然とした――」、といった問題は、もはや、見る影もなくなって、しまっている。あまりにも、一面的、皮相上滑りの、「史観」へと、一歩も、二歩も、後退した論の展開、となっている。それゆえ、私の[セカイ]からの、後退は、押して知るべし、の観がある。藤岡の論は、「司馬史観」を、底抜けに、楽観的すぎるほどにまでに、述べているのである。そうすることによって、問われるべき問題は、後景へと、追いやられてしまった。

ところで、「司馬史観」において顕著な「歴史」の「二項対立的」描き方、たとえば、「明るい明治」と「暗い昭和」といった区分について、私のようにあのモデルの[セカイ]からみるとき、あまりそうした区分け自体に意味があるとは思えないし、むしろ司馬氏自身の「歴史観」の問題点に目を向けざるをえない。これについて、中村は、適切に以下のように述べている。「なぜなら、大正・昭和は明治を母胎として形づくられたものであって、明治と昭和の間にそれほど大きな非連続や断絶を置くことはあまりに単純であるし、この間における国際関係の重大な変化を見落とす危険さえある。あるいは、次のように言いかえてもよい。歴史とは連立方程式ないし三次方程式になっているのであって、それぞれの時代には明るい側面もあれば、暗い側面もあるし、明治の明るさが昭和の暗さに転じることもあれば、その逆のケースもありうる。たんに「明るい明治」「暗い昭和」といった文学的かつ二項対立的な把握でとらえられるほど日本の近現代史は単純ではないのである。」(68) その通りと言えばそうである。だが、中村もここでいうように、「歴史とは連立方程式ないし三次方程式になっている」というのであれば、「帝国主義－自由―民主」という「歴史」を解く必要があるだろう。また、「大正・昭和は明治を母胎として形づくられたものであって」というのであれば、日本の近現代史は、第二グループを[母胎]として、さらに、その第二グループは、第一、第二、第三グループの「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（史）」の形成、発展とその変容の「歴史（歩み）」をまさに[母胎]としていた（換言すれば、私のモデルのあの[セカイ]にほかならない）ということにまで論を展開することが最低限、私は求められるのではないかとここで強調しておきたいのである。

第 3 章 日清・日露「戦争」のなかの「日本」と「日本人」

1.「朝鮮半島」をめぐる日本の「戦争」

ここで福田の『魂の昭和史』にもどり、そのなかでの「日清戦争」、「日露戦争」についてのくだりを紹介しておこう。基本的には、福田の両戦争の見方は、司馬遼太郎の「朝鮮半島の位置」づけ方と、「祖国防衛戦争」ととらえる見方とほとんど変わっていない。ただ、福田は、司馬が提起した「問題」には直接答えてはいないものの、「高校生を対象とする」著作という「性格」も手伝って、その「問題」に触れざるをえない種々の論点を提示しているのである。後に詳しく論じるとして、ここでは簡単に述べることにするが、明治時代においては、「戦争」は国際社会における「大事な競技種目」とされ、その競技種目を上手くできない国は、国際社会のなかで生き残れないと述べている。そして、当時の日本は、イギリスやフランスを見習い、「メジャー・リーグの一流チームになろうとして」いたと述べている。「競技としての戦争をきちんとやらない国はダメな国だったし、植民地にされても仕方がなかった」と、福田は指摘する(69)のだが、このくだりを「民主主義の発展」の「歩み」と結びつけて考えると、司馬が提起した「渾然とした――」問題の一端に迫れるかもしれない。ここでの「戦争」は「植民地」、「従属地」をめぐる「植民地争奪戦争」であると見て間違いないが、そうした戦争そのものが、「自由」をめぐる「自己決定権」（国家的共同体のレベルにおいては「主権」とその「拡張」に、共同体の各構成員レベルにおいては「市民的自由」とその「拡大」にそれぞれ呼応するものである）の「争奪戦」であり、そのこと自体が、「自由」、「民主主義」の実現の動きと密接に関連していることを示しているのではなかろうか。

福田は、「なぜ日本と中国が戦争をしなければならなかったのか」のくだりで、「近代化に取り組んでいる中国と、近代化に取り組んでいる日本が、朝鮮半島をめぐって衝突したというのが日清戦争なんだ」という。またなぜ朝鮮半島をめぐってなのかということに対しては、「ただ日清戦争だけではなくて、日本と北東アジアの近代史を考えるうえでとても重要な問題だ」として、「日本が独立してやっていく、植民地にならないでやっていく、という目標から考えてみると、朝鮮半島がとても大事な場所だったからだ。―――日本が過去に大陸から脅されたり、あるいは日本が大陸に向かっていったときには、いつでも朝鮮半島が軍隊の通り道になってきた。」と論じている。(70) その際、興味深いのは、福田が以下のように言っていることである。「一方日本は、朝鮮が独立国であると

いう立場をとっていた。独立国だと思っていたのは、別に立派な意図があったわけじゃない。朝鮮の人たちの独立を守ってやろうとかいう気高い気持ちなんかは、ほとんどなかった」(71) と。これは、第一グループにおいても同じであるのはいうまでもない。ただ、このように福田はいうのだが、同時に、日本は西洋諸国と同様に、「朝鮮を収奪した」がその一方で、彼らと異なり、といった具合に、日本の植民地化を、積極的に論ずる面も散見される。しかもその際、「もちろん、そんなもの嬉しくも何ともなかっただろう」とか、「そういった社会投資が、日本の支配の道具であったことは間違いない」と慎重に留保しながらも、「しかし、イギリスやフランスがおこなった、植民地からの一方的な収奪、徹底的にかっぱらうだけだったのとは全然違った」とこだわるのである。(72) そして、戦争後の日本の朝鮮支配の決算をしてみると、「日本側の大幅な赤字だったほどだ」(73) と述べている。正直私にはこのような論の展開は、承服できない。お金で償えないものがあるという前に、「大幅な赤字」でもって、日本が収奪した者、奪った人命を償うことはできないということである。またこうした議論は、せっかく司馬の提起した「渾然とした――」問題に、目を向けることを遠ざけてしまう。やはり重要なことは、こうした「損得勘定」の話ではなく、朝鮮半島を舞台として、日本と中国が「近代化」の歩みのなかで「衝突」せざるをえなくさせるあの［セカイ］の、すなわち、「経済発展」と「民主主義の発展」の、そしてそれらの「関係（史）」の抱える問題にメスを入れることではなかろうか。もっとストレートに言うならば、「民主主義の発展」が抱える問題なのではないか。すなわち、「私的所有権、財産権の自由」「営業・通商の自由」といった「市民的自由」の抱え続けてきた問題ではないのか。福田自身も次第に、このような問題に対して、正面から向き合うことを避けるようになってきたというのは酷ないい方だろうか。それでは一体誰がこの問題に向き合うのか、向き合えるのだろうか。『昭和史』の著者たちだろうか、中村だろうか、司馬だろうか。あるいは家永三郎だろうか、丸山真男だろうか。残念ながら、だれも向き合うことができないのである。当然ながら、西尾幹二に代表される「新しい歴史教科書の会」のメンバーにおいても然りである。(74)

ところで、福田は、「日本と朝鮮半島の問題の核心とは何か」というくだりで以下のように語っている。―――そして実際に、投資なんかを一生懸命したからこそ、日本と朝鮮半島の関係はとても面倒くさくなってしまったんだ。イギリスみたいに、ただ搾取するだけなら、いくらかたちが悪くても、いっそのことスッキリしている。イギリスはミャンマーをほとんど、国ごと材木工場みた

いにしてしまったからね。でも日本みたいに、搾取をしつつ投資もしていた、なんていうと、複雑になってしまう。[75] ———このように述べつつ、福田の次のくだりとなる。「考えてみればわかるだろう。君たちが、お父さんの遺産を相続したとしよう。それを横取りする悪い身内がいたとする。そのときただ横領するだけの奴と、横取りしているくせに保護者面をして、いろいろと面倒を見てくれる奴がいたとしたら、どちらか憎いと思うだろうか。」と論じる。[76] ここは非常に大切なところである。というのも、この手の話それ自体が、「自分の世界」に閉じこもった「身内の論理」を吐露しているように思えるからである。当然そのくだりは、「絶対に後者だ」となり、それはまた「憎しみは同じだとしても、その脈絡ははるかに複雑になる。」と導かれていくことが予想される。私がすぐ前で「ここは非常に大切なところ」と指摘したのは、このような福田の問いかけは、ますます司馬の「渾然とした——」問題に目を向けさすどころか、ますます「情感的な世界」へと話題を変えてしまう恐れがある。私は、「情感」を否定するわけではない。福田のいう「歴史を感じる」ことの重要性は理解しているつもりである。さらにここで福田のいう朝鮮半島をめぐる日本と朝鮮との「愛憎」に関する分析は間違っているわけではない。間違っていないどころか、見事な分析である。しかし、もともとそれは何の目的のためになされるはずの分析だったのか、それを今一度想起しておきたい。さらにまた次の福田のくだりも、ある意味で分かりやすいたとえを使って語る分析であるがゆえに、ここも注意してみなければならないところである。すなわち、以下のくだりである。———彼らの旧植民地との関係は、そういう意味ではスッキリしている。だけど日本と朝鮮半島は、そうはいかない。君たちの世代には、もう関係ないといっても、彼らは怒りつづけるだろう。それは彼らの「歴史」、つまり、ここで語ってきた、今ここにいるということに直接かかわる「歴史」なんだ。朝鮮半島の近代化は、日本の手によっておこなわれ、彼らは日本の「おかげ」で、近代化した。これは、非常に深刻なことだ。明治維新による近代化が、日本にとっての青春というのか、自らを脱皮させて自立していく過程だとすれば、その「青春」を日本は朝鮮半島から奪ってしまったのだから。それこそが日本と朝鮮半島の問題の核心だ。植民地支配だの、従軍慰安婦だのといった問題は、みんなこの核心のフリルみたいなものだよ。だから、日本が反省しないとか、謝罪しないとかいった話も、本当は彼らにとってどうでもいいことなんだね。そんなことをしても、「青春」が返ってくるわけではないし、それは詫びようも、反省もしようがないことなんだね。何らかの形で朝鮮半島に人たちが「青春」

を謳歌するまで、絶対に解消できないわだかまりが、続くだけだ。[77] ———少し引用が長くなったが、もう少し、続けて紹介しておきたい。

———ここのところをよくわきまえてほしいし、彼らに対して感じるべきなのは、合併をしたという罪悪感よりも、むしろ彼らが「青春」をもつことができなかった、という悲劇に対するおもんばかりだと思う。良心とか、やましさで、この問題が解決すると思うのは間違いだ。絶対にとりかえしのつかないことの積み重ねが、「歴史」ということなんだから。[78] ———

ここにある福田の「歴史観」について、すぐさま論難したり、揚げ足を取ることは簡単だと思われるものの、それを福田は了解しつつ、あえてこのくだりで述べていることを踏まえて、福田の論に向き合いたい。

日本の近代化の歩みにおいて、日本にとっての「青春」を、すなわち、「自らを脱皮させて起立していく過程」を経るために、朝鮮半島に対して、「その『青春』を日本は朝鮮半島から奪ってしまった」と、日本と朝鮮との「経済発展」と「民主主義の発展」とにおける「共時態」的「関係（史）」の「歩み」を認めている。ここがまず重要な点である。これはなにも日本と朝鮮との関係にだけ該当するものではない。福田がここで日本との比較で例に挙げていた、イギリスとインドとの間においても、イギリスとミャンマーとの、またフランスとインドシナとの、アメリカとフィリピンとの、さらには、「西洋」と「非西洋」との間においても見出される「関係（史）」である。それは、「西洋」と「日本」との間にも妥当することである。まさに「西洋」による、当時の欧米先進国の日本に対する「不平等条約」に端的に示される［客観的外圧］のもとで、日本の「青春」は自らの手を離れたところで経験される状況のなかに位置づけられていた。それを自らの手に引き戻すために、すなわち、「自らを脱皮させて自立していく過程」と位置づけなおすために、日本は朝鮮に対する植民地支配をしたのである。福田にしたがうならば、「大航海時代」のスペイン、ポルトガルが、自らの「青春」をイスラム圏から取り戻すために、ラテンアメリカの「青春」を奪っていったとみることができる。オランダはスペインに蹂躙されていた「青春」を取り戻すために、今日のインドネシアとアチェーのイスラム共同体の「青春」を奪ったといえよう。そしてイギリスは、またアメリカは、そしてフランスはと「青春」に関わる話は続いていくだろう。その過程で、「西洋」は、アフリカの「青春」をも奪い取ってしまう。福田のいうように、「反省」しても「謝罪」をしても彼らの「青春」はかえってこない。もっともそのことから、「彼らにとってどうでもいいことなんだ」ととは、私は思わない。「詫びようも、反省

もしようがないことだよ」ともいえない。「絶対にとりかえしのつかないことの積み重ねが『歴史』ということなんだ」ということにはほとんど同感である。福田自身はおそらく分かりすぎるほどに分かっているのだろう。私の描くあの[セカイ]のなかで、「西洋」も「非西洋」も生き続けるであろうし、生きていかざるをえないことを。「謝罪」や「反省」また「詫び」をするものも、求めるものも、同じように、この[セカイ]を支える以外に何もないことを。私の「経済発展」と「民主主義の発展」の「関係（史）」モデルから、今日の中国と中国人の歩みを見るとき、一体彼らが求めた「謝罪」と「反省」とはなんのためのものであったのかと、私のような見方をしてきたものにさえ、改めて思ってしまうが、しかし、そんなことはすでに分かり切っていたはずである。後にみるように、1965年の「日韓基本条約」の締結に際して、結局のところ、韓国の「平和」も、日本のそれと同じように、私のモデルのあの[セカイ]の「経済発展」と「民主主義の発展」の「関係（史）」のもとで手に入るものであり、そうした「関係」を破棄するような「平和」ではないということを。それは、同時に私たちに教えているのではあるまいか。福田のいう「青春」物語が、時代と場所を変えてまた続いていくことを。それゆえ、福田は先のように語るのだろう。私は、福田の言わんとすることが分かるような気がする。しかし、だからといって、「はい、そうですね」とはやはりいえないのである。だが同時に、『昭和史』の論者や、中村の「平和」観では、どうすることもできないと、いわざるをえない。「日本国憲法」とその「第9 条」は、私のモデルのあの[セカイ]を擁護するものであって、決してそれに抗して、何か別のものへと変えていくものではない。換言すれば、福田の「青春」物語の「日本版」に関しては、論理的に批判しつつ、その「イギリス版」、「アメリカ版」「フランス版」といった、いわゆる「市民的自由」を体現するとされるものに対しては、論理的、感情的に支持するのである。これに対して、福田は、「青春」物語を、良いとか悪いとかの「価値」判断をしても所詮は詮無いことだとして、せいぜい「情緒的」レベルで、「歴史」を「感じる」ことで、何とかバランスをとる形で「我慢する」と主張しているかのようである。しかし私は、結局のところ、福田の態度は、左翼的論者の見方に対して、「日本人」の立場から「論理的整合性」を与えることにおいて消極的意味しか持ちえない、あるいは、なんらの力にもなりえない、と考えている。そのことは、しっかりと銘記すべきであると、ここでも強調しておきたい。それにもかかわらず、福田の日本と朝鮮半島の「共時」的「青春」物語のくだりは、上述した私の福田に対する見方と「矛盾」するものの、従来の左翼的論者の主張と比較して、「渾然とした――」問題に目を向けさせる

手がかりを与えていると、指摘しておかねばならない。この点について私のモデルを使ってもう少し詳しく述べてみたい。

2.「戦争」を語ることのできない「民主主義」論

福田が指摘したように、日本が「青春」を実現していくなかで、朝鮮半島の「青春」が奪われてしまったと見る「共時態」的「関係（史）」の捉え方は、［B の経済発展→C の経済発展］（これを逆からみるときは［C の経済発展→B の経済発展］となる）、［B の民主主義の発展 $\overset{(\times)}{\rightarrow}$ C の民主主義の発展］（これも逆からみるときには、［C の民主主義の発展→B の民主主義の発展］）となる。

しかし日本と朝鮮半島の「青春」をめぐる「共時態」的関係は、ただ単に B の日本と、C の朝鮮半島の「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（史）」に限定されるものではなく、当然ながら、そこに、A の、すなわち、中村により「歴史」を見る際の「物差し」とされた第一グループの「経済発展」と「民主主義の発展」とが結び付けられることとなる。それによって、日本と朝鮮半島の「青春」物語に、［A の経済発展→B の経済発展］、［A の経済発展→C の経済発展］および［A の民主主義の発展 $\overset{(\times)}{\rightarrow}$ B の民主主義の発展］、［A の民主主義の発展 $\overset{(\times)}{\rightarrow}$ C の民主主義の発展］の「関係（史）」が組み込まれた「青春」物語となってくる。そのことはまた、［A の経済発展→B の経済発展→C の経済発展］、［A の民主主義の発展→B の民主主義の発展→C の民主主義の発展］の図式で描かれる「青春」物語における「経済発展」と「民主主義の発展」の「関係（史）」の問題点を浮き彫りにするのである。ところが、すでに何度も指摘してきたように、「左翼的」論者は、第一グループの「市民的自由」を礼賛してそれを「歴史」を理解する「所与」の「物差し」としているために、B や C とむすびつけて語ることを避けてしまう。せいぜい彼らができたのは「経済発展」における「関係（史）」に目を向けたことであり、決して「民主主義の発展」の「関係（史）」にまで目を向けることはなかったのである。もし「A の民主主義の発展」の歩みを私のモデルで描くようにあの[セカイ]のなかで位置づけることができていれば、日本の近現代史の理解はもう少し深められていたに違いない。こうした観点から「右翼的」論者の見方に目を向けるとき、彼らの多くも「左翼的」論者と同じような立場にあったといえるだろう。せいぜいのところ、彼らは、「相討ち」狙いの論を提示するのである。その代表的論者として、西尾幹二や、田母神俊夫を挙げることができよう。田母神の論考のタイトル「日本は侵略国家ではなかった」は読者向けのものだと思うが、そこでの本来の主張は、彼らも日

本の「侵略」を認めたうえで、「日本だけが侵略国家ではなかった」というのである。[79] そこから、司馬の提起した［渾然とした――］問題へと向かうことはなかった。それは「左翼的」論者と共通していたが、それは、西尾の「自由、民主主義――――はいい」[80] というくだりにも、はしなくも垣間見られるものであった。このようなレベルでは、到底「渾然とした――」問題に接近できるはずもない。ましてや私のモデルの[セカイ]の抱える問題に対して、たとえば、[A の民主主義の発展 $\xrightarrow{(\times)}$ C の民主主義の発展]、[A の経済発展 $\xrightarrow{(\times)}$ C の民主主義の発展]の図式に描かれる「宿阿」）に対して、切り込んでいくことなんてできもしないことは自明のことではないか。その意味では、新旧の「歴史教科書」の「歴史観」ではともに日本の近現代史の問題を究明することはとても難しいことが予想されるのである。そうだとしたら、福田がいうように、「悲劇に対するおもんばかり」以外にすべはないということになりかねない。それでもここはなおしばらく、社会科学に従事するものとしてもう少し踏ん張ってみたい。

さらにここで付言しておくならば、これもまた後に、「I´期」の「段階」において論じることなのだが、ここでの福田の「青春」物語は、時と文脈を変えて、赤木の論考「丸山真男をひっぱ叩きたい」をめぐる論争のなかで、赤木が「結局は自己責任ですか」と論難する「青春」をめぐる議論にも［再現］するものだと、私は見ている。[81] 赤木に代表される「失われた世代」の「青春」を奪ったのは、まさに、私のモデルで描く「セカイ」の形成と発展とその変容の「関係（史）」であり、その「経済発展」と「民主主義の発展」を「所与の前提」とする「左翼的」論者の立場から、何ら有効な処方箋は提示でないのである。

「格差社会」とか、「格差」問題を、私は、「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（史）」の形成と、発展、そして、その変容、という観点から、いつも理解し、論じてきたことから、私は、そうした「関係（史）」を前提として、その下で、創り出されてきた「自由主義的民主主義（リベラルなデモクラシー）」、それ自体が、「格差（社会）」を創り出す、大きな要因である、と私はみるのだが、私のみるかぎり、多くの論者は、逆に、「自由」や「民主主義」、「人権」が、十分に、守られていないことから、そうした「格差」にかかわる問題が生じているのだと、そう考えている。こうした事例として、「格差」や「貧困」が拡大するなかで、日本のマスコミにおいて、声高に「普遍的人権」の、世界的な拡がりを目指せ、という論調の記事が、目につくことが、指摘できよう。こうしたことにも、論者が、いまだに、福田和也が、俎上に載せていた、ヘーゲル的「世

界史」の流れを、そのまま「受容」し、それを、21 世紀になっても、いまだに、無批判、無責任に、たれ流し続けているところに、大きな問題があると、私は、考える。これらのマスコミ関係者には、そうした「普遍的人権」の「世界的拡大傾向」なるものが、今日の先進国における「格差」社会と、「貧困」の、形成とその深化とに、どれほど深く、関係しているかなどは、思いも至らないことであろう。残念なことに、こうした傾向が強くなってきている。

こうした点に関連して、ここで、「民主主義」が、どのように教えられているかについて、少し、紹介しておきたい。とくに、ここでは、「国際関係論」において、どのように取り扱われているか、みておきたい。〈シリーズ国際関係論 1 篠田英郎著『国際社会の秩序』(東京大学出版会、2007 年)〉の「第 6 章　民主主義」のくだりを紹介してみる。そこにまず、「民主主義は広く国際的に認知された価値規範となったのである」と、述べられているように、「民主主義」を、「価値規範」として、理解している。このような理解の仕方は、別に今に始まるものではないし、珍しいものでも無いのだが、私は、こうした「価値規範」とされるものを、あの[セカイ]の歩みと、関係づけて、捉え直してみたいのである。何か「価値規範」と言われると、もうはじめから、「所与」の、「当為」のように、見られてしまう嫌いがある。はたして、そう理解したままで、問題はないのだろうか。

これまでにも、何度も言及してきたことだが、ここで、「民主主義」について、私の理解の仕方を、語っておきたい。「民主主義」を語る際に、重要なことは、論者にとって、都合のいいところだけを、勝手に、好きなように、取り出したり、切り離したりすることにより、それ(「民主主義」とされるもの)が、本来、位置づけられている、「全体像」を、捉えることを、許さなくさせることだけは、ぜひとも、避けたいところである。たとえば、「民主主義」を、「みんな(誰も)が、自由に、政治に参加して、政策決定をしていく、政治のあり方」と考えるのも、そうした一例である。これも、「全体像」のなかで、それが位置しているところから、勝手に、とりだしているのである。「民主主義」と言う場合、それは「自由主義的民主主義」を意味している。それゆえ、一般に「民主主義」と言うとき、私たちは、「自由主義」を、そこから取り除いていることに気がつかなければならない。そして、「自由主義」とは、まさに私のモデルで描くあの[セカイ]それ自体と矛盾するものではないことを、あの[セカイ]を意味することを、銘記しなければならない。それゆえ、そうした「政治のあり方」が、実際に、実現できるようになるのには、多くの時間と労力を、必要としたのであり、また、

その歩み、それ自体が、私が考えているように、「歴史の大きな流れ」というか、「大きな歴史の流れ」というか、そうした「歴史」のなかで、まさに、「共時態」的な「関係」として、創り出されてきた、ということを、押さえておくことが、大切である、と私は、ここでも、強調しておきたい。それゆえ、そうした「民主主義」を守るということは、論者が、それをどれほど意識しているかに、かかわらず、「大きな歴史の流れ」、それ自体を、守ることを、意味しているのである。ここでいう、「歴史の大きな流れ」とは、私のモデルに置きなおすならば、いわゆる、あの[セカイ]の、生成と、発展、そして、その変容の「歩み」、ということになる。したがって、こうした「全体像」と、切り離して、先ほどの、「みんなが、参加して、「自由」に、発言して、物事を決定できる、そうした「政治（決定）の仕組み」として、「民主主義」を「定義」するとき、私たちは、何を、隠すことになるのだろうか、また、何に対して、「ウソ」をつく、ことになるのだろうか、と私は問わざるをえなくなるのである。(82)

福田のいうように、そこでも「絶対にとりかえしのつかない積み重ね」としての「歴史」が立ちはだかるのであり、その「歴史」の歯車を回し続ける「市民的自由」を、すなわち第一グループの「民主主義」の歩みを礼賛する「左翼的」論者に期待することはできないし、福田もそれに対処できないことを十分わかっていることから、赤木に対して、おそらくここでも「良心とか、やましさで、この問題（ここでは「格差問題をさしている」が解決すると思うのは間違いだ）というだろうし、「彼らに対して感じるべきなのは、――彼らが「青春」をもつことができなかった、という悲劇に対するおもんばかりだと思う」と繰り返すであろう。

3.「格差社会」のなかで「奪われる（もう一つの）青春」

「格差」社会をめぐる論考を、手がかりとして、「格差」と「民主主義」の歩みとを、結び付けて考える、そうした視点、視角を、提示してみよう。内田樹「収奪される若者たち　安価な定宿　実は高収益率」（『愛媛新聞』2007 年 6 月 27 日付）に、興味深い指摘がある。それをもとに、論を展開していこう。

内田は、次のように語る。―――つまり、ネットカフェ難民たちは経営サイドからすると、恐ろしく安い商品に高額の対価を払ってくれる「上得意」なので―それゆえすでに大手企業がネットカフェに参入し、全国チェーン展開まで始まっている。－確かにビジネスはビジネスであり、利用者たちが－便益をえている―けれども、できるだけ多くの若者たちが、その境涯から脱出できな

い程度に貧困であり続けることから利益を得るというビジネスモデルを作り出したことに彼らは疾（やま）しさを感じることはないのだあろうか。―――

このくだりにあることを、私のモデルで描く、あの[セカイ]から、語りなおすとき、私たちは、まさに、「疾しさ」を、「感じること」なく、すでに生き続けており、こうしたビジネスモデルは、何も目新しいものではなく、あの[セカイ]においては、至極当然のビジネスの在り方であり、もし「疾しさ」を問うのであれば、あの[セカイ]のなかで繰り返されてきた「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（史）」、それ自体の「疾しさ」を問うものでない限り、どうにもならない問題である、と私はみている。もう少し言及するならば、「疾しさ」を問うことで、済まされるような問題ではないし、私たち、一人一人が、その「疾しさ」を、どうあがいたにせよ、「是認」しながら、生きている、生活しているということ、ではあるまいか。私達が今手にしている、「自由」、「民主主義」「人権」「平和」は、まさにこの種の「疾しさ」、抜きには語れないような、「差別」と「排除」の「関係」のもとに、創り出されてきたものだと、私は、これまで、ことあるごとに論じてきた。ただし、そう語る、私自身、内田が「感傷的」に、指摘する、「疾しさ」を、感じながらも、容易に、そうした「仕組み」を離れて、別の「衣・食・住」の「ネット・ワーク」の下で、生きていくことが、できないままにいる。ただし、このような私ではあるが、こうした問題を、もし仮になんとかして、取り組んでみようとするときには、安易に「憲法」の保障する「人権」を盾にとり、「解決」を図ることだけは、避けなければならない、と考えている。その理由については、すでに、拙著や拙論でも、論じてきたが、簡単にいうならば、そうした「憲法」で謳われている「人権」は、それ自体が、「疾しさ」をともなう「関係」を前提として、創り出されてきたからにほかならない。「人権」は、たとえ「普遍的」だと、仮に認めても、あの[セカイ]の、A グループと、B グループ、そして、C グループにおいて、「人権」の意味と意義は、おのずから、異なってくる。それは、A グループ内においても、「力」のあるものと、そうでないものにおいて、その「効力」は、異なるのである。いつも「人権」を創り出す「力」の「関係（史）」の存在があるのである。

いきなりで、唐突の感があるのは否めないことだが、私は、この「ビジネス・モデル」は、場所と形を変えながらも、まさに、福沢のいう「文明―半開―野蛮」の「関係」を創り出す「世界」においては、「自然」の「仕組み」であると、いわざるをえないのである。「大手」企業は、どのようにして、「大手」たる存在になり得るのであろうか。それは、まさに、「覇権国」が創り出される「仕組み」

と、ある面、類似している。内田のいう「収奪される若者たち」とは、まさに「遠隔地」として位置した存在ではなかろうか。「文明」とか、「覇権国」の歩みを、鑑みるとき、あるいは、そこに暮らす人々は、「遠隔地」としての役割を担わざるをえない「存在」に対して、どれほどの、「疾しさ」を、「感じていた」のであろうか。また、たとえ、それを感じたとして、どれほどのことができたのであろうか。ここで、私たちが、やはり、問わなければならないのは、そうした「疾しさ」を感じるか否かに関係なく、このような「差別」や「排除」を、生きていくためには、多少なりとも必要であり、仕方のないことだと、各人に、思い込ませ、納得させてきた、そうした「仕組み」が、なぜ、また、どのようにして、創り出されてきたのか、そうした問いではなかろうか。私が、これまで、あの［セカイ］の、形成と、発展、そして、その変容、という「歴史（関係史）」について、論究してきたのは、まさに、ここに関わるのである。

赤木は、こうした福田の態度にこそ信頼を寄せるのではなかろうか。残念なことだが、中村らの論では答えられないのである。これについてはまた後にふれることを断わった上で、次に移ろう。

誤解のないように言っておくならば、あくまでもこれは「頭の世界」の話である。この種の議論をするために、「私的所有権」や「財産権」を放棄しろとか、それを手放さないでこの種の議論をする資格はない、などと私はいうつもりはない。もしそうであれば、私もこの議論には加われない。そんな話ではない。最初から、「市民的自由」を「物差し」として採用していれば、この手の問題には答えられないということを述べているだけである。残念なことに、「市民的自由」を、少し放り投げることによって、なにか別の「物差し」を持って議論しようとする試みは、これまで成功してきたとは思われない。後にふれるように、せいぜい、田母神論文のようなとても「物差し」としては採用できないものがみられるだけである。しかしだからといって、「市民的自由」を「所与の前提」としてしまったのでは、何のために、冒頭に福田氏の「世界史」についての話を持ってきたのかということになってしまう。厄介ではあるが、ここは暫く踏ん張ることが大事である。

これまで述べてきたことを少しここでまとめてみたい。福田の『魂の昭和史』は、「おもんばかる」とか「感じるとか」の表現に端的に示されているように、「パックス・ブリタニカ」、「パックス・アメリカーナ」の「パックス」であるとか、そこでの「経済発展」なり「民主主義の発展」の歩みに見い出される「差別」であると、「排除」といった問題それ自体を、問い質すものではない。福田自身は、ど

の時代であれ、どのような「体制」であれそうした問題はつきものであり、たとえそれが分かったとしてもそれを別のものへと変えていくなどというのは、まさに「百年河清を待つ」かのようだと見ている節がある。もちろん、私はこれまで、福田と異なり、そうした問題を究明したり、処方箋はないかと思案してきたが、そうするなかで、福田の見方をすべて否定することもできない自分に気づくようになったのである。もっとも、だからといって、社会科学的観点から、問題の究明や考察を手控えることはできない。しかしそのように偉そうなことを言っても、赤木の論考にあった「結局、自己責任ですか」という問いかけに、正直、「頭ではそうではないといいながら、現実の生活においては、自己責任を当然とした暮らしを送ってきた」ことを否定できない。事実、社会科学の研究者が、論文を書いて、著書を発表して、職を手に入れるという最低条件をクリアできないとしたとき、もうそれは仕方のないことだ、と私は見ている。もちろん、世の中はどの時代も、「例外」があるし、「人生の運・不運」というものがある。しかしそれもまた仕方がない。とすれば、結局のところ、福田の見方の方が、私のように、理屈をこねまわすことよりも、未だ正直ではないかと思ってしまう。

4.「渾然とした・・・・問題」からほど遠い「論議」

こうした見方をとるとき、司馬が問おうとした「渾然とした―――」問題と向き合えることは決してない。司馬を批判した中村は、どうであろうか。司馬は「渾然とした――」問題を提起しながら、その問題と向き合うことをしなかったと指摘する中村の物言いは、私も同感するのだが、当の中村も、結局は司馬と同じように、そうした問題に向き合うことはなかった。それは、中村が、福田がみていた「パックス・ブリタニカ」や「パックス・アメリカーナ」という枠のなかで、「市民的自由」を結びつけて問い質せなかったというところに端的に表れている。そうした態度は、中村だけではない。加藤陽子や半藤一利においても然りである。彼らもまた、中村同様に、「パックス・ブリタニカ」や「パックス・アメリカーナ」の「パックス」や、そこでの「経済発展」、「民主主義の発展」の問題を、すなわち、司馬が問い質したかった「渾然とした―――」問題はそうした問題に答えるとき俎上に上ることとなるのだが、取り上げて論究してはいないのである。さらに、加藤や、半藤を批判している、西尾幹二に代表される論者らは、加藤や、半藤の論考が、国際環境、国際関係という大きな枠組みのなかで日本の近現代史を語っていないことから、あまりにも近視眼

的な見方となっていると批判する[84]のだが、その際彼らもまた、私が問い続けてきた、「覇権システム」とその「秩序」とそうした枠組みのなかで創り出されてきた「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（史）」と、それが抱え続ける「問題」に向き合うことはなかった。西尾が『国民の歴史』のなかで披歴している「自由」、民主主義」の積極的、無条件的な支持表明とその態度[85]は、結局は、西尾も「覇権システム」それ自体を問い質すものではないということを示している。そのことは逆に、「市民的自由」を「所与の前提」として「歴史」を語る加藤や半藤の「歴史観」とそれほどには隔たりはないということを物語っている。またここで少しわかりづらくなるのである。というのも、加藤や、半藤の「歴史観」は、福田がいう「世界史」の歩みを体現した「市民的自由」を「所与の（無条件的）前提」としていることから、彼らの枠組みは、欧米的な国際関係を前提としている。たとえ、彼らの語る日本の近現代史が、西尾らのいうように、日本にもっぱら限定されていると批判されても、その見方は正しくはない。日本を、日本人の歩みを、「市民的自由」の「拡大」という観点から語る以上、そこには欧米主導の「世界秩序」が組み込まれているのである。私はその欧米の「世界秩序」を、私のモデルで描くあの[セカイ]だとして捉えなおすことで、彼らの支持する「市民的自由」が、[A の民主主義の発展 $\overset{(\times)}{\rightarrow}$ B の民主主義の発展 $\overset{(\times)}{\rightarrow}$ C の民主主義の発展]という「関係」から創り出されるものであり、そうした「市民的自由」を「所与の前提」とすることは、結局のところ、あの[セカイ]の形成、発展とその変容を擁護してしまうと、批判的に考察してきたのである。そのことはまた、[A の経済発展 $\overset{(\times)}{\rightarrow}$ C の民主主義の発展]、[C の経済発展→A の民主主義の発展]の関係を容認することとなる。こうした眼でもって、日本の近現代史を語っていいのだろうか。語ってほしいだろうか。加藤や半藤の語る「歴史」は、私の[セカイ]を前提として語られる「歴史」にほかならないし、彼らを批判する西尾らの「歴史」もまた同様に、「市民的自由」の歩みを実現可能とした欧米主導の「国際秩序」の枠組みに依拠しながら、国際環境、国際関係を見ているという点では、まったく同じである。私は、「坂の上の雲」を目指す歩みが、私のあの[セカイ]を問い質すものであることを望むと同時に、それが明治期に行えたとはいえないし、それを望むのはあまりにも、天に唾する物言いだといわざるをえない。しかし、21 世紀の今、またしても「坂の上の雲」を目指す試みが、あの[セカイ]を強固にしていくものだとしたら、それはやはり問い質すことが必要だといわざるをえないのである。

ところでこれに関連して先に「司馬史観」、「中村史観」に対して、僭越にも、

私自身の「歴史」の見方を、「村田史観」などと述べてしまったが、もう少しここでそれについて開陳させてほしい。すでに拙著や拙稿において、私の近現代史の理解の仕方については、何度も何度も論じてきた。詳しい話はそれらの著作に譲るとして、ここでは論の流れに関わる最低限の話をするにとどめておきたい。簡単に言うならば、日本の近現代史の歩みを語る際、日清戦争、日露戦争に至るまでの歴史は、またもう少し先の第一次世界大戦と、ベルサイユ講和条約締結の前後の頃までの「歩み」は、私のモデルで描くとき、「Ⅰ期」の「段階」の「歴史」として位置付けられるものである。その「段階」の「歴史」の「特徴」は、[権威主義的性格の政治→経済発展]の図式で描かれるところに見出せる。忘れてならないことは、この「Ⅰ期」の「段階」の「歩み」は、私のモデルのあの[セカイ]のなかで、展開されるのである。「壁」の「厚い」、「薄い」あるいは「ボーダレスの状態」との関連でいうならば、この「Ⅰ期」の「段階」は、「ボーダレスの状態」からそれを「薄い」「壁」へ、そしてそこから少しでもできる限り「厚い」ものへと試みようとはするものの、なおまだかなりの時間を要する段階であると見ることができる。すでに「壁」を厚くすることに成功した「Ⅱ期」および「Ⅲ期」の「段階」を目指して邁進しているAグループや、Bグループの「上位」の国々が、彼らの諸国よりも低い「段階」にある国の「上昇」を、すなわち「坂の上の雲」を目指す試みを、妨害したり、阻止しようと試みるからである。

私はこのように「歴史」を理解しているので、たとえば福田のいうように、「第一次世界大戦によって、それまで日本人が信じてきたような帝国が支配するメジャー・リーグとしての国際社会はなくなってしまった」(86) とは見ることができない。なぜなら、「覇権国」を中心とした「覇権システム」は存続しており、その意味では、なお「覇権国が支配するメジャー・リーグの国際社会」は、すなわち、私のモデルのあの[セカイ]は、たとえその変容期を迎えていたとはいえ、すなわち、「パックス・ブリタニカ」から「パックス・アメリカーナ」へと覇権のバトンが移りかわろうとしていたのだが、それにもかかわらず、その[セカイ]の「関係」はなお確固としてその「歩み」を続けていた、そのように私は見ているのである。それゆえ、「日本の経済的自立を支えたリーグそのものが無くなってしまった」(87) とみる福田とは、「リーグ」のとらえ方が違っているのである。すでに上でも述べたように、「パックス・ブリタニカ」の「崩壊」が起こったとしても、そのことが直ちに「覇権システム」とその「秩序」の「崩壊」までも意味するものではないと、私は見ているからである。この点については、もう少し後でまた取り上げることにしたい。

ところで、「村田史観」にとって問題となるのは、中村が「歴史」の「物差し」と位置づける第一グループの「歩み」が、私のモデルの[セカイ]の「関係（史）」からも理解できるように、第二グループや第三グループに対して、もちろんそれは彼ら自身も免れないのではあるが、「構造的圧力（暴力）」を行使しつづけており、その「圧力」から逃れるために、第二グループは、第三グループに対して、第一グループが第二グループに対するのと同様に、「圧力」を行使しつづけようと試みるのである。この問題にこそ中村はまず目を向けるべきなのだが、そうした観点から論じることはない。それゆえ、中村の日本の近現代史の描き方は、ある程度、予想されるものとなる。たとえば、日露戦争を「祖国防衛戦争」とする司馬の見方に対して、中村は、旧ソ連の研究者ボリス・朴の「ロシアと挑戦」に依拠して語っている和田春樹に依拠して、「ロシアがダイレクトに日本に攻め込んでくる蓋然性は、それほど高くはなかった」とみながら、「したがって日本がとらなければ、ロシアが朝鮮をとっただろうという主張は、歴史的にみて正しくない」と述べている。[88] それゆえ、中村は、日露戦争を、「利益線」という観点から捉え、そこから日本の独立の確保という立論に向かう見方と、それに依拠した「日本の祖国防衛戦争であった」という主張を論難するのである。私はこうした中村の主張に対して、ある種の説得性を認めるのにやぶさかではないものの、しかし同時に、これまで何度も指摘してきたように、こうした議論の以前に、日本と日本人は私のモデルで描くあの[セカイ]のなかで、つねに「構造的圧力（暴力）」に直面しながら、その「存続」（独立）」の「危機」のなかにおかれ続けていたということを認めなければならないということである。もっとも、だからといって、日本やドイツやイタリア、あるいはロシアが、その「圧力」に抗するために、自分たちよりも弱い立場にあるものを植民地としたり、従属地としていいのかという「反論」があるならば、逆に問い直したいのである。それを認める、認めない以前に、その前に、第一グループがこれまで植民地、従属地を作り出しながら、彼らの「自己決定権」を、すなわち「自由」を、獲得したことに対して、どのような「立場」をとるのかを、まず示してほしいと。これについて、中村が最初に語ることにより、先の「反論」をするのならば、それこそ「フエア」な「対話」が行えると考えるのだが、いかがなものか。ここでも正直なところ、苦しさを禁じえない。なぜなら、中村の見方を批判することで、私は、「利益線」や「祖国防衛戦争」という見方に「軍配」を上げるつもりはない。しかし同時に、中村のような論の進め方にも、諸手を上げて支持するわけにもいかない。本当にややこしい、厄介な、一筋縄では決してすまないような問題が、日本の

近現代史の歩みにはまとわりついているのである。それゆえ、どうしても「帝国主義－自由―民権」の「渾然とした―」関係にある連立方程式、三次方程式を解かなければならないのである。それをしない限り、結局は、福田によって提示されたあの「世界史」の跳梁跋扈を許すことになるであろう。そのことは、「フエア」な批判を通して初めて可能となると思われる「司馬史観」に対する批判を、中途半端なものとしてしまうと同時に、中村のような「歴史観」を、相も変わらず、支配的なものとしてしまうこととなる。まさに、8 月の日本のマスコミの「日本の過去」を論じる右翼的な論調と、左翼的なそれとの対置に如実に反映されるものである。日本のマスコミはいまだかつて一度も、司馬遼太郎が提起した、司馬自身もそれには答えられなかった「問題」に対して、向き合うことはなかったのである。もっとも、それは、『昭和史』の論者も、また中村も例外ではないのだが。

第 4 章「あの戦争」へと至るなかの「日本」と「日本人」

1.「国際環境」の変化を読めない「日本」と「日本人」

それでは、私のモデルで描く「Ⅱ期」の「段階」について、それでは目を向けることにしよう。福田の『魂の昭和史』において、この時期に該当するのは、第一次世界大戦から 1930 年代そして「あの戦争」の敗北から 1950 年代中頃に至るまでのくだりである。ちなみに、日本は、1945 年 8 月 15 日、あるいは 9 月 2 日以前において、決して「Ⅲ期」の「段階」の「歴史」をたどることはなかったと見ていい。さらに、「Ⅱ期」の「段階」といっても、すなわち、「Ⅰ期」の[権威主義的政治→経済発展]の「段階」を経て、[経済発展→分厚い中間層の形成]の「段階」の前期、中期、後期に三区分される前期を、担うのがせいぜいのところであった。そして、またあの[セカイ]のなかでは、B グループに位置し続けたのである。「あの戦争」に至ることにより、日本と日本人の「坂の上の雲」を目指す歩みは、すなわち、あの[セカイ]の A グループへと「仲間入り（上昇）」をはたす歩みは、頓挫することを余儀なくされたのである。

それにしてもである。「開国」以降から「あの戦争」とその「敗北」に至るまで、日本と日本人はあの[セカイ]のなかでその存続をかけて悪戦苦闘の連続であった。絶えず A グループからの「構造的圧力（暴力）」に対処し続けてきたし、同時に C グループに対しても「構造的圧力（暴力）」を加え続けてきたのであった。そのことが、敗戦後の日本と日本人の位置を決定したということを、まずは確

認しておきたい。あの[セカイ]のなかで、もし仮に戦後もその[セカイ]が存続し続けるとしたならば、B グループと、そこでの日本の役割は、必要不可欠であったとみたほうがよい。何もそれは「冷戦」ということといきなり結びつくものではない。あの[セカイ]において、「パックス・ブリタニカ」の「崩壊」はだれの目にも明らかとなり、したがって、「ポスト・イギリス」をめぐる動きは加速していく。まさにその「歩み」が、「戦争」を導いたと見ることもできるだろうし、そうした観点から「あの戦争」を位置付けたほうが良い。原爆を二発も落とされ、「文明に対する罪」、「人道に対する罪」の名のもとに「東京裁判」で裁かれた日本が、戦後アメリカの庇護のもとに力をつけるに至るのは、まさにこの[セカイ]のなかで、戦前戦中と「日本」と「日本人」とが担い続けてきた「役割」に対する、次期覇権国たらんとしたアメリカ合衆国による「正当な評価」であった。もうそろそろ、「米ソ」、「西側陣営対東側陣営」そして、「冷戦」といった流れともっぱら結びつけて、戦後日本の現代史を語ることはやめた方が良いだろう。少なくとも私はそう見ている。それよりも、戦後形を変えて続いていくことになる、開国以降、日本が直面し続けた「経済発展」と「民主主義の発展」の「関係（史）」の含む「問題」に、すなわち司馬が提起した「渾然とした――問題」に対して、目を向けることが重要であると、私は見ている。

それではここからは、福田の著作の「5　昭和も始まり（1910 年代～20 年代末―世界秩序の変化に気づかなかった日本の悲運」のくだりを取り上げてみよう。その際、中村の「大正デモクラシー」観、そして加藤陽子の「市民的自由」観について、行論の都合上、紹介しておきたい。

福田は、「第 1 次大戦とは世界秩序の破壊だったんだ」において、以下のように論じている。ここでそのくだりを紹介する前に述べておきたいことがある。すでにふれたように、第一次世界大戦により、「パックス・ブリタニカ」の「崩壊」が導かれ、そこから福田がいうように「世界秩序」が「破壊」されたという状態がおきたとしても、そのことにより、私のモデルで描く「経済発展」と「民主主義の発展」の「関係（史）」の「歩み」（あの[セカイ]の歩み）までもが「破壊」されたとは決していえない、そう私は理解している。わかりやすくいうならば、たとえ表面的景観が破壊されたとしても、その「構造」それ自体の「破壊」へと導くものではなかったということである。たしかに「パックス・ブリタニカ」の基盤は弱体化していたとはいえ、また次の覇権国とそのリーダーシップがなお不在であったとしても、それを生み出したものは、まさにあの[セカイ]の形成と発展とその変容それ自体によってもたらされるものであったから

である。この点をしっかりと理解しておきたいのである。それを踏まえたうえで、それでは福田の見解に目を向けるとしよう。

福田は昭和の始まりをどこと考えるかというとき、第 1 次大戦後からとみている。第 1 次大戦により「18 世紀くらいから続いていた、ヨーロッパ大陸中心の世界秩序の破壊」が導かれそれによって、「日本が入っていたメジャー・リーグ、日本がそのなかでプレーしてきた列強の創っているリーグが壊れてしまった。列強同士が殺しあいをした果てに崩壊してしまった、というのが「第一次世界大戦」だったのだが、それにより「日本が、幕末から一生懸命適応し、そこで何とか生きのびようと思っていたゲームが、突然開催中止になってしまった。そのゲームをなんとかこなせるようになったと思ったら、帝国主義という名前のそのリーグが解散になって、これまでのゲームは禁止です、ということになった。」とある。(89) しかしここで忘れて欲しくないのは、だからといって福沢諭吉が『文明論之概略』で指摘した「文明―半開―野蛮」という「世界」が消失したわけではないし、「製物の国」と「産物の国」の「難病としての外国交際」が終わりになてしまったわけではない。長谷川三千子が指摘しているように、その関係そのものが「帝国主義」の関係であったのである。(90) さらに私のモデルの[セカイ]における、[A の経済発展→B の経済発展→C の経済発展]、あるいは、「A の民主主義の発展 $\xrightarrow{(\times)}$ B の民主主義の発展 $\xrightarrow{(\times)}$ C の民主主義の発展」の図式で描かれる「経済発展」と「民主主義の発展」における A、B、C の「関係」それ自体が、「帝国主義」の「関係」を物語っていたということを忘れてはならない。(91)

たしかに福田のいうように、幕末以降の日本が属していたメジャー・リーグとそのゲームとその規則が変わってしまったということは間違いではないが、それはあくまで「パックス・ブリタニカ」をもとにみている「世界」である。これに対して、私の描くように、歴代の覇権国を中心として創り出された「覇権システム」とその「秩序」を前提とする「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（史）」という観点から捉えるとき、福田の描く世界よりも、もう少し大きな[セカイ]が提示されることとなるのである。私はこの[セカイ]から、福田の「世界」を見てみることにする。福田は「日本がついに追いついたとき世界のルールが変わっていた」のくだりで、第 1 次世界大戦がイギリスのこれまでの圧倒的優位が無くなったことを示すとともに、「イギリスが支えていた世界秩序、つまり帝国主義のリーグが崩壊し始めた」と述べている。そのことが日本に対してあたえた意味は非常に大きかったことを以下のように指摘している。日本はイギリスを手本として見習いその指導のもとに、「イギリスがつくりあげた自由

貿易経済圏のなかで商売をさせてもらってきた」、と述べる。それゆえ、いきなりの変化に日本は対応することが難しかったとして、「頭の中も、帝国主義リーグのルールで固まっていた。だから気がついても、意識や発想の転換がきかなかったんだ。後発国の悲しみ、辛さ。そこのところを割り切らないで、感じてほしい。その割り切れなさから昭和は出発した。そして、イギリスを中心とする秩序の崩壊にうまく適応できなかったことが、戦前の日本の、最大の問題だ。」と論じるのである。(92) このくだりにも、日本がイギリスに「おんぶと抱っこ」をしてもらわないと生きていけないかのような福田の見方が色濃く投影されている。このような、日本の描き方で、はたしていいのだろうか。本当にこれでは一人で生きられそうもないかのような日本の見方になっていないだろうか。朝鮮半島の「青春」を仮にも奪うことができたのは、福田流にいうと、日本が「たくましく、力強かった」からでなないのか。私はそのように「感じる」のだが。イギリスなしにはやっていけないという見方は、逆に、「親分」であったイギリスが昔のように強くなくなったから、その親分の地位に代わりに就く、就けるかもしれないと考えられるのではないか。戦前の日本の歩みを見るとき、福田のいうように、「後ろ盾」であったイギリスがいなくなったことから「あの戦争」へと至るという「筋書き」の他に、もう一つ最低限、別の筋書きを準備しておく必要があるように、私には思われる。換言すれば、「パックス・ブリタニカ」の「枠組み」をもとにした「筋書き」とは異なる別の「筋書き」とそれが導かれる別の「枠組み」である。すでにそれについては指摘したように、日本は「開国」以降、私のモデルの［セカイ］に放り込まれ、そこでアップ、アップを繰り返しながらも、しっかりとこの［セカイ］の「ゲーム」とその「ルール」を習得していったのである。日本にとって、第一グループを目指す事が至上命題であり、覇権国のイギリスの力が弱体していくことは、たしかに福田の言うように、日本にとっては不利な面があったことは否めないものの、同時にそれは、この[セカイ]の変容をもたらし、それに乗じて日本が「上昇」をはたす「チャンス」を得たとも考えられた。もちろんそのことは、イギリス以外のＡグループによるＢグループに対する「構造的圧力（暴力）」に対して、日本がうまく対応することを求められていた。そのために、日本は、イギリスを含むＡグループ諸国と対立、敵対あるいは妥協を繰り返しながら、「交渉（外国交際）」をしていくことを迫られた。Ａグループの Ｃグループに対する「経済発展」と「民主主義の発展」の「関係」に割り込んでいかない限り、日本にとっての「上昇」は望み薄であったと見てよいだろう。しかもそこには、Ａグループの Ｂグループに対する「経

済発展」と「民主主義の発展」との「関係」とその「構造的圧力（暴力）」にうまく対処しつつ、抗していかなければならないといった前提条件があった。そのことは「日本」と「日本人」にとって、想像以上に困難な「壁」であったように、私には思われて仕方がない。福田のひそみに倣っていうならば、この[セカイ]・リーグと、そこでの「ゲーム」とその「規則」に、「日本」と「日本人」は適応できなかったのである。ここに、「左翼的」論者、「右翼的」論者は眼を向け、喧々諤々の議論を展開してこなければならなかったのではあるまいか。前者はあまりにも「狭い」、福田のいう「世界史」一辺倒の「教条的な論理」を前提としすぎるきらいがあり、また後者は、それに対抗するために、あまりにも「情に訴えすぎる」論の展開になっていたのではあるまいか。

さて福田の「日本が世界で初めて人種平等を主張したんだ」のくだりのなかに、すぐ上で述べたように、[セカイ]・リーグの「ゲーム」とその「規則」にうまく適応できない「日本」と「日本人」の姿を垣間見ることができる。福田は、ベルサイユ講和会議で人種平等を主張したことに対して、「日本も朝鮮や台湾を支配していたから、大威張りで人種平等を守っているといえない立場にあった。」と認めながらも「けれども、白人の支配する国際社会のなかで、有色人種がただ一つの主要国として入って、発言権があるときに、当時の日本人は名誉白人の座に甘んじるのではなく、すべての有色人種の権利を要求したんだ。世界で日本が初めて人種平等をとなえ、国際社会に認めさせようとした。このことは、僕たちが誇りに思ってよいことだ」(93) と論じるとき、これほど周りが見えていないとしたら、これはとても日本の先行きは暗いとしかいうしかない。日本に対するＣグループの態度は、中村の先の著作のネルーや孫文に見てとれる(94) だろうし、Ａ グループにしても、いまさらそんな恥ずかしいことを真顔で、しかも国際舞台において「だしぬけ」にいうとは信用ならない国として見られることは必至ではなかろうか。あまりにも、[セカイ]・リーグで生きる上での「見識」が無さ過ぎるのではないか。しかも、「人種平等」というとき、日本の主張は、第一グループに入って、西洋諸国と同様に、Ｃ グループの「黄色人種」に対する「差別」や「排除」の「関係」を「白人」と同様に、日本にももっと認めさせろという、あまりにも「見え見え」の主張であるからにほかならない。これでは、Ａ グループからの「不信」を買うことは避けられないし、Ｃ グループからも反発を食らうであろう。こうした事態を回避するために日本に残される道は、「強行突破」しか残されないような雲行きではないか。ところがである。こうした「空気」を当の福田も読めていないかのような次のくだりである。人種

平等規約が否決されたのを受けて、「それからの日本の進んだ道を考えてみれば、このことが日本人が、国際社会と協調しなくなった、反発していった一つの分かれ目になっていたと思う。――でも人種平等を認めない、ということは、いくら頑張ったって国際社会は白人のものだということだ。日本人はいつまでたっても黄色人種で、せいぜい名誉白人にしかなれないということを思いしらされた。だから、ベルサイユ会議は、とても大きな意味をもっている。」と指摘して、「中国での権益を主張するような、時代おくれの『帝国主義』を展開して、国際社会の顰蹙をかってしまった。にもかかわらず、日本が近代化をつうじて持ち続けていた理想を、初めて国際社会にたいして述べた。そしてそれが否定された。ベルサイユ会議から昭和史が始まるというのは、こういう理由だ。日本の欠落、増長、そして理想がないまぜになって、国際社会とぶつかった。」と、論を展開している。(95) ここには、さも日本が国際社会と「ぶつかった」背景に、「人種平等規約が否決」されたことが、あたかも大きな要因を占めていたかのような語り方となっている。これに対して、私は、まったく異なる見方をとっている。福田は、空気を読めていないのではない。よく読めている。たとえば、前の章の「近代のなかで初めて白人の国に、アジアの国が勝った」のくだりで以下のように語る。―――19 世紀、帝国主義の時代には、有色人種は白人には勝てないんじゃないか、というあきらめや思い込みが普通だった。――その思い込みを、日本が一掃した。――他民族を支配する、それは褒められたことではないに決まっている。しかし、日本人は、朝鮮半島をロシアや中国に渡すわけにはいかなかった。――といって植民地にすることは、欧米の真似みたいでうしろめたいから、泥棒みたいなことをした一方で、一生懸命近代化しようと努力をした。きちんと悪いことをするのでもなく、かといって従前に気高いこともできない日本人の情けなさ、辛さを感じてほしいと思う。(96) ―――付言すれば、「きちんと悪いことをするのではなく」は、余計な物言いではないか。そのことの判断は、支配されている他民族がするものである。さらに、「歴史」をいいとか、悪いとかで見てはいけないとは、福田の言ではなかったろうか。いずれにせよ、福田のこのくだりのなかに、見事に「日本」と「日本人」が、[セカイ]・リーグの「ゲーム」のなかで生き抜くことが大そう厄介なことが示されている。再度ここで指摘しておくならば、ベルサイユ講和会議での「人種平等」の「規約」を、福田の指摘しているような観点から、決議にかけようとしたのであれば、あまりにも稚拙な「外交」としか言いようがない。そして、それが否決されたことを、後に国際社会と「ぶつかった」要因だとしたなら、「日本」と「日本人」と

はあまりにもおめでたい「ユートピア」的存在だと見られても仕方があるまい。このような「ユートピア」的観点でもって、私のモデルのあの[セカイ]の「経済発展」と「民主主義の発展」との「共時態」的「関係（史）」から創り出される「構造的圧力（暴力）」を認識して、それに適応することは困難であった、という以外に他にはない。こんな状態を前にしては、とてもではないが、「悲劇」として、ただ「おもんばかる」ことはできないし、「歴史」を「感じる」こともできない。

2.「市民的自由」をどのように描けばいいのか

改めて、「市民的自由」なるものと真剣に向き合うことが、すなわち、第一グループの「民主主義の発展」の歩みと向き合うことが不可避ではないかと言いたくもなる。行論の都合上、ここで、「大正デモクラシー」とそれに関連した「市民的自由」についての見解を、中村政則と加藤陽子の著作に依拠しながら紹介しておきたい。

中村は先の著作、「第 3 章　近現代史をどう見るか」の「第 4 節　大正デモクラシーの歴史的意義」において、「大正デモクラシー」に関する二つの立場を紹介している。(97) ここに示されているように、ここでも司馬が問おうとしていた例の「渾然とした――」の問題と絡ませて、大正デモクラシーを捉えようとはしない。それは、第一グループの「民主主義の発展」の歩みを、第二グループ、第三グループの「経済発展」と「民主主義の発展」並びに第一グループの「経済発展」との「関係（史）」から創り出された「民主主義の発展」として位置づけ捉えられないのと同様に、日本の「大正デモクラシー」として描かれる「民主主義の発展」の歩みを、第一グループ、第三グループ、そして日本を除く第二グループの、各々の「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（史）」といった観点から位置づけ捉えることができないのと同じ立場を示している。中村の「民主主義の発展」の歩みを、私のモデルで描くあの[セカイ]から、勝手に恣意的にその「民主主義の発展」の「歴史」だけを取り出して、比較することは、「民主主義」の歩みのなかに「宿阿」として根付いてきた問題にメスを入れることはできないままである。

それゆえ、中村の「大正デモクラシー」観は、以下のようにただ言及されるだけで終わってしまう。―――私の考えでは、大正デモクラシー期は、それまでの「動かない民衆」が「動く民衆」に変わっていく時代であった。拙著『労働者と農民』では、第一次大戦後の「目覚めゆく女工と坑夫」以下の章で、いかにして「動かない民衆」が「動く民衆」「立ち上がる民衆」に変貌していくかを女工・坑夫・農民からの聞き書きを多用して描いてみた。「私のねらいは、今までだれ

からも注目されず、歴史の忘却のかなたに放逐されていた無名の人々を、歴史の舞台にひきだし、その人たち自身のことばによって、民衆の歴史の豊かな可能性を語ってもらう」ことであった。(98) ———と。中村は、これに続けて、「これを書くことによって、私は『民衆が歴史をつくる』という実感をたしかな手ごたえをもってつかむことができたように思う」と述べるにとどまっている。(99) どこを探しても、「大正デモクラシー」を、司馬が問題提起したように、「帝国」とむすびつけて問い直そうという視点なり、視角は出てこない。すぐわかるように、日本が「大正デモクラシー」と呼ばれる時期は、「大日本帝国」と呼ばれた時代であった。それを踏まえるならば、A・ゴードンが揶揄したように、「インペリアル・デモクラシー」といった観点から攻めて考察することを試みても良かったのではなかろうか。日本において、「動かない民衆」が「動く民衆」、「立ち上がる民衆」へと変貌していく歩みと「帝国」、「帝国主義」との「関係」にも眼を向けることがやはり必要ではなかったろうか。小松裕『「いのち」と帝国日本』(小学館、2009 年)、「第 2 章「いのち」とデモクラシー」、のなかの「さまざまな烽火」に次のようなくだりがある。———ロシア革命やコメ騒動などを契機とする「デモクラシー状況」は、それまでいのちと人権を抑圧されてきた広範な人びとを、みずからの権利をみずからの手で獲得し擁護していこうとする「自決権」運動に立ち上がらせることになった。———(158 頁)ここにいわれている、「デモクラシー状況」を、「歴史の大きな流れ」のなかで、捉えなおすとき、どのような「デモクラシー」を、「日本」と「日本人」は、獲得、擁護しようとしていたかを、理解することができるのではあるまいか。すなわち、このくだりにある「いのちと人権を抑圧されてきた広範な人びと」と、そうした人びとの「自決権」運動に立ち上がる歩みを、日本と中国、日本と朝鮮、朝鮮と中国といった「日・中・朝関係史」の「共時態」的歩みのなかで、再度位置づけ、捉えなおすとき、日本の、そうした人々の「自決権」運動は、どのように、描かれるのだろうか。

とくに、ここで留意してほしいのは、日本の「抑圧されていた人びと」と、そうした人びとの「自決権」運動と、朝鮮における「抑圧されていた人びと」と、そうした朝鮮の人びとの「自決権」運動とは、一体どのような「関係(史)」の存在として、結び付けられているのか、という点である。付言すれば、そこに、中国における「抑圧されていた人びと」と、そうした中国の人びとの「自決権」運動とが、さらには、当時のいわゆる「列強」を構成したイギリス、フランス、アメリカ、あるいは、ロシア、プロシア、イタリア等における、「抑圧

されていた人びと」と、そうした諸国における人びとの「自決権」運動も、そうした「関係（史）」のなかに結び付けられているが、ここでは、行論の都合上、朝鮮を取り上げて、論じていることを、断わっておきたい。

こうした点を踏まえて、日本のコメ騒動以後の、抑圧された人びとと、彼らの「自決権」運動は、まずは、彼らの「生存」を図る為に、すなわち、彼らの「いのち」と「人権」の維持のためにも、朝鮮からの、コメの輸入が必要不可欠なものとなっていく。こうした事情については、升味準之輔『東アジアと日本』（東京大学出版会、1993 年）に、詳しく述べられている。日本の朝鮮に対する植民地支配の深まりにともない、日本人による土地の集積、大量にコメを買い付け、日本に送り込む、そのことにより、朝鮮では、人々は、粟を食べるようになる、などなどに事態が進行していく。とりわけ、注意したいのは、「日本」と「日本人」は、1910 年の韓国併合により、総督府を設置し、「朝鮮の本格的開発に着手」していくのだが、そうした流れにおいて、「土地私有権」を確定するのである。(100)

付言すれば、A・ゴードンは、第一グループの「民主主義の歩み」を「インペリアル・デモクラシー」という観点から見てはいない。(101) すなわち、私のモデルで描くあの[セカイ]のなかで、第一グループの「民主主義の発展」の歩みが創り出されたとは見ていない。その点では、中村と同じ観点に立っている。それは、『昭和史』の論者をはじめ、日本の社会科学の研究者においても、同様な見方に立っていると見ていいだろう。すなわち、彼らは、「植民地・帝国主義」の歩みというものがあり、また「自由・民主主義」の歩みがあり、さらに「民族主義」の歩みがあると、それぞれ切り離して、各々の「歴史」を位置づけ、理解してきたのである。(102) それらの「歴史」が「渾然とした―――」関係という視点や視角をはじめから持つことを拒否していたといっても過言ではない。とくに、それは第一グループの「歴史」に関してはなおのことそうである。だからこそ、A・ゴードンに代表されるように、第二グループの日本の「民主主義の発展」の歩みは、「植民地・帝国主義」の歩みとむすびつけて論じていたのである。

ところで、それでは次に、加藤陽子の「市民的自由」観について、見てみよう。加藤は、先の著作において、加藤自身でそれについて語る代わりに、岡義武に依拠しながら、日本における「市民的自由」について、以下のように述べている。「民権論者は世界をどう見ていたのか」の「まずは国の独立が大事」のくだりにおいて、「国会開設をこれだけ待ち望んでいるはずの民権派であっても、やはり先に条約改正だという。不平等条約を押し付けられて、国の主権が侵害されて

いる、主権をどう取り戻そうかと考えたときに、―――日本人があれほど考えたのは、国家の独立ということについて独特の強い気持ちをもっている人たちが、民権派のなかでも多かったのだろうということがわかる。」(103) と指摘しているが、ここでも不思議なのは、［独特の強い気持ち］というこだわりを一方で示しながら、他方において、当然のことを問おうとしていないのである。なぜ、日本が「不平等条約を押し付けられて、国の主権が侵害されている」ような状態に置かれていたかについて、とくに、「民権」を重視して国造りをしてきた第一グループによって、なぜ日本がこうした状態におかれたのかという、まさに日本の近現代史における「大問題」だと思うのだが、簡単に通り過ぎてしまうのである。

続くくだりを紹介する。―――吉野作造という人物がいますね。東京帝国大学法学部の教授で、大正デモクラシーの理念的基礎をつくった人です。――その吉野のお弟子さんで、やはり東京帝国大学法学部の教授であった岡義武という先生がいました。―さて、この先生は第 2 次世界大戦の前、1936-38 年、ヨーロッパ留学に旅立ちました。そこで、イギリス側の外交資料を見る。そのとき、先生は日本の民権派の自由民権思想と、ヨーロッパの、ルソー以来のデモクラシーの理論を比較し、ある違いに気づきました。日本の民権派の考え方は、どうも個人主義や自由主義などについての理解が薄いように思われる。この点はヨーロッパとは非常に違っている、こう気づきます。――岡先生は吉野作造の二代目をついだ知識人です。その人が、ちょうど日本が日中戦争に突入する前後をはさんで論文を書く。また、第二次世界大戦が始まる直前に論文を書く。どうして日本においては、民権派の考えのなかに、個人主義的、自由主義的思想が弱いのか、「国家の独立がなければ個人の独立なし」ではないですが、どうも明治の初めから、民権派は国権を優先していたような気がする、と岡先生は気づいたのでしょう。国家か個人かといったとき、自由主義的バックボーンがないと、時代状況によって、人々は、国家のなすことすべてを是認してしまうのではないか。確実に近づいてくる戦争の足音を聞きながら、岡先生としては、日本人はどうすれば良かったのか、深く悩み考えていたに違いありません。――――と論じる。(104)

このくだりで岡が述べていることは、冒頭の丸山の議論と類似している。この手の論で、そこで紹介した東ティモールの「国権」重視の政治姿勢を論難されたのではたまったものではない。付言すると、加藤は、岡について、イギリスと日本の外交を一次資料を使って、初めて、比較研修したと紹介しているが、

ここで私が問うている問題は、一次資料をいくら使いこなしても解けない類の問題であるということを、加藤は皮肉にも読者に示している。始めから、加藤には、なぜ明治期の「民権派」が「国権的姿勢」を重視するかといった、「民権」と「国権」の関係に関する枠組みが自らの手に用意されていないのである。(105) これに関して、私のモデルは、なぜ「開国」以降の日本において、「国権」の要素が重視されるかを描いている。これにたいして、加藤は、ただ、岡に従って、状況を述べるだけである。このような観点から明治期の「民主主義の発展」の歩みを語るとき、最初から話の方向性はわかりすぎるほどわかってしまう。加藤は以下のように言及している。―――日本の場合、不平等条約のもとで明治国家をスタートさせましたから、自由だ民主だとの理想という前に、まずは国権の確立だ、という合理主義が全面に出てしまう、そのような見通しをまずはお話ししました。(106) ―――このようにまとめるのだが、こうした見方は、許されないといわざるをえないのである。不平等条約を押し付けたイギリスの、あるいはフランスやアメリカの、ここではイギリスを例に取り上げるのが論の流れとしては妥当と思われるが、「民権」と「国権」の関係は、日本との関係において、どのように理解されるだろうか。とくに、イギリスの「民権」と「帝国主義」との関係は十分に論究される必要があるだろう。これも冒頭のモデルで示したように、「壁」の「厚い」国家と、「薄い」国家、さらには「壁」がつくれない、それをつくることを許されないボーダレスな状態に置かれている、たとえばイギリスの支配のもとにあるインドやアイルランドにおいて、もし加藤のいうように、「壁」をつくることを重視する「国権の確立」がただ単に「合理主義が全面に出てしまう」という観点から考察してしまっては、「あなたは、本当にそれでも日本の近現代史研究者ですか」と疑いたくなるのも仕方がないではないか。私のモデルのあの[セカイ]のなかで生きるために、日本が「合理主義」的行動に訴えたと理解できていたならば、もう少し、「民権」と「国権」の両者の関係に関する論究がなされていたであろう。もっとも、ここにこそ加藤の見方が如実に反映されているといわなければならない。いずれにせよ、加藤においても、司馬が問い質したかったあの「渾然とした―――」問題は視野の外に置かれていることだけは確かというほかにない。

3.「満州国」のなかの「日本」と「日本人」

それでは、ここで福田の著作にもどることとしよう。「6　満州国とは何か（1930 年代初頭）－独自の道を歩み始めた日本と、西欧の鋭い対立」のくだりに

は多くの重要な論点が提起されている。先ずは、この見出しのある「独自の道」を本当に日本は歩み始めたのだろうか。私は決してそのように理解していない。むしろ、西欧と同様に、私のモデルのあの[セカイ]のなかで、第二グループとしてのBから、第一グループであるAへと「上昇」を試みていたこと、そのために、「Ⅰ期」の「段階」から「Ⅱ期」の「段階」へと移行するために、西欧諸国と同じように、「自己決定権」の拡大のために、奮闘していたと見ている。そうした「自己決定権」の拡大なしに、国家の存続が許されるような状態でもなかったし、同時に、そのために「自己決定権」の拡大を目指すならば、「差別」と「排除」を作り出すことは必至であった。そうした仕組みを作り出す「経済発展」と「民主主義の発展」の「関係（史）」こそが、何よりもまずは批判の俎上に載せられるべきではあったのだが、果たして福田はどこまでそうした課題に応えていたであろうか。こうした観点から、福田の「なぜ日本は満州国をつくったのか」「満州は近代になって開かれた国際的フロンティアだったんだ」「日本は満州に一種の合衆国をつくろうとした」「満州に独自の空間をつくろうとしたとき西欧との鋭い対立が始まった」「単純に侵略だったと切ってしまうわけにはいかない」「満州国がなければ今の君たちの豊かさもなかったんだよ」のくだり(107)を見ていこう。最後の「満州国がなければ今の――」のくだりは、私のモデルの[セカイ]を使っていい直すとき、今の君たちの豊かさは、その[セカイ]を支持し、Aグループへと「上昇」することに首尾よく成功したからなんだよ、となる。そして、戦前にはそれができなかったんだ、残念だったと。こうした論の展開からは、当然ながら、その[セカイ]の「経済発展」と「民主主義の発展」の「関係（史）」の抱えてきた「問題」は不問に付されてしまうこととなる。司馬の「渾然とした――」問題に向き合うこともできなくなってしまう。福田のいう「満州国」とは、私のモデルで描くあの[セカイ]の「ミニチュア」にほかならない。その意味では、「満州国」を日本の近現代史の途上で必要とさせる、あの[セカイ]とそのなかで形成発展、変容を見てきた「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（史）」を問題として批判的考察を行なわない限り、21世紀においても、第2、第3の「満州国」がつくりだされてくる仕組みに抗することは容易ではない。第二グループによる「満州国」建設は否定、非難されても、第一グループの手による「満州国」建設は非難、批判されないのではないか。まさにガルトゥングのいう「暴力」の問題に関わる。

福田は、「満州に独自の空間―――」のなかで、「満州という国をつくることによって、日本は経済的に、あるいは政治的に生きていける道を探そうとした。

つまりそれまで西欧の大国がつくる国際秩序に頼って、そのなかで生きていこうとしていた道から、完全に踏み出してしまったことになる。西欧の道ではなく、自分たちで新しい空間をつくり、そのなかで生きていこうとした。ようするに、それまで、適応という受け身の姿勢で国際社会に対してきた日本が、突然、建設という形で、独自の道を歩きだしたわけだ。だから満州国は、当然、白人中心の国際社会の反撃を買った。」(108) のくだりからみていこう。福田はここで、「西欧の大国がつくる国際秩序」から日本が離れて独自の道を選択したというのだが、私はこの見方には懐疑的である。というのも、ここでいわれている「西欧の大国がつくる国際秩序」とは、私のモデルで描くあの[セカイ]をさしているからである。たとえ、国際連盟を脱退しようと、あるいは、満州国をつくろうとも、それらによって、「日本」と「日本人」がその[セカイ]から抜け出せたことにはならない。むしろ逆に、私は、あの[セカイ]のなかで、日本が生き抜いていくために、そして第二グループのBから第一グループのAへと「上昇」するために、国際連盟を脱退し、満州国をつくったと捉え、理解している。それゆえ、「日本」と「日本人」は、たとえ国際連盟を脱退して満州国をつくったとしても、なおあの[セカイ]で生きていくことは十分にできたと見ている。すなわち、イギリス、アメリカ、フランス、オランダなどの歴代覇権国あるいはナンバー2の大国からなる第一グループとの「外国交際」を続けていく余地は十分とはいわないものの、残していたことまでも否定することはできない。第一グループにとって、彼らが「主導」する、あの[セカイ]の「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（史）」の「平和」と「安定」とが壊されない限りは、十分に「交渉の余地」は見いだされたと思われるからである。事実、その後の紆余曲折した歩みのなかで、いくらでも「チャンス」があったことは否定できないだろう。(109) もちろん、このようにいうこと自体、あの[セカイ]の「差別」と「排除」の「関係（史）」を肯定することになるのだが。それゆえ、ここでもまた厄介な問題が立ちはだかっていることに気がつく。つまり、福田も言及しているように、今日の地点から、あのときに戦争を止めていれば、妥協して引いていれば、という理屈はいくらでも出てくるだろう。しかし、その際、そうした議論は、あの[セカイ]の「差別」と「排除」の抱える問題に、どの程度かかわっているかという観点からも見直される必要があるだろう。もう少し踏み込んでいうならば、「あの戦争」に関して、それを「無謀」であったかどうかをめぐる論争が繰り返される(110) のだが、その際、多くの論者は、ここで私が問題としているあの[セカイ]の「差別」と「排除」の創り出す「構造的圧力（暴力）」の問題と、結び付けて論究することを避けている。

皮肉を込めていえば、彼らは、「渾然とした———」問題に対して積極果敢に掘り下げる「無謀な研究」を、回避し続けているようである。

もう一度先の問題にもどるとしよう。日本が満州国をつくろうとした試みにより、「欧米との鋭い対立が始まった」とは、私はすぐさま考えられない。欧米主導の枠のなかで、彼らが想定する範囲のなかで、あの[セカイ]の歩みとその「平和」と「安定」が壊されない限り、イギリス、アメリカにとって、日本の行動は、それほど容認できないものではなかったと思われる。第 1 次世界大戦から第 2 次世界大戦の始まるまでの期間は、まさにイギリスからアメリカへと覇権のバトンが引き渡されていく時期であったと私はみている。(111) イギリスとアメリカによる「覇権連合」が形成され、彼らの「共同管理」のもとで、「パックス・ブリタニカ」から、次の「パックス・アメリカーナ」へと交代させていく「シナリオ」が妨害されない限り、日本が「西欧との鋭い対立」を回避できたと私は理解している。問題は、日本がその「シナリオ」を理解できずに行動してしまったということなのである。単刀直入にいえば、第二グループに甘んじて行動し続けることができていればよかったということになる。すなわち、[A の経済発展→B の経済発展]、[A の民主主義の発展 $\xrightarrow{(\times)}$ B の民主主義の発展] の「関係」を超えることのないように、踏み越えないように、自重しておけばよかったのである。だが、ここでもまた先に提起した、別の厄介極りない問題は残ったままである。いわゆるあの[セカイ]の「差別」と「排除」の「関係（史）」の問題である。それゆえ、私は、福田がいうように、満州国建国に向けて「満州事変」の挙にでたということが、「西欧の秩序からはみ出すという」こととはみていないし、また、そのはみ出すことが、「日本が自分の歩く道を見つける挑戦」の試みとしても、捉えていない。福田がいうように、それゆえ、「日本が、建国をして、新しい政治・経済空間をつくるという構想をもったことが、欧米には許せなかった」という指摘に、すぐさま同意することはできないのである。

ところで、そもそも、「なぜ日本は満州国をつくったのか」。まさにこの小見出しのくだりで、福田は、次のように述べている。———明治までの日本は、イギリスを手本として、その後を追いかけていた。「日本が課せられた条件は厳しかったけれども、一応安定している自由な経済圏があって、そのなかでルールに則って帝国主義のゲームをしていればよかった。このルールに適応することで日本は、近代国家として成長していったんだと。」と切り出している。(112) ところが、そのイギリスの力が衰え、そこに大不況がおきたことから世界経済は大打撃を受け、その対応のために、イギリス、アメリカ、オランダ、フランス

などの諸国はブロック経済圏を「みんな争って自分の植民地や連邦とつくって」、自己の生き残りを図ることとなる。「これまでの、自由貿易を前提としたやり方では日本は生きていけない。それでは、どうしたらいいんだろうということを、いろいろ考えた。そのなかで出た一つの答えが満州国だった」と述べるのである。(113) このくだりにある「一応安定している自由な経済圏があって」、また「ルールに則って帝国主義のゲームをしていればよかった」、さらには「このルールに適応することで日本は、近代国家として成長していった」に見事に指摘されているように、福田は、私のモデルの[セカイ]の「差別」と「排除」の関係から、ここでも目を遠ざけているのだが、それを福田が理解できていないわけではない。むしろ良くわかった上で、こうした描き方をしている。私のいうように、「経済発展」と「民主主義の発展」の「関係（史）」に見出される「差別」と「排除」には踏み込まないで、日本が、こうした「閉鎖的世界」で何とか無事に生き抜ける方法が、満州国を建設していく以外にあっただろうかという観点から論を展開していく。私はこれに対して、その前に、まずはあの[セカイ]の A、B、C の「経済発展」の「関係」を福田のいうように、「一応安定している自由な経済圏」とみてしまったのであれば、C の人々はたまったものではないだろうと、素朴に「感じて」しまう。さらに「ルールに則って帝国主義のゲームを」と言い放つことで、福田は、第一グループの「自由主義」や「民主主義」の問題を、すなわち、私がモデルで描いてきた[A の民主主義の発展 $\xrightarrow{(\times)}$ B の民主主義の発展 $\xrightarrow{(\times)}$ C の民主主義の発展]、[A の民主主義の発展→B の経済発展→C の経済発展]に示される「関係（史）」に示される A の、すなわち、中村がいう第一グループの「民主主義の発展」や「市民的自由」の歩みにみられる問題を、中村や加藤、さらには半藤らと同様に、「告発」することはできなくなってしまう。もちろん、中村、加藤、半藤は、さらには、西尾幹二でさえ、「告発」しようなどとは露ほども思わないであろうが。

「満州国がなければ今の君たち———」のくだりで福田は、戦後の日本の経済発展とそれにより享受された豊かさを、まさに「1940 年体制」論を彷彿とさせるように、戦前の満州国における「蓄積」とむすびつけて語っている。すなわち、———たとえば、戦後の日本の経済発展を考えた場合、短期間での復興と発展が可能になった大きなポイントとして満州国での蓄積があげられるんだね。満州という国を短期間で発展させるための、官民が一体になった経済運営の実験が、戦後の日本で、より大規模に生かされたわけだ。だから、満州国なしには、戦後日本の繁栄もありえなかったと云わざるをえないし、そう考えれば、今君

たちが享受している経済的豊かさも、満州国の恩恵であると云わざるをえない。だから、満州事変がいいとか、悪いといって、裁く前に、簡単には否定できない事件であることを、忘れないでほしい。(114) ———ここで考えなければならないことは、たとえ福田のいうように、満州国での日本の「蓄積」があったとしても、直ちにそれをもちだして、戦後の日本の経済的繁栄に結び付けて語るのは、やはり相当に無理があるだろう。その「蓄積」があったとしても、それを生かせる「舞台」がもしなければ、それはどうしようもなかったのではなかろうか。つまり、そうした「蓄積」を受けいれる「受け皿」の存在である。それをまずは前提として戦後の日本を語ることが必要ではないだろうか。これについては、A・ゴードン編『世界システムのなかの日本』所収の論文にも示されるように、戦後において、覇権国の地位を確保したアメリカ合衆国の存在と、それを中心として、その形成と発展と変容を見た「覇権システム」の構造抜きには語れないであろう。(115) それは、また私のモデルで描くあの[セカイ]の存在である。日本はそのアメリカに「あの戦争」の敗北後に占領統治されたが、そのことが戦後の日本の歩みに大きな影響を及ぼすところとなったのである。この事実がまずは、最初に来なければならないだろう。戦後の日本の経済的繁栄は、戦前とは異なり、日本があの[セカイ]のなかで、アメリカのいうことを「謙虚に」受け入れ、生きてきたことによる。もっとも、戦後日本の経済的成功は、その意味において、あの[セカイ]の「差別」と「排除」の「関係（史）」を受容したことを同時に意味していることから、諸手を上げて喜べるようなものでもない。しかしそうした「差別」や「排除」の「関係（史）」に向き合い、世界にその非を問いつつ、その代わりうる「理想像」を提示することもできないし、その力も有していない。できることならば、「二度と同じ過ちを繰り返さない」と誓ったのだから、あの[セカイ]のなかに再び組み込まれることはごめんこうむりたいのだが、敗戦により占領下に置かれることによって、また組み込まれることとなったのである。戦後の日本のすべてはここから始まったことを銘記しておかねばならない。さらに、覇権国アメリカの日本に対する「てこ入れ」があった。これも忘れてはならない。

4.「あの戦争」へと至る「日本」と「日本人」

それでは福田の「8　大東亜戦争とは何か（1930 年代後半～45 年）——勝ち目のない戦争に進まざるをえなかった悲しさ」のくだりを見ていこう。ここは『魂の昭和史』のなかでも、とくに大事なところである。なぜ「あの戦争」へと「日本」と「日本人」が突き進んでいったのかについて、福田の「地声」が聞こえ

るところだからである。これに関連して、中村の著作の「第 5 節　大東亜戦争とアジア・太平洋戦争」や加藤陽子の著作にある「あの戦争をどう見るか」のくだりも関連させて紹介していきたい。いずれにしてもまさに大問題であり、そんなに簡単に答えられるものではないことだけは確かであるが、それを踏まえた上で、それでもやはりこの点だけは外せないだろうと思われる論点があるということに関しては、問題提起しておきたいのである。順序は逆になるが、加藤の著作のなかの「5 章　太平洋戦争」の「戦争拡大の理由」のなかの「南進の主観的理由」に次のくだりがある。―――ある国の国民性がどうだこうだというのは、少し怪しい。けれども、たしかに日本人には少しひがみっぽいところがある、いじけやすい（笑）。ソ連、アメリカ、イギリスが中国に援助しているのを見ると頭に血がのぼる。どうして、みんな中国だけ援助するのか、と。むろん、日本が戦争を仕掛けて、中国の対日政策を武力によって変えようとしたことからすべては始まっているわけですが、それは日本側には自覚されません。―――また、これと呼応する形で、「チャーチルのぼやき」には以下のように述べられています。―――ここまでのお話の表面だけを理解すると、なんだか、英米ソなどの国ぐにが中国を援助したから日中戦争は太平洋戦争に拡大してしまったといったような、非常に他律的な見方、つまり、他国が日本を経済的にも圧迫したから日本は戦争に追い込まれた、日本は戦争に巻き込まれたのだ、といった考え方に聞こえるかもしれません。しかしそれは違います。日本における国内政治の決定過程を見れば、あくまで日本の側の選択の結果だとわかるはずです。(116) ―――

これらのくだりで加藤が述べていることに対して、私は直ちに非難、批判することはできないと見ている。私はこれまでにも何度も紹介してきたように、「覇権システム」とその「秩序」をもとに「経済発展」と「民主主義の発展」の「関係（史）」モデルにあるあの[セカイ]から、A（第一グループ）、B（第二グループ）、C（第三グループ）の相互の「関係（史）」から、加藤の「歴史観」の背景となっている第一グループの「経済発展」と「民主主義の発展」の歩みを捉え直してきたので、加藤の歴史の見方に関しては批判的であるにもかかわらず、それでも、加藤のような見方を受容する何かが、私のなかにあるからである。この点も、私にとって、私自身興味を抱く、簡単に割り切れないと「感じてしまう」ところなのである。ただし、ここでの加藤の主張することは、また福田が「誰でも戦争が嫌なのになぜ戦争がおきてしまったのか」のなかで、次のいうように述べることとは、矛盾するものではないと見ていることにも関係しているだろう。す

なわち、———そういう意味では、大東亜戦争（第二次世界大戦）というのは、極めて日本的な事件としておこったわけだ。愚劣であるといえば愚劣だし、おこるべくしておこったしまったといえばそれまでだ。別の面からみれば、日本とヨーロッパとの対立、すなわち明治維新から、ベルサイユ講和会議、そして満州建国までの経過からみると、必然だったということもある。戦争にはいろんな要素があるから、一刀両断はできないけれど、この二つは重要だ。とにかく、このような大戦争を日本人がやった。日本が、アメリカ、イギリスといった近代西洋国家のご本尊ともいえる大国を向こうに回して戦争をした。戦争になったのは、政治の不健全さとか、指導部の誤りという部分もあったにしても、戦争をおこなったのは、日本人全体だった。——人間は、有史以来ずっと平和が尊いと思ってきたし、平和を望んできた。にもかかわらずやっぱりそれは破られてきた。それはなぜだろう。平和に暮らしていることを幸福だと思うような人たちばかりが生きている世界のなかで、なぜ戦争がおきるのか。ーまず、明治以来の近代の歴史と、ベルサイユ条約以来の日本の迷走とを絡めて考える必要がある。一九一九年のベルサイユ条約から、一九四一年までの二二年間に日本がいろいろ体験したこと、国際社会での孤立とか、あるいは経済的な行き詰まりとかいったようなことが全部重なっているわけだ。この経験のなかで、日本は西洋と対立するようになった。そして日本が自分たちが生きていく道をつくる上での壁としての西洋の姿が明らかになってきた。しかもそれらのヨーロッパ諸国は、多くの植民地をアジアにもって、アジアの富を収奪して贅沢に暮らしている。日本がアジアの植民地を解放するために戦争したという、美しいだけの物語、いわゆる聖戦史観を、今日僕たちは信じることはできない。けれども、日本人がなんとか自分たちの独立を守ろうとし努力して、その挙句に国際的な経済秩序から放り出されたときに、ヨーロッパ人たちが不正な植民地支配によって、のうのうと暮らしている光景がどうみえたのかということは理解できると思う。日本は正義のため、理想のためにだけ戦争をしたとはいえない。しかし植民地支配に対する怒りはあったわけだし、現実的に、アジアの国がほとんど植民地であるという状態は、日本の戦争によって崩された。[117] ———

アジアの植民地が日本の戦争で崩されたという見方に、私は正直賛成できない。そうした方向から、論を進めることをしたくはない。だが、ここで福田の言及している内容は、私のあの[セカイ]の歩みと重なるところがあることは、認めていい。加藤の見解は、私のあの[セカイ]を過小評価、あるいは、それと切り離して語られている傾向が顕著である。その理由は、もし私の[セカイ]を前提

として議論すれば、岡義武の「市民的自由」のくだりに示されていたように、「市民的自由」を擁護できなくなってしまうからである。当然のことながら、加藤の論は、こうした論の流れを避けようとするであろう。そのことは、加藤の論を皮相的な表面的なレベルにとどめてしまわざるをえない。たしかに、加藤のいうように、「他律的な見方」でもって、日本の行動をすべて正当化、合理化することはできないと、私もみている。しかし、同時に、問題はこの先にあるのではないだろうか、と考えざるをえない。日本は、欧米が「経済的にも政治的にも圧迫したから」戦争に訴えざるをえないとしても、それでは、第三グループのように、第一グループのイギリス、アメリカ、フランスの、そして第二グループの日本の「経済的政治的圧迫」に対して、日本のように「戦争」に訴えることもなく（訴えることができないまま）、そうした「圧迫」に対して「戦争」に訴えたとされる日本の「圧迫」におかれ続けているということに対して、同時に、そうした日本やドイツ、イタリアの「侵略」から第三グループを開放し、第一グループの「民主主義」を守ったという勢力が、そのために第三グループを「圧迫」し続けなければならなかったという「現実」に対して、目を向け続ける必要があるであろう。その際大切なことは、その「圧迫」を、もっぱら日本の「圧迫」と位置づけ、それと結び付けて、日本の「侵略（圧迫）」を批判の俎上に載せるのではなく、第一、第二グループの「圧迫（侵略）」と、また第三グループにおける「侵略（圧迫）」への対応に際しての第一、第二グループとの「交渉〈中国国民党と共産党のそれが代表的」を含めた問題に、目を向け続けておかねばならないと、私はみている。それを怠れば、「複雑な」様相を描いているようにもかかわらず、まさに「木を見て森を見ず」ということになってしまうからである。それゆえ、これまで何度も指摘したあの「渾然とした――」問題に向き合うことは決してないということを意味する。これまた悩ましい中途半端な議論とならざるをえない。

ここで少し視点を変えて、加藤の著作『それでも日本人は「戦争」を選んだ』のタイトルに、注目しながら、アメリカの対英植民地「独立」戦争を、取り上げて、『それでもアメリカ人は「戦争」を選んだ』と、加藤は、タイトルを、決めるだろうか。さらに、スペインからの「独立」戦争に訴えたオランダ（ホラント）の場合は、どのような、タイトルとなるのだろうか。さらに、また、そのオランダから、「独立」を目指して、「戦争」に訴えた、現在のインドネシアのアチェー自治区の場合は、どのようになるのだろうか。たしかに、「戦争」に訴えない「選択」もあるだろうし、訴えることのないままに、「抑圧」状態におかれ続けた共同

体は、多数、存在していた。しかし、ヨハン・ガルトゥングの「構造的暴力」の概念にしたがうとき、「戦争」vs.「平和」ではなく、「暴力」vs.「平和」と、考えられる。その場合、「戦争」を、意味する、「直接的暴力」よりも、「構造的暴力」、「文化的暴力」の存在が、またその存在を、どのように、取り扱えばいいかが、重要になってくる。加藤のように、「戦争」を「選んだ」、という「タイトル」となるとき、それでは、「それ以外」にいかなる「選択（肢）」が、存在したのか、という問いかけが許されない「雰囲気」になっている。とくに、「第 9 条」を、「直接的暴力」としての「戦争」の、対立概念として、もっぱら、「平和」を考える傾向の強い「日本人」のとっては、なおさら、そうである。それゆえ、「第 9 条」を、「構造的暴力」や「文化的暴力」の対立、対抗概念として、位置づけ、捉えなおすことのできる分析視角、枠組みが、日本人には、求められなければならない。そうでなければ、「産物の国」vs.「製物の国」の関係に示される「構造的暴力」の「関係」を、「暴力」として、すなわち、「平和」の対立概念にあるとして、理解できないであろう。またそうした、「関係」の恒常化が、「戦争」を選ばざるをえない、「戦争」に訴える大きな要因を構成していることに、思いを寄せることはできないであろう。当時の日本人が、「戦争」を「選んだ」背景として、私は、こうした「構造的暴力」、そしてそうした暴力の存在を正当化、肯定する「文化的暴力」の存在があったことを、否定できない。ところが、加藤のような論法でいくとき、それでは「戦争」以外に、何ができたかという問題に答えられなくなる。ましてや、「構造的暴力」、「文化的暴力」を押し付けている第一グループが、すなわち、その時代の先進国が、同時に、「市民的自由」、「人権」、『民主主義』、「平和」を、「普遍化」させていく「役割」を担っているとして、対内的、対外的に、認められていることから、相当に、厄介な問題とならざるをえない。と同時に、日常のレベルでは、それが「厄介な問題」だとは、けっして、認識されることがないから、さらに、複雑、厄介となってくる。「戦争」に訴えることによって、かろうじて、そうした「構造的暴力」や「文化的暴力」のいびつさが、垣間見られることがある。もちろん、そうした戦争が、すべて、その「いびつさ」を露呈させることに、「成功」するわけではない。多くの場合、それは、失敗する。「あの戦争」もまた、その代表的な例である。それほど、私のモデルで描く、あの[セカイ]を形成、発展させてきた、「覇権システム」とその「秩序」の「担い手」の「力」は、圧倒的だといわざるをえない。その力が、別言すれば、「力のバランス」が、揺らぐのは、あるいは、揺らいでいるように見えるのは、現在の覇権国から次の覇権国に「覇権のバトン」が、引き渡

される、一時期である。その場合においても、私のモデルの、あの[セカイ]の、全体的な「骨格」は、確固としているのだが。

それではこれに対して、中村はどのような立場に位置するものであろうか。先にもふれたように、中村は、「第５節　大東亜戦争とアジア太平洋戦争」において、中村の「戦争観」を開陳している。「戦争観は変容したか」のくだりで、上山春平の論考「大東亜戦争の思想的意義」に依拠しながら、アメリカ人の戦争観が「太平洋戦争」史観、ロシア人は「帝国主義戦争」史観、中国人のそれが「抗日戦争」史観とそれぞれ、一辺倒であるのに対して、日本人の「戦争観」について、「あの戦争を、これほど立体的に、これほど多元的な角度から反省する機会をもった国民が、ほかにあるだろうか」と論じる上山の見解を紹介している。(118) 中村同様に、私もこうした指摘に対してうなずくのだが、問題は「立体的」、「多元的」という際の［中身］である。中村が「戦争の複合的な性格をどうとらえるか」のくだり(119) において、『昭和史』の著者と同じような３つの「性格」をあげているが、これらが、はたして「立体的」、「多元的」な戦争観であるかと問われるならば、私の答えは、「否」である。「立体的」「複合的」な「戦争観」となるのは、司馬遼太郎の「渾然とした―――」問題に答えられる「枠組み」を備えた「戦争観」以外にはないと考えるからである。ところが、上山をはじめ、中村もそうだが、加藤や半藤らの「戦争観」は、西尾幹二らのも含めて、こうした論点に応えられるものではないと見ている。

ところで、中村の次のくだりに目を向ける前に、ここで少しこの問題と関連させて、「格差」問題における「自己決定権」と結びつけて論じてみたい。すでにこの問題については（後にふれるとして）赤木の論考を紹介しながら、指摘していたが、私はときどき自分でも不思議に思うことがある。なぜなら、これほどまでに、司馬の「渾然とした―――」問題にこだわりつづけ、また私のモデルで描くあの［セカイ］の「経済発展」と「民主主義の発展」の「関係（史）」という観点から、A グループ、B グループそして C グループにおける「自己決定権」の「争奪戦」とその問題点を究明しているのにもかかわらず、21 世紀に今日における「格差」社会のなかでの「自己決定権」の「争奪戦」に関してはなんと「冷淡」というか、「客観的」なのだろうと、「感じてしまう」のである。私のモデルで描くあの[セカイ]の「自己決定権」の「争奪戦」は、国家間の「戦争」においても、また各々の国家に生きる人々の日常の「種々のレベルの戦争」においても、ひとしく該当、適用するものである。(120) それにもかかわらず、「あの戦争」をめぐる「自己決定権」の「争奪戦」とそれに関わる問題については、

これまでの論の展開にも示されるように、侃侃諤々（カンカンガクガク）といった調子で論究してきたのに対して、同じ「自己決定権」の「争奪戦」をめぐる問題であると認めておきながら、「格差」社会をめぐる論争のなかで、赤木の論考にある「結局は自己責任ですか」という「応答」(121) に対して、私の反応が、あまりにも「冷淡」なのはどうしてなのかと、いまだに思案し続けている。おそらく、そこには、私自身が何らかの「区分け」をしているのだと見ている。「自己決定権」をめぐる「争奪戦」の人間の「関係（史）」といいながらも、どこかで「線引き」をしている結果であると見ている。(122) それをさせるものは何かと問題提起をしつつ、中村のくだりにもどるとしよう。

中村は「戦争の複合的な性格をどう見るか」において、中国研究者の竹内好の論考「戦争責任について」を紹介している。そこで、竹内が中国との日本の戦争は侵略戦争であったことから日本人は責任があるが、米英蘭との戦争は、対帝国主義戦争の側面がある（すなわち「持てる国」と「持たざる国」との帝国主義戦争）として、「日本人だけが一方的に責任を負ういわれはない」と述べているのを紹介している。(123) 同時に、哲学者の久野収の見解（「あの戦争にはファシズム陣営対民主主義陣営との戦争という性格があったのであって、竹内のような捉え方では日本の戦争責任を相対化し、薄めてしまうことになると言う」）を紹介しながら、「この問題は、現在も未解決の問題で、いまだに尾を引いている」と述べている。(124) しかし、ここのくだりもおかしいところである。「持てる国」と「持たざる国」と「ファシズム陣営」と「民主主義陣営」との「関係」くらいについては、やはり自問自答しておくべきではないのか。「帝国主義」により「持てる国」となる歩みと「民主主義」国になる歩みとは、どうつながるのか、あるいは、つながらないのか。竹内の見解に対する久野のような批判は、同時に私のモデルで描くあの[セカイ]の「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（史）」の問題を「相対化し、薄めてしまうことになると」、私はみるのである。またこの問題に関連して、中村が「侵略と解放の両義性」のくだりで、日本の戦争によりアジア植民地体制が崩壊したという点を強調して、そこから「あの戦争」をもっぱら「侵略戦争」といった観点からみるのは一面的であり、「解放戦争」としての側面をも同時に認めるべきではないかといった論を、取り上げている。そこからまた、この「侵略」か「解放」かの問題は、戦争の呼称に繋がるのだが、中村は、「司馬は太平洋戦争をどう見たか」のくだりで、司馬の見解と同意見だと述べている。司馬によれば、〈「大東亜共栄圏などとは、むろん美名です。」「あの戦争」は、多くの他民族に加害を与えました。領地をと

るつもりはなかったとはいえ、―――侵略戦争でした。」「あの戦争は結果として戦後の東南アジア諸国の独立の触媒をなした、と言われますが、たしかにそうであっても――真に植民地を解放するという聖者のような思想から出たものなら、まず朝鮮・台湾を解放していなければならないのです〉。このように中村は、司馬の理解と「ほとんど一致している」と論じている。(125) ここで司馬のくだりの「解放」という名の「侵略」という位置づけ方に対して、私も異論はない。しかし同時に、そのことでもって、問題が解決するわけでもない。さらにまた分からなくなってくる。なぜ、「解放」という名の「侵略」をし続けたのかということである。「解放」ではなく「侵略」だという批判がいくらそうであっても、それで問題が片付くのならば、簡単なのだが、それではなぜ、そうした「侵略」をしたのか、という問題には答えられていない。同時に、第一グループの「民主主義」国は、「自由」「民主主義」「平等」「人権」という名の「解放」という「侵略」をし続けてきた、と私はみているのだが、ここでもそれは何故かという問題が起こってくる。ここで、いきなり唐突の感を与えるかもしれないが、あれだけの「利益」を手にしながら、なぜ「トヨタ」は、非正規雇用の首を切り、彼らの「自己決定権」を奪い、それによって、彼らの「人権」を「侵略」し続けなければならないのか、という問題と重ね合わせてみてはどうだろうか。トヨタも対社会的には、第一グループと同じように、「ご立派な」うたい文句を発しているはずなのに、なぜこれほどまでにアカラサマに、労働者の「人権」を、彼らの家庭の「平和」を奪い続けるのだろうか。(126) その際、なぜ私は、「あの戦争」をめぐる「自己決定権」に対しては、「ああだ、こうだ」とあれこれの問題を考察してきたのに、なぜこのトヨタの〈人員整理〉に対しては、この程度の「常識」的な範囲の物言いで済ませてしまうのだろうか。そのことが、赤木のいう「結局は自己責任ですか」、という問いかけに「その通りです」、と答えるしかないことを示すことになると十二分に分かった上でも、それでもなおそう答えるとすれば、一体「あの戦争」をめぐる議論は、何のためになされてきたのだろうか。すぐさまいろいろな「応答」が浮かぶのも事実である。代表的なものとしては、「二度と戦争を繰り返さないため」「戦争によって尊い命の奪い合いをしないために」「平和を破壊しないために」という具合にである。しかし、その際、私たちは、今日の「格差」をめぐる議論のなかで、その規模や範囲は異なるものの、ある種の「戦争」を続けてきたのは確かではなかったかということに気がついたのではあるまいか。先ずは戦後の日本の経済発展のために、アメリカの占領政策のもとでその展開を見た「大三角地帯」構想とそ

の実現をふり返るならば、[127]「日本」と「日本人」はその舌の根も乾かないうちに、「戦争」へと「総動員」されていくのがわかる。（まるでこの「歩み」は、「開国」から明治維新、そして「富国強兵」へと至る歩みを彷彿とさせるのだが。）もちろん、今度の「戦争」は、「あの戦争」とは、一見したところ、表面的にはまったく異なるものである。それは、「日米合作」のもとに推進されるものであり、世界的な「民主主義」、「平和」、そして「繁栄」の実現に向けてという「お題目」のもとで展開されたのだから、「あの戦争」を引き合いに出す方がおかしいと見られるのは必至であろう。なにしろ、「日本国憲法」と「第九条」を手にしての「再出発」だから。しかし、「大三角地帯」構想とその実現の［踏み台］になる東アジアの韓国、台湾、また東南アジア諸国の人々は、たまったものではない。「あの戦争」において、「大東亜共栄圏」構想の名のもとに「踏み台」にされた韓国、台湾、そして東アジア地域、また何よりもあの「満州国」との「関係（史）」がすぐさま連想されるのはどうしてなのだろうか。[128] そこには、非常に類似した「関係」が見て取れるのではないか。「あの戦争」の後、すぐに「朝鮮戦争」、そして「ベトナム戦争」と続いたが、それは戦後のアジア諸国における「開発独裁政治」と同様に、この「大三角地帯」構想とその実現の「歩み」と見事に関係づけられていたと、私はみている。付言すれば、私のモデルで描くあの[セカイ]が戦前、戦中、そして戦後も「順調に」推移していくために、この「大三角地帯」構想とその実現に向けての歩みは、必要不可欠であったのである。

それでは、こうした問題意識のもとに、それでは、福田の著作の「9　占領は日本を変えたか（1945 年～51 年）――わかりやすい目標が生まれ、変な陽気さがあった」「10　高度経済成長（1951 年～60 年代）――経済発展が国民に一体感を与えた幸福な時代」「11　繁栄と新たな混迷（1960 年代後半～70 年代）――モノへの憧憬が終わりサブカルチャー時代が始まる」「12　平成時代について（1980 年代～現在）――冷戦の終焉、ふたたび日本の前提が崩れはじめた」「13　そして今（戦後の目標を超えて）――昭和と同じ道を歩まず、新しい構想を示せるか」のくだりを紹介していこう。

ここで私のこれまでの研究をもとに結論めいた論を少し開陳しておきたい。「二度と同じ過ちを繰り返さない」とは、どういうことなのか、私なりに考えてきたが、それは、私のモデルで描く「自己決定権」をめぐる「争奪戦」に関わる「経済発展」と「民主主義の発展」の「関係（史）」を、二度と繰り返さないということになる。ところがそのようなことがはたして可能だろうか。「衣食

足りて礼節を知る」ではないけれども、私たちの「衣食を足す」仕方は、戦前、戦中、そして戦後もそれほど変わるものではない。「商売」の仕方が変わったようには思われない。誰しも「利益」（儲け）を得るために、「当然」だと思われることに精を出す。「商売」は「慈善事業」ではない。たとえ相手の生活ができなくなることが分かっても同情で商いをすれば、今度は自分の生活の破壊となるかもしれない。それは、自分の生存を危うくするし、自分の家庭を崩壊させるかもわからない。もしそうなれば、家族の構成員の「人権」や「平和」を保証することは難しくなる。それがわかっているから、あるいは分かってくることから、誰しもこの「自己決定権」の「争奪戦」をめぐる「衣食足りて礼節を知る」ための「関係（史）」のなかで、必死に生きていかざるをえない。誰か自分を助けてくれるような「幸運」にでもめぐり合えれば話は別だが、相当に大変な世界であることだけは間違いない。こうした諸個人の「自己決定権」の「争奪戦」が積もり積もって、国家間の「自己決定権」の「争奪戦」へと形を変えていく。その際、重要なことは、あくまでその「単位」は、ここの個人レベルにおける「自己決定権」をめぐる「争奪戦」の「関係」であるという点である。私は、このように考えてきたことから、「戦後における日本人の誓い」は相当に「無理」をしている、あるいは、まったくの「ウソ」だと言わざるをえない。こう述べている私自身もこの「ウソ」の世界で生きていかざるをえない。私自身は、拙著や拙稿において、こうした「自己決定権」をめぐる「衣食足りて礼節を知る」ための「争奪戦」を、モデルを提示しながら、描いてきた。そこから少しでもそうした「争奪戦」を回避する、換言すれば、そうした「争奪戦」を作り出すあの[セカイ]から、一歩でも二歩でも、抜け出せるような「生き方」を目指すべきであると提言してきた。しかしその際、そうした提言にもかかわらず、私のモデルで描く[セカイ]から抜け出せない人々の存在にも気づいていたから、それははやり、「無責任」の誹りを免れないものであったのも確かであろう。それ以前に、私自身もそこから決して抜け出してもいないし、抜け出すことができないのだから、なおさらである。

しかし、もし本当に「二度と繰り返しません」との声を世界に向けて「発信」したいのであれば、私は、私がいうこと以外には、方法はないと考えている。これまで通りの「経済発展」と「民主主義の発展」の「関係（史）」のなかで生き続けていては、それは最初から無理だと言わざるをえない。しかし、これ以上にまた、厄介な問題がある。敗戦後の日米合作のもとでの「総動員体制」は、今度は形を変えながら、まだ今後も続きそうだからである。戦前、戦中の「総動員体制」

が、悲惨な結末を迎えたように、これから始まる、いやもうすでに始まっているのだが、「米中覇権連合」主導の「総動員体制」のもとに、「日本」と「日本人」は、がんじがらめの状態で、組み込まれてしまっているのである。私のモデルで描く、［B→C→A］（省略系）の[セカイ]の形成、発展とその変容に、大きく関わっているのである。二一世紀の「日本」と「日本人」はこの[セカイ]のなかで「衣食足りて礼節を知る」ような「生き方」を「強要」されているのである。「開国」と「敗戦」の時に、私のいうように、一歩でも、二歩でもあの[セカイ]から抜け出すことが可能であったろうか。それは望むべきもない。当時の「日本」と「日本人」の現状を考えてみれば。しかし、問題は、二一世紀の現在においても、もしそれが「望むべきもない」とすれば、私たちは、一体どのような「歴史」を歩んできたのだろうか。あの「高度経済成長」とは、「世界第二の経済大国」とは、「日米のイーコール・パートナー」とは、一体何であったのか。

第 5 章「占領」から「平成」へと至るなかの「日本」と「日本人」

1. アメリカの占領統括と戦後日本の「平和」と「繁栄」

少し前置きが長くなったが、それでは福田の議論を紹介していこう。「9　占領は———」のくだりにある「民主主義が入ってきたというよりもとに戻っただけのこと」において、———敗戦と同時に、日本は、民主主義になった、といわれている。前の日まで、「天皇陛下万歳」といっていた人たちが、つまり政治家や、新聞記者や、教師たちが、突然民主主義だ、自由だ、平等だというようなことをいいだした。これはとても情けないことだね。特に、新聞記者のように、戦争が終わる前と後で、ぜんぜんいうことが違うのは、とても恥ずかしい、人間として最低だと思われても仕方のないことだ。———のくだり(129) は、非常に大事な個所である。「カメレオン」的生き方(130) を端なくも露呈してしまった「日本」と「日本人」の象徴的な例である。私自身も、あの[セカイ]のなかで生き続けながら、福田氏のように、この種の「カメレオン」的人間を、「他人事」としては批判できない。福田がいうように、———こういう立派な新聞の記者さん達が、自分の会社のことは棚に挙げて、昔から戦争に反対していたようなことをいいながら、日本人は戦争への反省が足りないなんて主張するのはおかしなことだと思う。本当に恥ずかしいね。———である(131) ことは、その通りである、と私も同意する。それはそうなのだが、「この自分の会社のことは棚に上げて」のところを、私のモデルの「あの[セカイ]のことは棚に上げて」に、置き換えてみるとき、私自身が批判されているように思えるし、まさにそうだと見ている。まさに「五十歩百歩」である。だが、せめて、ジャーナリズムに生きる人には、もちろん社会科学に従事する人にはムロンノこととして、私のモデルのあの[セカイ]のなかで繰り返される「自己決定権」の「争奪戦」をめぐる「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（史）」には、眼を向けてほしいものである。

さて、福田は戦後日本が民主主義の世の中になったとは言っても、もとに戻ったということであり、「日本人としては大正くらいの民主主義をやっているだけなのに」(132) と論じているが、この見方は、まさに、アメリカの占領と占領政策の展開の下で、「日本」と「日本人」とが今一度、私のモデルで描くあの[セカイ]へと、「復帰」していくことに等しい、と私はみている。それは、「開国」によって無理矢理に放り込まれたあの[セカイ]のなかで明治、大正、そして昭和と生きてきたのが、「あの戦争」とその敗北によって一時的に頓挫していたのが、また米国の占領統治の下で、また再スタートを切ることを意味していた。またその

際に、福田が、「日本人としては、大正くらいの――」というとき、福田の言及は、彼がそれをどの程度、意識していたかどうかは別にしても、「大三角地帯」構想とその実現のなかで、戦後の日本の「民主主義の発展」が見られることに鑑みるとき、いわゆる「大正デモクラシー」の実現を「成功」させるに至る、この時期に見出された「大三角地帯」構想とその実現の歩みは、一体何であったかという問題にも、目を向けさせる契機となるのは確かなことである。(133)

日本の戦後は、米国との関係抜きには考えられないほどに、米国のさまざまな傘の下で、その歩みを実現してきたといっても過言ではない。その意味では、「戦後の平和が保持されたのは心がけがよかったからじゃない」、「なぜ日本はふたたび経済的な発展ができたのか」において、福田が指摘している(134) ように、米国の庇護がなにより大きかったということを認めることがまずは重要である。そして、そこから、なぜ米国は、かつて自分に牙を向けた日本に対して、しかも戦争の帰趨がある程度見えていた段階で、二度にわたってまでも原爆を投下した日本に対して、これほどまでに支援し続けたのかという問題に答えることが大切であろう。その際できれば、東西の冷戦構造ともっぱら結び付けて、その理由を、考えることは少し後回しにしておきたいと考えている。むしろそれに代えて、私は、自分のモデルの[セカイ]における「自己決定権」の「争奪戦」の歩みと結びつけて考察してみたい。とくに、その「争奪戦」における「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（史）」という観点から、その問題を論究してみたいと考えている。ここで少し踏み込んだ発言をしておくならば、アメリカは、「パックス・アメリカーナ」として戦後すぐにその覇権を世界に示すことができたが、もうすでにこの時点において、「ポスト覇権国」を念頭に置きながら行動していたように思われる。それは、歴代の覇権国が中心となって管理、運営する「覇権システム」とその「秩序」の維持、安定のためにも、覇権国にとって避けては通れない重要課題であったのである。それゆえ、そのためにも、「自己決定権」の「争奪戦」をめぐる「経済発展」と「民主主義の発展」の「関係（史）」の行方を、覇権国であるアメリカ合衆国が決定するという重要な役割を担っていたと見ることができるだろう。結論を先取りしていうならば、これまで続いてきた「経済発展」と「民主主義の発展」の「関係（史）」から成る[A→B→C]の[セカイ]から、[B→C→A]の[セカイ]へと、転換させていく大切な役割を引き受けていたのである。(135) こうした観点と枠組みを前提として、私は、福田の戦後日本の歩みに関する見解に迫ろうと考えている。それについてもう少し言及しておくならば、以前に拙著『民主化の先進国がたどる経済衰退』において、私が提示した分析視角と分

析枠組みを、ここでも採用している。私は、オランダからイギリスへ、イギリスからアメリカへ、そして現在進行中のアメリカから中国への歩みのなかに見出せる歴代の覇権国の興亡史を、「三つのポリティックス」の観点から接近しようと試みた。すなわち、①「クラス・ポリティクス」、②「カルチュラル・ポリティクス」、③「システム・ポリティクス」である。(136) こうした観点から、1950年代から今日に至る米中間の「関係」を見直してみたいのである。ここでそれらを踏まえて米中関係を概観してみよう。米中関係は、1970年代を境として劇的に変容していく。当時のニクソン共和党大統領の中国訪問を皮切りとして、米中は急速に接近を図っていく。当時の米国と中国においてそれぞれ国内的事情を抱えていたが、その打開を図る目的も当然ながら、米中接近の原因としては大きな位置を占めていた。しかし、1978年における中国での「社会主義市場経済」に向かう船出は、両国におけるこれまでの「経済発展」と「民主主義の発展」の「関係（史）」を急激に転換させる契機をなしたと見て間違いないだろう。そうした流れを作り出す、「相互補完的」な「関係（史）」が形成され、発展しつつあったのである。

それでは、福田の著作に戻ろう。福田は、アメリカの占領統治の下で、「占領軍」は裁判をして彼らを刑務所に入れたり、死刑にしただけでなく、憲法まで変えてしまった。ようするに、ただ戦争に勝ったというだけでは満足しないで、やっつけた相手の性格まで叩きなおしてやろうということをアメリカ人は考えていたんだね。まさか占領した軍隊がその国の国家体制まで全部かえてしまうような、そういう大胆なことをやるとは、敗戦時の指導者たちは考えていなかった。アメリカという国を甘く見過ぎていたんだね。――実際に、いくら戦争に勝ったからといって、占領軍がその国の国家体制を変えて、憲法を書き改めるなんていうことは、国際法に違反している。そういう権限を占領軍に与えるなんてことは、連合軍が日本側に降伏条件として突きつけたポツダム宣言にも、国際法にも、でていない。」と(137)、力説しているが、正直なところ、私はこのような物言いを理解できない。逆にいうと、田母神の論考のなかで、日本の韓国併合を国際法に依拠しながら正当化する論法にも、承服できない。というのも、国際法の研究者には申し訳がないのだけれども、国際法は、私のモデルのあの[セカイ]を擁護するために、覇権国や大国が中心となってつくってきたと理解しているからである。それゆえ、国際法に依拠するということは、私のモデルのあの[セカイ]の「経済発展」と「民主主義の発展」の「関係（史）」を、その形成

と発展とその変容の歩みを支持する、肯定するということを意味すると考えられる。それゆえ、もしそうであれば、「あの戦争」を、あの[セカイ]に対しての「侵略」戦争とみることはできても、あの[セカイ]からの、「解放」戦争であるとは、国際法を支持する、つまりあの[セカイ]を支持する人にとっては、口が裂けても言えることではないであろう、と私はみているからである。それゆえ、こうした福田の、国際法を援用する論の展開は、福田の論の正当化にはならないと考える。むしろ、私はこうした見方に代えて、あの[セカイ]を維持、管理して、さらに永続化させようとする「覇権システム」とその「秩序」の「主体的」な担い手たちは、その目的を実現するためにはどんなことでもするだろうし、またそれが許されるものと斟酌しておいた方がいいと見ている。実際、国際法を、日本が韓国併合や、日本の植民地支配の正当化のためにもちだすとき、これに対して、福田のような論法でもって、アメリカの占領統治に抗議した者たちに対して、福田はどのように答えるのだろうか。また、福田のいうように、国際法をも無視したアメリカのやり方の下で、「日米合作」の「経済発展」を実現した日本と日本人は、もう「アメリカは国際法を無視して———」とはいわないし、いえないだろう。たとえそうした言を弄しても、弄すれば弄するほど、みじめになってくるのではないか。私は、もっと異なる観点からこうした問題を捉えなおしてみたい。

しかし、そうはいうものの、福田のくだりに示される「屈折」した論の展開を、私は、正面切ってバッサリと切り捨てることはできないし、それだけの力もない。むしろ、そこでおそらく抱えていたであろうと思われる「心情」は理解できるのである。もちろん、そこに「論理の一貫性」が無いではないかと、すぐさま批判はできたとしても、またそうした批判を展開した後においても、である。福田は、アメリカの占領統治の下での、日本の変貌ぶりを嘆きながら、同時に、戦後日本の経済「繁栄」と「平和」をもたらした「功労者」としてのアメリカをきちんと見据えている。ここでも、当然のことだが、私は、あの[セカイ]の歩みとむすびつけてみていることから、その「繁栄」と「平和」の下で、かつての日本と日本人が甘んじることを余儀なくされた「段階（状態）」において、呻吟し続けているBグループやCグループの存在に眼を向けざるをえない。何故か。やっとめぐり合った「幸福」を、しかも「開国」以降二度の世界大戦と、その間における「日本」と「日本人」の台湾、朝鮮、そして満州への果てしない「侵略」と、二度に及ぶ原子爆弾の投下を経験した挙句の「僥倖」に、もっと素直になればいいのだが、どういうわけかそうはいかない。素直になって喜んでいたのもつ

かの間、今度は長く続く「不況」から、「雇用崩壊」「家庭崩壊」そして「日本崩壊」といった「崩壊」の連鎖が引き起こされている。こうした戦後の「日本」と「日本人」の歩みを、どうすれば的確に描けるのだろうか。

ところで、話をまた福田のくだりに戻してみよう。「戦後の平和が保持されたのは心がけがよかったわけじゃない」において、先にも示したように、米国の傘の下で日本の平和が保持されたことについて、的確に指摘をしている。すなわち、———つまり安保条約は日本国憲法とセットになっていた。憲法九条で欠けている軍事力は、アメリカが提供する、その代わりアメリカのアジア制覇のかなめとしての基地を提供しなさい、それが講和の条件ですよ、という形で、日本は独立を許された。だから戦後日本の平和というのは、かけがえのないものだし、続いてもらいたいに決まっているけれど、その平和は、日本人の心がけがよかったから保持されたわけじゃない。安保条約という、日本の外側にあるアメリカの力が、ソビェトや中国の力と拮抗していたから続いてきたわけだ。つまり、日本が武力を放棄していたから、平和が維持されていたわけではないということだ。——かわりに強力なアメリカの軍事力があった。その力が、平和を守っていたんだ。[138]———私も、このくだりには同感せざるをえない。同時に、左翼を標榜する論者が眼を向けることを避けていたところである。こうした「現実」から目をそらすことで、結局、「左派的」と目される「九条」を護持する人たちは、「覇権システム」とその「秩序」をもとにして創り出される「市民的自由」の問題点にも目を向けることができなかった。換言すれば、あの[セカイ]のなかで形成され発展と変容を見てきた「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（史）」を直視してこなかった。そのことは、「沖縄」と、「大三角地帯」構想とその実現のために、「（総）動員」させられた、アジア地域とそこに暮らす人々が甘受し続ける「圧政」と、「日本」と「日本人」の「平和」と「繁栄」とが、まさに「共時態」的な「関係（史）」の状態にあることを、十分に理解することを困難にさせたのである。

福田は、すぐその後のくだりにおいて、「平和というと、安定した一つの状態みたいに思っているかもしれないけれど、本当のところは、力のバランスという、ごくごく物理的かつ暴力的な原則によって実現され維持されているものなんだよ。そう考えると、日米安保条約は、日本をアメリカの軍事的占領下におくという条約であって、日本はこの条約を結んでいる限り、本当は独立していないとも考えられる。」と、[135] 鋭い指摘をしている。私は、このくだりを、私のモデルで描くあの[セカイ]と結びつけて、福田が考えることを望んでいる。

つまり、戦後の平和と経済的繁栄とか、戦後民主主義の歩みとかは、福田のいうように、こうした「力のバランス」という「物理的かつ暴力的な原則によって実現され維持されてい」たと同時に、それはまた、私のモデルのあの[セカイ]における「自己決定権」の「争奪戦」をめぐる「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（史）」の形成と発展並びにその変容の歩み自体が創り出す「力のバランス」であり、そうしたバランスによって支えられる「平和」であるということである。換言すれば、その「平和」とは、あの[セカイ]を構成する、A（第一グループ）、B（第二グループ）、C（第三グループ）との「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（史）」によって創り出される「構造的圧力（暴力）」間の、「力のバランス」を、意味していたのである。こうした点に鑑みるとき、これまで流布されてきた、「戦後の日本は、一度も戦争を経験することもなく、平和でよかった」云々といった議論は、あまりにも皮相的な議論であるばかりでなく、無責任のそしりを免れない類の妄言である(140) ことを、肝に銘じておかねばならないであろう。

ところで、ここで福田が指摘していた「力のバランス」であるが、福田は、それを「ごくごく物理的かつ暴力的な原則」として理解していたが、それに対して、私は、そうした「物理的な暴力」を「行使」する「実体」として、上述したように、A、B、C の各グループ間での「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（史）」によって創り出される、「構造的圧力（暴力）」を、福田のいう「力」と捉え直して理解している。それゆえ、「力のバランス」とは、まさに、A と B との、A と C との、また B と C との間に創り出されてきた（いる）、「構造的圧力（暴力）」の「バランス」を、さしている。すでに言及しているように、ここでいう「構造的圧力（暴力）」の「構造的暴力」とは、ガルトゥングのいうそれではない。ガルトゥングは、その暴力を、もっぱら「世界システム」としての「資本主義」の関係から捉えているのだが、私は、そこに、「民主主義（の発展）」も含み込んだ、「世界システム」としての「資本主義」と「民主主義」の「両者」の「関係」から創り出される「圧力」（暴力）」を描いている。ここは非常に大事なところである。「資本主義」における「低度化」と「高度化」の「関係」は、「民主主義」においても同様に、「低度化」と「高度化」の「関係」として描くことが可能である。こうした観点から、あの[セカイ]を見るとき、そこに「力のバランス」が、一九七〇年代を境に、転換していることに、初めて、気がつくのである。これに関しては、すでに、拙著『民主化の先進国がたどる経済衰退』（晃洋書房、一九九五年）において披歴しているが、論の展開上、後にまた紹介する。

2.「力のバランス」のなかの「日本」と「日本人」

さて、「なぜ日本はふたたび経済的な発展ができたのか」において、福田は次のように論じている。———しかも大経以来壊れていた自由貿易のシステムが、ふたたび成立した。いわゆるブレトン・ウッズ体制だ。—日本はアメリカの庇護の下にブレトン・ウッズ体制に入れてもらった。これは、自由に経済的な活動ができる保証を手に入れたということだ。この保証が、戦前の日本の苦況を考えれば、どんなに大きいことだったかわかるだろう。自由貿易と金融の安定（為替の安定）がなければ、そう簡単に日本は、戦後の経済発展はできなかった。抗して、日本は敗戦国ではあったし、国土は荒廃にさらされていたし、有為の青年の命をたくさん失ったけれども、その強大なアメリカの力に支えられた自由貿易体制で、努力すればいくらでも儲けられる、市場という自由空間を得た。———このくだりを見てすぐにわかるのは、先述したように、国際法違反だ、と批判していた当のアメリカの庇護の下で、戦後の日本の経済発展の可能性が開けたことを、福田は、相当に複雑な思いの下で述べていると、私はその心情を、勝手にそのように察するのだが、どうであろうか。たとえ、「あの戦争」に関する、対アメリカ批判や非難をいくら繰り返しても、たとえば、「東京裁判」をめぐる「裁判」の違法性云々、行き過ぎた占領統治（先の福田のいう国際法違反）の問題等々、にそれは示されるのだが、すぐに「論調」が一変して、アメリカサマサマと見事に移り変わってしまう。正直、こうした議論には、ついていきたくはない。しかし、そうはいうものの、ここでも、その「屈折」した心情は理解できる。私は、そうした「心情」を含み込んだ別の日米関係の描き方はないものだろうかと思案してきたのだが、その際、日米関係を、単なる二国間の関係としてでなく、また単なる覇権国の存在としてのアメリカではなく、歴代の覇権国が中心となって形成、発展させてきた「覇権システム」とその「秩序」の中心的監督者、管理者としての、覇権国アメリカとして位置付けることによって、日本とアメリカの関係を見ることにより、そこから私のモデルで描くあの[セカイ]のなかの「日米関係」として捉えようと試みてきた。そうすることによって、「日米関係」を語ることが、そのまま、あの[セカイ]をも同時に俎上に載せることができる。そうした観点から、戦後の日本の経済的成功なり、福田のいう、ブレトン・ウッズ体制における「自由貿易」、あるいは、「自由空間」の「自由」を捉えなおすことが可能であり、また、A、B、C の「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（史）」に見出される「構造的圧力（暴力）」とその「関係（史）」にも眼を向けることができる。こうした観点から、先に述べたように、「力のバ

ランス」の変化を「感じる」ことが可能となるのである。何より、そうした「構造的圧力（暴力）」の「関係（史）」は、「東京裁判」時においても、占領統治下においても、「戦後民主主義」とか、戦後日本の「繁栄」と「平和」とが、謳歌されていた時期においても、それは、一貫して「感じる」ことができるのではあるまいか。私は、こうした観点から、これまで、日本の「近・現代史」とそれに関わる諸問題に接近することを試みてきたのである。

私は、モデルのあの[セカイ]を通して、日米関係を、また「日本」と「日本人」の歩みを見てきたことから、戦後日本の「高度経済成長」と、日本の「繁栄」と「平和」を導いた主たる要因として、何よりも挙げなければならないものに、日本のあの[セカイ]への「復帰」と、米国の庇護の下に、A グループへと「上昇」できたことが、最も大きかったと見ている。それによって、福田が認めたように、「悲惨な貧困がなくなっていろいろな問題が解決した」のも、たしかなことではあったが、同時に、あの[セカイ]のなかで生きるということは、またそのなかで、戦後日本が、「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（史）」において、いち早く、A グループへと、「段階」を、「上昇」することによって、対内的、対外的に、相当な程度の「構造的圧力（暴力）」を、課すこととなったのである。すなわち、対内的なそれは、水俣病に代表される「環境問題（公害）」であり、対外的なそれは、朝鮮戦争、ベトナム戦争、そして近隣のアジア諸国における「開発独裁」軍事政権の誕生である。誤解を恐れないでいうならば、まさに 1949 年以降の毛沢東主導化の中国も、そうした「開発独裁」政権として位置付けることが可能である。(142) と同時に、戦後の、「G・H・Q」主導の（軍事）統治下におかれた当の日本も、「開発独裁」（語弊があれば、「開発主義」と、呼び換えてもかまわない）政権の下で、戦後の再スタートを切ったと見ることができると、私は位置づけている。こうした観点から日本の戦後史を見直すとき、日本が、「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（史）」において、「Ⅰ期」の「段階」から、「Ⅱ期」の「段階」へ、そして、その「Ⅱ期」の後期から、「Ⅲ期」の「前期」あたりに差し掛かる頃、すでに、覇権国のアメリカは、私のモデルで描く「Ⅰ´期」の前期を、迎えていたと見ることができるのである。いずれにしても、「日本」と「日本人」が、「Ⅲ期」の「段階」の成熟した時期を、心底味わうことができるまで、その段階にとどまることを、許されなかったのは、また確かなことである。こうした流れは、福田が、「沖縄返還と同時に新たな混迷が始まる」、「アメリカの優越が絶対的なものではなくなってしまった」のくだりとも、関連するものである。

福田は、「沖縄返還――」のなかで、ベトナム戦争について触れている。そこで、福田は、「はたして、ベトナムにたいして、そこまでアメリカがかかわる利益があるのか、あるいは大義があるのか。これは非常に疑問であって、アメリカ人自身も強く疑っていた。というよりも、そうした利益なり正義なりをみすえてベトナムにかかわったのではなく、フランスが撤退した後に、小規模な援助をした後、そのかかわりを見直す機会がないまま、ずるずると全面的な参戦にまで至ったというのが実相なんだね。つまり、支那事変のときの日本とよく似たかかわり方をしてしまったわけだ。そして、一度かかわると、大国としての矜持と、社会主義の進攻を防ぐという建前にしばられて、撤退することもできず、大攻撃をかければ相手が屈服するだろうという見込みのもとに、具体的な戦略目標もないまま、軍事的圧力を高めていった。」と論じる(143) のだが、わたしは、このくだりについては、納得できないものを感じている。というのも、私は、ベトナム戦争の意味は、私のモデルで描くあの[セカイ]の護持と安定にとって、どうしてもアメリカが介入することを避けられない、いや、介入してでも絶対に護持しなければならない[セカイ]であると理解しているからである。もしそれができなければ、日本の「平和」も「安定」もないはずだと、アメリカからみれば、当然ながら、福田もそう理解してくれるものと感じていただろうと、私はみていたから、このような見方を、福田が示すことに対して、「覇権システム」とその「秩序」の維持と発展を願うアメリカ当局の関係者は、失望を禁じ得ないであろうと、私は推察する。と同時に、日本の近・現代史に関する、福田の見方が、こうした観点からの考察ではないことを、ここでもまた、はしなくも露呈していると言わざるをえない。このことの意味は、相当に深刻である。というのも、日本の近・現代史の歩みが、覇権国を中心として創り出されてきた「覇権システム」とその「秩序」と関連付けられないままに描かれているということを示しているからである。それは、日本の・近現代史が「覇権システム」とその「秩序」のなかで、その歩みを見たということ、ならびに、「覇権システム」とその「秩序」を、自らもまた、「代弁」する存在であるということに、思いを至らせることができていないことを、物語っているからである。それゆえに、厄介だと言わざるをえない。福田には失礼なのだが、一見したところ、その著作の「タイトル」からして、「右翼的」、「右派的」あるいは「日本的」と、思われる論者が、「覇権システム」と、その「秩序」を代弁する、「世界史」の[セカイ]のなかに、「埋没」していることを、示している、といえないだろうか。その「世界史」的[セカイ]を「客観」視できないのである。

この問題というか、こうした福田にみられる「姿勢」については、すでに何度も指摘してきたが、ここでもそれが示されていることについて、注意を喚起しておきたい。付言すれば、それはまた、西尾幹二や、田母神や、渡部昇一にも、該当するのである。このことは、日本において、「世界史」的[セカイ]を的確にとらえ、論評できる論者が見当たらないことを示している。というのも、左翼的、左派的論者は、すでにそうした「世界史」的[セカイ]に、「埋没」していることにずっと気がつかないままに、今日に至っているからである。

ところで、ベトナム戦争に関する、福田の記述からわかることは、福田は、ベトナム戦争を、「覇権システム」とその「秩序」と結びつけて、捉えてはいないということであった。換言すれば、あの[セカイ]の維持と発展という観点から、アメリカのベトナム戦争への関与を、福田は、捉えることができていないということを示している。結局のところ、福田は、私の見ているように、「世界史」の歩みを（別言すれば「市民的自由」の歩みを）、捉え切れていない、理解していないことを示している。それは、福田の別のくだりのなかにも、見出すことができる。たとえば、「悲惨な貧困が―――」において、『それでも、社会がだんだん豊かになって、いちじるしい不平等や悲惨な貧困といったものがなくなり、国民の八割が中流だといわれるような状態に近づいていくと――いずれにしろ、経済成長がすすむにつれて、かつて日本社会を悩ませていたいろいろな問題が解決していった。――社会の矛盾は、経済が成長すれば、だんだん消えていくんだという社会モデルを、こうして日本はつくってみせたわけだ。』(146) において、福田が論じている日本の歩みは、その背後に、アメリカが戦後すぐに、あるいは、戦争中に考案していた、「大三角地帯構想」とその実現が大きくかかわっていたと、私は見るのだが、そのために、ベトナム戦争は不可避となったと、理解できるのだが、福田の記述からそれを垣間見ることは難しい。すなわち、そのことは同時に、覇権国アメリカが中心となって、推進していた、あの[セカイ]の維持と発展並びにその変容といった観点から、日本の戦後の豊かさに向けての歩みを、捉えることができていないことを、ここでもまた、福田の見方は示している。そのことは、「世界史」の問題（点）を、十分に認識できないことを示しているといえないだろうか。つまり、「A の民主主義の発展 $\xrightarrow{(\times)}$ B の民主主義の発展 $\xrightarrow{(\times)}$ C の民主主義の発展」、[C の経済発展→B の経済発展→A の経済発展]、[C の経済発展→B の経済発展→A の民主主義の発展]の図式に描かれる「力のバランス」が、いつまた変容するかもわからないことを、理解できないということを示している。福田のいうように、たしかに八割以上の日本人が中流

だと思えるようになった（いわゆる「一億総中流（化）社会」である）のだが、それが今日の「格差」社会といわれるなかでの「中流の崩壊」と、一体どう結びついているのだろうか。少なくとも、私のモデルで描く「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（史）」が、従来のそれとは異なる「関係（史）」の構図に導かれたと考えることができるのではないかと、私は理解している。その際に問題となるのは、そうした変容なり、転換に、「日本」と「日本人」の「歴史」はどのようにかかわったのかということである。当然ながら、そこには、敗戦と、それ以降の「日本」と「日本人」の歩みが、大きくかかわってきた。しかし、同時に注意しなければならないのは、「日本」と「日本人」の戦後の歩みは、アメリカとの関係のなかで大きく影響されてきた、ということである。アメリカというとき、それは単なるアメリカではない、すでに指摘したように、覇権国としてのアメリカである。そのことはまた、単なる覇権国を意味しない。「覇権システム」とその「秩序」の維持管理、監督者としての、すなわち歴代の覇権国の興亡史のなかで、覇権国が担わなければならない「役割」を引き受けている、そうしたアメリカである。その「役割」のなかでも重要なのが、次期覇権国を探し出し、育てていくというものである。こうした役割を、覇権国アメリカは、「あの戦争」の渦中で担っていたということである。逆にいうならば、戦後の「日本」と「日本人」の歩みは、戦後、名実ともに覇権国となった、覇権国アメリカの引き受けた、この「役割」を、担い続けていた、と見ることができるのである。そうした視角と枠組みをもつためにも、私は、私のモデルで描く「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（史）」として捉えられるあの[セカイ]の形成と発展、そしてその変容に,もっと注目、注視してほしいのである。そのとき初めて、福田がこの著作のなかで述べている日本の近・現代史の歩みを、今以上に、「感じる」ことができるであろう。自分の喜びや痛みは、他人のそれと「共感」出来たときにはじめて、より一層の喜びとなり、また痛みとなるのではないか。この「共感」という意味は、別言すると、「共時態」的「関係（史）」のなかで、生きている、生かされている、ということを、「感じる」という意味であると、私はここで、静かに、強調しておきたい。

3.「覇権国の興亡史」のなかの「日本」と「日本人」

それでは、戦後の「日本」と「日本人」の歩みを、上述したように、覇権国アメリカによる次期覇権国探しのために、「日本」と「日本人」が、アメリカ主導のもとに、「共同」でその「役割」を担ってきたのではないか、という観点から、考

察してみよう。こうした観点から、戦後日本の経済的繁栄を見直すとき、どのようなことが改めて浮き彫りになってくるだろうか。先ずは、アメリカが、そうすれば必ず、アメリカ経済の基盤を掘り崩すことは必至となると思われたにもかかわらず、積極的に、日本経済のテコ入れに協力したという点である。ヨーロッパにおける、かつての西ドイツへのテコ入れと同様に、それを、東西冷戦構造への対応と、もっぱら結び付けて、語ることはできないであろう。と同時に、1970 年代に入ると、「ニクソン・ショック」にみられるように、いまだ冷戦が続いているにもかかわらず、日本の経済繁栄に水をかけるかのような対応に打って出る。この対応が、アメリカ経済の復活を試みるものであると見るのは、あまりにもナイーブ過ぎるのではなかろうか。むしろ、ある種の「合図」であるかのように思われる。そうした対応と、ニクソンの訪中はどのようにつながるのであろうか。私は、この繋がりに、アメリカによる、従来の歩みを、積極的に変化（転換）させていく、その始まりだと、みたいのである。こうした枠組みのなかで、ニクソン訪中、文化大革命の終息、冷戦の「実質的」な終焉、そしてアジア・ニーズに代表される飛躍的な経済発展の歩みを捉えなおしてみたい。つまり、その「合図」は、1978 年の「社会主義市場経済」の下での驚異的経済発展を導く、それである。ここに、従来の「西欧」主導の「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（史）」が、「非・西欧」主導のそれへと、転換・変容していく流れが創り出されていくのである。ところが、こうした流れが、先に述べていたように、「共同」で「役割」を担っていると、覇権国アメリカからは見られている、当の「日本」と「日本人」は、十分に理解できなかったようである。日本の打つ手は、ことごとく、アメリカの思惑にそぐわないものであったことから、業を煮やした、アメリカ側から、「対米経済・貿易摩擦」騒動を吹っかけられるに至るのである。それでも、「日本」と「日本人」には、この流れが読めなかったのである。

翻って考えてみれば、「押し付けられたけれど、いい憲法である」云々といった類の議論に甘んじている「日本」と「日本人」に、この流れが読めるはずもないのである。換言すれば、「市民的自由」がどのような歴史のなかで実現されたかを、いまだに理解できないままに、あの「世界史」を、そのまま額面通りに受容し続けているのである。それは、岡義武、然り、丸山真男、然り、中村政則、然り、加藤陽子、然りである。同時に、西尾幹二、然り、福田和也、然り、なのである。すなわち、私のモデルで描く、あの[セカイ]のなかで、ヘーゲルの礼賛した「世界史」の歩みが実現するということなど、露ほども思い至ら

ないのである。それゆえ、「力のバランス」が転換して、あの[セカイ]が、[A→B→C]から、[B→C→A」へと、転換、変容していくことを、理解できないままにあるといっても、過言ではない。付言すれば、すでに言及したように、ここでいう「力」とは、「構造的圧力（暴力）」である。

ところで、自分自身もあきれるほどに、偉そうな物言いを、ここでもしていることは十分に自覚しているのだが、私は、正直なところ、そのようにみている。もちろん、そうはいっても、それでは、「日本」と「日本人」は、どのように歩むべきなのかという問題に対して、的確な助言ができないままである。これに対して、福田の方が、あれほど、私のモデルで描くあの[セカイ]の歩みが見えていないと批判していたはずなのに、より的確な現状分析を行っているように思えるから、不思議なのである。それについて、以下に紹介しておきたい。「12　平成時代について（1980 年代～現在）―冷戦の終焉、ふたたび日本の前提が崩れはじめた」のなかの「平成を迎えるころから戦後の日本の前提が崩れてきた」で、福田は、次のように述べている。「日本は、例えば湾岸戦争のときに、戦後それまで考えてこなかったような、忘れていればよかったようなことを全部考えなければならなくなった。湾岸戦争が起こって、日本はアメリカに『おまえは味方なのか、敵なのか』と聞かれたんだ」、と紹介しながら、「日本の外交当局にしてみれば、味方に決まっていて、ずっとアメリカに追随してきたつもりだったのに」、「しかしアメリカにしてみれば、そうじゃない。戦争をやっているときに、一緒に戦うのが味方で、敵の味方をするのは敵なんだと」なるのだが、そういう「当たり前のこと」に、「日本は、そういうことをずっと考えないできたわけだ」、と論じ(149) ながら、この後で、非常に大切なことを指摘している。すなわち、「問題はアメリカと一緒に戦争をするか、しないのか、といったことではなく、一番大事なパートナーからそう言って詰め寄られたときに、どうすれば戦争に行かなくても身のあかしをたてられるか、といったことを、全然考えていなかったことだね。(149) 」と。このくだりは、私自身も、納得するところであると同時に、あの［セカイ］のなかで生き抜くための、一つの「処世術」であると、教えられた。そしてまた、福田から教示されたことは、たとえ、あの[セカイ]の歩みを熟知していたとしても、ここで福田がいうような対応ができたかというと、それは必ずしもその保証はできないということであり、逆に、あの[セカイ]について、十分理解できなくても、そうした「外国交際」は実現可能だということである。いずれにせよ、「日本」と「日本人」は、福田のいうようには、対処、対応することができなかったのである。これに関連して、「自

衛隊の存在そのものをまともに論じないやり方はおかしい」において、「保守派だろうと、進歩派だろうと、考えていることは、国際社会の常識や日本の現実からみれば、極端に外れたことしか言えないままだ。自分たちの生きているリアリティと、国際社会のダイナミズムをどう結びつけるかという問題を、戦後ずっと日本人は忘れていた」と言及しながら、「日本人は、アメリカが用意してくれた安全な金魚鉢のなかで繁栄することだけに夢中で、ガラスの外側に世界があるなんていうことを、想像もしなくなっていた。これは本当になさけないことだ。あまりにも幸せで、何も困難がなかったから、生き死にをかけて、信念や理念を語ることができなくなってしまった。そこで冷戦が終わって、西側という枠組みがなくなってみると、こういう子供じみた日本が、非常に異様に見えるようになってきたんだね。周りの国からは。」、と福田は述べている(151) が、このくだりは、まさに私のあの［セカイ］の変容にかかわる話である。私自身も、福田の見方に教えられるところが多いのだが、何度もいうように、私は、福田が述べているくだり（日本の歩み）を、「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（史）」という観点から捉え、理解しようと試みているために、私と福田の日本の近・現代史の理解の仕方には、当然ながら、何がしかのズレが伴う。私は、このズレとその認識を、大切にしながら、この後も、論を展開していきたい。それを踏まえて、急いで、ここで付言しておくと、福田がすぐ上で述べている、アメリカが提供してくれた「安全な金魚鉢」のなかで、日本と日本人の、あまりにも幸せな「生き方」であるとか、そうした「生き方」に伴う、「信念や理念を語ることができなくなってしまった」というくだりを、私は、あの[セカイ]と、そのなかのＢやＣグループと、そこに生きている人々の多大な犠牲と、結び付けて、捉えなおしてみたいのである。またそこから、福田のいうように、もし仮に、「日本」と「日本人」が、「安全な金魚鉢」の外側の世界にも目を配り、「信念や理念を語ることができ」ることを、望むのであれば、ぜひとも、私のモデルで描く、あの[セカイ]の「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（史）」を、別の、あらたなる「ケイザイ発展」と「ミンシュシュギの発展」との「関係（史）」に、置き換えていく、そのような「生き方」を、目指すことが必要であり、また、それを思案し続けることが大切であると、ここで提言しておきたい。もちろん、この提言が、どれほど「非・現実的」なものかは、私自身も重々承知している。しかし、もし仮に、司馬遼太郎が提起した、あの「渾然とした―――」問題と向き合い、その解決策を考えるならば、「日本」と「日本人」とは、どうしても、私がここで提言した課題に取り組まなければならないだろう。そのことのもつ

意義と意味は、あの「世界史」の歩みのなかで繰り返される「戦争」と、「平和」という名の「戦争」、の「繰り返し」を問い質すことであると同時に、「9 条」の「欺瞞性」を、自覚することにほかならない。

ところで、福田は「愛国心で過去を見ることが大事だと思う」というくだりにおいて、これまた非常に重要な、論点を提示している。ここで福田の説く「愛国心」は、おそらく、「左翼的」とされる論者にも理解される内容だと、私はみている。たとえば、「従軍慰安婦問題」の「戦争被害の賠償」に関して、たとえ日本と韓国との国家間レベルでの「外交上の取り決めで決着をしている」、解決済みである、とされた事案であっても、当時のアメリカによる戦後処理のおかげもあって、「自国でその問題をきちんと考えてこなかったということも、否定できないんじゃないか」と指摘しながら、過去の「暗黒時代」とは関係のないことだとか、「みんな済んでしまったと忘れるのでもなく、現在生きている自分との関係でどう考えるかということを、きちんと議論してこなかった。」と述べている。(152) そして、福田は、こうした戦争にかかわる問題に対して、「自国を愛し、誇りに思うということ。それはけして偏狭なことではないし、その外側にいる人たちを排除することではない。自分が今生きているというこの背後にある、蓄積というものをきちんと受け止め、それに共感をし、ある種の苦さを味わいつつ愛情をもつことだ。その蓄積に、意識的であるということだ。そういった愛国心に立つのならば、やはり自分たちの過去に対して真面目であらなければいけないと思う。」、と語るのである。(153) まさにそのとおりである。ただし、その自分たちの「過去」を、すなわち、ここでは、「日本」と「日本人」の「近・現代史」に該当するであろうが、それを、どのような視角と、枠組みのなかで、捉え直すのか、ということが、大切である。福田がすぐ上でもいうように、「けして偏狭なことではないし、その外側にいる人たちを排除することではない」というとき、私が、これまでにも、何度も論述してきたように、私たち「日本」と「日本人」の歩みは、あの［セカイ］のなかで、創り出されてきたということを銘記しておかねばならない。すなわち、あの[セカイ]の、「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（史）」と、その形成と発展、そしてその変容のなかで、繰り返される「自己決定権」の「争奪戦」の「歴史」のなかに、放り込まれて、ひたすらその[セカイ]の頂点である、A グループを、司馬遼太郎の描くように、まさに「坂の上の雲」を、目指して邁進してきた、という「現実」に、まずは、眼を向けることである。そのことが意味しているのは、いつも

「偏狭で」、また「差別」や「排除」の「関係（史）」の下で生きることを、免れることができない「歩み」であったということである。

こうした観点から、福田が「誰かが責任をもって支えないと自由貿易体制は潰れてしまう」のくだり(154) を、読み直すとき、正直、ここでも、福田がいわんとすることは理解できたとしても、すぐ上で、福田が説いたような「愛国心」を、「自由貿易体制」という名の「自由」が「潰してきた」のではないかと、福田に問い質したくなってしまうのである。無責任な物言いをあえてここでぶつけるとき、私は、以下のように主張したいのである。「自由貿易体制」が潰れてもいいではないか。その「自由貿易体制」とか、「自由」、さらには、そうした仕組みの下で養われる国民が担い手となって、A グループで創り出される「民主主義」体制、そうした仕組みが、あの[セカイ]と、そこでの「経済発展」と「民主主義の発展」とのあの「不幸」な、「不人情」極りない「関係（史）」を、創り出して生きのだから、つぶれたっていいではないかと。もちろん、あの[セカイ]の形成と、維持、発展、そしてその変容に、主体的にかかわってきた、「覇権システム」とその「秩序」の安定とその存続に与るものたちは、決して「自由貿易体制」を潰さないように、懸命の努力をするであろう。換言すれば、冒頭で紹介した、福田の語る「世界史」と「市民的自由」を、経済的（物質的）に支えるために、「自由貿易体制」は必要とされてきたのである。付言すれば、ナポレオンをして、プロシアの占領へと導いたのは、まさに「世界の工場」へと飛躍した覇権国イギリスの「自由貿易」ならぬ、「保護貿易」体制にほかならない。ここにこそ、「自由」という名の「保護」があり、また同時に、「保護」という名の「自由」が成立する「関係（史）」が創り出されていたということに、眼を向けなければならない。単刀直入にいうならば、「自由」なり、「保護」なり、それらは、あの[セカイ]の形成と発展、またその変容のためにつくり出されるものであり、つねに、あの[セカイ]との関わりで持って、その意味と意義は、理解されなければならない。「自由」と「保護」あるいは「管理」とは、一見すれば、「対立」関係にあるものとして、位置づけ捉えられるものだが、あの[セカイ]のなかに、それらを、置きなおすとき、まさに相互に「補完」する「関係」として創り出されてきたということが理解されるだろう。こうした観点から、「ナポレオン」（的役割）と「フィヒテ」（的役割）の間にも、たとえ、一見したところ、両者の間に、はなはだしい「距離」があるように思われても、相互に「補完」する「関係」が創り出されているのである。

少し長くなったが、ここでもう一度、福田のくだりに戻ろう。福田は、――どういうことかというと、日本はアメリカに戦後、自由貿易体制に入れても

らって、その自由貿易体制のなかにいるということが当たり前だと思ってしまったそういう自由をタダで享受できると思ってきた。でも本当はそうではなくて、自由貿易とか、金融体制というのはやはり誰かがコストを払って維持しなければならないものだ。(155) ———と述べているが、これは、日米構造協議との話の関連で語られたくだりである。福田は、日本が、あまりにも、無自覚で、「誰かが責任をもって支えないと持たないというのが国際貿易体制であって、第二次世界大戦後はそれをずっとアメリカがやってくれてきたわけだけれども、アメリカは一人でそれを支える力がなくなってしまった」ことに対して、日本は「真剣に考えなければいけなかったのに、日本はアメリカまかせにして、自ら責任をおわないできた」、「そのツケが日米構造協議となって表面化している」、と紹介している。(156) このくだりは、後のくだりと重なり、重要なところである。ここでも、私は、福田の言に耳を傾けつつ、福田の話を、私のモデルのあの[セカイ]と結びつけて、見ようとしている。この観点からの私の言及は、後回しにして、まず、この続きを紹介しておく。福田は、日米関係における、日本側の役割について、あまりにも日本が無自覚、無責任であることを、「しかしどうやって日本は自由貿易体制、云い変えれば日本がこれまで安定して成長してこられたような体制を支えられるのかということを全然考えてこなかった。これは湾岸戦と同じだ。アメリカは基地を日本にもっているし、日本の味方だだと思っていたら、突然『敵なのか、味方なのか』と問われた。そういうときに、いつまでも信頼できるパートナーだと思ってもらえるようにするにはどうすればいいか。」と、(157) 論じながら、問い質している。「日本」と「日本人」は、アメリカに対しても、また、「沖縄」に対しても、無責任であり続けた。もちろん、ここで、私が「無責任」と言うのは、私のモデルで描いてきた、あの[セカイ]と、そこでの「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（史）」と、その問題点に、きちんと向き合わないままに、今日に至った、ということを前提として、そこから、福田の言を、捉え直した意味での、それである。しかし、そうはいうものの、福田のいうことは、私にも、そのまま伝わってくる。それは、私の誰か周りの人に対してというよりも、私自身の「無責任」さに対して、である。

ここでもまた、問われていることは、「日本」と「日本人」は、司馬が問題提起したあの「渾然とした———」問題に、すなわち、「帝国主義」、「自由主義」、「民主主義」、「民族主義」——がどのような関係の下に置かれているのか、ということを、問うべきだ、とすることに対して、背を向け続けたままであるということではないか。私がここでいいたいことは、その問い（かけ）に、向き合い、

その「答え」と、その具体的な解決策を、提示することと、いわゆる「現実」なるものとの間に、はなはだしい「乖離」が存在しているにせよ、やはり、その問い（かけ）に、答え続けていくことは、重要ではなかろうか、ということである。

結びにかえて—「歴史の大きな流れ」を掴みきれないままの「日本」と「日本人」——21 世紀における「日本人」の配置—

ところで、これまで語ってきたように、最初にも問題提起したように「歴史の大きな流れ」を、換言すれば、司馬遼太郎のいう「渾然とした———関係」の「歴史」を、どうも「日本」と「日本人」は、うまくつかみ切れていないように、私には、思われて、仕方がない。そこで、これまでの論の流れを踏まえながら、結びにかえる論を、ここで、提示しておきたい。「自由主義」や「民主主義」の「歩み」を、「覇権国」や「覇権システム」の「歩み」と、結び付けて、論じることができないでいる。これに関連して、以下に二つの文献を取り上げてみたい。最初に紹介するのは、そうした両者の「歩み」を、なんとか、結び付けて考察しようと、試みている文献なのだが、残念なことに、これも、それぞれの「歩み」を、独立したものとして、捉え、理解した上で、それから、二つの「歩み」を、「総合」して、捉えているのである。そうした作業の結果として、これまた、驚くべきくだりが、個々彼処に見出されるのである。このようなところにも、私は、「歴史の大きな流れ」を、日本人が、十分に掴みきれていないと,判断するのである。最初の文献とは、神野道彦『「分かち合い」の経済学』（岩波新書、2010 年）である。その著作のなかの、「パクス・アメリカーナ」の形成と「ブレトンウッズ体制」に関する、あるくだりからみていこう。そこには、次のように、述べている。——アメリカを覇権国とする「パクス・アメリカーナ」という世界経済秩序が形成される——。ここに、すなわち、「覇権国」が創り出されてくる構造に、神野は、問題があるとは、あまり見ていないように、思われる。それどころか、逆に、こうした仕組みのもとで、「自由主義」が、「埋め込まれる」ことになったとして、そこに、積極的、肯定的評価を、与えている。たとえば、次のくだりをみてみよう。——「埋め込まれた自由主義」とは「パクス・ブリタニカ」のように「金本位制と自由貿易を主軸とする自由主義」ではなく、「国内における市場介入を前提」とした国際主義を意味していた。これがアメリカを覇権国とした世界経済秩序である。——。そこでは「重化学工業を基盤として」（40－41 頁）の「経済発展」が可能であり、そうした豊かさの果実から「所得税・法人税を基幹税として」（41－42 頁）、「再分配と経済

成長」の「幸福な結婚」(43－44 頁) を導くところとなり、そこからいわゆる「ケインズ的福祉国家へ」(44－45 頁) と向かうところとなるのである。こうしたくだりに、示されるように、神野は、「覇権国」アメリカのもとで、「ケインズ的福祉国家」が、実現する、と捉えているにもかかわらず、それでは、「覇権国」とか、「覇権システム」とは、一体、どのような「構造」のもとに、創り出されてきたのか、に関する「理解」が、あまりにも、「楽観的」というか、それについての思考が、欠落しては、いないだろうか。「覇権国」と、「周辺」とは、(あるいは、「非覇権中心国」、「準周辺」との関係を含めて)「埋め込まれた自由主義」や「ケインズ的福祉国家」の、形成において、どのような、「関係」にあるのだろうか。その問いかけは、当然ながら、「自由主義」や「自由民主主義」の、形成においても、同様に、該当するのではないか。その問いかけは、次の、第二の問題へと、つながるものである。

さて、その、第二の問題は、後で検討する、百瀬による、「国際関係」のなかで、「民主主義」の形成、発展についての、理解に、関連するものである。神野(のくだり)にあって、百瀬にないものは、何か。それは、神野の議論は、たしかにいくつもの問題点があり、しかもそれに直接答えられない内容ではあったものの、それにもかかわらず、「パクス・ブリタニカ」、「パクス・アメリカーナ」といった「覇権国」の姿がみられる論の展開となっていたのに対して、百瀬の議論は、「国際関係」のなかで、「民主主義」の形成、発展の歩みを、捉えなおすといいながらも、その「民主主義」論には、「覇権国」も出てこないのである。ましてや「覇権システム」やその「秩序」も論じられることはない。

百瀬　宏『国際関係学』(東京大学出版会　1993 年)「3 国際関係の中で問い直す――近代以来の文脈の中で (2) ――」で取り扱われている「民主主義」に関するくだりを、私のモデルのなかに置き直して考察していく。結論としていえることは、「覇権国」「中心国」「準周辺」「周辺」を単位として構成される「覇権システム」とその「秩序」(各々の「担い手」の「役割」とその「関係」の配置、たとえば「産物の国」、「製物の国」) の形成、発展と変容と切り離されて「民主主義」が理解されているということである。

「序　比較と関係－方法論―」(17－21 頁) のくだりで 20 頁に――たしかに「比較」と「関係」とは相対立する概念ではなく、むしろ相補的な概念であり、さらにいえば、「比較」そのものが「関係」のなかに含まれてしまうと考えることもできるのではないだろうか。―――また 21 頁では、―――ある国なり、地

域なりの、政治や経済、あるいは社会や文化の特徴は、他との比較によって明らかに出来るが、ただ表面的に比較をするだけであったら———たとえば、近代以降の世界でもっとも恵まれた条件の下に経済発展を遂げた西欧諸国の民主主義制度や福祉国家体制と、西欧の発展の犠牲とされた旧植民地諸国の政治や社会とを機械的に比べて違いを指摘するだけであったら、それこそナンセンスというものであろう。関係を追究していく姿勢を欠くと、比較は、気付かぬうちに先進国中心主義の独断や偏見にあぐらをかく結果に陥る危険を免れない、というべきであろう。

上のくだりは傾聴に値するところである。ただし問題は、こうした観点から西欧の「民主主義」の「発展」と、旧植民地の「民主主義」の「発展」との「関係」を、それらの「経済発展」との「関係」をも含めて、どの程度論証することに成功しているかであろう。付言すれば、私のモデルで描いたように、西欧の「民主主義の発展」および「経済発展」は、非西欧（旧植民地）における「経済発展」と「民主主義の発展」との両者の「関係」を前提にすることにより初めて実現可能であるものとして、どの程度「関係」づけられているかの確認をする必要がある。私の見方は、残念ながら消極的なそれである。それについて説明する。116 頁に以下のくだりがある。2 行目——「民主主義」は、現在では、世界のたいていの国ぐにー政治のあるべき姿として肯定され、追究されている理念—5 行目——「自由、平等、参加」という三点セットが、「民主主義」について人が合意する基準——7 行目の段落のくだりは注意したい。——しかし、それでも、——のくだりである。ここでは「西欧民主主義」なる用語が先ず「民主主義」を語る際のキーワードになっている。B・ムーアを引き合いに出して、「民主主義」という［ゴール］とされる「地点」に向かう「ルート」（近代への移行の過程が分類されている。実はこの［ゴール］とされる「民主主義」なるものが、117 頁の「西欧民主主義の軌跡」として紹介されている「市民革命」を経験したイギリス、そしてフランス（さらにはアメリカ合衆国がおそらく加えられる）なのである。ここでの問題は、このイギリスなり、フランスなりあるいはアメリカの「西欧民主主義」の「軌跡」が、「非西欧」の「経済発展」と「民主主義の発展」の「関係」と結び付けられているか、「関係」的観点から捉えられているかどうかである。また次に紹介されている「ドイツとナチズムへの逸脱」にあるドイツと、「ロシア革命とソビエト体制」にあるロシア、ソビエトと、「西欧民主主義の軌跡」とがそれぞれ「関係」づけられて語られているかどうか。残念ながら、「関係」づけられないまま「比較」されているのである。当然

そこには、「覇権システム」とその「秩序」とそれらの「民主主義」とがどのように結び付けられるかという視点なり視角からの論は最初から期待できない。

結局のところあれほど「比較」と「関係」について素晴らしい論点を提示していた百瀬ではあるが、「民主主義」の論じ方を見るかぎり、「西欧民主主義」として位置付けられるイギリス、フランス、そしてアメリカが、到着地点とされているのではないか。その際ドイツの歩みにおいて「逸脱」とされる「ナチズム体制」に対して、「正常」だとされるイギリス、フランス、アメリカが対置されるのだろうか。そうだとすれば、非西欧を犠牲とした西欧の「民主主義」の歩みは、どのように説明されるのだろうか。こうした論から導かれるのは、「西欧民主主義」の歩みに本来「関係」づけられたはずの「非西欧」の「民主主義の発展」の「低度化」や「不在」の「歴史」が無視されたままにおかれ、「一国民主主義」として形成されそして発展してきたかのような議論となるのである。そうした理解の仕方はそのまま、133－134 頁にかけてのくだりに如実に反映されることとなる。133 頁の 5 行目から始まるくだりに注目したい。―――ここで角度を変えて、民主主義の問題を、先進諸国と後発諸国の関係という視点に立って考えてみよう。――――南北問題の解決にあたっての先進諸国の責務は重大であるが、それが果たされていない理由は、先進諸国の民主主義がきわめて不十分であることである。「その本質的問題の一つは、民主主義の一国的性格に求められよう」。「民主主義が一国的な性格である限り、地球社会の諸問題や危機の解決は図られない」。なぜなら、先進国は、自国内だけの民主主義の実現にかまけ、第三世界の国にたいしては、「国益の追求を主目的に、資本投下や経済援助を通じて、権威主義的な強権支配を外から支える重要な役割を演じてきた」―。要するに、第三世界の諸国における民主主義の実現は、先進国が自国だけの繁栄をのための政策と発想を改め、他ならぬ自国の政治や経済の体質を問い直して初めて可能だというわけー。そればかりではない。先進国には、第三世界からの移民労働者の労働力にたいする需要ー、先進国側では、「国家の負担する社会的コストを出来るだけ最小限に抑えようとする『国益』重視の論理」に立ってこの問題を扱い、「外国人労働者に対する抑圧的な論理として作用するという現実」を生み出している。そして、「外国人労働者の人権を考慮しようとしない社会は、一般に、労働者の人権が弱く、資本の破壊性が様様な形で支配的に貫徹している社会であろう」。このくだりには、「民主主義の発展」の「関係」が見えていない。「体質」の「見直し」とは、「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係」の見直しを意味するのか。「一国的性格」「国益追求」「自

国内の―かまけて」を、私のモデルを使って検討することが重要である。

それは、さておいても、(131 頁にある)「後発国の民主主義の問題」について、――すなわちいわゆる南の諸国については、「近代化」の副産物としての「権威主義政府」あるいは「開発独裁」の存在が指摘されてきた――あるいは――そこでは、先進資本主義国が経過した「原始的蓄積」の過程が不可避であるという理由づけも根拠のないことではない――のくだりに、「見事に」、示されているように、百瀬の「民主主義」論は、南の「近代化」とその問題点と、北の「近代化」とその問題点とを、「関係」づけることにより、そのなかで、「民主主義」の歩みを、捉え直すものとは、なっていない。従来の「民主主義」の理解の仕方に対して、どのような視点、視角が、こうした作業に際して、必要とされるか、という問いかけも、ない。南の「開発独裁」と北の「民主主義」とは、どのような「関係」にあるのか。「権威主義政府」とか「開発独裁」の「用語」を、使用するのに代えて、「北」と「南」を「民主主義の発展」という観点から、「関係」づけてみることも、大切ではないのか。村田モデルで描くような方法もあるのではないかと、手前みそながら、思わず、みてしまうのである。

また百瀬が、先進資本主義国が経過した「原始的蓄積」の過程というとき、その際に「南」とされる諸国や諸地域は、当の「原始的蓄積」過程においてどのような「関係」に置かれてきたのか。せっかく、「国際関係の文脈」のなかで、「民主主義」を、捉え直す必要性を、謳いながら、ここでも、そうした試みが、なされていない。「市民革命」を実現した、イギリス、フランスは、「重商主義の時代」の「原始的蓄積」過程を、「うまくやり遂げる」ことができたことにより、「民主主義の発展」を、導く可能性の高い、「経済発展」と、また、そうした「経済発展」を、前提としながら、「民主主義の発展」の実現に、「成功」した、とみるとき、どうしても、そうした、イギリス、フランスの、「原始的蓄積」の過程の、「もう一方の当事者」との、「関係」を、描くことは、「不可避」となるのではないか。

さらに 133 頁のくだりにおいて、――ここで角度を変えて、民主主義の問題を、先進国と後発諸国の関係という視点に立って考えてみよう。――とここでも謳いながら、どうもそうした方向には向かない。たとえば、南北問題の解決についてのくだりはそれを端的に示している。南北問題は、「北」と「南」の「経済発展」と「民主主義の発展」との相互の「関係」により創り出されてきたと私は見ている。それゆえ、――先進諸国の民主主義がきわめて不十分である―

―とか、「民主主義の一国的性格」という次元の問題ではない。先進国の「民主主義の発展」は、またその「高度化」は、第三世界の「民主主義の発展」の「不在」あるいは「低度化」と「共時的関係」にあるからである。その「関係」は「北」と「南」の「資本主義の発展」との「高度化」と「低度化」の「共時的関係」と相互に関係している。けして「先進国の民主主義がきわめて不十分である」ことに起因するものではない。ここのくだりにも、「北」と「南」の「民主主義」を「関係」づけてみようとしていない。あたかも「南」にははじめからそうした「不十分」な「民主主義」すら育っていないことを「所与の前提」としているかのようである。それゆえ、ここでも問うべきではなかろうか。なぜ「南」において「民主主義の発展」は見られなかったのであろうかについて。もちろんその際、「北」の「民主主義がきわめて不十分」な状態と「関係」づけながら。同時に、なぜ、「民主主義が一国的な性格」となるのか、ここに大きな関心を向ける必要がある。「民主主義の一国的性格」とは、換言すれば、「民主主義」なるものが豊かな先進国にのみ先ず実現されたということを意味しているのではなかろうか。そうであればなおさら、スペイン、ポルトガル、オランダ、イギリス、アメリカといった歴代の「覇権国」を中心として形成発展してきた「覇権システム」の形成。発展のなかで、南北関係の形成と発展の問題や、「民主主義の一国的性格」の問題を再検討する必要があるのではなかろうか。

それでは、最後に、21 世紀における「日本人」の「配置」に関して、ここで簡単に指摘しておきたい。村田モデルの[B→C→A]の[セカイ]からみるとき、21 世紀に生きる「日本人」は、B グループの中へ自由に行き来できて、そのグループの先頭を走る中国と利害を共有する「日本人」（そこにはかつての覇権国アメリカの富裕層の利害関係者も含まれている）と、A グループの「日本」に位置して、それと利害を共有する「日本人」（そこにはかつての先進国の解体された中間層と低所得層の利害関係者が含まれている）とに分裂している公算が大である。皮肉なことだが、こうした「日本人」の配置において前者の発する「ナショナリズム」の声が「日本」を席巻していく。そして一番の悲劇というか、決して笑えない「喜劇」は、この後者の「日本人」が前者の「日本人」に扇動されて、「ナショナリズム」あるいはもっと先鋭な「国粋主義」の担い手となっていく傾向が強いということである。今もこの瞬間において、日本の出版界のいわゆる中国や北朝鮮批判を声高に叫ぶ読み物の読者は、こうした後者の「日本人」であるとすれば、歯がゆい限りである。しかし「歴史」とはいつもそういうもので

あることを、ここでも確認するだけである。何も不思議がることはない。少し前の「日本人」がそれを証明していたではないか。あれほど「鬼畜米英」と言っていた「日本人」が、簡単に「寝返る」ことになってしまった。ただし、この「日本」と「日本人」の「物語」においても、やはりというべきか。この時は、村田モデルで描く［A→B→C］の［セカイ］においての「歴史」であったが、すでにAグループに「内通」していた「日本人」がいて、それが敗戦後以降とくに増大していったのだが、この中の「日本人」が当時まだBグループにいた「日本」の中の「日本人」を扇動していたのである。その前者の「日本人」が後者の「日本人」を「骨抜き」にしたのである。もっとも後者の「日本人」だって、食べるために、生き残るために喜々として自らを骨抜きにしていったのである。ここでも同じ図式が描かれる。

もっともこのように言ってしまっては身も蓋もないから、我々は理屈をつけることになる。それは「歴史」をつくることのできるものと、それに従わざるをえない「日本人」によって創造された「科学」的装いをまとった「理屈」に他ならない。まさに欧米のアングロ・サクソン民族が先住民に対して行った「差別」と「排除」あるいは「ホロコースト」の「歴史」が、「自由」、「民主主義」、「進歩」、「平和」の「歴史」というように、すり替えられていく、そうしたものといえるのではあるまいか。それにしても厄介な「世界史」の流れである。

第 2 部　「あの戦争」をめぐる考察から見えてくるもの

はじめに

第 1 部において、私は、日本の近現代史をめぐる様々な問題を、特にそのなかでも、「あの戦争」をめぐる問題を、福田和也『魂の昭和史』（小学館、2002 年）を参照しながら、私の研究と絡ませつつ、論究してきた。この補論は、そうした作業を踏まえた上で、「あの戦争」に関して論究されてきた「ことがら」が、実は、形を変えながらも、その代表的な事例としては、「水俣病」という「環境（公害）問題」として、また、「格差」社会をめぐる今日的な「貧困問題」として、あるいはまた、1980 年前後から顕在化する「日米異質論」に象徴される「日本問題」として、一貫して、「生き続けている」ということを示すために、まとめた拙論である。その意味では、私たちは、「あの戦争」を、たとえ経験していない戦後世代が増大してきた時代に暮らしてはいても、なお「追体験」し続けている、といえるのではないだろうか。少なくとも、私自身は、今も「あの戦争」の真っただ中にいる、と感じている。

こうした問題意識の下に、私はここで、「環境問題」と「格差」社会をめぐる問題と、「日本異質論」（「日本問題」）を、「あの戦争」へと導くに至った、「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（史）」（「構造（史）」）という観点から、再度、捉えなおしてみたいのである。それらの間には、お互いをつなぎとめる、「環」がつくられている、と私はみている。（なお、この拙論は、2010 年度前期の「リレー講義　環境問題（第①②③④回）」と「国際政治論」の講義ノートを、加筆修正したものであることを、ここで断わっておく。）

（補論）「あの戦争」－「水俣病」―「格差」社会をつなぐ「環」

Ⅰ　「環境問題」と「貧困問題」をつなぐ「環」

1. はじめに

「環境問題」とは一体何をいうのだろうか。「環境」、あるいは、「環境問題」について、何か語ってほしい、と私がもし求められたならば、私は、どうしても、議論の前提として、対象となるものを、「限定」しておかなければならない。たとえば、その一つとして、私が考える「環境」、「環境問題」とは、何であろ

うかと、やはり、そこから、始めなければならない。そして、そのためには、世間一般に、「環境」とか「環境問題」として、言われているのは何かを、私は、調べなければならない。そうした作業をする中で、私は、今、そうした「限定」を、私自身の手による、というよりは、マスコミを通じて、押し付けられているのではないか、ということに、初めて、気づくことになる。それが証拠に「環境」とか「環境問題」と尋ねられるや、多くの人と、同様に、私自身も、すぐさま地球温暖化、CO2 削減、温室効果ガス、北極、南極の氷といったものを思い浮かべることになるからである。何かしら、「環境」や「環境問題」とくれば、もう、こうした温暖化や、二酸化炭素に関係したもの以外には、ないかのように、なってしまう。

はたして、「環境」なり「環境問題」とは、そのようなものだけに、「限定」されるものなのか。そうした「限定」により、私たちが見失ってしまう「環境」なり、「環境問題」があるのではないか。たとえば、先の温暖化、二酸化炭素、北極、南極の氷の問題の背後に、換言すれば、そうした「自然環境」の問題（とされる出来事）に、多くの人々、諸国家、地域共同体といったいわば「社会（人的）環境」の問題（とされる出来事）が結びついている、すなわち「セット」として結合した、切り離すことのできない自明の関係を構成しているということを、一体どれほどの人が「自明」のものとして理解できているのであろうか。もう少しこれについて付言して置くならば、「水俣病」という時、その原因として「有機水銀」を指摘する人の中で、その水銀をつくり出した「社会環境（とその関係）」と、換言すれば、そのような指摘をする人自身の存在と、すなわち彼、彼女が存在している社会関係と、切り離すことなく結びつけて捉えることのできる人がはたしてどれほどいるのかということを、私は述べているのである。とくに現在では、温暖化対策のためにCO2 の削減が必要であり、そのためには、原発推進が必要不可欠であるとした世界的世論形成の流れも、そうした端的な例証の一つであると、私はみている。つまり「自然環境」と「社会環境」とを切り離して理解しているからこそ、そうした流れがあまりにも安易に受容されることになるのではないだろうか。

この拙論において、私が論究したいのは、、「環境」、「環境問題」がどのように扱われてきたかに関する「歴史」をふり返ることによって、「自然環境」と「社会環境」とは、切り離すことのできない「関係」を構成している、ということを再確認する、と同時に、今日の「環境」、「環境問題」への接近方法とその姿勢に関する問題点を、考察することである。少し横道に入ってみよう。以下の

問いを考えるとき、そこに、なにか奇異なことを、感じてしまうのは、私一人だけであろうか。最近よく野生動物（クマ、イノシシ、サルなど）が人里に出没する騒ぎがあるが、こうした動物が本来暮らしていたところで「普通」に暮らせなくなったことが彼らにとっての「環境問題」であり、「環境破壊」ではないだろうか。彼ら野生動物の「環境問題」と、私たち「人間」のいう「環境問題」とは、どのような関係にあるのだろうか。私たちの「環境問題」が仮に解決されるとしたら、たとえばエコ製品を使いそれで二酸化炭素が削減され温暖化の進行が阻止されるとき、彼ら野生動物は、元の暮らしを、取り戻せるのだろうか。私には、そうは思えない。どこか、なにかが、欠落している、それになにかがついても、引き返すことのできない、仕組みのなかで、がんじがらめとなっている、そのような状態ではないのか。

2.「環境」について語ることは「格差」について語ることであり、同時に「格差」について語ることは「環境」について語ることである。ー「環境」と「格差」をつなぐ「糸」を探す試み

福島良典氏による「温暖化の政治学」(『毎日』「発信箱」2009 年 12 月 28 日付)には、コペンハーゲン会議における「温暖化対策は政争の具と化した。」との記述と、以下のくだりがある。———先進国責任論を展開して、駆け引きを主導したのは中国、インド、ブラジル、南アフリカの新興 4 カ国。貧困層を抱える途上国陣営の一員として経済開発継続の権利を訴え、「力強い勢力として台頭した」（インド環境相）。———

ここに示されているのは、今日の「環境」をめぐる問題が、かつての先進国対途上国との「南北問題」に端的に示される「発展」の「格差」をめぐる問題と表裏一体の関係にある（あるのではないか）ということである。そしてまたそこから、こうした南北間の「格差」の問題は、今日の先進国における「格差」の問題と表裏一体の関係にある（あるのではないか）という問題が浮かび上がってくる。それゆえ、今度は、逆から、それらの問題をたどっていくならば、先進国における「格差」の問題は、南北間の「格差」の問題に、そしてそこから「環境」をめぐる、今日的課題へと、結びつくのではないか、といった、そうした構図を、描くことができるのである。

こうした観点から、「環境」と「格差」（ここでいう「格差」は先進国でいま議論の対象となっている「豊かさ」の中の「貧困」、「飢餓」「ワーキング・プア」という問題と結び付けられているもの）とを、つなぐ「糸」を、考えてみたい。

そのため第一段階として、先ほどの記事に紹介されていたように、「環境」問題の議論は、「かつて」の「南北問題」に象徴されていた先進国対途上国といった、「格差」問題を、伴っているということを、確認しておかねばならない。つまり、そのことは、「環境」問題の背後には、そうした「発展」の「格差」をつくり出してきた先進国と、そこに住む人々の「生き方」（歩み）が関わっている、関わっていたのではないか、という問題へと、私たちを導くことになる。それゆえ、もしそうした「生き方」（歩み）を不問に付したままで、ただ温室効果ガスの削減だとか、エコが大切だと声高に叫んでみたとしても、何かが抜け落ちていくことになるのではあるまいか。付言すれば、「あの戦争」をめぐり、「もう二度とあのような悲惨な戦争は二度とごめんだ」と、語る人々が、戦前と同じような「生き方」を繰り返しながら、そう述べるのであれば、という状況と、類似しているのではあるまいか。それゆえ、問うべきなのは、私たちが、そんな「ウソ」をついてまで、私たちにそうした「生き方」を繰り返させるものは、一体何かということであろう。ここでいう「生き方」とは、各人がその担い手となる「国家」という「共同体」の「生き方」である。それゆえ、そのことは、たとえば、日本という国家を前提に語るとき、「日本国」の「生き方」とは、その「歴史」として描かれるものになる。その場合、ごく簡単にいえば、「開国」以前の歴史と以後のそれに大別される。そしてここで念頭に置いているのは、「以後の歴史」である。その意味で、「近代化」を受容してきた「生き方」をめぐる問題が対象とならざるをえない。すなわち、政治的近代化としての自由民主主義に向かう「歩み」、経済的近代化としての資本主義に向かう「歩み」に関わる問題である。もう少し具体的に言うならば、「合理的（人間）社会」、「工業文明社会」「都市化社会」「大量生産・大量消費社会」の建設に関連した問題である。

3.「南北」間の「格差」問題から先進国における「格差」問題につながる「環」

今日の「北」の先進諸国における人々の暮らし向きは 1970，80 年代を境として「豊かな」状態から次第に「貧しい」状態へと変容していく。その一つの例として、「福祉」の後退化現象が挙げられる。「先進国病」。日本ではかつては「一億総中流化社会」として日本社会を呼んでいたのに対して、今では「貧困化社会」、「下流社会」として日本を評する。

その一方で、かつての「南」の途上国であった中国、インド、ブラジルといった諸国の経済的躍進は、顕著である。もちろん、そこにも、「格差」は存在し

ているのだが、先進諸国の「格差」が、いわば経済的後退、衰退という流れの中で、生じてきているのに対して、途上国のそれは、経済的興隆の中で、生み出されているものである。両者の「格差」は、その意味と意義を、異にしている。両者の「関係」を問うことが大切となる。こうした流れと呼応する形で、「民主主義」の歩みにも、大きな流れが見られる。すなわち、これまで「民主主義」というと、もっぱら、先進諸国の専売特許のように思われていたが、次第に、途上国地域にも、それが広がるようになる。いわゆる「民主化」の「世界化」である。それでは、何故、「民主主義」とか、「人権」が保障される社会は、これまで一部の限られた先進国地域に限定されていたのであろうか。それがなぜ、1970、80 年代を境に、大きく変容するに至るのか。こうした変容を、生み出す底流の動きに関連するものとして、「南北関係」の問題が関わっていたのである。

4.「南北関係」とそれに関連する問題は、「資本主義」の経済的「格差」の問題だけでなく、「民主主義」の政治的「格差」の問題でもある

「民主主義」の「格差」の問題とは、先進国地域では「人権」が保障されるのに対して、途上国地域ではそれが保障されないといった「人権」の「格差」の問題として最も典型的な形として現れる。その中でも北欧諸国に代表される「福祉国家」の姿には、その「人権」の「格差」が端的に示されている。すべての国がそれを望めば「民主主義」社会を実現できると考えるのはあまりにも空想的過ぎる。そこには、たとえある国や地域の人々が経済的に豊かで政治的に人権が保障された社会を切望したとしても、またそのための涙ぐましい「努力」をしたとしても、それが置かれた時代や環境の下では「民主主義」を実現するのは到底不可能であるような「構造」的問題があるのである。たとえば、イギリスに支配され続けたインドにおいて、換言すれば、「大英帝国下のインド」において「人権」を、「民主主義」を、「福祉国家」をいきなり望むことは土台無理な話であろう。インドはイギリスの植民地の下にあり、独立した主権国家でもない。ましてや国民国家を建設もできないのである。ここには、経済的、政治的「格差」（もちろんそれだけではない）が歴然として存在しているのである。それではいったい何なのだろうか。そうした「格差」をつくり出すのは、いかなる「構造」が問題だというのだろうか。

ややこしい話になってきたが、もしこの当時にも「環境問題」があり、たとえばインドにおける自然破壊の問題（征服戦争、プランテーションの開発など

に伴う）があるとした時、その「環境問題」は、こうしたイギリスとインドの関係、またそのイギリスとインドの関係をつくり出す「構造」問題を抜きにしては（つまり切り離しては）語れないということだけは「自明」のことではなかろうか。ここが、こうした視点を持つことが、大切なのである。くどいようだが、インドにおける「環境問題」、「環境破壊問題」は、イギリスによるインドの人々に対する「人権」の「破壊」に関する問題なのである。おそらくそのことを当時のイギリスに暮らす人々がどの程度自覚し理解していたかはわからないが、多くのイギリス人がそうした彼ら「イギリス人」自身による「インド人」の「人権」の「破壊」を、「環境問題」として、あるいはその問題の中にこうした「人権」問題が含まれているものとして捉えることはなかったであろうということは容易に推察できるのではなかろうか。

「北」のイギリスと「南」のインドとの「南北関係」は、このように、経済的「格差」のみならず政治的「格差」に大きく関わる問題であり、その「格差」をつくり出す「構造」が存在しているのである。いずれにしてもこの「格差」は「人為」によるものであることは間違いない。しかし、たとえ人為であるとしても、それだからまた「人為」によって解決可能だともいえないのが、まさに「構造」という問題なのである。

5. 先進諸国の「格差問題」から「環境問題」へとつながる「環」

ところで、「南北関係」という「格差」を、北の先進諸国は長い間に渡りつくり出すことに「成功」してきた。こうした「格差」を前提として、「大量生産」、「大量消費」に象徴される生活様式（フォーディズム）をもとにしたいわゆる「福祉国家」に代表される「豊かな社会」を先進諸国はつくることができたのである。それによって、第二次世界大戦からしばらくした後に、先進諸国は高度経済成長を遂げることにより、その途上において、最初に見られた国内的「格差」を縮小することができたのである。そのことによって、先にみたように日本においても「一億総中流化社会」という「中流の時代」が到来したのである。ここには、「南北関係」に代表される国際的「格差」の存在する中で先進諸国の国内的「格差」が解消されていく構図が見て取れる。こうした世界が 1970、80 年代を境として激変し始める。今日の「世界の工場」である中国を先頭にして、途上国地域に先進諸国の「ヒト・モノ・カネ」の大移動が起こり、それら途上国地域での目覚ましい経済発展に伴いそこでの「環境問題」は途上国のみならず、北の先進諸国の「環境問題」にも飛び火するようになってきたのである。

日本ロ中国の関係にもそれは窺える。たとえば、宍道湖の酸性雨問題、また日本列島に飛来する黄砂といった問題が挙げられる。と同時に、中国人の安い人件費により生産される100円ショップに満ち溢れる大量の低価格商品をはじめ、低廉な日常の生活関連商品の反乱は、たちまち日本の生産者に大きな打撃を与えることとなったのは記憶に新しい。既にそれまでにも工場移転をはじめ、先進諸国から「職の移転」が続いており、こうした流れはその後の「デフレ・スパイラル」と呼ばれる流れを導くところとなるのである。ここに「格差（環境）問題」と「環境（格差）問題」とを結びつける「環」が現れるに至るのである。先進諸国の政治家は、エコ産業開発（その代表格はオバマ大統領による「グリーン・ニューディール」構想である）を提唱することにより途上国に対して経済的優位に立とうとしているようにみられるものの、それはあくまでも選挙対策の域を出ない。

6.「環境問題」としての「豊島」をどう見ればいいのか

私たちが「環境」とか「環境問題」というときそれは上述したように「地球温暖化」とそれに関連した「温室効果ガス」とか「オゾン層の破壊」といったまさにあの米国副大統領であった人（アル・ゴア）の著作『不都合な真実』に描かれた事柄を連想しがちである。しかしこれはまさに「豊島」にとっては「不都合」な「真実」以外の何ものでもない。というのも、現代の象徴的な「産廃問題」が、「環境問題」の中心的課題として位置付けられないという恐れがあるからである。この「豊島」の置かれた「環境」とそれをめぐる「環境破壊」問題は、まさに豊島という島で生活する人々の「人権」破壊に他ならない問題であった。ここにもかつてのイギリスとインドの関係が形を変えて現れているのである。豊島に運ばれた「産廃」は、まさに「北」の「都会」と「南」の「田舎」の関係から生み出された「ゴミ」である。この「北」の生み出した「ゴミ」を「南」に持ち込むことで、北の人々は「ゴミ問題」と呼ばれている「環境問題」の解決を謀ったのである。北の人々にとっての「ゴミ問題」は、南の人々にとっては、「環境問題」以外の何ものでもなかった。

それゆえ、「地球温暖化問題」と「産廃（ゴミ）問題)」を切り離さないで捉えることが大切である。そのためにも「豊島」について取り上げてみたい。

「豊島」に象徴される「ゴミ」は、私たちの豊かな社会が創り出したもの。いわば高度経済成長の産物としてみることができる。国内的「格差」の解消のために国際的「格差」(「南北関係」）を前提として、またそうした関係をつくり出

すことにより、「北」はその豊かさを手に入れることができたが、その一方で、「北」の中に「南」を作らざるをえなくなったとみてよい。ところが、この時期、この「北」の中の「南」の「環境破壊」に対して多くの人々はそれを自らの「環境破壊」問題だとしてみようとはしなかったのも確かなのである。そのような人々が現在「環境問題」を語るとき、それは一体いかなる「問題」として語るのであろうか。「豊島」の「環境問題」をつくり出した高度経済成長の果実を享受した人々が、今度は「格差問題」に直面している。そうした問題を解決するために、先進諸国はエコ産業や原発を推進するために二酸化炭素の削減、温暖化対策という「環境問題」を創り出すことになったと考えられるだろうか。もちろん、それは「格差問題」を解決することにはならない。それではそこには何があるのだろうか。

Ⅱ　エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』の中に描かれた「環境問題」－「環境」問題は「政治学」（という学問）から考えるときどのように語ることができるのだろうか

1. はじめに

マスコミの報道において、「民主主義」「人権」「平和」という「言葉」を見聞きしない日はない。これらの言葉で示される事柄は、「政治学」の研究対象として重要な位置を占めている。「民主主義」なる社会を実現する際に、それでは「環境」は、あるいは「環境問題」はどのように結びついているのだろうか。議論をわかりやすくするためにここで問題提起をしておきたい。我々が享受してきた「民主主義」や「人権」、「平和」などが十分に保障される社会を実現するためには、「環境破壊」が必要不可欠なものとされてきたのではないか。こうした「仮説」をもとに「環境問題」について考察していく。

先述したように、「環境問題」を考えることは「格差問題」を考えることであると同時に、「格差問題」を考えることは「環境問題」を考えることでもあるという観点から論を展開したが、ここでは、そうした流れを踏まえた上で、「民主主義」（ここでいう「民主主義」とは「自由民主主義」を指す）の実現という観点から、もう少し、言及しておきたい。

「自然科学」の対象とする「環境」をめぐる議論は、「民主主義」の「正統性」

について考える上でも重要な意味を持っている。「社会科学」は、「公害」や「戦争（内戦）」に代表される「環境（破壊）問題」を自らの学問の「ウチ」に含み込んできたのだろうか。その問題を「外部」にあるものとして、その意味では、直接的な「責任」を負うことのないものとしてみてきたのではないだろうか。換言すれば、「民主主義」の形成、発展の「歩み」と「環境問題」の発生とは関係のない、いわばその「民主主義」の「外部」にそれ（環境破壊）は位置づけられると理解してきたのではなかろうか。そのことを示す例として、戦後日本社会は高度経済成長の下で、「平和」で豊かな「民主主義」社会を実現するという「正の側面」に反して、その一方で、水俣病という「公害」の「負の側面」がみられたといった見方が挙げられる。さらに視野を広げていうならば、世界的にみて 1950，60，70 年代に至る時期において、世界は「平和」で豊かな「民主主義」社会を実現したが、その一方で、「南北問題」に示される「格差」をつくり出したのであるといった見方が挙げられる。また米国による、「平和」と「民主主義」の世界の創造のためにという大義名分の下に始められた湾岸戦争、その後のイラクやアフガニスタンに対する激しい空爆は、人的、自然環境の双方に「優しくない武器」を使用することにより環境破壊を深刻なものとさせている。もう少し歴史をたどれば、ベトナム戦争での「枯葉剤」の使用は、森林破壊の最たるものである。人的破壊については言うまでもない。大切なことは、こうした例は「自然環境」と「社会（人的）環境」の「破壊」が各々相互に関係しているのを教えてくれるところにある。またそれを認識できる。

ところで、今日的「環境問題」とされている二酸化炭素の排出規制問題、温暖化問題で指摘されている「自然環境」の「破壊（されている対象）」と「呼応」している「社会（人的）環境」の「破壊（されている対象）」は、一体何だろうか。ベトナム戦争の事例を考えるとき、この「呼応」するものが見えにくいのではあるまいか。ましてやマスコミの「環境問題」報道からは分かりにくい。

ところで、上述の例が物語るように、「民主主義」の「平和」な社会の建設は「自然環境」の「破壊」を不可避としてきたのだとするならば、なぜ社会科学がその対象として取り上げる「民主主義」実現に向けての歩みに関する「研究」は、「環境破壊」に関わる「出来事」と切り離して行われてきたのだろうか。切り離したままで語られ続けてきた「学問」とは一体何であろうか。また先進国の「環境」と後進国の「環境」とを切り離したままで、私たちの「世界」がつくりだされることは不可能である。それは何よりも「大航海時代」以降の「歴史」が端的に示している。ヨーロッパの「環境」と、アジア、アフリカ、ラテ

ン・アメリカの「環境」とは、世界的一体「関係」を形成、発展させていく。それは、イギリスとインドの関係（イギリスによるインドに対する征服戦争）にも垣間見ることができる。

こうした「民主主義」と「環境」との関係を問う作業は、E・トッドが『帝国以後』、『デモクラシー以後』の中で描いた問題、とくに高等教育を受けたエリートが、左右問わず、「自由貿易」を支持することにより、「民主主義」を前提としながら、閉鎖的「寡頭体制」を管理運営していく弊害とも関わるのである。分かりやすく言うと、今日の「環境問題」は、国際政治経済構造（関係）ーまさにこれ自体が一つの「環境」であり、この「環境」の中で二酸化炭素の「排出権取引」が行われていることを鑑みれば、この国際政治経済構造（関係）ーという「環境」の抱える「問題」ということになる。

さて、これまでの話をまとめておくと以下のようになる。「環境問題」、とくに「環境破壊」（その中でも公害）を考えるとき、そこには「経済発展」の問題が関係している。そしてその「経済発展」は「民主主義」の実現の歩みと関係している。つまり「衣食足りて礼節を知る」ではないが、そこには生存を保障する豊かさが必要であり、そのためには「経済発展」が求められることになる。その際、「環境破壊」が引き起こされるのである。この流れは一つの「関係」として切り離されないものである。「正の側面」と「負の側面」に区分けして論ずることはできないのではないか。ところが私たちはそうした区分けを通した見方を所与の前提としてきたのではあるまいか。

こうした問題を考察するために、エンゲルスの著作を手がかりとして論を展開していきたい。

2. エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』の中で描かれた「環境」問題とイギリスの「民主主義」の発展との「関係」

何故「環境」問題が生まれるに至ったのか。その起源を考える手がかりの一つとして、エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』が挙げられる。そこには、19 世紀中頃のイギリスの労働者がおかれた悲惨な「環境」が描かれている。彼らの劣悪な「衣・食・住」の労働「環境」の惨状と、彼らをはじめとした、イギリスの大都会で生活している人々を取り囲む自然「環境」の汚染の、「関係」が、描かれている。

そこには、イギリスの「産業革命」として語られてきた「経済発展」の歩み

（「世界の工場」に至る歩み）の「問題点」が描かれている。ただし、そうした問題点を、「イギリスの資本主義」の問題としてのみに限定してみることはできないのではないか。（何度も言及しているインドをはじめ、アイルランドなどの植民地、さらにはオランダやのちのアメリカ合衆国と関係づけて捉えることが大切。）そもそも、なぜこのような「人間の尊厳」を踏みにじるような「経済発展」を実現する「役割」を、なぜイギリス国家（政府）は、イギリスの資本家と呼ばれる人たちは、労働者と位置づけられた人たちは、引き受けなければならなかったのであろうか。より具体的に言うならば、エンゲルスの著作で描かれているようなイギリス人労働者の「環境」（生活者としての、労働の場としての「環境」）を「破壊」してまでも何故「経済発展」を実現していかなければならないのか、またそのようにしてまで「世界の工場」の地位を獲得しなければならないのか。

これに対する答えはいろいろあるが、個人レベルでは、「食うため、仕方ないだろ、それしかないのだから」。また、国家レベルでは、「国家の生存のため、仕方がないだろ、それしかないのだから」までに該当する類のものである。エンゲルスの著作の「世界」も、今日的な意味での二酸化炭素の削減とか地球温暖化の問題と同種の「問題」が存在していたかもしれないが、エンゲルスの描く「世界」の「環境問題」として提示されているのは、何よりも「人の問題」（労働者の「生活環境」の破壊に関する問題）であることに注意すべきではなかろうか。これに対して現代の「環境問題」として喧伝される温暖化問題には、「人の問題」が結び付けられていないのではないか。つまり、極端に言えば、「地球にやさしい」好条件の「自然環境」を創り出すことに成功したものの、そこ（地球）に暮らす人々は「格差問題」「介護問題」「年金問題」「財源問題」に四苦八苦して悪条件の「社会環境」の下におかれているといった構図が描かれる。今日の「環境問題」とは、地球温暖化の問題というよりも、むしろこうした「自然」と「社会」との「環境」を結びつけて捉えることのできない私たちの「生活環境」の問題を指しているのではなかろうか。そこでいう「生活環境」とは、現代の私たちの一人一人の「生活」の「関係」を意味している。その中でもやはりマスコミや大学（学問）の問題は大きい。そこには、「政治」や「経済」の問題が関連している。

ところで、エンゲルスが描いた労働者の生活を悲惨にするような「経済発展」と「自由な民主主義」の社会を実現する「歩み」との間には、一体どのような「関係」が存在しているのだろうか。この関係について素描しておく。

イギリスはかつて「揺りかごから墓場まで」と形容されるように、「福祉国家」の理想的モデル国とされていたことがある。「福祉国家」とは、「民主主義」の社会のより「高度化」した「段階」にあるものとして理解できる国家である。ところでここでいう「民主主義」の社会なり国家を創り出すには、先ず何よりもイギリスは国際政治経済構造（関係）の中で、「自己決定権」を手にすることが必要であった。すなわち独立した国家主権である。また主権を手にした後も国家を存続させていかねばならない。先の国際政治経済構造の中において、それを実現するためには、イギリス国内の「経済発展」（大きな意味では国内的「開発」）と対外的な「経済発展」（大きな意味では国際的「開発」あるいは「開発」という名の「協力」）を同時並行的に（もちろんそこには多少の時間的ズレはいつもあるのだが）行うのである。何故そうなるのか。これはすでにスペイン、ポルトガルそしてオランダがそのレールを引いていたということである。「大航海時代」以降のこれら諸国によるアジア、アフリカ、ラテン・アメリカ諸地域に対する「環境破壊」は筆舌に尽くし難い。

こうした流れの中で、国際政治経済構造の中での「覇権」を目指すイギリスの国内的「経済発展」の一つの「成果」としての「工業化」（いわゆる「産業革命」）とそれに伴う「世界の工場」としての地位がある。そうしたイギリスの歩みを、国内においてはイギリスの労働者、資本家と呼ばれた人々が支える。国外においては、オランダの産業構造の変化（「世界の工場」から「世界の銀行」へとオランダの金利生活者国家」への変容）とインドやアイルランドに代表される海外植民地の存在が支える。こうした国際政治経済構造（関係）の中で、エンゲルスにより描かれたイギリスの「環境問題」が生じる。

エンゲルスの描いた「悲惨な」労働者の「環境」が、19 世紀―20 世紀転換期において次第に「改善」される。ところが、エンゲルスの著作の刊行から約 60 年を経過した日本で、新たな「悲惨な」「環境」が生み出されることになるのである。

Ⅲ 「環境が私たちに問いかけているものは何か」
―――荒畑寒村『谷中村滅亡史』で描かれた「環境」

1. はじめに

何故イギリスは 18 世紀の後期に、「世界の工場」へと押し上げられたのだろうか。何故 19 世紀の後期に、アメリカは「世界の工場」へと押し上げられたの

だろうか。何故 20 世紀の後期に、中国は「世界の工場」へと押し上げられたのだろうか。これらの諸国は大なり小なり、「世界の工場」としての「役割」を引き受けると同時に、その当然の帰結として「環境問題」に直面するのだが、何故そうした問題を繰り返し経験せざるをえなかったのだろうか。一番近い例として、私たちは中国の「世界の工場」へと向かう歩みと、悲惨な「環境（公害）問題」の「発生」との関係を挙げることができる。その際、先進国の人々は、「人権」を無視してまでの中国の「経済発展」（工業化）を非難してやまない。彼らとて同じことを経験してきたはずなのに。「環境問題」を引き起こすことが分かっていながら、なぜ同じような「歴史」を繰り返すしかないのであろうか。かつて日本は、こうした歴史を一度ならず二度まで経験している。戦前と、戦後において。今日はその戦前の「歴史」について取り上げてみようみよう。

2. 荒畑寒村『谷中村滅亡史』の中で描かれた「環境」問題と日本の「民主主義（自由民主主義）の発展」との「関係」

1 において取り上げた、エンゲルスの著作の刊行から、60 年経過した、日本において、「足尾鉱毒事件」（明治 20 年代から 40 年代にかけて大きな問題となる）が起きている。イギリスの「世界の工場」、「世界の銀行」の歩み、イギリスの「民主主義の発展」の歩みと「足尾」はどのように「関係」づけることができるのだろうか。

＊足尾鉱毒事件―――明治期の社会問題。近代日本における最初の公害問題。古河市兵衛が経営する栃木県の足尾銅山から流れ出た鉱毒が渡良瀬（わたらせ）川沿岸一帯を汚染し、人体や農作物に大きな被害をもたらした。渡良瀬川の異変は明治 10 年代から知られていたが、1891（明治 24）田中正造が議会でとりあげてから大問題となった。当初古河は示談でことをおさめようとしたが、96 年の大洪水で被害が深刻化し、被害民たちは 97 年から 4 度にわたって上京、直接政府に操業停止を訴えた。政府は古河に鉱毒予防工事を命じる一方、1900 年群馬県川俣（かわまた）で上京途中の被害農民を警察・憲兵が弾圧した川俣事件を機に、運動の鎮静化をはかったが、田中正造の天皇への直訴で世論は再び沸騰。日露戦争後、政府は鉱毒問題に終止符をうつため渡良瀬川下流の谷中（やなか）村をつぶし遊水池をつくろうとしたが、谷中残留民の根強い抵抗が続いた。煙害による山林被害も甚大で、1973 年に閉山された後も鉱毒の流出が続いた。―――（『日本史辞典』）

足尾鉱毒事件について、ここで荒畑寒村の著作の「結論」と、鎌田慧による「解説」を紹介しておく。荒畑は「結論」において以下のように述べている。

谷中村の滅亡について、荒畑は明治政府の権力と資本家の金力とが結びついて計画通りに谷中村を滅亡させたとみる。古河市兵衛、陸奥宗光、古河潤吉、原敬、西郷従道にみる「紳士閥階級」の成立（174 頁）、明治 10 年に政府による足尾銅山の古河市兵衛への払い下げ、政府は鉱業主の利益のために藤川県知事を島根に追放し、鉱毒被害民を示談に追い込み、そのためにどう喝脅迫も辞さない。あるいは捕らえて獄につなぐ。「資本家の罪跡を埋没」させるために谷中村を買収（強制土地収用）（175 頁）。谷中村の滅亡が世人に教えたことは、「資本家は平民階級の仇敵（きゅうてき）にして、政府は実に資本家の奴隷たるに過ぎざる事、これ実に谷中村滅亡がもたらせる、最も偉大なる教訓にあらずや。」「而してかくの如きの残虐横暴は、これ実に政府が、古河らが行ひ来れる、鉱毒問題てふ積年の大罪悪を埋没せんがために企てたる、数年間にわたれる準備あり、組織ある、大罪悪なるを思はざるべからざるなり。」（177 頁）

荒畑寒村が糾弾してやまない、日本の資本家、政治家などから形成された「紳士閥階級」による谷中村を滅亡させていく歴史をみるとき、ここでもう一つの「疑問」が生まれる。何故彼らはそのような残虐横暴な行動に走ったのかという問題。彼らにそうさせるようなもっと大きな「圧力」の存在に目を向けるべきではないだろうか。仮にその圧力を、当時の明治日本が組み込まれていた「国際政治経済構造（関係）」の存在からもたらされるものとみるとき、谷中村を滅亡に導いた足尾鉱毒事件という「環境（公害）問題」に関わる「出来事」について「勉強」するということは、結局のところ、こうした「国際政治経済構造」がそれでは一体どのようにして創り出されてきたかについて、先ずは考察することであるのを私たちに教えるのではなかろうか。当時の日本においても、「環境破壊」に導く、換言すれば、19－20 世紀転換期の明治日本の「温暖化問題」は想定されたであろうし、その意味では、この時期の「温暖化問題」を「解決」しようと（もし本当に）それに向き合うのであれば、どうしてもここで指摘したように、当時の「国際政治経済構造」を俎上に載せることが必要不可欠であろう。私は、こうした「国際政治経済構造」の形成、発展の「歴史」を、先進国（地域）、中進国（地域）そして後進国（地域）における「経済発展」と「民主主義の発展」の「関係（史）モデル」を構想することにより考えてきた。

それでは次に鎌田慧の「解説」を紹介しておく。鎌田は「解説」において非常に重要な現代にも通じる寒村の描いた「世界」を教えてくれている。寒村の

著作は、1907 年（明治 40 年）、寒村 20 歳のときに書かれたものである。折しもこの年に政府による「谷中村の強制土地収用」が行われた。寒村は「政府と県とによる暴虐を広く世間に伝えようとする」（187 頁）谷中村は「公害と開発」との原点であるのと同じように、この本が「国家と企業」との、奇妙な関係を学ぶための最良の「教科書」「強制土地収用広告」を発したのは西園寺公望内閣の内務大臣、原敬。原は、1 年前まで足尾銅山を経営する「古河鉱業会社」の副社長。原と古河を結びつけたのは、陸奥宗光外相。宗光の次男（潤吉）が古河家の養子。潤吉の死後、後を継いだ古河虎之助は西郷従道の娘と結婚。「政財軍の強固なトライアングルが形成される」（188 頁）。陸奥宗光は、日清戦争後の下関条約時の日本代表。巨額の賠償金をこの流れで考えるとき想像されることは、「政治家、官僚、財界三つ巴の癒着構造には、いまもなおさほど変わりはなく、利益供与と天下りの腐敗の関係」（189 頁）。付言すれば、「環境問題」を考えるということは、こうした「政・財・官」の癒着構造を考えることでもある。ところがどうもこうした観点からの考察は希薄になりつつある。「環境問題」とは「温暖化問題」であり、「国益」より「地球益」が大事であるとか、「地球にやさしくする」等々に、論点の「すり替え」が行われているのではなかろうか。「エコ製品」「エコ産業」の流れが先の「癒着構造」とどう結びつくのか、つかないのか。「谷中村が滅亡させられたのは、そこをダムにして、渡良瀬川とそれを受ける利根川の洪水を防ぐ、との名目によっている。しかし、洪水の発生は、その上流にある足尾銅山の鉱滓（こうさい）の堆積と燃料などの採取のための森林乱伐による。つまりは資本家の勝手によるものなのだが、それを取り締まることなく村を潰してダムをつくるのは―――古河市兵衛、陸奥宗光、原敬による閨閥であり、県知事の任命制だった。」（193 頁）ここのくだりに私は少し引っかかりを覚える。「資本家の勝手」で済まされないものが当時の日本にあるのではないか。逆にいうと、「勝手にできないこと」が存在しているのではなかろう。「さらには、砂川米軍基地の建設や成田空港建設に使われた強制代執行と谷中村との間に、どのような民主主義の発達があるといえるのだろうか。」（194 頁）ここに言われている「民主主義」とはどのようなものだろうか。前回（第 2 回）に紹介した中国の学者の称賛した「民主主義」を指しているのだろうか。この 194 ページの最後の段落に注目したい。―――公害は拡散し、「環境問題」として世界化している。ダイオキシンにしろ、二酸化炭素にせよ、フロンガスにせよ、あるいは温暖化防止口実にさらに増強しようとする原発建設にせよ、あいかわらず大量生産をつづける発生源の規制なしには解決しようもない。―――。

ここにある「発生源の規制」とは何を指しているのだろうか。たとえば、足尾銅山の操業を規制する時、当時の明治期日本の「経済発展」はどのような影響を受けただろうか。この「発生源の規制」の問題が最も大切。私はこの「発生源」を「国際政治経済構造」としてみているので、また先に示したように、「経済発展」と「民主主義の発展」の「関係（史）」モデルからみているので、その「規制」については、すこぶる「悲観的」ならざるをえない。

さて、上述したように何故イギリスが直面した「環境」問題に、日本も直面することになったのだろうか。何故そうした問題は繰り返し起こるのだろうか。そうした「環境」問題の（繰り返される）歴史と「民主主義の発展」の歩み（歴史）の間にはどのような「関係」が存在しているのだろうか。

3.「開国」から「明治維新」そして「大日本帝国憲法体制」（「明治デモクラシー」）の下での日本の「近代化」

当時の日本の至上課題である「富国強兵」のスローガンの下での「国造り」（国家建設）が急務とされた「経済発展」－いかにして「産物の国」の「段階」を卒業して「製物の国」の「段階」へと「上昇」できるか。日本における「足尾銅山」の重要な「役割」その「開発」は急務。―――日本の「ナショナリズム」を推進するためにも何よりも日本は経済的に豊かにならねばならない。「経済発展」の必要性。そのためには、足尾の銅山開発は必要不可欠。そのために、その間、鉱毒事件が起こり、また田中正造らの問題告発がたとえなされても、それでも開発の手を緩めようとしない（＊できなかった）明治日本政府の姿勢に注目することが大切である。

こうしたくだりに関して、アンドルー・ゴードン　森谷文昭訳『日本の 200 年　徳川時代から現代まで　上』においても詳しく紹介されている。とくに、ここでは、「第七章　社会、経済、文化の変容」と「第八章　帝国と国内秩序」から、引用しておく。先ず、第七章の最初の段落から紹介しておく。―――一八六〇年代から八〇年代までのわずか三〇年間に、日本はアジアきっての経済力を誇るようになった。その当時日本につけられた「アジアの工場」という異名は、二十世紀に入ってからも長いあいだ使われつづけた。一八九〇までに国内市場を支配するにいたった繊維産業は、中国やインドでイギリス企業と互角以上に競いあうようになった。日本の海運会社は、繊維製品のヨーロッパ向け輸送でも、ヨーロッパの商船と競争しあうようになっていた。―――また次の段落、―――長期的な視野に立ってみると、明治期の日本の経済的な離陸はお

そるべき異業であった。―――（195 頁）そして次の（196 頁）に、重要な指摘がなされている。―――しかし、その一方で、一八八〇年代から九十年代には西洋一辺倒の近代化をまっしぐらに追求するなかで、なにか重要なものを失いつつあるのではないか、という奥深い懸念がしだいに強く頭をもたげてきた。このような不安に突き動かされた知識人たちは、日本的「伝統」に代わる新しい概念をいくつも大急ぎでつくりあげた。また、この不安感は、政府の高官たちのあいだで、社会的な騒動や反政府運動への不安とも結びついた。政府の高官たちは、個人の思想と行動に圧倒的な制約を設けるというかたちで、この不安に対処した。―――このくだりと先の荒畑寒村や鎌田慧のくだりとの「違い」にも注意してみたい。「奥深い懸念」なり「不安」を生み出すものは、一体何か。

この第七章では 200 頁から 208 頁の「産業革命」のくだりに注目したい。最初の段落に、―――明治国家はすでに一八八〇年代はじめまでに、資本主義的工業化のためのインフラストラクチャーの建設に着手していた。―――世紀の境い目を挟んで一八九〇年から一九一〇年にいたる二〇年間に、日本経済は工業化に向けて離陸した。―――（209 頁の 5 行目までのくだり。次の段落とその次の段落にも注意。）―――工業化を主導したのは繊維産業だった―――日本の初期の工業化を主導した第二の基幹産業は、石炭と鉱物を採掘する鉱業だった。―――さらに、二十世紀はじめの時点になると、足尾の銅山と精錬所が、世界有数の銅生産施設として台頭した。―――

また 203－205 頁にかけて、「政・財・官」のネット・ワークの形成について指摘されている。とくに後発国の発展戦略として―――なかには―日本のように―政府が手がける官営のプロジェクトと巨大な民間独占事業体が共同で主導する場合もあるだろう。―――

まだまだ大切なくだりはあるのだが、ここまでの内容をもとにまとめてみると以下のようになる。「足尾鉱毒事件」という日本で最初の大きな「環境（公害）問題」は、日本が「アジアの工場」となる流れの中で生まれたということである。それゆえ、なぜ日本は「アジアの工場」とならなければいけなかったか（なぜ「アジアの工場」になれたのか）を問わない限り、「環境問題」に向き合うことはできないということである。そこから直ちにわかるのは、「資本家の勝手」とか、「資本主義の暴走」だとかといった類の議論では容易に片付けられない問題が存在しているということである。少なくとも私はそのようにみている。何故、イギリスと同様に、日本国家（政府）は、日本の資本家は、日本の労働者

は、農民は、そして市民は、悲惨な「環境（公害）問題」を、この時期に引き受けるという「役割」を担わざるをえなかったのだろうか。日本が、かつてのイギリスが引き受けていたような「役割」を引き受けていたときに、そのイギリスはこの時期一体どのような「役割」を担うようになっていたのだろうか。そうしたイギリスと日本の引き受けた「役割」の間にはどのような関係があるのだろうか。またそうした「役割」と「民主主義の発展」の間にはどのような関係が見出されるのだろうか。ここにもエンゲルスが描いたイギリスと同じように、こうした問題は、「経済発展」と、「環境（公害）」の関係についての考察から、「経済発展」と「民主主義の発展」（「自由民主主義体制」に関わる問題）の関係についての考察、さらには、「覇権国」「覇権システム」（国際政治経済関係に関わる問題）の考察へと、私たちを導いていくのである。

Ⅳ　結びに代えて:「環境問題」が私たちに問いかけているものは何か」

石牟礼道子『苦海浄土―わが水俣病』（講談社文庫 2004 年）の中で描かれた「環境」問題と「民主主義（自由民主主義）の発展」との「関係」について――戦後日本の「歩み」が問いかけているもの――

明治期の憲法体制とは異なり、基本的人権と平和を尊重した「日本国憲法体制」の下で繰り返された「環境（公害）問題」―――一体なぜなのだろうか。そこには何が、どのような「関係」が存在しているのであろうか。

従来の見方―――「大日本帝国憲法体制」の下では、「人権」が重視されないことから「経済発展」が実現しなかった。そのため、結局は戦争へと至る。「民主主義国」に対する戦争――

これに対して、戦後の日本は、占領されたけれども、そのもとで「日本国憲法体制」（占領民主主義、戦後民主主義とも呼ばれてきた）を確立したことから、今度は先に「人権」が保障されたことから「高度経済成長」を実現できたとみる。こうした論は、戦後最大の「環境（公害）問題」は、そうした「平和」と「人権」を大切にすると謳った「平和憲法体制」のもとで引きおこされたということに対して、どのようにこたえるのだろうか。

さらに、ここで「1940 年体制」論の観点から、上述した議論を、見直してみたい。いわゆる、従来の「憲法体制」における、日本の戦前と戦後の「断絶」を認め

るものと、「連続」を認める者との対立、論争が見られたが、そうした「断絶」、「連続」の見方を、水俣病の観点から捉えなおすとき、従来の「断絶」、「連続」といった見方では、論究され得ない問題が存在していた。その一端について、すぐ上で、指摘していたのだが、同様に、日本の高度経済成長と、1930、40 年代における「戦時動員体制」とを結びつけて、そうした「戦時体制」の担った「役割」を、積極的に評価して、それを、戦後日本の経済的成功と結びつけて語る、いわゆる「連続」説の論法は、先に示した「憲法体制」の「断絶」を、強調する論に見られた問題点を、同様に、露呈しているのである。すなわち、水俣病という「環境（公害）問題」の観点から、「1940 年体制」論を見直すとき、「戦時動員体制」が、あるいは、そうした動員体制を作り出す仕組みが、水俣病を生み出したと想定されるからである。さらに、「日本」と「日本人」は、なぜまた、戦後において、「戦時動員体制」なる仕組みを、必要としたかを、問題として考察すべきであることがわかる。私は、この問題を、あの[セカイ]の「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（史）」の形成と、発展、そして変容の歩みと結びつけて考察すべきであると、「1940 年体制」論者に対して、主張しておきたい。

ここで問題となるのは、この時期（20 世紀の後半）になっても日本国家（政府）は、日本の資本家（経営者）は、労働者は、市民は、また再び戦前の明治期の日本や、18 世紀の後半から 19 世紀の中頃にかけてのイギリスが担っていたような「役割」を、引き受けなければならなかったのではないか、ということである。もしそうであるとするならば、一体どうしてそのようなことになるのだろうか。なぜまた同じような問題が繰り返されたのだろうか。

こうした問題意識を踏まえて、ここで石牟礼道子の著作の「あとがき」とそこに「解説水俣病の 50 年」を載せている原田正純氏の見解を紹介しておく。

356 頁最後から 2 行目に「足尾鉱毒事件谷中村―――」と続く文章のなかに、チッソ水俣病「公害」と明治期の「公害」とのつながりを石牟礼氏は捉えている。357 頁真ん中の段落に注目したい。―――仙次郎では国に提供するのは個人の私有財産であるが（もちろん生存権であったが）、七十数年後の水俣病事件では、日本資本主義がさらなる過酷度をもって繁栄の名のもとに食い尽すものは、もはや直接個人のいのちそのものであることを、わたくしたちは知る。谷中村の怨念は幽暗の水俣によみがえった。―――。どうしてこのようなことになるのだろうか。改めて、ここでも、私は、強調しておきたい。「憲法体制」や、「1940 年体制」をめぐる論争に加わる論者は、まず、このような問題に向き合って欲しいのである。それを念頭に置きながら、「断絶」、あるいは「連続」の観点から、

このような問題を、問い直すとき、従来の議論のあり方がどのように修正可能かを、考えてもらいたいのである。ここで少し考えたいのは、私有財産（権）、あるいは生存権というとき、古河市兵衛の「私有財産権」あるいは彼の「生存権」とここにある高田仙次郎のそれとはどのような関係にあるのだろうか。また戦後のチッソの江頭社長と水俣病患者の間において、それらの「権利」はどのような関係に置かれているのだろうか。もしそこにおいて著しい「不均衡」がみられる時、はたしてそれは「日本資本主義」の「過酷度」にもっぱら与かっているのだろうか。私は前回のノートにも書いたように、日本資本主義だけでなく、その日本も含まれる世界資本主義なるものにも原因があると考えるのだが、その際、さらに「日本の民主主義」の歩みにも、また「世界民主主義」の歩みにも問題があるとみている。それゆえ、「資本主義」の「世界システム」と「民主主義」の「世界システム」との両者を関係づけて考察することが大切ではないかと考えるのである。もう少しだけ踏み込んで述べるならば、先進国の豊かさと、そこに住む人々の享受している「人権」の「段階」の「高度化」は、途上国の貧しさとそこに暮らす人々が享受する「人権」の「段階」の「低度化」と相互に「関係」して創り出されてきたと考えるのである。少なくともこの「関係（史）」は、1970 年代、80 年代まで続いてきた。先進国の「資本主義」のみならず、そこで暮らす人々の「人権」、とくにそこで享受される「人権」（私有財産権、生存権、営業権（通商の自由権）が、途上国の「資本主義」の「あり方」に対しても「注文」を付けることができるということである。（付言すれば、ここでいわれる「人権」とは、福田和也が、『米英にとっての太平洋戦争』の「解説」において、「世界史」の歩みをもとに語る「市民的自由」にほかならないものである。）と同時に、途上国の「人権」の「段階」も決めることになるのである。こうした「関係」はさらに、先進国の内部においても、また途上国（地域）内においても創り出されていく。そのことは、先述したように、古河市兵衛と高田仙次郎との間に、またチッソの江頭社長と水俣の農漁村民との間にもみられる「関係」である。

石牟礼が 359 頁の 5 行目で———極限状況を超えて興亡を放つ人間の美しさと、企業の論理とやらに寄生する者との、あざやかな対比をわたくしたちはみることができるのである。———と述べる「企業の論理」に代えて、私は「経済発展」と「民主主義の発展」の「関係」を位置付けて、「水俣病」という「環境（公害）問題」を再考察すべきであると強調しておきたい。

それではここで原田正純氏の「解説　水俣病の五十年」をみてみよう。こ

の「解説」は水俣病がどのようにして発生したのか、またその背景について、また会社の患者への対応、さらに水俣から新潟市阿賀野川下流域へと「第二の水俣病」が発生したことなどを非常に分かりやすく述べている。このなかで私が注目したいのは、406 頁の最後の段落―――それにしても、曲がりなりにも政府が解決策を提示したのは、なんと水俣病の正式発見から四十年も経ってからである。時間がかかり過ぎた。―――そこには、被害者が高齢化して死んでいくのを待っているかのような政府、企業、そして審議会や専門委員会の姿勢があり、―――こういった構造は水俣病に限らず他の公害、薬害などにみられた。したがって、構造を変革しない限り悲劇は繰り返しおこり、被害は拡大し、被害者の救済は遅れ、不十分なものとなる。―――原田氏のいう「構造」の問題は氏のいうとおりだと思うのだが、同時に原田氏の指摘するそうした「構造」を生み出していく背景に、私は、第 2 回、第 3 回において、そしてこの第 4 回においても論じているように、「覇権国」が中心となって創り上げてきた「覇権システム」とその「秩序」の存在と、またそれを前提として形成発展の歩みをみた「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（構造)」があるとみているのである。

原田は 407 頁のその次の行において――――あのとき、人が傷つき、狂い、死んでいるとき、世論（国民）もまた、豊かさと便利さ（経済発展）を選択したのではなかったか。その意味では私たちにも責任がないとはいえない。被害者だけにそのツケを背負わせてはならない。「負の遺産」として国民全体が受け止めなければ被害者は救われない。―――このあと数行続くこの段落のくだりは大切な問題を提起している。私はここで気になるのは、原田が「選択」という言葉を使っているところである。そもそも「選択」という次元で語れるような問題であったのだろうか。別の「道」を「選択」できたのであろうか。非常に厄介な問題である。また「負の遺産」という言葉の使い方も気になる。それでは「正の遺産」とは一体何なのであろうか。別に揚げ足をとるつもりはない。私などと違い原田氏は「水俣病」の第一線に立ち戦い続けてこられた正真正銘の「研究者」であるからだ。それはきちんと断っておきたい。ただ、やはりこの「負の遺産」という言葉遣いには抵抗を覚えてしまう。そもそも「正」なるものと「負」なるものは各々別個のものとして切り離せないものだとみている。しかも「水俣病」の「患者側」からみるとき、彼らにとって「正なる遺産」とは、患者でない一般の国民が考える「正の遺産」と「同じもの」だと考えてしまってよろしいのだろうか、そう私などは考えてしまうのである。ただし、こ

れも相当に難しい問題であるのは確かであるが。

ところで、日本の公害問題にみられる「環境」問題は、その原因をたどっていくとき、「人権」を無視しながら、「経済発展」(「開発」) をシャニムニ推進していった「日本」と「日本人」の「生き方」にいきつく。表面的には、日本の自民党政府を、財界を、あるいは、資本主義や、生産至上主義を、すぐに槍玉に挙げることはたやすい。しかしそれらの問題は先の「生き方」に関わる。そうした「生き方」と「自由民主主義」とがどのように関わるのかといった問題に突き当たる。

こうした問題との関連から、ここで栗原彬編『証言水俣病』(岩波新書 2000 年) の著作の一節を紹介しておく。5 頁の「たれ流し続けた水銀」のくだりに、水俣病の兆候は、遅くとも 1953 年には現れていたこと、1956 年は水俣病が多発した年であり、また水俣病の発生が公式に記録されたということ、1959 年に熊本大学医学部研究班が水俣病の原因物質が魚貝類中に含まれた有機水銀であることを明らかにしたことが述べられている。6 頁には政府が公式に水俣病の原因をチッソ水俣工場のアセトアルデヒド製造工程中に副生されたメチル水銀を含む排水にあることを 1968 年になってからやっと認めたこと (水俣病を公害病として認定)、水俣病の公式発見から一二年間、原因物質が特定されてからでも九年間、有機水銀を含む排水のたれ流しが続き、政府もそれを黙認したということ、について書かれている。また 8 頁では、水俣病患者の英語訳が、コッシュマンによれば、“Minamata disease suffere”となることが、つまり単なる “patient” ではないことを、栗原は強調している。そのことは、――医者や医療に対する「患者」――として「水俣病患者」をみるのではなく――社会総体の加害に対する「受苦者」を意味する――存在として捉えなければならないといっている。コッシュマンは、――水俣病が医学の問題にとどまらず。社会的な受難、もっと言えば社会的に構造的な殉教だといっている――。その意味で、「水俣病は社会病である。」このくだりは重要なところである。それゆえ私にとって、問題はこうした「殉教者」がどのような仕組みの下で創り出されるのか、とくに、そうした「殉教者」と「民主主義の発展」の歩みとの間にはどのような関係が見出せるのかという問題である。

11 頁の栗原の「四　生産力ナショナリズムの政治」のくだりも注目したいところ。とくに、「民主主義の発展」に、それがどう関わるのか、関わったのか、という問題に関して。同頁の最後の 2 行目から 12 頁の 3 行目にかけて「生産力ナショナリズム」を定義し、またその例として明治期、戦中期そして高度成長

期の日本を描いているが、その定義は――国家や会社などのシステム全体の生産力を増大すれば、人は豊かになり幸せになるというイデオロギーであり、政策でもある――とされる。この関連で、12 頁の 4 行から 7 行目にも目を向けて、そこのくだり（――国家官僚の主導下に政・官・財・学の権力同盟を推進母体として、何よりも経済価値を優先させ、生産力ナショナリズムに導かれてひたすら進歩と開発と経済成長を追い求め「豊かな社会」と経済大国の実現が目指された。――）と戦後の日本の「民主主義の発展」との関係を考察することは大切となる。栗原の論理に従うとき、「平和と民主主義」はあまり歓迎される代物ではないことになるのだが。

栗原は、石牟礼や原田の見方と異なり、チッソと政府の「癒着」の構造の背後に、単なる「企業の論理」とか官僚による政治指導といった仕組みの問題というよりも、国際関係の仕組みの存在に目を向けている。13 頁の最後の段落――先進国に追いつき追い越せと唱導した生産力ナショナリズムの政治は、大量生産・大量流通・大量消費のシステムを急速に制度化して、一方に耐久消費財を満載した「豊かな社会」、快適で便利な都市型の生活を作り出すと同時に、他方では水俣病にみるような人間は皆、環境破壊、そして社会破壊を生み出した。――と栗原は主張するのであるが、ここでも私は、それではこうした歩みと「平和と民主主義」の歩みとの間には、矛盾する関係があるのか、それとも相互に補完し合う関係があるのか、それを問題にしたいのである。ここで栗原が指摘している―後発的近代化の特徴を示す企業の手法に、行政も連携していた――のくだりを、エンゲルスの描いた「世界」と関連付けてみるとき、当時のイギリスもまた「後発的近代化の特徴を示す企業の手法」の下に「世界の工場」の地位を得たのではないのかと思わざるをえない。そうであるなら、「先発的」とされる国においても、同様な「生産力ナショナリズム」が「経済発展」のある「段階」においては必要とされるのではないかと理解した方がいいのではあるまいか。

ところで、栗原の論の展開において何よりも注目すべきくだりは、16 頁の「六ジェノサイドの政治」であろう。栗原は――水俣病は海からのジェノサイドである――という。そして――ジェノサイドの本質は、国家と産業の発展を優先させ、生命の尊重や人間の尊厳を二の次とする倒錯した政治にほかならない。――と述べている。また――ジェノサイドの政治は、近代の例外や逸脱ではなくて、「最大多数の最大幸福」とエコノミーの原則という近代の中心から出てきた正統な嫡子である。――環境ホルモン問題から遡行すれば、水俣病は化学物

質による日常的なジェノサイドの起点と言える。水俣病をジェノサイドの政治の文脈で読み解くこと。それは、国民国家・経済・法・階級・性・教育・民族などの近代複合システムによる差別と価値剥奪との極限的なモデルを提示すると共に、人間の受苦と尊厳の底知れぬ深さを推し量る測針でもある。――と述べているのだが、ここに「民主主義」を含めてみるとき、どのようなことがいえるのだろうか。

付言すれば、「日本人」は「二度と戦争はしません」と、無理な誓いを立てる。戦後いろいろな「戦争」があり、日米安全保障条約の下で、結局は、日本もアメリカとともに、「戦争」に加担。問題は、なぜそうなるのかを問うことである。「戦争」は「環境」破壊につながる。と同時に、「自由民主主義」の形成、発展にも関係する。

この時期、1950、60 年代の日本は、「日本国憲法体制」（戦後民主主義）の下で、いわゆる「開発主義」の政治を推進していた（[権威主義的性格の政治→経済発展]）。何故こうした政治路線を採らざるを得ないのか。自然「環境」、人的「環境」を破壊してまでどうしてそうせざるを得ないのか。またそうした公害問題が明らかになった後も、長期間にわたり「放置」され続けたのは、なぜなのか。そこには「環境」をめぐる（り）どのような「関係」がつくられていたのだろうか。ここでもやはり繰り返される「歴史」の追認に終始せざるを得ないのか。

最後に、これまでの話を踏まえて簡単にまとめておきたい。「環境」「環境問題」とは、「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（史）」（構造）に関わる問題として捉えることができると同時に、こうした枠組みと結び付けて考察しなければならない。それゆえ、そこから、「覇権国」、「覇権システム」とその「秩序」といった問題とまた結び付けてみることが必要となる。その意味では、今現在これまでの覇権国である米国と共に「G2」を構成していると目されている中国に目が向けられて当然であろう。（その意味では、二酸化炭素を大量に発生させているから中国をみるということではない。）ぜひともこうした観点から「環境」、「環境問題」に接近することの有意義性と有用性を強調することで、結びに代えることにしたい。

（補論）　「あの戦争」と「日米経済貿易戦争」の背後にある「日本文化」に関する一考察―――「日本」と「日本人」の「生き方」は、なぜ「ユニーク（異質）」とされたり、「アブ・ノーマル」とされるのか―――

1. はじめに:「日本」と「日本人」の何が問題とされているのか

「あの戦争」以後、たしかに、「日本」と「日本人」は、アメリカの占領統治のもとに、生まれ変わり、一九五二年の「独立」後も、アメリカの庇護と指導のもとに、再び国際社会の仲間入りを果たして、世界も注目する経済成長を遂げ、「繁栄」と「平和」を享受するにいたった。しかし、その「日本」と「日本人」は、一九八〇年前後の時期、当のアメリカやヨーロッパ諸国から、「日本は異質だ」との大合唱のもとに、激しい批判や非難にさらされるところとなったのである。それにしても不思議なことである。開国以降の、日本の「近代化」の途上において、その当初は、イギリスや、アメリカをはじめとする欧米諸国の庇護と指導を受けて、国際社会の中で、順調に、その発展を見た日本であったが、次第に、それら諸国と、対立、衝突するようになり、結局、「あの戦争」へと、突入して、敗北する、そうした歴史を経験した。ところが、気がついてみると、また同じような「歴史」を繰り返しているのではないかと、錯覚するような、批判と非難の声に直面するのである。そして、その挙句、先の「日本は異質だ」との大合唱の声となる。今から振り返ると、今日において、そうした大合唱は鳴りを潜め、今一度、国際社会の信頼を回復したかのような感もあるのは、たしかではあるが、沖縄の米軍基地移転、移設問題をはじめ、韓国や中国との「あの戦争」の「清算」をめぐり、まだまだ不確定要素をはらんだ状況にあることも、否定できない。

そうした点を鑑みるとき、私は、ここで、どうしても「日本異質論」がなぜかくもわき起こったかについて、考察しておきたいのである。二一世紀の「日本」と「日本人」がどのような「生き方」をすべきか、そうした問題を考えるにおいて、この問題とその背景にあることがらに関する、究明は、避けては通れないものだと、考えるのである。それは、まさに、「日本」と「日本人」にとっての、「近代化」の問題にほかならない。その意味では、「あの戦争」に至る経緯も、また同様に、「近代化」に関わる問題であったことを、銘記しておく必要がある。こうした観点から、以下に、論を展開していこう。

今の地点から振り返るならば、日本の近現代史の歩みを語る際、「あの戦争」は、戦争に至るまでの「歴史」と、戦争以後の歴史を画する、いわば日本の近現代史の流れにおける分水嶺として、位置づけられる。その日本の近現代史の歩みを、私のモデルで描く、あの[セカイ]の歩みの中に位置づけなおすとき、開国から、「あの戦争」に至る「歴史」と、敗戦から 1970 年代までの「歴史」が、ちょうど、あの[セカイ]の一つの流れと、すなわち、[A→B→C]と、重なっていたことがわかる。そして、同時に、1970 年代以降から今日までの「歴史」は、あの[セ

カイ]の新しい歩みと、すなわち、[B→C→A]の始まりと、重なっていることが、確認されるであろう。別言すれば、日本の近現代史の歩みは、開国から 1970 年代においては、「パックス・ブリタニカ」から「パックス・アメリカーナ」へと、また 1970 年代から今日においては、「パックス・アメリカーナ」から「パックス・チャイナ」へと「覇権」のバトンの引き継ぎが行われる、覇権国の興亡史の流れと、重なっているのである。

「日本」と「日本人」は、まさに、第 I 部の本論の初めにおいて紹介したように、福田のいうヘーゲル的「世界史」の流れの中で、「市民的自由」を、みずからの手に掴むために、開国以降、ひたすらその歩みを続けてきたと、いうことができる。「市民的自由」というとき、それは、いわゆる、「普遍的人権」として理解されるものであり、「自由」な「民主主義」の社会において、その「市民的自由」なるものを、現実のものとすることができるのである。「市民的自由」、「自由」、「民主主義」というと、非常に心地よい響きのある言葉ではあるのだが、これまでの歴史を振り返ってみても、どういうわけか、どの国に住む人々も、一様に、それをみずからの手にするのは、容易なことではなかったことがわかる。というのも、そうした人権なり、自由を、世界に先駆けて、普遍化するべく、いわゆる「市民革命」を行なったはずのイギリス、フランス、アメリカといった諸国が、多くの国や地域の「自由」を奪い、植民地や従属地として、彼ら（の「自由」）に、奉仕させ続けてきたからである。こうした「歴史」こそ、「アブ・ノーマル」であり、「異質」だとして、なぜ「日本」と「日本人」はそれこそ「告発」しなかったのだろうか。残念ながら、すでに日本の近現代史の歩みが教えてくれるように、開国以降、日本自体が、不平等条約の下で、半植民地状態に置かれていたことを、前提としたとき、この種の問いかけは、「愚問」というほかない。そうした告発をする「力」が、決定的に欠如していたのである。その日本が、そうすることのできる「力」を得たとき、今度は、逆に告発される側に位置していた。その意味において、「日本」と「日本人」は、「異質」であり、「アブ・ノーマル」として、批判、非難されてもいいのだが、どうも事情が違っていたのである。こうした点も、念頭において、さらに論を、掘り下げてみたい。

1980 年前後から、日米経済・貿易摩擦問題を契機として、「日本」と「日本人」に対する「日本異質論」が、台頭してくる。それは、いわゆる「日本問題」として、内外に知られるものとなる。「日本問題」とは、それでは何か。それは、以下のように要約される。すなわち、―――「日本問題」とは、日本は不可解だという欧米知識人の問いである。―――　（奥井智之著『日本問題－「奇跡」

から「脅威」へ』中公新書）つまり、「日本」と「日本人」は不可解だ、わからない、謎だとする「見方」に、集約されよう。すでに指摘したように、21 世紀の「世界」の中で、「日本」と「日本人」がどのようにすれば生きていけるのか、生き残れるのかを考えるためにも、この問題の考察は、必要である。私が属している「日本」と「日本人」の「安全保障」が重要であることは、いうまでもないことだが、そのためには、「自己主張」をしつつも嫌われない、うとまれないで、あわよくば、もし可能ならば、その上に、さらに、尊重される「共同体」をつくっていくことが、不可欠である。そのためにも、1980 年前後において、特に、1980 年代以降、次第に大きな底流を構成している「日本は異質だ」に象徴される、「日本問題」に対して、今ここできちんと受け止めるとともに、それに対する、何らかの方策を、準備しておかなければならないのではあるまいか。さらに 21 世紀になって、顕著になりつつある、日米、日中関係に見られる、軋み（きしみ）、というか、相互の微妙なズレが、気になるのである。代表的問題は、沖縄の米軍基地問題と北米や中国でのトヨタ（たたき・いじめ）問題であり、東シナ海の油田問題である。さらにイルカやマグロそしてクジラ問題も挙げられる。私は自身の安全保障のためにも、どうしても、この問題を、すなわち、「日本問題」を、読者と共に、一緒に考えてみたい。世界が、「日本」と「日本人」を、どのように見ているのか、その「眼」を、検証してみたい。そのためにも、まずは、手がかりとして、セオドア・H・ホワイト論文「日本からの脅威」を取り上げることにしたい。その理由の一つは、彼が「日本問題」に関わる、欧米知識人のいわば、「総帥」と目される人物であったからである。また、この関連から、そのホワイト論文を紹介している、ジョージ・アキタ著『大国日本　アメリカの脅威と挑戦―――リビジョニストの思考と行動』（日本評論社）の第 1 章を、取り上げ検討していきたい。同時に、日高義樹著『アメリカの日本潰しが始まった』（徳間書店、2010 年）の第一章の、第四部、第五部と第六章の第 4 部を、紹介する。

日高氏の論の特徴は、米国の拡張主義とその一つの表れとしての太平洋諸島ならびにそれを足場としたアジアへの進出の流れの中で、遅かれ早かれ日本との対峙は避けられないとみている点にある。ここで問題となるのは、米国が 19 世紀後半から、以降にかけて、なぜ、「拡張主義」に走り出すのか、また、なぜ、アジアへと向かうのか、ということである。もちろん、それは、米国だけに限定される問題ではなく、ヨーロッパ諸国にも、同様に該当する。さらに、日本も、そうである。それらの諸国を、そうした流れへと、突き動かす「構造」（「関

係」）が、あるのではないか。もし、そうだとすれば、それは、どのようなものなのか。実は、ここにこそ、目を向けて、論を、掘り下げていくことが、できないならば、「日本問題」を、わざわざ、取り上げて、議論する意味は、半減してしまうのではないか、そのように、私はみるのである。

日高氏の著書の219頁の最後から2行目の「アメリカの日本に対する敵意は」、———から 221 頁の最後の行———「そしてその後、日米安保条約に基づいて日本を守っている。」にも、注意すべき出来事が述べられている。1903年のワシントンでアメリカ陸海軍の首脳が中心となって開催された合同戦略会議において、「太平洋のむこうまではアメリカの領土」であると認定したのだった。それは日露戦争後においては、「日本に対するアメリカの敵対的な行動となった。」さらに、「1904年4月に作られたカラープラン」では「日本をオレンジとして敵性国家と決め、アメリカがどう戦うかを決めたもの」「1913年、オレンジ計画が初めて具体的な作戦計画となった。」「こうしたアメリカと日本の対立の背景にあるのは、中国であり、どちらかが中国を自由にするか、占領するかというのが対立点であった。」これらのくだりにみられるように、日高による、1945年の敗戦に至るまでの、日米対立の構図は、1980年代以降において、激しくなった「日本異質論」を、考える上でも、重要な歴史的文脈を、構成している。なぜなら、日本異質論の背後には、日米の経済・貿易戦争に象徴される、日本と米国による、政治的経済的競争（「戦争」）が、起きていた、からである。それは、戦前においても、該当する。福沢諭吉は、国と国との「交際（外国交際）」について、「平時は物と物とを売買して互いに利を争い、事あれば相殺すなり」とみている。21世紀の現在においても変わらない「現実」ではないか。

それゆえ、「日本は異質だ」に象徴される、「日本問題」を、考察することは、重要となってくる。ところで、「日本異質論者」は、「修正主義者」として、知られている。その概略について、ジョージ・アキタの著作の「序章」に、依拠しながら、みておく。ただ、その前に、一言しておくことがある。あれほど1980年代を頂点として、まさに「遼原の火」のごとく、猛威をふるった観のある、「日本叩き（たたき）」に、直面した「日本の経済力」は、1990年代以降から、現在に至る、ほんの一瞬の間に、その活力を、失っていることを、鑑みるとき、（たとえばこれに関しては、『週刊現代』2010年、4月17日号、「日本経済はこのまま死ぬのか」その小見出し（「三流国ニッポンという現実」とある）を参照されたい）、あの「日本異質論」にみる、あるいは、「日米経済（貿易）摩擦」論争にみられる、「議論」なり、「論考」の真偽、信憑性についても、懐疑的、批判

的スタンスを取りながら、再考する必要があるのではないか、と私は考えている。また、その際、そうした「議論」や「論考」は、先に指摘した、「構造」なり、「関係」と、結びつけて、捉えなおすことが、重要である。たとえばこれに関して、付言するならば、『ＳＡＰＩＯ』(小学館、1994 年、1 月 13 日号）の「文明間闘争の時代」の特集において、Ｓ・ハンティントンが「日米経済摩擦」の問題について、以下のように言及している。―――日米経済摩擦問題も、文明・文化の相違論で説明がつく。第 2 次世界大戦終了後、日本は輸出を促進し貯蓄と設備投資を奨励し、製造者優先の経済政策をとることによって、国の経済の立て直しを計画、推進してきた。国内市場を保護する政策も長くとり続けてきた。それに対し、アメリカは、消費者優先の経済政策をとった。そこで日米間に経済摩擦が起こったわけだが、この経済政策の違いは、個人の権利よりもグループ全体の福祉を優先的に考える日本と個人主義志向が強いアメリカという、文化的要素の相違によるものだ。日本は経済大国になってからも、その文明・文化的要素に基づいた思考・行動様式を、国家レベルでも企業レベルでも、なかなか変えようとしなかった。その結果が膨大な貿易黒字の蓄積であり、アメリカだけでなく、ＥＣ からもアジア諸国からも文句を言われることになったのである。―――

ハンティントンの、こうした見方は、やはり、一面的ではないか。なぜなら、アメリカも、かつては、製造者優先の経済政策を、採用していた。第 2 次大戦前の、アメリカの関税は高く、自由貿易よりも、保護貿易政策を、とり続けていた。それが、19 世紀末に、アメリカを、当時の「世界の工場」へと、押し上げることに、貢献した。また、当時のアメリカでは、「質素・倹約・貯蓄」は、美徳とされていた。さらに、国家を前面に押し立てる、打ち出していく、動きが、存在していた。その一つの例が、南北戦争とその時のリンカーンによる「人民＝国民」創出のスピーチである。こうした動きは、当時の、日本の戊辰戦争や、イタリア、ドイツの祖国統一運動の流れと、重なる。プロシア（プロイセン）のビスマルクの下でのドイツ帝国建設は、「保護貿易」の下で、進められた。これに対して、イギリスは、自由貿易政策を、19 世紀の中頃から採り始める。そのイギリスも、かつては、保護貿易政策をとる。これらのことは、たとえ、個人主義文化であろうと、また、欧米圏の文明であろうと、ハンティントンの見方は、そのまま、うまく適合しないことがわかる。そこには、文明・文化的要素だけでは、説明しきれない、問題が存在している、ことを、教えてくれる。もっとも、私は、文明・文化的要素のもつ意義や意味を、過小に評価している

のではない。言いたいのは、それを、あらゆる「関係」から、「独立」した要素として、切り離して捉えたままで、そうした観点を、もっぱら、強調する、危険性について、である。そこには、文化還元論の危険性が、つきまとっている。少し、前置きが長くなったが、こうした点を踏まえながら、それでは、先のアキタの序章の（4 頁の）「修正主義者」のくだりを、みておこう。その際、西尾幹二氏の「田母神論文」に関する論考を、重ね合わせて、論を展開してみる。その理由と意図は、論の展開において、自ずとわかるだろう。

2.「修正主義」論者のなかの「日本」と「日本人」

「修正主義」とは何か。

ここで、まずは、先述した、Ｓ・ハンティントンによる「日米経済・貿易摩擦」の背後にみられる日本と欧米の文化、文明の特徴および相違点に関する見方を想起されたい。そこには、日本は個人よりも全体（グループ）の利益を重視する文化であるのに対して、米国の文化は個人の権利を重視するものであるとか、日本は「製造者」の利益に重きを置いているのに対して、米国は「消費者優先」であるとかのくだりに注目したが、まさに「修正主義」の「主張」もそうした見方と呼応している。「序章」の 1 頁でまず気がつくのは、「日本」が、ここでいわれているように、「否定的な意味で注目の的になっている」状況は、今日においても、それほど、変わらない、のではあるまいか。私は、そうした、「日本バッシング」を、強く感じる。その感慨は「自意識過剰」の裏返しからきている、とも思われるかもしれないが、私の危惧は、「日本」と「日本人」が、そうした「自意識」すら、持たないで、今日に至るまで、来てしまったことに、由来するものである。まさに、西尾氏が述べるように、「自分」を、自らの言葉で、語れない、語ることを、許されないままに、きたのではないか、と思わざるをえない。さらに、いうならば、これまた、西尾が指摘しているように、「日本」と「日本人」は、いつの間にか、自分で語ることを、自ら、放棄してしまった、かの感すらある。その方が、楽であり、また、安全だからである。もう少し、「自虐的」に言うならば、これほどまでに、「米国の保護、監督と指導」の下で、「日本」と「日本人」は、歩んできたはずなのに、なぜ、「日本は異質だ」、との批判を、浴びなければならないのか、といえるだろう。いずれにせよ、「自意識」を持たない、持てない、「日本」と「日本人」は、「日本は異質だ」、と言われても、その意味すら、わからないのでは、あるまいか。誤解のないように、付言するならば、「日本は異質だ」、とする見解を、「正しい」ものとして、

ここで、私は、語っているのではない。正しいとか、あるいは、間違っている、とかの判断も、多くの「日本人」には、できない、ということを、前提において、述べているのである。また、西尾による、欧米の民主主義と侵略主義に関する見方（批判）に対して、私は、すべてにわたり支持しているわけではない。同時に、西尾に対する「左翼」からの「批判」にも、すべてにおいて、満足しているわけではない。これについては、以下において、私の論を展開するが、ただ、ここでは、「修正主義」の見解を、西尾の観点から、読んでいくとするなら、「日本」と「日本人」が歩んできた、生きてきた、国際政治経済関係と、その問題点を、より見やすく、また理解できるのではないか、との思いから、関連させて、取りあげている、という点だけを、指摘して、先に進みたい。「序章」の小見出し―――[反ソキャンペーンと反日キャンペーン]で、アキタは、ミシガン大学のＪ・Ｃ・キャンベルによる論文（1991 年）を取り上げている。それは、冷戦時代の「強い反ソイデオロギ―に基づくキャンペーン」と「最近の反日キャンペーン」の内容を、比較紹介したものである。アキタによれば、キャンベルは、「この二つのキャンペーンの間に重大な相違」をみている。――その相違とは、2 頁 6 行目から 15 行目、結論に賛成する。――
「反ソキャンペーン」の「特徴」――五つの主要な「イメージ」による。それについては、2 頁の最後の行から 6 行目まで。また「反日キャンペーン」と反ソキャンペーンとの間に著しい相次点を指摘している。3 頁 7 行目―最後の行まで。

ここまでのくだりにおいて、当然のことながら、キャンベルの見方に、アメリカに対する強い「自意識」を感じてしまう。ソ連との比較では、「自由に対して奴隷制」（ここは非常に興味深いところ。アメリカの「黒人奴隷制」の下でアメリカの「自由」は「拡大」したのではないか。）「基本的な人間の諸価値を尊重」「非道徳」「個人を信じない」の文言、また日本との比較では、「日本の高度な技術に依存」「日本はアメリカにとって脅威」「日本の体制は自由市場ではなく、異なったものであると考えられる」「日本人は――アメリカの『通常』の経済または政治と同じルールに従って行動しているのではないといわれている」「日本人の価値判断の仕方は非道徳的であり」「日本の行動は、長期的目標を達成する――戦略――」（この指摘は、日本の「高度経済成長」を、そうした観点から、捉えたものだと思うのだが、その日本の経済成長を創り出す、アメリカの「長期的戦略」は、なかったのであろうか。）また（5）にある「しかし日本人は、特に消費者としてみると、貧困――一方、アメリカは――高い生活水準

を与えている」。（ここには、Ｓ・ハンティントンの見方を垣間見る。このアメリカの「高い生活水準」はそれではどのような仕組みの下で実現されたのか。とくに、「日本」との関係を念頭に置くとき。）

4 頁から[修正主義者]、[修正主義者の反駁]に関するくだりが 8 ページの 1 行目まで続く。キャンベル論文の前の 1989 年に既に「日本叩き」の先駆的論考が出ている。「四人組ギャング」といわれているチャルマス・ジョンソン、ライド・Ｖ・プレストウィッツ、カレル・ウァン・ウォルフレン、ジェイムス・ファローズである。彼らの日本批判に対して日米双方で「攻撃」がなされる。これに対して彼らは、初めて共同で反批判を行なう。かれらの反批判の内容は、5 頁に紹介されている。彼らに対して「敵意」のある批判者の見解は、彼らからすれば、自分たちの思いもよらぬもの。それらについては、5 頁 4 行目―14 行目に紹介されている。さらに彼ら四人組は、「日本についての議論をより明瞭でより建設的なものにしたいとの意図から、自分たちの著作における六つの「本質的類似点」を示している」、これについては、5 頁最後から 2 行目―7 頁の最後から 2 行目まで。このくだりは重要である。ここに、[修正主義者]の「考え」が紹介されている。私は、このくだりを見ながら「第二のポツダム宣言」のように思ってしまうのである。付言すれば、西尾が『ＷｉＬＬ』誌上において、加藤陽子、半藤一利らの著作を挙げて批判している「歴史書」の「主張」も、読者に、「ポツダム宣言」の趣旨を、21 世紀においても、忘れないように、と述べているものだと、西尾らは、批判しているのである。その意味でも、西尾の論考に目を向ける必要がある。

「日本は異質だ」として「欧米にならえ」という際、その「欧米」とは、アイスランドを指しているのか。また『貧困大国アメリカ　Ⅱ』のなかに描かれている、「貧しいアメリカ人」なのか。それは、もちろん、違う。ここで少し唐突の観があるが、付言しておきたい。いわゆる「WASP」と呼ばれる人々に倣えということである。彼らは「覇権国」をささえると同時に、彼らの「生き方（とその利害関係）」を「覇権システム」とその「秩序」を擁護することにより維持してきた。何を隠そう、「日本は異質だ」と日本を論難してやまない「修正主義」と揶揄される論者たちは、「覇権システム」とその「秩序」の下で創り出されてきた「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（史）」を、理解できないでいるのである。（もっとも、このように断言するのはやはり誤りだろう。彼らは十分にそれをわかった上で、わからないかのようなふりをして、「たわごと」をいっているのだと受け止めておいた方がいい。むしろ、わかっていないのは「日本人」の方かもしれない。今から思えば、事実そうではなかったか。「たわごと」

を、本当のことのように、受け入れるしかなかったのだから。）あのS・ハンティントンによる、日米経済・貿易摩擦に関しての文化・文明論的説明が、そうした認識不足を、見事に物語っている、と私はみているのである。それゆえ、「日本は異質だ」という批判、非難は、本来ならば、「覇権システム」とその「秩序」に対して向けられなければならないものなのである。すなわち、「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（史）」、それ自体が、「異質」である、というよりも、「異常」なものと、されるべきである。というのも、そのなかで、「日本」と「アメリカ」はまさに「関係」の歩みを創り出してきたわけであり、「アメリカ」も「日本」と同様に、「異質だ」と認められなければならない。こうした問題提起に、これから、答えていきたい、と考えているが、その前に、まだまだ、取り組んでおかねばならない、準備作業が、多くある。それらを一つ一つ、片付けながら、先に、提起された問題に、接近することにしよう。

その際、私が上で指摘した、「国際政治経済関係（構造）」についての、具体的な話を、ブルース・カミングズ「世界システムにおける日本の位置」を、参照しながら、みていきたい。ここにある「くだり」を、「序章」の［修正主義］、ならびに、西尾、田母神両氏の「論考」と、結びつけて、考えてみる。とくに、西尾、田母神が、「あの戦争」を、どのように理解しているか、また、「ポツダム宣言」や「東京裁判」についての「評価」にも、注意してみたい。こうした作業を進めるなかで、「日本異質論者」の「主張」は、ある種「ポツダム宣言」の「再宣言」にたとえられることに気が付かれるかもしれない、と私は考えている。ちなみに、「ポツダム宣言」の目玉は「非軍事化」と「民主化」である。GHQ の「占領（政策）」の下で、それではそれはどのように実現されていったのだろうか。それを「国際政治経済関係」と結び付けて考察することにより、「日本異質論者」の見方と西尾、田母神らの見方の問題点が見えてくるかもわからない。こうした論者の見解の背後には一体どのような「国際政治経済関係」が見えてくるのだろうか。と同時に、こうした「再・ポツダム宣言」とその「問題点」に対して、読者のみなさん一人一人がどのように向き合ったかを思い起こしていただければ、幸いである。おそらく、西尾氏、田母神氏らは、読者の方々と異なり、ある意味で、「敏感」に、そのことを、本能的に、直感として、身体で感じることができたのに違いない。それは、西尾氏が言うように「戦争」は続いている、と彼らが、戦後ずっと、一貫して、そのようにみているからである。それゆえ、私は、ある面で、至極残念なのである。そこから、私の描く、「モデル」の［セカイ］に、目を転じていただけないものかと。というのも、

西尾らが述べる、「戦争」の実態なるものを、よりはっきりと理解し、そうした「戦争」に、「日本」と「日本人」とが、向き合えるためには、なによりも、そうした「戦争」が、戦後において、それでは、一体どのような「舞台」（まさに「国際政治経済関係」である）の上で、行われているかを、描くことが、求められるからである。なぜならば、その「舞台」の上で、この世に生を受けた、私たち一人一人は、また、彼や彼女が属している、「政治的・経済的・社会的・文化的・共同体」は、それぞれの「役割」を、演じている、演じることを、求められているからである。この「舞台」が、私のいう、［セカイ］なのだ。失礼かもしれないが、私からみれば、やはり西尾氏も「木を見て森をみていない」、ということになる。付言すれば、「左翼」の論者が、「民主主義」の「永続革命」を、論じる際、彼らは、その革命が、どのような「舞台」を、前提としているかを、はっきりと、読者に、示すことができていない、と私は論じてきたが、その意味では、西尾氏と似ているのである。

3.「戦後の世界システム」のなかの「日本」と「日本人」

また少し、前置きが長くなったが、それでは先のカミングズ論文に目を転じることにしよう。先ず 92 頁の 2 行目から 9 行目までに注目してほしい。(「――この三人はいずれも、日本についてきちんと勉強したこともないし、日本事情にくわしかったわけでもない」「かれらが望んだのは、アメリカが構想する世界システムのなかに日本を位置付けること」「日本の行動を一定の範囲内に縛るための枠組みを設定」「そして、その規制の枠組みは今もなお機能しつづけている」にあるように、ここに「国際政治経済関係」についての言及がある。と同時に、カミングズに従うとき、どうも「日本異質論者」による「修正主義」の「日本」理解はそのまま肯定できなくなる。93 ページの 1 行目から 9 行目のくだりをみると、それがよくわかる。「――日本はまだ戦後期を脱していない。」「――戦後の世界システムにおける日本の位置は、――一九四七年から五〇年までの時期に定まっただが、今日の状況は、依然としてその当時に確定された日本の位置づけによって規定されている――」「しかし、一九四〇年代末に形成され一九七〇年代はじめに部分的に修正されたこのシステムは、一九九〇年代のはじめの時点でもなお健在」とのくだりからわたしたちが考えなければならないのは、それでは両戦間期において、ここでカミングズがいう「戦後の世界システム」（もう少し後に具体的に指摘されている）は一体どのようなものであったのかという点である。

ところがこうした「戦後の世界システム」のなかの「日本」の「位置づけ」に、「再定義が行われる可能性が開かれた。他の国々が決めた位置・役割を受け入れるという受け身形から、自国のあるべき位置、果たすべき役割を自ら再定義するという能動形へと、———変わること自体が、アメリカからみれば恐怖でありぞっとすることだとしても、今や日本が、戦後世界であてがわれた地位を自ら再定義するかもしれない時代が到来したのはたしかである。」このくだりを重視するとき、先の「修正主義者」との「絡み」が見えてくる。彼らは、米国の思惑の下で（米国主導の「国際政治経済関係」の枠組みのなかで）「再定義」を考えているのに、「日本」がその意思に反して動かないことに腹立ちを覚えていることから、日本に対して「理不尽」とも思える要求を突き付けてくるのだと。もっともこの「再定義」が行われるかどうかはなお「将来の問題」とカミングズはみている。こうしたくだりに関しては、今の沖縄の米軍基地問題は一つのリトマス試験紙となる。ただ私自身はこの日本による「再定義」が「日本」と「日本人」のイニシアティブの下で行われる可能性は低いとみている。むしろその「再定義」は「戦後の世界システム」とそのなかの「日本」の「位置」と「役割」が変容することにより生じていると捉えている。それゆえ、「修正主義」それ自体もこの文脈の下で批判的に捉えるべきだとみている。

そのためにも、やはり、「戦後の国際政治経済関係」について、みておかねばならないし、そこから両戦間期の「世界システム」についても、考察しておかねばならない。こうした作業を通して、はじめて、西尾、田母神らの論の問題点が浮き彫りにされると私はみるのである。

それでは 94 頁の〈「大三角地帯」構想と「ケナン維新」一九四七ー五〇年〉のくだりに目を向けるとしよう。ここではとくに、「大三角地帯」なるものについて、そこでの「経済（発展）」の「関係」は「民主化」「民主主義の発展」とどのように相互に「関係」しているのか、また両戦間期においてはどのような「関係」が創られていたのか、こうした問題意識をもとに接近してみたい。ここでカミングズが論じていることを要約しておく。「開国」以降の「日本」と「日本人」が組み込まれた「世界システム」は、戦後のそれと「連続」するものであったということ、その際、ソ連に代表される共産主義陣営との対立により、フランクリン・ルーズベルトが描いていた——「一つの世界」システム——と異なり、——非共産主義の「壮大な領域」内で地域ごとに力の結集をはかる——次善の戦略」に依拠したシステムであった。「次善の戦略」である——「大三角地帯」構想は、複合的で、相互に重なりあった三極ヒエラルキーというウォ

ーラースティン流の概念にぴったりとあてはまるものである。そこにおいては、以下のような「経済発展」の「関係」がみられた。――アメリカが世界で圧倒的な力を誇るコア経済だとすれば、日本とドイツには、地域レベルのコア・システムを下支えすると同時に、旧来の排他的帝国が崩壊した後の周辺諸地域を再統合することにも貢献する、という役割が期待された。――コア経済としてのアメリカの優位性は、一九四〇代当時の「ハイテク」産業であった。――これらのハイテク産業からみれば、日本とドイツは、資本、技術、防衛、資源の面で従属的な位置にとどまりつづけるかぎり、まったく脅威ではなかった。東アジアでは、アメリカの政策決定者たちは、日本にたいし加工貿易に不可欠な大陸の市場と原料のアクセスを保証して日本の産業を復興させ、これをけん引力として地域経済を発展させることを構想した。――

このくだりにある、「中心」－「半周辺」－「周辺」からなる「経済発展」にみる「役割」の「関係」は、両戦間期においてはどのようなものであったか。日本が満州国を建国したのは、日本がやがて「コア・経済」の位置を占めるためではなかったか。その当時の「コア経済」は、「パクス・ブリタニカ」のイギリスと、「覇権連合」を形成していたアメリカであると私はみているが、そうした彼らが描く「世界システム」の「構想」とその「実現」に対して、日本はどう向き合うことになったか。カミングズが論じていない重要な問題として、こうした「経済発展」とその「役割」のなかで、それでは「民主主義」なるものはどのようにして実現するのであろうか。「コア・経済」に位置する国家と、原料供給の役割を担う国家なり地域とにおいて、どちらが「民主主義」を実現するのに際して有利な地点にいるのであろうか。修正主義者や西尾、田母神らはこうした問題を斟酌、理解した上で、「日本」対「英米」といった構図で描かれる「論」を展開しているのだろうか。西尾や田母神らが、日本の「侵略」と英米の「侵略」を対比して論を展開する際、当時の日本は「国際法」を「遵守」していたことを力説するのだが、戦後のアメリカ主導の「世界システム」がこうした「大三角地帯」構想のもとに形成されたと「仮定」するならば、当然のことながら「国際法」は、そうした「世界システム」とその下での「経済発展」とその「役割」を「正統化」する法としての機能を果たすことになる。その意味では、戦前の「国際法」もまた同様の機能を果たしたとみてよい。そのことは、田母神が、いみじくも日本の「侵略」を「正当化」するために、「国際法」を持ちだすことは、それにより、田母神は当時の「世界システム」を、すなわち歴代の「覇権国」が中心となって築き上げてきた「覇権システム」とその「役

割」を自ら「受容」したことを意味しているといえないだろうか。それでは「日本」は何を「問題」として「戦争」という事態へと向かうことになるのだろうか。「欧米列強」からの「アジアの解放」というとき、もし先の「世界システム」とその「役割」からの「解放」とならないのであれば、すなわち、「第一次産品国」としての「役割」からの「解放」を意味するものでないとしたら、結局のところ、欧米のやってきたことと何ら変わらないことをあたかも何か変わった、変えられたかのように、語ってきただけではないのか、そう私はいわざるをえない。付言すれば、「新しい歴史教科書」を批判する「旧い歴史教科書」を護る論者らは、こうした観点にまで、踏み込まないままに、西尾や田母神の論を批判するだけであることから、「開国」以降「日本」と「日本人」とが組み込まれてきた「世界システム」と、それを前提として、形成された「経済発展」と「民主主義の発展」の「関係（史）」の抱える、問題点にまで、批判の目を、向けるまでには、至らないままに、あったといえまいか。

いずれにせよ、GHQ の占領政策の下で「ポツダム宣言」の履行は進められていくのだが、ここで大切なのは、いわゆる「逆コース」の前においても、「大三角地帯構想」を前提とした、「世界システム」の実現に向けての、動きが進んでいた、ということ、「第二次世界大戦」と「アジア太平洋戦争」とは、そうした「世界システム」の実現の動きのなかでの、リーダ―シップを、誰が握るかの、「戦争」であった、ということを、銘記すべきである。（10 頁）

ところで、今日の話題の「一つ」に、沖縄の米軍基地移転の問題があるが、その「一つ」といった瞬間に、それを、単なる「一つ」として、見ることのできない人々が存在している。彼らにとって、それは、彼らの生活の「すべて」として、位置付けられる問題ではないか、と思われるのだ。ところで、この基地問題を、語るとき、「マスコミ」の議論は、いつも、きまって、まさに、「国際政治」の観点から、「東アジアの平和と安定」とか、「有事の際の防衛問題」とか、ほとんどが、「国家」、「国民」を前提としたものに、終始してしまう傾向がある。たとえば、「日本」はどのように対応すべきか、「日本人」としては、――――とか、に代表される問題提起がおこなわれる。こうした問いかけは、もちろん、重要であるし、それを考えることは、大切だが、どうしても、「他人事」としか、思われないものである。そこに、「私」は、どのように関わっているのかが、少しでも分かれば、「私」の「目線」から、問題に取り組めるのかもしれないが、残念なことに、ほとんど全てが、与えられる「情報」を前提とし

て、しかも「日本」、「日本人」の「立場」を、前提として議論するのが、「当然である」かのような情報を、もとにして、であるから、勢い、私たちの議論も、国家、国民を代表して語る、政治家や官僚の目線でしか、問題に向き合うことが出来ないように、なってくることから、いつも、「日本」は、「日本人」は、こうすべきである———、という答え方に、ならざるをえない。これまた、当然のことながら、私たちの、多くは、政治家でも官僚でもないから、その語りの、多くが、不自然なものに、ならざるをえないし、私たちの、日常の感覚から、どこか縁遠いものと、なってしまいがちである。なぜなら、普段、私たちには、沖縄は観光の島として想像することはできても、基地の島としては、理解しがたいものがあるからだ。それゆえ、騒音問題とか、沖縄が抱える日常の問題に対して、あまり、関心がない。関心があるように思わされるのは、先の、情報に影響されてである。それゆえ、私が、読者の皆さんに、望むのは、こうした「日本」、「日本人」の、「代弁者」としての前に、自分は、どう考えるだろうか、という、いわば、「私」を、起点として、そこから、そうした、「情報」を、再度、捉え直していただきたいのである。政治家や、官僚の目線ではなく、そうした「声」に、取り込まれない、「私」を、探してほしい。

そのためには、どうすればいいのか、それが、問題なのだが、逆説的ないい方になるかもしれないが、そのためには、どれほどに、国内外の政治家や官僚の、創り出す「声」の、枠の中で、生きてきたか、生きてこざるをえなかったかを、再度、「私」の側から、自己確認することが、大切だと、言いたい。「自由気ままに生きている」ように見えて、私たちは、「自由気ままに生かされている」のだ、ということを、再確認しなければならない。つまり、誰かさんが敷いてくれた、レールの中で、生きることは自由だが、そのレール自体を、自分で敷くことが、出来る、自由は、手にしてはいない、ということに、気がつくべきではないだろうか。戦後の、「日本」と「日本人」も、まさに、そうであったことは、多くの文献からも、知ることができるが、先に紹介した、B・カミングズの論考も、まさに、それを教えてくれる、貴重な文献の一つである。私は、それを、読みながら、また、改めて、いろいろなことを、考えてしまう。戦後の、「日本」の再建が、日本のことを、あまり、よく知らなかった、三人の、リーダーの手により、構想されていた、ということ、アメリカの、戦後秩序形成の中で、その再建策は、練られ、そして、実行に移されたということ、そして、何より、そのために、いわゆる、「大三角地帯」構想と、その実践が、不可欠であったということである。「大三角地帯」構想とは、簡単に言うと、最先端に位

置する国（地域）と、最後尾に位置する国（地域）と、その中間に位置する国（地域）からなる、ヒエラルヒー構造の中に、米国、日本そして韓国、台湾、東南アジア諸国を結びつけるものである。このくだりは、なにか、日本の大企業―中小企業―下請け・孫請け企業の関係に、似ている。戦後の「国際秩序」が形成され、それが「安定」するためには、アジアにおいて、こうした「大三角地帯」（日本版の大企業―中小企業―下請け・孫請け企業の関係）が、しっかりと、根づくことが、大前提であったことが、理解される。

私は、1953 年（昭和 28 年）生まれなので、私が、20 歳になるまで、私の「衣・食・住」の「ネットワーク」の、形成と発展に、この、「大三角地帯」が、どのように、関係していたのか、非常に、興味がある。これに関連する文献も、たくさんあるが、その中でも、『バナナと日本人』、『エビと日本人』は、非常に、身近な世界を、教えてくれる。冒頭にあげた、沖縄の基地問題を考えるとき、「沖縄」は、1945 年から 1972 年までの間、米国の統治下におかれていた。その意味では、朝鮮戦争による、また、ベトナム戦争による、「日本」経済の、「特需」の「恩恵」には、与ってはいない。「憲法」の公布、施行、サンフランシスコ講和条約、1960 年の安保改定、1970 年の自動更新・継続にも、直接の当事者として、関与していない。それにもかかわらず、「大三角地帯」の維持・発展と、その安定・強化の中で、私の「衣・食・住」の、「ネットワーク」の発展と、それに由来する豊かさと、利便性との恩恵に、私が、与るのに際して、「有形無形」の、多大な貢献を、私は、「沖縄」と、「沖縄人」に対して、強いさせてきたのではないか、と思うである。「沖縄」の米軍基地を、介在させることによって。彼らは、その間、日本政府と、その国民に対して、どのような思いを、抱いていたのだろうか。私は、そんな「思い」には、気が付きもしないで、経済的豊かさを、享受してきたのは、確かなことだ。それゆえ、こんな私が、たとえ、政治学や国際関係を、教えるようになったからといって、これまでの、私の「過去」に、胡坐（あぐら）をかいたままに、何かを、語ることも、もちろん、「ウソ」であるし、逆に、改心したかのように、「沖縄」に関わるのも、また、「ウソ」だ、といわざるをえない。それゆえ、正直に物を語るとしたら、私の「日常」の中にある、「オキナワ」を、語る以外、ないのである。たしかに、「沖縄」は、差別・排除されてきた歴史をもっているが、私を含めた、「日本」と「日本人」も、差別・排除（したり、されたり）の、歴史をもっている。なぜ、かくも、私たちは、このように、誰かを、あるいは、どこかの国や地域を、差別・排除したり、されたりとの、「関係」の中で、生きていかなければならないのだ

ろうか。これを、問うことが、「沖縄基地問題」の、重要な課題だ、と思うのである。同時に、「修正主義」（論争）問題の背後にも、この差別・排除の関係の存在を、認めざるをえない。

ところで、沖縄の米軍普天間基地移転問題は、日米共同声明により、結局のところ、名護市辺野古に移転する（また訓練施設として鹿児島県徳之島も含む）ということで、落ち着くところとなった。なお、紆余曲折はあるものの、基本方針が決められた以上、よほどのことが、おきない限り、沖縄基地問題は、「決着」したとみていいだろう。自民党政権下で、アメリカとの間において決められたことを、そのまま「踏襲」したということになる。『毎日』（2010 年 5 月 25 日付）第 2 面に、「小見出し」で「オバマ政権の勝利」「鳩山氏、屈辱的後退」とある。また、この間の経緯について、「普天間交渉・米紙が論評」とあり、そのなかで、日米間の交渉の流れを、「ジャパン・バッシング」（JAPAN　BASHING）の流れと関連付けて、そこから、次は、「ジャパン・パッシング」（JAPAN PASSING）へ、、そして次に、「ジャパン・ミシング」（JAPAN　MISSING）、へ、そして、「ジャパン・ディシング」（JAPAN　DISSING）へと、流れが、変遷しているのを、示している。

それでは、ここで、沖縄米軍基地問題との関連から、「防衛」問題について、少し、考えてみよう。そもそも、なぜ、なにを、そして、なにから、「日本」と「日本人」を、「防衛」しなければならないのだろうか。最初から、難しい問題である。ただ、そうはいうものの、私たち、人類の歴史を、ふり返るとき、古今東西、ずっと、なんらかの「戦争」を、経験してきたことが、容易に分かる。それでは、なぜ、「戦争」となるのだろうか。「戦争」は、いつも、「相手（当事者）」がいることから、その相手と、何らかの、「理由」により、戦う事態に至ることが、想定されるだろう。もちろん、いきなり、何の前触れもなく（宣戦布告もなく）、「戦い」となる、場合もあるが、普通は、「交渉（外交）」を、繰り返すなかで、そうした戦いと、なるだろうし、その交渉の、内容により、また、戦いの内容も、また変わるであろう。ただし、いずれにせよ、戦争の両当事者（「ウェストファリア体制」の成立以降それは一般には「主権国家」であるから、当事国とした方が適切だが、相手が主権国家でない場合もあることを、想定するとき、そのことも含めて、ここでは、当事者を、使っている）は、戦争という、「手段」に訴えてでも、相手から、何かを、守りたいのである。と同時に、そのことは、相手から、何かを、奪いたいのである。ここには、守るという、「防衛」に関わる事象と、奪うという、「攻撃」に、すなわち、「攻める」

ということに、関わる事象が、「一対の関係」を、なしていることが、示されている。私たちは、よく、以下のようなことを、聞くのではあるまいか。「北朝鮮が攻めてきたら、核攻撃をしてきたら、どうするのか」と。これは、すぐさま、また、次のようなことを、いっているのではなかろうか。「どのようにして、どのようにすれば、その攻撃から、われわれを、守れるのか、守ればいいのか」と。

ここまでの話で気がつくことは、「防衛」とか「攻撃」に関わる事象と、その問題は、「戦争（戦い）」に関わるだけでなく、同時に、また、「平和」とか「安全」という事象に、直接、かかわるものだ、ということである。すなわち、私たちは、「平和」や「安全」のために、「防衛」が大切だ、というし、その「平和」や「安全」を、脅かすものがあれば、また、その危険性が高い、と判断されるのであれば、「平和」と「安全」を守るために、こちらから、「先制攻撃」を仕掛けても、「戦争」に訴えても、仕方のないことだ、許されるものだ、といってきたし、「テロとの戦い」は、それを、象徴する、最近の出来事であった。ここには、「戦争」と「平和」とが、「表裏一体」をなしていることが、よく描かれている。私たち「日本人」の物語のなかで、記憶に残る、「あの戦争」の最中に、英米の「覇権連合」勢力は、「大西洋憲章」「ヤルタ宣言」「カイロ宣言」「ポツダム宣言」を公布することによって、「戦争」後の、「平和」の「秩序」を、高らかに、謳っていた。この逆に、平時において、戦争に際しての、法律が決められたものである。このようなことを鑑みるとき、「戦争」と「平和」の「関係」は、まさに、どこまでが、「戦争」状態であり、どこからが、「平和」状態であるかの、「線引き」が、非常に、難しい、厄介なものだ、ということに、気がつくのではあるまいか。たとえば、日本人の多くは、戦後の経済繁栄と、「平和」のなかで、「もう二度度戦争をしてはいけない」と、何度も、述べていた。しかし、すぐ隣の韓国では、北朝鮮と、また中華人民共和国との「冷戦（熱戦）」状況の進展のなかで、いつも「有事」として、まさに「臨戦態勢」と呼べる状態であった、とも見ることができる。ここには、同じアジアの、極東の「国際情勢」を見ていたとしても、明らかに、その捉え方（感受性）が、違い過ぎているといえるのではないだろうか。当然のことながら、日本の統治者と、韓国の統治者の間には、「安全保障」問題への認識、対応において、相当のズレがあることが、理解できる。また、戦後の国際秩序を、自らの描く青写真の下に、形成、発展させていくことに、直接関与してきた「覇権国」アメリカの、「安全保障」の理解の仕方は、これまた、違うことが、想像される。（ここで大切なことを述べておきたい。今回の基地問題での民主党政権、鳩山首相の対応をみて、

多くの有権者は、おそらく「頼りないリーダーだ」「信頼できない」と思われたに違いないだろう。鳩山さんが、仮に、自ら、「武器」をもって、「武装」した「姿」になって、「チェンジ」したとしても、どれほどの、「脅威」を、鳩山さんの、日ごろの言動を、既に、知っている人に対して、与えることが、できるだろうか。なかには、不謹慎ながら、逆に、笑う人もいるのではないか。このような人は、たとえ、「武装」しても、相手に対する「抑止力」を、もつことはできない、とみたほうがいい。このことは、鳩山さんのような、人間が、1億以上も集まったとしても、同じことを意味するのではないだろうか。今回の、沖縄の基地問題への、鳩山首相の対応と、それを見守る、私たち国民の反応の仕方こそが、いかに、「防衛力」「抑止力」にとって、「危うい存在」であるかを、内外の多くの軍事関係者に、教えたのではないだろうか。このようなリーダーと、それを抱くことに、恥じない集団と、一体、だれが、真剣に「安全保障」を語れると思えるだろうか。私なら、こちらの方から、御免こうむりたい。最後まで、信用できないからなのだ。途中で、二転、三転されたら、守れるものも、守れないだろう。こうした「汚点」を、知らしめた以上、辞めて貰わないと困るし、辞めさせることもできない国民だ、と分かれば、これほど楽な「敵」は、いないのではあるまいか。私たちに、どんな「防衛」を語る、資格が、あるのだろうか。）

読者のみなさんに、考えていただきたいのは、たとえば、辞書で「有事」、「抑止力」「戦争」「平和」「安全」という「定義」や「意味」をみて、頭のなかで、それを、考える際に、同じ定義、意味であっても、日本、韓国、アメリカの認識、評価、対応は、異なる蓋然性が高い、高くなるということを、しっかり銘記していただきたい。当然ながら、沖縄の米軍基地問題についても、同じことが、考えられよう。沖縄から、遠いところで、長年暮らしてきた人と、基地のすぐ近くで暮らしてきた人の語る「平和」と、「安全」の内容は、まったく、違うことが、予想されよう。前者の語る「平和」と、「安全」のなかには、「沖縄米軍基地」は、普段は、あまり大きな位置を、占めてはいない、むしろ、それとは関係のないものとして、あるのかもしれない。私は、以前、「第九条」のおかげで日本が戦後「平和」であり続けた、と強く主張する論を読んだことがあるのだが、おそらく、こうした論に共鳴する人たちは、沖縄の基地がみえていない、はずである。つまり、基地が、どのような「役割」を、担い続けてきたかも、わからないはずである。それゆえ、「覇権国」としての、米国の統治者の構想する、「安全保障」が、どのようなものか、理解できていないだろう。先に

紹介したブルース・カミングズのいう、「大三角地帯」と、それを前提とする国際政治経済関係を、「第九条」の信奉者が守り続けることにより、アジア各地で、内乱や紛争、戦争が引き起こされてきたことも、理解できないであろう。

それでは自民党に代表される保守勢力は、どのような「平和」観、「戦争」観の下に、「日本」の「安全保障」問題を、構想してきたのだろうか。それは1952年にサンフランシスコ講和条約と、日米安全保障条約の発効により、アメリカとの良好な関係（日米関係）を維持発展させることにより、国際社会のなかで生きていくことを「選択」した（選択せざるをえなかった）ことに示される。まさに、「日本人」の、「戦争」と「平和」の「定義」と「意味」に関しては、アメリカが教える通りに、「学習」することが当然のことのように、自覚された。このような「日本」と「日本人」にとって、自らの頭で、考える「戦争」観、「平和」観を、作り出すことができないのは、最初から、容易に、想像できることである。占領政策と、その後の米国の傘のもとに、生き続けてきたことが、沖縄の米軍基地問題の推移にも、そのまま、投影されたことが、理解できる。日本の保守勢力は、その意味では、革新勢力と同様に、覇権国である、アメリカ（合衆国）が、歴代の覇権国との歩みのなかで、創り出すことに与った、「覇権システム」とその「秩序」を、前提として、また、その枠組みのなかで、その存在を、保証されてきたといっても、過言ではないだろう。

それゆえ、私たちが語る、「有事」とか、「抑止力」とか、あるいは、「東アジアの平和と安全」の、「定義」と「意味」を、勉強する際に、こうした「覇権システム」とその「秩序」と、結び付けて、「学習」することが、大切である、と私は考えている。また、これは、「理想主義」、「現実主義」、また、「パックス・デモクラティア」論について、学ぶときにも、等しく、該当することである。

4.「覇権システム」とその「秩序」のなかの「日本」と「日本人」

さて、これまでの話において、私がこだわってきた論点の一つとして、「ジャパン、ユニーク」（「ジャパニーズ、ユニーク」）という、「日本」、「日本人」に対する、非難めいた、ある種の、「脅威」を表しているものとして、理解され、受け止められてきた、「日本異質論」に象徴される「日本問題」なるものが、実は、そうした「脅威」云々という、問題を超えて、そこから、「ジャパン、アブ・ノーマル（「ジャパニーズ、アブ・ノーマル」）という、「問題」へと、われわれ「日本人」を導き、向き合わせることになる、そうした厄介極りない問題なのである。その意味では、まさに、「あの戦争」の敗北後、10年間近くにわたり続

いた「日本文化」は、「特殊」であり、それゆえに、「否定されるべきもの」だとする、「日本文化」の問題点に、関連した、深刻な問題として、捉えられてしかるべき、ものである。もし、「ユニーク」を通り越して、「アブ・ノーマル」だ、とすれば、問題の背後には、相当に、根深いものが、存在していることを、「日本」と「日本人」は、「覚悟」しなければならないだろう。簡単に言うならば、それは、「ポツダム宣言」の「再履行」を、「日本」と「日本人」に、迫っているようなもの、だからである。それは、アメリカが描く、青写真に沿って、アメリカに、お伺いを立てて、生きていくように、ということに、ほかならないものだ。このことに関しては、既に、何度も紹介したように、B・カミングズの論考でも、みたとおりである。「ノーマル」とは、アメリカの言うとおりに、生きることである。もう少し、詳しくいうならば、「民主化」「非軍事化」の問題も、覇権国アメリカの、また、「覇権システム」とその「秩序」の、形成とその維持、発展とに、貢献するものであれば、ひとまずは、「ノーマル」だということなのだ。

それゆえ、「日本」と「日本人」が、そうした「正しい軌道」を、外れそうになると、アメリカが、（覇権国として、「覇権システム」とその「秩序」の形成と、その維持、発展に与る、役割を担っている、アメリカが、）日本に対して、何らかの「注文」を、つけてくる、ということになるのである。したがって、「日本」と「日本人」にとって、大切なのは、「日本」と「日本人」が、組み込まれてきた、「覇権システム」とその「秩序」の、全体像を、知ることなのだ。換言すれば、その「全体像」とは、まさに「歴史の大きな流れ」であり、私のモデルで描く、あの[セカイ]の「歩み」に、ほかならない。欧米に反発したり、声高に、アメリカを非難、批判することでは、断じてないし、それでは、何も、「突破口」など、見えてこないだろう。誤解のないように、繰り返して、付言しておくならば、「突破口」のように思えるものが、たとえ、見えたとしても、そこから、何か、具体的に、事態が打開できるかどうかは、また、別の問題である。それは、たしかに、そうなのだが、もし、「突破口」が見えてくれば、そこから、たとえ、それが細々としたものであれ、次に至る、「手段」が、「目標（理想）」として、描かれる可能性が高まるであろう。そのためには、先の「正しい軌道」が、たとえ、おぼろげであるとしても、つかめなければならない。簡単に言うと、その軌道は、1971 年、72 年の、ニクソン大統領の下で決定された、「中国シフト」に、ほかならない。21 世紀の、この地点に立って、あの頃を、振り返るならば、「日本」と「日本人」に対して、次は中国だから、それを、十分に理

解した上で、行動しなさい、とアメリカが、なんらかのメッセ―ジを、直接的、間接的な方法で、送っていたのではないかと、改めて、理解できるのではなかろうか。もちろん、そのことは、アメリカの、覇権国アメリカの「利益」に、適うことである。換言すれば、「日本」と「日本人」は、何がアメリカの「利益」となるのかを、もう少し、「相手の立場」になって、考えても良かったのではないか、ということに関する、再考を促すものである。「相手の立場」を考えることは、なにも、自分の立場を捨てて、相手に、ひたすら、「奉仕」することを、意味するものではない。むしろ、「相手」と「自分」が、どのような「関係」にあるのかを、知ることにより、「自分」を、守ることに、役立つものである。
ところで、繰り返し述べるのだが、その場合の、アメリカとは、単なるアメリカではない、「覇権国」としての、また、それゆえ、「覇権システム」とその「秩序」を、形成し、さらに維持、発展させていく、そうした役割を担っている、アメリカなのである。アメリカの「利益」とは、そのような意味での「利益」である。そのように考えることが、仮に、あの時点で、もしできていれば、なぜ、あれほどまでに、アメリカが、「日本」と「日本人」を、守ろうとしたのかが、分かったのではないだろうか。アメリカには、「不利益」となっても、「覇権国としてのアメリカ」、「覇権システムを護持する立場としてのアメリカ」の、「利益」には、適うものだと、考えられるのではないだろうか。当然ながら、このように考え、行動する、「二つの顔」をもつ「アメリカ」は、日本に対しても、このような「二つの顔」を持っている、ということを、わかってほしいと、思うのではないだろうか。もし、「日本」と「日本人」が、それを、理解できないときには、アメリカは、腹を立てるかもしれないし、いろいろな手段を使って、牽制するのではあるまいか。この「二つの顔」について、もっとわかりやすい話を、以下に、示しておく。

アメリカを、ある大きな会社の、「社長」に、日本を、そこで働く、「社員」としておく。この社員は、社長の助けで、会社の一員に、してもらった。社員としては、よく働くのである。そして、次第に、会社での地位を上げ、発言力を、持つようにはなるのだが、致命的な欠点が、この社員にはあったのだ。周りの社員が、どのように働いているのか、彼らの「役割」が、何かを、理解できない、もっと的確に言うと、理解しようとしない、のである。当然、社長がどのように、会社のことを考えているかが、分からないのだ。この会社は、いわゆる、創業以来、何代も続く老舗（しにせ）であり、歴代の社長が、大切に伝えてきた、「社訓」があるのだが、この社員は、その「精神」を、理解するこ

となく、働いてきたのである。最初は、無我夢中で働いても、会社には、利益となるだけだから、それでよかったのだが、「重役」になって以降、この社員は、会社での居場所が、分からなくなってきた。かわいそうなことに、他の重役や社長の仲間からも、「おまえはユニーク」だ、といわれても、その「本来の意味」が、分からないから、ある種の「逆切れ」をして、社員の家族や親せきと、その他の仲間に、「愚痴」を言ってしまう。「社長は何もわかってくれない」、「一生懸命、朝から晩まで、会社のために、働いているのに、働き過ぎだと、非難されてしまう」「おまえは、集団主義的文化を体現し過ぎだから、もう少し、個人主義的文化も、見習え、と批判される」等々。この社員は、「社員としての顔」は持っているが、如何（いかん）せん、「会社の社員」の「顔」を、持つことができないままなのだ。おかしいことである。本来「社員」とは、「会社」の「一員」を意味しているから、わざわざ「会社の社員」と言わないでも、いいのだし、「会社の社員」という表現、それ自体、おかしな使い方なのだが。ところが、この社員には、自分が、どこの「会社」に、属しているのかが、分からないままでいる。本当に、不幸な話である。

もっと、必死になって、考えても良かったのでは、ないだろうか。そのためには、「日本」と「日本人」が、自らの頭でもって、思案しなければならない。自分たちは、一体、どこに所属しているのか、ということを。「国際社会」の一員だ、と語るとき、それでは、「国際社会」と「覇権システム」とは、どのような関係にあるのか、先ずは、そこから、考えてみる必要があるのではなかろうか。その際、ここで、ごく簡単に、その両者を、これまでの私の話を前提として、概観するならば、「覇権システム」に関する猪口邦子の著書において紹介されている、「準周辺」「周辺」のくだりと、「秩序」に関するくだりを、長谷川三千子「難病としての外国交際―「文明論之概略」考－」において、描かれているくだりと、関連付けてみていくとき、「産物の国」が、猪口の著作で説明されている、「準周辺」「周辺」に呼応していること、また「世界システム」（「覇権システム」）の中で、「産物の国」が、どのような「役割」を担い続けてきたかということが、はっきりと、理解できる。猪口が「きれいに」描く［セカイ］の問題点を、長谷川は、鋭く、私たちに、垣間見せてくれる。また、ここで、長谷川が指摘している、「製物の国」と「産物の国」との関係を、B・カミングズの説く、アジアにおける「大三角地帯（構想）」の〈日本―韓国・台湾―東南アジア諸国〉との関係に、置き換えてみるとき、そこでもまた、考えさせられてしまうのである。どうして、「製物の国」と「産物の国」とが、必要とされる

のか。そうした関係を、作り出す流れと、「主権国家」が創られていく流れとは、また、「覇権システム」が創られていく流れとは、一体どのように関係しているのだろうか。さらにまた、「日本」と「日本人」は、こうした「関係」を、どのように捉え、理解してきたのであろうか、と。

「開国」以降の「日本」の歩みの中で、「日本」と「日本人」は、「産物の国」から「製物の国」へと、必死になって転換を図るのだが、「独立国」としての地位を、得るためには、こうした転換は、どのように関わっているのだろうか。ここで、少し、ややこしい話をしておくと、もし、仮に、「日本」と「日本人」が、「製物の国」へと、転換に成功したとしても、はたして、それだけで、「独立」した「状態」を、勝ち得たと、どの程度、いえるのだろうか。ごく簡単に言うと、目覚ましい経済発展を遂げ、「世界第 2」の「経済大国」としての地位を、手に入れた、と言われた「日本」ではあるが、それにもかかわらず、アメリカとの関係において、絶えず、「従属的主権国家」とか、「半植民地国家」とか、最近では、「属国」とまで、揶揄されるのを見聞きするとき、「産物の国」から「製物の国」へと産業・経済構造が転換することが直ちに「独立」を、その「永続的状態」を、保証するものだとは、いえないと思うのだ。それは、たしかに、「独立」のための、前提条件ではあっても、「永続的独立の状態」を、保証するためには、必ずしも、それだけでは、満たされるものではない、ということを、示しているのではあるまいか。ここには、「独立」をめぐる、複雑な要因が、存在していることが、含まれている。「経済力」もさることながら、「政治外交（交渉）力」が、はるかに、重要だということである。この「力」の背後には、当然ながら、「軍事力」も存在している。しかし、ここでも強調しておきたいのは、「政治外交力」が、もし、十分に、育まれていないならば、たとえ、「経済力」が、「軍事力」が、「普通」の水準であれ、そうした力を、それ以上のものに、伸ばしていく、あるいは、見せかけることは、到底、望めないのではないか、ということである。換言すれば、たとえ、「経済力」や「軍事力」が、世界有数のものであると、認められるものとなったとしても、そこから、それらの諸力と比例して、「政治外交力」が、「自然に」、増大していくとは、いえないということなのだ。はたして、「日本」は、「日本人」は、この「政治外交力」を、どのように理解してきたのだろうか。

ところで、長谷川三千子の論考「難病としての外国交際」は、「産物の国」と「製物の国」の経済的分業関係をもとにしながら、「文明―半開―野蛮」の構造が創られていくことを、描いている。この「構造」は、「世界システム」とか「覇

権システム」と呼ばれている「システム」を支えている、と同時に、「システム」の形成、発展が、この構造を創り出していくのである。長谷川により指摘されている、「貿易」の持つ大きな問題に関連して、「富の吸い上げポンプ」というくだりがある。この「富の吸い上げポンプ」とともに、ここで、考えておきたい問題がある。すなわち、①今日かつて富を吸い上げる側に位置していた先進国とそこに暮らす人々は、現在でもその「位置」を「防衛」することに「成功」しているか。もしそれが出来ていないとすれば、いかなる「構造」の「変化」、「変容」がある、あったのだろうか。②ここで「防衛」というとき、私たちが今おこなっている防衛に関する、あるいは安全保障に関する議論の仕方は、あまりにも視野の狭いものではないのだろうか。以上、この二つの問題である。

少し、②について、述べておきたい。沖縄の米軍基地の移設・移転問題の取り扱い方にも、それは、如実に示されている。そこでは、ここで問題提起しているように、「構造」とか「世界システム」とか「覇権システム」という、「全体像」のなかで、あるいは、そうした「全体像」に関わる問題として、捉えられ、議論されることがない。換言すれば、その全体像を見ようとしないで、そこから、軍事に関する、防衛問題だけを、勝手に、切り離して、論じているのである。それゆえ、「県外か、国外か」という言辞を、弄することが、可能となるのである。もし「防衛」問題を、「構造」を「防衛する、「覇権システム」を防衛する、問題と、同一のものとして、みることができていたなら、当然のことながら、「相手」（覇権国、他の中心国、中国、北朝鮮、韓国を含む）の顔が見える、議論にならざるをえなくなっていただろう。「県外、国外」の路線を、選択しようとする場合、それでは、その路線の選択により、「構造」を防衛する際、あるいは、「世界システム」を防衛する際に、いかなる「不都合」が生起するかを、あるいは、逆に、「好都合」となるかを、想定した上で、「日本」と「日本人」は、どのような「代案」が、提出できるかという問題に、向き合わざるをえない。誤解のないように、付言すれば、「防衛」に賛成か反対かを、ここで強要しているのではない。賛成であるか、反対であるかの以前に、「日本」と「日本人」は、この「構造」の中で、生きてきたのであり、現に、今も、そこで生きていることを、鑑みれば、この「構造」を「防衛」するか、しないかの前に、先ずは、この「構造」の中で、生きてきたという「現実」にこそ、目を向けるべきではないか。ところが、いつも、そうならないのである。「日米経済・貿易摩擦問題」は、この「構造」の形成と発展、及び、その変容と、密接に、結びついているものである。しかし、この種の問題への、対応においても、「日本」

と「日本人」は、今の沖縄の、米軍基地問題の対応と、同じ対応を、していたと、いわざるをえない。この「構造」の中で、生きてきたという、「現実」を、直視しないままに、革新陣営の側からは、「非武装・中立（第 9 条護憲）路線」の「堅持」と「護持」が、説かれ、保守陣営の側からは、「ノーといえる日本」という、「空虚なスローガン」が声高に、叫ばれ続けるのみである。

いずれの陣営においても、この「構造」や、「覇権システム」の中で、「日本」と「日本人」が、生きてきた、という現実に、目を向けない、ままなのである。日米安保、日米関係を語る論者も、この「構造」の中で、あるいは「世界システム」のなかの、「日米安保」であり、「日米関係」であるとの認識が、足りないのである。それゆえ、そこから、中国の歩みが見えないのは、当然である。視野を、もう少し、拡大したところで、せいぜいのところが、「沖縄の問題は沖縄に限定されないのであり、日本全体の防衛問題として考えなければならないのだ」、と説くばかりである。ここでも、この「日本」が、ここでいう、「構造」や、「覇権システム」と、どのような「関係」の下に、組み込まれているか、といった視点は、欠落しているのは、容易に、想像できることである。

これと関連して、沖縄米軍基地問題に関する資料を読んでみるとき、そこにはやはり、「覇権システム」を形成し、それを維持、発展させてきた、「覇権国」や「覇権連合」と、きちんと、向き合って、「覇権システム」と「戦う」、そして、それに代わる、「チツジョ」を提起していこう、とする姿勢が、あまり、感じとることができないのである。なぜか。その理由の一つが、自ら、そこに生きてきたという現実感が、掴めていないのでは、と私は考える。日米関係という場合、あるいは、米軍基地という場合、それは、単なる「米国」ではない。何度も言うが、「覇権国」の「米国」であり、「覇権システム」のなかの「米国」である。それゆえ、たとえ今「多極化」とか「G20」とか、言われていても、また、たとえ、この先 2，30 年間の世界が、流動的なものとみられたとしても、そのことにより、「覇権国」と「覇権システム」の存在が、今後、否定されることにはならないのである。それゆえ、どうしても、この「構造」とか、「世界システム」、「覇権システム」の形成、発展、変容に関する仕組みの勉強は、必要不可欠とならざるをえない。さしあたり、これまでの話の続きでいうならば、「民主主義」なるものが、この「構造」なり、「覇権システム」の形成と、発展、変容と、どのように、関係しているかが、分かれば、次の覇権国は、中国であり、また、覇権国である中国は、民主化するということが、「予測」されるのである。また、もし、この流れが、今、あらかじめ、理解できていれば、米国と

中国とが、今後どのような関係になるかも、ある程度、「予測」されるのである。そこから、「日本」と「日本人」が、決して、してはならないことは何かが、見えてくるのである。

ところで、これまでの論の展開において、「覇権システム」とその「秩序」及びそうした枠組みのもとでの「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（史）」の形成、発展とその変容に関する私自身のモデルを紹介してきた。まだ十分な紹介となってはいないものの、紹介したモデルを使いながら、「日本問題」とそれに関する知見を、とくに「日本はユニーク」とみる「日本異質論（者）」について、批判的に検証、検討してみたい。

私のモデルで見るとき、「日本」と「日本人」はモデルで描く［セカイ］のなかで「健気に」生きてきたことは間違いない。（もちろん誤解のないように語っておくならば、「健気に」生きているのは「日本人」だけではない。この［セカイ］に生きる者はすべて「健気に」生きているのである。ある種この言葉には同情せざるをえないとの意味が込められている。たとえ「強者」であろうと、「強者」に課せられた「役割」を担うことを拒否できないからである。）この［セカイ］のなかで生き続けることこそが本来、問題とされてしかるべきではないのか。「覇権システム」のなかで「頂点」である「覇権国」を目指す歩み（生き方）それ自体が「異質」として最初に問題として俎上に載らないのか。私たちは「弱肉強食」あるいは「力の論理」に関わる問題に関して、ある意味では［常識］として理解している（「アメリカン・ドリーム」はそうした「現実」を前提とした中で這いあがっていく「物語」ではなかったか）。にもかかわらず、その反面において、そうした歩みを体現してきた「日本」と「日本人」の歩み（生き方）について（「アメリカン・ドリーム」に対比される「ジャパニーズ・ドリーム」について）「異質」として「批判」するのはなぜなのか。

ここには、自分たちの「物語」もひょっとすると「異質」かもしれないと考える「謙虚さ」は無く、「傲慢な目線」があることは否定できない。それどころか逆に自分たちの物語こそ「フェア」でまともだとする態度が垣間見られる。そこには「アメリカ」を軸としてそこから日本や他の国、地域との関わりを見てきた、見ているとの印象を抱かざるをえない。たしかにアメリカは強大であり「覇権国」の地位に就いたことも否定できない。名実とも「ナンバー・ワン」のアメリカとなった。しかしここで大切なことは、たとえ「覇権国」であろうとも、（覇権国であれば）何でも望むことが出来るわけではないということを知

っておかねばならない。そこには「覇権国の興亡史」を「演出」する「覇権システム」とその「秩序」を前提とする「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（史)」の形成、発展とその変容に関する「ルール」が存在しているのである。「日本異質論」を語る論者のほとんどがその「ルール」を理解できていないのである。と同時にそうした異質論に反駁・反論する論者もしかりなの だ。ごくごく初歩的なところから論点を提示しておく。

先ず、エズラ・ヴォーゲルやのちの見解にみるチャルマ―ズ・ジョンソンのように、アメリカ合衆国の経済的復活を、日本を見習い、学ぶことにより、アメリカ政府がそこから政策を提言して、それを現実化していくべきだとする論（これについては、ジョージ・アキタ著、前掲訳書『大国日本…』の第 2 章、第 3 章を参照、引用。）は、まさに私のモデルで描く「覇権システム」とその「秩序」さらにはそうした仕組みのもとでの「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（史)」がまったく理解できていないということを如実に示しているというほかはない。当然そこには、現在の「覇権国」と次期覇権国と目されている中国との「関係」が捉えられていないといわざるを得ない。そこには「日米経済・貿易摩擦」問題を日米関係という日米ニ国間の問題として理解しようとする視点はあるものの、それを「覇権システム」とその「秩序」を「舞台」として展開される「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係（史)」のなかに置き直して論じようとする視点はほとんど見られない。もしそうした視点があるならば、これまでの覇権国の興亡史において、「世界の工場」から「世界の銀行」に「移行」する流れとそれを作り出す「関係」が理解できるだろう。それはアメリカが「世界の工場」となり、戦後 1950，60 年代に重厚長大型産業を世界的にリードしながら、60 年代末から 70 年代初頭にかけて、あたかも自らその地位を日本や西ドイツに「積極的」に譲り渡していくかに見えた「歩み」にも等しく該当する。

仮に「日本異質論者」が勝利し、日本を叩き、日本経済の勢いを封じ込めることに「成功」したとしても、米国（製造業）企業の海外移転・進出の流れを「逆転」することが出来たのであろうか。中国が「世界の工場」になるためには、中国一国の力ではとても無理なことである。そこにはアメリカをはじめ先進国やそこで大きな力を有する企業の「協力」が不可欠であったことはいうまでもない。こうした今日の中国の「世界の工場」とその後の飛躍的経済発展を鑑みるとき、1980 年代の日本異質論の高まりは、こうした中国台頭の文脈において捉え直されるべきではなかろうか。中国が「世界の工場」へと向かい躍進

する動きに対して、アメリカは、ヴォーゲルやジョンソンに従って産業（製造業）復興計画を作成してそれに対抗しようと本気で考え行動したのであろうか。もしそうした中国の動きと切り離した日本叩きだとすれば、それもまた理解し難いものとなるのではないか。

付言すれば、ジョンソンは、「日本は国家主導型市場経済システムの最もよい例」とか「資本主義的発展的国家」あるいは「柔軟な独裁主義」によって、「驚異的な成功をおさめた」と見ていた。また「この国家主導型システムの中核が通産省であり、通産省の歴史こそ日本の経済的政治的歴史の中核をなす」と位置づけていた。またジェイムス・ファローズは、「計画合理型システムにおいては、政治的目標や動機づけが経済的重要性や利益に優先する。すなわち消費者のニーズは第二義的となってしまうのである」の指摘を踏まえて、「国家主導型市場システムと消費者のニーズとは相互に矛盾すること、この矛盾を解決するために消費者自らが進んで犠牲となる道を選んでいると述べている。」（これについては、ジョージ・アキタ著、上掲訳書、第 3 章、第 4 章を参照、引用。）こうした見方ははたして的確なのだろうか。アメリカが「世界の工場」を目指して「経済発展」を経験する時に、国家の形態はどのようなものだったのか、「国家主導型」とされる日本とまったく異なるものであったのか。「計画合理型」に対してアメリカを「自由主義的」と理解しているのではないか。同様に、アメリカにおいて、「消費者のニーズ」はいつも優先されていたのだろうか。「生産者のニーズ」も重要でなないのか、「世界の工場」を目指す国家が始めから「消費者のニーズ」に応えられるだろうか。両者の関係はどのようになっているのだろうか。こうした問題に修正主義論者は答えられないのではなかろうか。少なくとも、私の「民主主義」の形式、発展とその変容に関するモデルをもとに考察したとき、そのように結論つけざるをえないのである。

（最後に、今回も「伊予エスニック共同体」共同主宰の西岡祐喜氏に研究叢書出筆に際して、パソコン入力、校正そして編集作業において、お世話になったことを記しておきたい。）

（注）

(1)　覇権国の興亡史については、拙著や拙論において述べてきたが、『覇権システム下の「民主主義」論―何が「英霊」をうみだしたか―』(20005 年)、『「日本人」と「民主主義」』(2009 年）を参照されたい。なおいずれも御茶の水書房から刊行されている。

(2)　これについては、多くの文献があるが、『毎日』(平成 19 年 11 月 27 日付)「今、平和を語る」の特集記事におけるガルトゥングへのインタビューが非常に興味深い。彼の発言の中に、「日本は平和国家ではない」、「世界は米国の従属国とみている」、「自衛隊の軍事力は先制攻撃できる」、「専守防衛を念頭においた憲法を」がある。またこのほかに、戸田　清「第 4 章　9・11 事件と平和学　ガルトゥングの視点から」(木村　朗他著『9・11 事件の省察　偽りの反テロ戦争とつくられる戦争構造』凱風社　2007 年　所収）を参照。

(3)　これについては、注①の拙著の他に、『史的システムとしての民主主義』晃洋書房 1999 年も参照されたい。

(4)　田母神論文は、田母神俊雄「日本は、侵略国家であったのか」のタイトルで、『WｉＬＬ』(2009 年 1 月号「田母神論文、どこが悪い！」）ワック・マガジンズ、2009 年 1 月に収められている。なお、同誌上にある中西輝政論文「田母神論文の歴史的意義」では、田母神のタイトルにある「日本は――」とは異なり、田母神論文の趣旨として、「日本だけが侵略国家ではない」といった内容を論じている。

(5)　これについては、本論で詳しく論究している。

(6)　これらのくだりについては、前掲拙著『覇権システム下の――』、『「日本人」と――』を参照されたい。

(7)　これについては、西尾幹二著『国民の歴史』産経新聞社、1999 年を参照されたい。

(8)　司馬遼太郎著『この国のかたち 1990～1991』(文藝春秋社、1992 年)。

(9)　これについては、西尾、前掲書、611 頁。

(10)　同上書、577 頁。なお、これについては、本論で詳しく論じている。

(11)　このモデルは、すでに前掲拙著『「日本人」と――』と、拙稿「「民主主義」論のあらたなるパラダイムを求めて－「民主主義」の構造転換を理解するために―」(『外国学研究　74』〈グローバリゼーション・デモクラシー・国民国家をめぐる考察』神戸市外国語大学外国語研究所、2009 年　所収〉152 頁に、紹介している。

(12)　これについては、拙著『民主化の先進国がたどる経済衰退－経済大国の興亡と自由民主主義体制の成立過程に関する一仮説－』晃洋書房、1995 年の、第Ⅱ部　モデルによる史的考察、第 3 章　「システム・ポリティクス」の視角からみた場合、を参照されたい。

(13)　これについては、拙著『覇権システム下の――』11-12 頁と、『朝日』(2001 年 9 月 8 日）の記事〈吉田裕『敗北を抱きしめて』が描く戦後―「日米合作だった占領改革―国完結型を超える歴史観―」〉が、「民主主義」を「共同」で推進したという視点から論じている。

(14)　これについては、クリストファ・ソーン著、市川洋一訳『米英にとっての太平洋戦争』草思社　1995 年　492－505 頁を、参照されたい。
(15)　たとえば、福田和也著『日本の近代（上）』（新潮社、2008 年）、『日本の近代（下）』（新潮社、2009 年）がある。
(16)　福田和也著『魂の昭和史』小学館　2002 年。
(17)　「中国のナショナリズムに関する一考察――丸山真男の「幸福な結婚」論を手がかりとして――」（『アソシエ』御茶の水書房 2005 年 16 号『超国家主義の系譜』所収）108 頁。
(18)　同上論文、106-108 頁
(19)　拙稿「日本人」と「民主主義」（『外大論叢』第 58 巻、第 5 号　神戸市外国語大学所収）、117-119 頁。
(20)　前掲、福田「解説」、496－497 頁。
(21)　同「解説」、497 頁。
(22)　これについては、前掲拙著『史的システムとしての――』175 頁を参照されたい。
(23)　キーナン判事と同様な見方を多くの政治学研究者が共有しているだろうし、多くの日本人もそれを当然のこととして考えているのではあるまいか。
(24)　福田、前掲「解説」、501－502 頁。
(25)　同上「解説」、502－503 頁。
(26)　これについては、前掲拙著『「日本人」と――』の第一部を参照されたい。
(27)　これについては、上掲拙著を参照されたい。
(28)　これについては、同上拙著『「日本人」と――』244-245 頁を参照されたい。
(29)　これについては、たとえば、前掲拙著『覇権システム下の――』に収められている拙稿「夏目漱石の苦悩に学ぶ日本経済の構造転換－「民主化」の先進国が辿る経済衰退史』（『週刊ダイヤモンド』1994 年 3 月 19 日号）においても描かれている。
(30)　もっともこれはマスコミを含めて批判されるべき問題だとみた方がいい。誤解を恐れないでいうならば、「王様はハダカだ」とわかっていて教えないというよりは、それもわからないとみた方がいいのかもしれない。
(31)　「あの戦争」をめぐる「三つの性格」を、「一つの物語」として語ることができないできたその「ツケ」が、「格差社会」に対する適切な分析を「左翼的」とみなされてきた論者に許さなかったと思われる。
(32)　「あの戦争」をめぐる「三つの性格」については、注の（31）の他に、前掲拙著『史的システム――』の、序章　「民主主義」論の再構築に向けて―その予備的考察－、を参照されたい。
(33)　これについては、前掲拙著『「日本人」と――』を参照されたい。
(34)　福田、前掲書『魂の――』、64 頁。
(35)　中村政則著『『坂の上の雲』と「司馬史観」』岩波書店　2009 年。
(36)　たとえばこれについては、前掲拙著『「日本人」と――』――――参照されたい。
(37)　中国研究者による「民主主義」「民主化」研究も、多くがこうした視角から分析されている。たとえばその一つとして、呉軍華著『中国　静かなる革命』日本経済新聞社 2008 年がある。

(38)　福田、前掲書『魂の――』52―53 頁。
(39)　こうした点は、ガルトゥングのみならず、「世界資本主義システム」の立場をとる論者にも該当する。これについては、前掲拙著『「日本人」と――』――頁を参照されたい。
(40)　私のみるかぎり、多くの論者がこうした観点から、「平和」と「繁栄」を語ってきたように思われる。こうした語り方は、私には、あまりにも独りよがりな物言いであるように思われて仕方がない。死んだものがなにも「抗弁」できないことをわかった上での「生きている側」の勝手な物言いであるのではないか。死者には日本人以外はおそらく想定されていないだろうし、生きているものも、すべて日本人を想定しての発言なのであろう。こうした物言い一つにも、日本人が「世界」の中の「日本人」であるとの「自覚」が（換言すれば、あの[セカイ]を構成している一員であるとの「自覚」が）、まったくないことを如実に示している。
(41)　私が残念に思うのは、結局のところ、福田和也の『魂の昭和史』の論じ方も、その例外ではないように思われることだ。
(42)　福田、前掲著『魂の――』、64 頁。
(43)　同上書、64 頁。
(44)　同上書、66 頁。
(45)　同上書、68 頁。
(46)　同上書、72―75 頁。
(47)　同上書、75 頁。
(48)　同上書、71 頁。
(49)　加藤陽子著『それでも日本人は「戦争」を選んだ』朝日新聞社　2007 年。
(50)　福田、前掲著『魂の――』、71―72 頁。
(51)　私の中村の「歴史観」についての批判は、前掲拙著『史的システム―――』を参照されたい。
(52)　中村、前掲書『『坂の上の――』、161 頁。
(53)　同上書、161－16Ⅱ頁。
(54)　これについては多くの例があるが、なかでも、私が今でも「典型的」な事例として鮮明に覚えているのに、『朝日』（1997 年 1 月 1 日付）の「社説」がある。
(55)　拙著『史的システム――』、『民主化の先進国―――』、『覇権システム下の――』を、参照されたい。
(56)　久野収については、前掲拙著『史的システム――』、15 頁を参照されたい。
(57)　中村、前掲著『『坂の上の―――』、23―24 頁、180－182 頁。
(58)　同上書、2－4 頁。
(59)　同上書、4 頁。
(60)　同上。
(61)　同上書、5－6 頁。
(62)　同上書、18－19 頁。
(63)　同上書、23 頁。

(64) 同上書、19 頁。すでに本論においても中村によって紹介された司馬の見解については、上述したくだりの通りであるが、ここでもう一度だけ、詳しい紹介を書きとめておく。―――では、どう説明すればいいのか。司馬は人類の歴史のなかにおける日本という国家の成長の度合い、近代ナショナリズムと明治国家、産業革命と帝国主義、国民国家と軍事・外交の問題などを明らかにしなければ、日清戦争の本質を解くことはできないという。たとえば次のように、である。「帝国主義と自由と民権は渾然として西洋諸国の生命の源泉であると見、当然ながらそれをまねようとした。西洋の帝国主義はすでに年季を経、劫を経、複雑で老カイになり、かつては強盗であったものが商人の姿をとり、ときに変幻してヒューマニズムのすがたにをさえ仮装するまでに熟していたが、日本のそれは開業早々だけにひどくなまで、ぎこちなく、欲望がむきだしで、結果として醜悪な面がある。ヨーロッパ列強では、帝国主義の後進国であるドイツが多分にそれであった」――。

(65) 同上書、100 頁。

(66) 同上。

(67) 同上書、153 頁。

(68) 同上書、157－159 頁。

(69) 福田、前掲書『魂の――』85－86 頁。

(70) 同上書、80－82 頁。

(71) 同上書、80 頁。

(72) 同上書、93 頁。

(73) 同上。

(74) まさにこの問題は、司馬が後世の研究者に解明を期待していた問題であったといえる。

(75) 福田、前掲書『魂の――』、95 頁。

(76) 同上。

(77) 同上書、96―97 頁。

(78) 同上書、97 頁。

(79) これについては、中西輝政、前掲論文「田母神論文の――」66 頁を参照されたい。

(80) これについては、西尾前掲書、577 頁を参照されたい。

(81) これについては、朝日新聞社から刊行されていた月刊誌『論座』2007 年 1 月号および 4 月号をとくに参照されたい。

(82) 「民主主義」というとき、それは今日の世界においては、「自由主義的民主主義」である。そのことは、「自由主義」なるものを前提としたものであることを意味している。この「自由主義」は、まさに、司馬のいう「渾然たる―問題」と結びつくのである。

(83) これについては、ここに紹介した拙著を参照されたい。

(84) これについては、『ＷｉＬＬ』2010 年 1 月号、2 月号の「加藤陽子『それでも日本人は戦争を選んだ』徹底批判」、5 月号、6 月号、7 月号の「半藤一利『昭和史』徹底批判」を参照。

(85) これについては、注（80）を参照されたい。

(86)　福田、前掲書『魂の――』、100－10Ⅰ頁。
(87)　同上書、104－105，119－122 頁。
(88)　中村、前掲書『坂の上の――』、184 頁。
(89)　福田、前掲書『魂の――』、100－10Ⅰ頁。
(90)　長谷川三千子「難病としての外国交際――」を参照されたい。なお、これについては拙著『覇権システム下の――』第五章と注の（11）を参照されたい。
(91)　前掲拙著『「日本人」と――』―――を参照されたい。
(92)　福田、前掲書『魂の――』、105－106 頁。
(93)　同上書、114－116 頁。
(94)　中村、前掲書『坂の上の――』、188 頁。
(95)　福田、前掲書『魂の――』、113，116，118－Ⅰ19 頁。
(96)　同上書、91―94 頁。
(97)　中村、前掲書『坂の上の――』、193－195 頁を参照されたい。ここで、簡単にその二つの見方を要約して紹介すれば、「大正デモクラシー」の歩みを、戦後日本のデモクラシーの歩みを円滑にする下地となったとみる見方と、14 年ほどの短い期間で凋落してファシズムへと導いた「薄命のデモクラシー」の歩みとして捉える見方である。
(98)　同上書、195 頁。
(99)　同上書、195－196 頁。
(100) これについては、升味準之輔著『東アジアと日本』（東京大学出版会、1993 年）「第二章　朝鮮」の〈文化政治、産米増殖計画、共産主義〉（260－266 頁）、〈満州事変、従属工業化、皇民化運動〉（266－270 頁）を参照。
(101) これについては、前掲拙著『史的システムとしての―――』、210－214 頁を参照されたい。
(102) これについては、同上書、序章ならびに拙著『「日本人」と――』の―――を参照されたい。
(103) 加藤、前掲書、107－Ⅰ10 頁。
(104) 同上書、110－112 頁。
(105) この構図は、まさに本論の冒頭で紹介している福田の「解説」に描かれている「馬上のナポレオン」を挟んで対峙する「ヘーゲル（的世界）」と「フィヒテ（的世界）」の対立「関係」に呼応している。
(106) 加藤、前掲書、112 頁。
(107) このくだりは、福田、前掲書『魂の――』の「6　満州国とは何か（1930 年代初頭）―独自の道を歩み始めた日本と、西洋の鋭い対立」の 132－157 頁を参照。
(108) 同上書、147 頁。
(109) 正直なところ、これも判断に苦しむところである。たしかに、いくらでも引き返す機会はあったと見られるものの、だからといって、その機会を実現できるかどうかはまた別のものだというのは、いうまでもない。私のような「覇権システム」とその「秩序」をもとに「歴史」をみる者にとっては、「引き返すことができた」とか「踏みとどまることができた」としても、それ自体が非難、批判されるもの

であるのだが、それを断った上でいうならば、満州事変から以降の日本の歩みに限ってみても、その都度、「引き返せたのではないか」と思える「局面」が何度も存在していたように、私には思われるのだが、まさに、そうした局面の一こま一こまそれ自体が、その局面での「最後通牒としてのハルノート」として、理解されたとみても、これまた直ちに否定できないのである。

(110) こうした観点から「あの戦争」を語る最近の文献に、―――がある。

(111) これに関しては、拙著『覇権システム下の――』――――を参照されたい。

(112) 福田、前掲書『魂の――』、132 頁。

(113) 同上書、132－134 頁。

(114) 同上書、155－156 頁。

(115) これについては、アンドルー・ゴードン編中村政則監訳『歴史としての戦後日本上』みすず書房　2001 年に収められているジョン・W・ダワー「1　二つの「体制」のなかの平和と民主主義　対外政策と国内対立」、ブルース・カミングズ「2 世界システムにおける日本の位置」、ローラ・E・ハイン「4　成長即成功か　歴史にみる日本の経済政策」の論文を参照。

(116) 加藤、前掲書、350. 357 頁。

(117) 福田、前掲書『魂の――』207－21 I 頁。

(118) 中村、前掲書『坂の上の――』、201 頁。

(119) 同上書、202－203 頁。

(120) これについては、拙著『日本人と――』―――を参照されたい。

(121) 赤木の論考とそれをめぐる論争については、注（81）を参照されたい。

(122) この問題については、別の機会に論じてみたい。

(123) 中村、前掲書『『坂の上の――』、201－203 頁。

(124) 同上書、203 頁。

(125) 同上書、206－208、210－211 頁。

(126) こうした「出来事」やそれに関する議論や著作は数多く存在している。その中でも『論座』で紹介されていた赤木の論考とそれをめぐる一連の論争はなお記憶に新しい。これについては、注（81）を参照されたい。

(127) これについては、ブルース・カミングズ、前掲論文、〈「大三角地帯」構想と「ケナン維新」 I 947－50 年〉、　94―105 頁を参照。なお、カミングズの論考は、私の研究に非常に有益な論点を提供してくれるのだが、私は、それにもかかわらず、カミングズが、ここで紹介している「大三角地帯」構想にみられる「経済発展」の「関係」と、そうした構想を相互に支えている米国、日本、韓国、台湾、東南アジア諸国における「民主主義の発展」の「関係」とを結び付けて考察していないことに、不満を禁じえない。カミングズは、「民主主義の発展」の歩みを、「大三角地帯」構想を担う各国、各地域の「経済発展」の歩みとは、次元の異なるレベルに位置づけ、最初から両者の「関係」を捉えようとしていない。本論で論究している「あの戦争」をめぐる中村政則に代表される左翼的見解とも重なる議論といえる。なお、A・ゴードン、ジョン・W・ダワー、ローラ・E・ハインもまた同様な立場にある。

(128) これについては、ローラ・E・ハイン、前掲論文、特に 212－213 頁を参照されたい。ここには、戦前・戦中の「大三角地帯」構想とその実現の歩みと、戦後の「大三角地帯」構想とその実現の歩みを、結び付けて考察する必要性を示唆する論が展開されている。
(129) 福田、前掲書『魂の――』、222－223 頁。
(130) 大仏二郎の論考「カメレオン的人間」を参照。
(131) 福田、前掲書『魂の――』、223 頁。
(132) 同上書、
(133) これについては、注（128）を参照されたい。
(134) 福田、前掲書『魂の――』、251－257 頁。
(135) これについては、前掲拙著『日本人と――』を参照されたい。
(136) これについては、前掲拙著『民主化の先進国――』の第一部の分析視角と分析枠組を参照されたい。
(137) 福田、前掲書『魂の――』、230－233 頁。
(138) 同上書、254－255 頁。
(139) 同上書、255 頁。
(140) これについては、前掲拙著『日本人と――』
(141) 福田、前掲書『魂の――』、256－257 頁。
(142) これについては、〈田島俊雄「6 章　中国・台湾 2 つの開発体制　共産党と国民党」〉（東京大学社会科学研究所編『20 世紀システム 4 開発主義』東京大学出版会、1998 年、所収）を参照。
(143) 福田、前掲書『魂の――』、272－273 頁。
(144) なお渡部昇一をはじめ、西尾や田母神らの見解については、機会を改めて論及してみたい。
(145) これについても、別の機会に考察してみたい。
(146) 福田、前掲書『魂の――』、262，264―265 頁。
(147) いわゆる「一億総中流（化）社会」である。
(148) これについては、第二部の（補論）を参照されたい。
(149) 福田、前掲書『魂の――』、293－294 頁。
(150) 同上書、294 頁。
(151) 同上書、297―300 頁。
(152) 同上書、301 頁。
(153) 同上書、302 頁。
(154) これについては、同上書、303－305 頁を参照されたい。
(155) 同上書、304 頁。
(156) 同上書、304－305 頁。
(157) 同上書、305 頁。

村　田　邦　夫（むらた　くにお）

神戸市外国語大学教授
専門：政治学（比較政治学、政治体制論）

研　究　叢　書　第48冊

2011年3月24日　印刷
2011年3月31日　発行

発行所　神戸市西区学園東町 9-1
神戸市外国語大学外国学研究所

印刷所　神戸市兵庫区下沢通 4-7-30
株式会社 ルネック

Monograph Series in Foreign Studies, Vol. 48

A History of the Japanese People

MURATA, Kunio

Research Institute of Foreign Studies
Kobe City University of Foreign Studies

2010